

2021年度「関西大学審査学位論文」

精神世界再考

——新潮流としての「霊性にかんする協働組織」の研究を中心に——

精神世界再考——新潮流としての「霊性にかんする協働組織」の研究を中心に——

伊藤耕一郎

関西大学大学院
文学研究科

伊藤 耕 一 郎

文学研究科

2021 年度

精神世界再考—新潮流としての「霊性にかんする協働組織」の研究を中心に—
伊藤耕一郎

論文要旨

本論文は、スピリチュアリティの原点といえる精神世界(スピリチュアルとも呼ばれる)について、先行研究において十分に明らかにされていない側面を実証的に論じたものである。

近年スピリチュアリティについては、「ツーリズム」、「マーケット」、「ケア」などさまざまな方面から論じられているが、必ずしもその実態が総合的かつ実証的に明確になっていくわけではない。そこで本研究では、質的研究(聞き取り・現地調査など)と量的研究(アンケート調査など)を併用し、そこから得られたデータを分析して、先行研究において実証的な研究手法によって検証されてこなかった部分を明らかにすることを試みた。

先行研究に対して本研究が大きく補充したのは、主に次の2点である。1点目は、先行研究では「精神世界と新新宗教には親和性がある」とされてきたが、それほど親和性が見出せず、むしろ伝統的宗教との親和性の方が目立つこと。また、2点目は、「奉仕による共同という理念を尊ばない」と見なされてきた精神世界関係者が、共通の目的のもとに集い、そこから多様な組織が成立してきていることである。

序章では、精神世界研究の背景としてこれまで実証的な研究がほとんどなされてこなかったことを述べ(1節)、それを補うためにどのような手順を踏んでいくのかを示した(2節)。さらにその上で、筆者が行う研究手法の有効性とその妥当性の担保方法や、留意点など、具体的な調査研究の手法について論じた(3節)。

第1章では、霊的なものや超常的なものに対する説明の試みを霊性思想とし、近代日本におけるその流れを論じた。「精神世界」はその中で、現代になって形成されてきた1つの領域である。筆者は、その歴史的背景をスピリチュアリズムが流入した明治時代にまで遡って研究し、さらにそこから精神世界にいたる霊性思想の歴史を前期と後期に分けて、第2次世界大戦までを前期霊性思想、戦後を後期霊性思想とした(1節)。また、前期霊性思想の特徴として、催眠術ブームを経てその中心が心霊研究に向かっていったこと(2節)、後期霊性思想の特徴として、1970年代後半から「精神世界」が興隆してきたこととその背景について論じた(3節)。

第2章では、本論文にて扱う「精神世界」とは何かについて論じた。島薺進によって提唱された「新霊性運動」という概念を用いて精神世界(及び世界の同一現象)を明らかにしようとした先行研究を批判的に捉え返して、その限界を示すために精神世界の内部にいる人々

への聞き取り及びアンケート調査を実施してその内容を分析した(1節)。また、本研究における研究対象を明確にするため、パワースポット巡りやタロットなどを単に消費するだけの人々を「広義の精神世界(関係者)」、パワースポットやタロットがどのような思想に基づいて行われているかを探求する人々を「狭義の精神世界(関係者)」とした。その上で、研究の対象を後者に絞った(2節)。さらに精神世界の実態を正確に掴むために、ブログやインターネットによるドキュメント調査の中から狭義の精神世界に関するものを抽出し、聞き取り及び現地調査による具体的な事例を挙げて検証を行った(3節)。

第3章では、精神世界の特徴をより正確に掴むため、宗教との比較を行った。はじめに、先行研究やアンケート調査結果を参考にして本論文における宗教の概念を定めた(1節)。また、精神世界関係者が考える宗教像を示した上で、「(旧来の新宗教を含む)伝統的宗教」及び「新新宗教」と「精神世界」とのそれぞれの関係について検証を行った。その結果、「精神世界と新新宗教にそれほど親和性がないこと」と、むしろ「精神世界と伝統的宗教とに親和性があること」を明らかにした(2節)。特記すべきことは、キリスト教の中でもカリスマ・ペンテコステ派と呼ばれる精神世界と似た技法を持つ教派に関しては反精神世界的であり、2節であげた宗教と精神世界の関係が、相互に親和性があるか相反するかのどちらかであったのに対し、この教派と精神世界との関係では精神世界から教派へ移動した人が複数確認されており、一方通行的な関係を見出すことができた。そこで、精神世界からこの教派へ移動した人々に対する聞き取り事例と、同教派の中にある霊的な問題を取り上げ、このような問題があっても彼らがなぜそこに留まり、精神世界に戻らなかったかについてさらに考察が必要であることを論じた(3節)。

第4章では、これまでの研究において精神世界の周辺とされてきた分野に関し、聞き取り及び現地調査によって詳細な検証を行った。ここで取り扱った分野は、心霊研究(1節)、霊体験(2節)、聖地(3節)、古神道(4節)、UFO・宇宙人(5節)、サブカルチャー(6節)、その他(7節)である。これらの具体的な事例を挙げた上で、精神世界に直接関わる人とそうでない人についての分析を行い、第3章3節で残された課題にも論及した。また、精神世界に直接関わる人の特徴について明らかにした。さらに、彼らの中から、相互に繋がり協働行為を行う人々が現れてきていることを示した(8節)。

第5章では、精神世界の内部で同じ目的のために集い、協働行為を行っている人々に注目し、その態様から「霊性にかんする協働組織」と名づけて、その特徴を分析した。まず、彼らを協働組織と見なすことの意味及びその概念についての説明を行った(序説)。調査対象としては、「一般社団法人たまや」(1節)、「大杉神社を守る会」(2節)、「NPO 法人心身研究会 SEW」(3節)、「禊カフェ」(4節)、「レムリア会議」(5節)を取り上げた。彼らは聖地の整備や保守に従事し、精神世界技法を社会の中で積極的に生かして活動することにより、精神世界の根本的思想を社会の中で現実化することを目指している。筆者は、彼らが実際にどのような活動を行い地域社会とどのような関係を築いているかについて明らかにするために、継続的な現地調査と代表者及び会員への聞き取りを行った。また、NPO 法人心身

研究会 SEW に関してはさらに参与調査も実施した。主な調査項目は、「成立の経緯」、「活動拠点」、「世話人及び会員」、「活動内容」である。研究対象とした5つの組織のうち3つは神社を活動拠点にしているため、古神道系の団体と混同されることがある。そのため2つの古神道系団体を例にあげて「霊性にかんする協働組織」と何が違うかの検証を行った。また、5つの協働組織についてその特徴を整理し、個人主義的な精神世界関係者と協働組織に属する精神世界関係者の違いについて検証を行った(6節)。

終章では、本研究において新しく確認された「精神世界と新新宗教に先行研究で言及されていた程の親和性がないこと」の理由について考察した。また、個人主義と言われてきた精神世界関係者の中に「霊性にかんする協働組織」に代表されるような協働性が芽生えてきた理由について、「世話人」、「地域社会」、「SNSの普及」の観点から論じた。本論文ではこれまでの研究では十分に明らかにされてこなかった精神世界の近年の変化について、多くの事例にもとづいて実証的に確認することができた。本研究は、単なるスピリチュアリティ(霊性)の事例研究に終わらず、スピリチュアリティ全体の理解に大きく貢献するものである。

目 次

序 章	(5)
1 節 研究の背景…(5)	
2 節 研究の目的と本論文の構成…(8)	
3 節 研究手法…(8)	
第 1 章 日本の霊性思想史	(18)
1 節 本章において扱う霊性思想の範囲…(18)	
2 節 前期霊性思想…(19)	
3 節 後期霊性思想…(26)	
第 2 章 精神世界とは何か	(36)
1 節 先行研究の問題点——精神世界・ニューエイジと新霊性運動…(36)	
2 節 「精神世界」と根本思想…(40)	
3 節 精神世界の現状…(45)	
第 3 章 精神世界と宗教	(66)
1 節 宗教の概念と新新宗教…(66)	
2 節 精神世界と宗教…(68)	
3 節 精神世界とキリスト教…(114)	
第 4 章 精神世界とその周辺	(156)
1 節 精神世界と心霊研究…(156)	
2 節 精神世界と霊体験…(164)	
3 節 精神世界と聖地…(181)	
4 節 精神世界と古神道…(194)	

- 5 節 精神世界と UFO・宇宙人…(203)
- 6 節 精神世界とサブカルチャー…(220)
- 7 節 精神世界とその他の周辺分野…(230)
- 8 節 総 論…(233)

第 5 章 精神世界の新潮流－霊性にかんする協働組織・ (243)

序 説…(243)

- 1 節 一般社団法人たまや…(245)
- 2 節 大杉神社を守る会…(261)
- 3 節 特定非営利活動法人心髄研究会 SEW…(275)
- 4 節 禊カフェ…(309)
- 5 節 レムリア会議…(316)
- 6 節 総 論…(317)

終 章……………(327)

序 章

1 節 研究の背景

——スピリチュアルブーム

日本人の宗教離れについてはこれまでも論じられてきたが、この論調は現在も続いている¹⁾。「日本人の宗教離れが指摘されるようになって久しい。その一方で、霊や超自然的なものを信じる『スピリチュアル・ブーム』やパワースポットの人気に見られるように、既存の宗教や教団に属さず、個人の立場で宗教的なものを希求しようという人々は後を絶たない」と時田英之は言う（堀江時田 2020：134）。

これについて堀江宗正は、現代の「靈魂や目に見えない不思議な力を求める動き」を分析するには「スピリチュアリティ」という概念が有効で、その特徴は「通常は知覚できないが内面的に感じられるものへの信念と、その体験に基づく実践の総体」であり、既成の宗教教団とは一定の距離を置いているとする（堀江 時田 2020：134-135）。

——学術的研究のはじまり

この分野の研究をするにあたって中村晋介は、「まず参照すべきは1980年-1990年代における日本の宗教シーンの変遷を丹念になぞり、現代のブームに至る系譜学的研究をおこなった島蘭進の著書『スピリチュアリティの興隆』（2006）であろう」（中村 2011：20）としている²⁾。島蘭は『宗教時代』（1988年 晶文社）に掲載された聞き取りの事例を用いて、このブームの渦中にいる人たちについての分析を行い（島蘭 1992：54-62）、輪廻転生とカルマの法則・地球外生命体との接触・指導霊の存在・人類意識の進化と宇宙意識・死後生への関心・自己変容による癒しなど、世界的に共通する類似思想や技法を「新霊性運動」という言葉を用いて説明し、早い段階からこの研究の基礎をつくった（島蘭 1996：23-66）。

——島蘭の研究について

中村は島菌の分析について補完すべき点として、1つめに、島菌の定義が世俗化社会の中で現実にスピリチュアルなものを支持している一般大衆（特に若い世代）の定義と合致する保証がない（例：宇宙意識の話とセラピーやエコロジーが同じ範疇に入っている）こと、2つめに、島菌の研究は過程の分析に重点をおいているため、人々がなぜスピリチュアルなものを求めているかを積極的に説明しておらず、要因に対する分析がないこと、3つめにスピリチュアルに関する量的研究が十分なされていないことの3点をあげている（中村 2011：20-21）。

中村は、2006年-2008年に出版された4つの論考³⁾に共通して見られる視点、すなわち、スピリチュアルの人は、「場の空気を読みながら、対人関係を円滑に進めていく複数の自己像」（外キャラ）と、「行動原理を自分自身に対して提示する存在」（内キャラ）⁴⁾とに自己を「多元化」しているという視点が、実際には量的研究で立証できなかったことから、「実証的データを欠いたまま展開されてきた」としている（中村 2011：25・29）。

——これまでなされてきた実証的研究、量的研究

とはいうものの、これまで実証的な研究や量的研究が全くなされてこなかったわけではない。たとえば有元裕美子は2011年に量的研究から分析を行い、スピリチュアル市場の消費者像を明らかにしており（有元 2011）、櫻井義秀はブース出展型イベントでの現地調査からスピリチュアル・ビジネスの実態に迫っている（櫻井 2009a）。

その他にも、葛西賢太は断酒自助会 AA に対して現地調査を行い、「弱さ」を共有することによって逆説的に強みをうるスピリチュアリティについて（葛西 2004：59-77）、稲場圭信はイギリス仏教運動ラジーニへの現地調査からスピリチュアリティをシェアすることによる共同体構築について（稲場 2004：122-140）、弓山達也は自己啓発セミナーの参加者からの聞き取りからスピリチュアリティを探求する道程に待ち構える危険について（弓山 2004：194-204）、それぞれ論じている。また、聖地・パワースポットについての研究では、

門田岳久が綿密な現地調査によって巡礼ツーリズムについて論じており、今井信次も現地調査を踏まえてアニメにおける「聖地」の生成とその巡礼について論じるなど（今井 2020：209-226）、スピリチュアリティに関する実証的な研究はいくつか存在している。

——進まない研究への補完

しかし、これらは島菌が提唱した新霊性運動の中に含まれる活動・技法・ビジネス・思想などの一部のみを対象としており、筆者の知る限り、その運動に共通する目標（「自己自身の意識を高いレベルに変容させ『宇宙的意識』に融合していく」こと（島菌 1992：54））についての実証的な研究データを示すものは、堀江（2011）を除いてみあたらない。2020年に島菌はこの分野について論じなおしているが、筆者が読みとる限り実証的データからは論じられてはならず、中村が指摘する点の補完はなされていなかった（島菌 2020：279-283）。

——現地調査にもとづく実証的データの必要性

この種の研究には現地調査（参与調査）が必要であることは島菌も述べており、その有効性を示しつつも、研究者によってはそれが許されない実情があるとする。島菌は、「大学教員というような社会的地位も固まってくると」調査対象の側が、「自分たちを研究者に紹介する」ために「一定の設定をして」研究者側を迎えるということがおきてくるという（島菌 1996：129）。

近年の精神世界関連事業者は大半が WEB ページやブログを持っており、これにインタラクティブ性を持つ Twitter などのツールを使用すれば、質的研究に加えて量的な研究も可能であることから、インターネットや SNS を用いたデータの収集は有効性が高いといえよう。堀江も2011年には4人の若者への聞き取りを行い、人々がなぜスピリチュアルなものを求めるのかについて若者の立場からの検証を行っているが（堀江 2011）、それ以降の研究においては、Twitter やブログからの情報収集を中心とした研究手法をとっている。

しかし、後述するように、ここ数年で様々な要因により、インターネットを使っての調査には限界が見えてきている。このような背景から筆者は、これま

での研究結果を精査し、そのうえで現地調査事例にもとづく実証的データを用いた研究を行うことにした。

2 節 研究の目的と本論文の構成

1 研究の目的

本論文では、まず現地調査事例に基づく実証的データの検証と量的研究を用い、現時点における精神世界の現状を正確に把握し、そのうえで島菌が1992年に提示した中心思想の視点から「精神世界の中にいる人々」、「精神世界と宗教」、「精神世界とその周辺分野」についてそれぞれ論じ、そこから精神世界の中に生まれつつある新しい潮流について具体的な事例をあげて検証していく。

2 本論文の構成

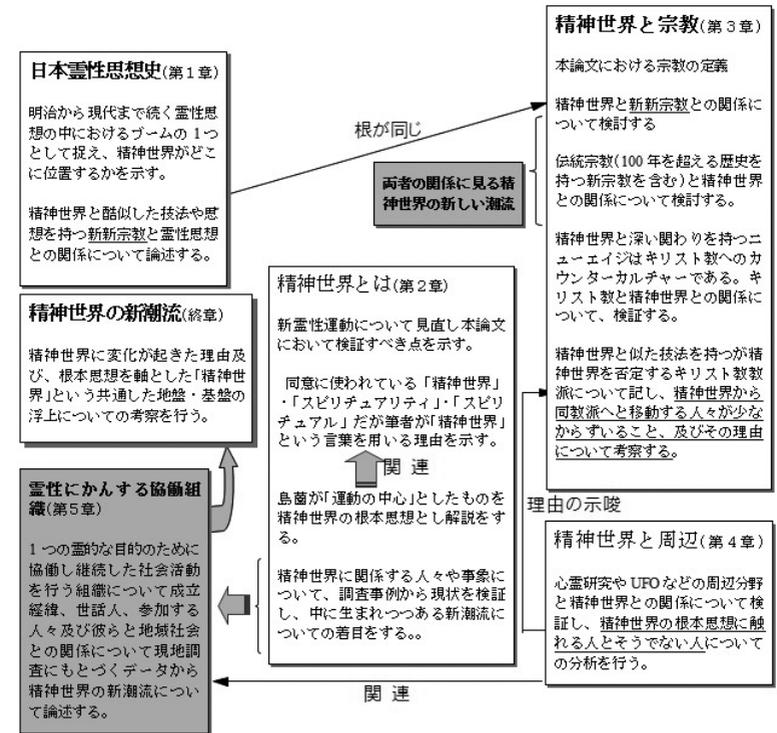
上述の通り、本論文では精神世界の中にある新潮流を具体的に示して、その背景について述べていくことを目的としている。

第1章では日本の霊性思想についての流れから精神世界の位置を確認し、第2章では先行研究で構築されてきた理論について、あらためて実証的な研究方法で現状を確認する。第3章では精神世界と宗教（伝統的宗教及び新新宗教）の比較を行い、第4章で精神世界とその周辺分野との関係について論じる。その上で第5章では、精神世界の中に見られる新しい潮流である「霊性にかんする協働組織」について、その成立、活動の調査事例から実態の分析を行う。各章の構造と関係を図にまとめると図0-1のようになる。

3 節 研究手法

先に述べた通り、これまで精神世界についての研究では実証的な現地調査はほとんど行われてこなかった。松井圭介は、「従来、フィールドワークに基づく研究は傍流とされ（中略）軽視される傾向が強かった」（松井 2014：128）としており、同時に宗教学において現地調査を手法として用いる難しさについて述べている。

(図0-1 筆者が作成)



池上良正も同じく、現地調査に基づく研究が軽視される傾向が強かったことに触れ、「フィールドワークの意義や手法を真剣に検討しようという試みは、近年に至るまで少なかった」と述べており、「フィールドワークの方法が適用できる宗教研究の分野」として、組織的宗教の実態解明、非教義的な宗教現象、一般生活者の中にみられる宗教性をあげている（池上 1996：126-128）。

筆者は現地調査を行うにあたり、方法・実践・課題について関連諸学（松井 2014：127・140）とされる地理学・社会学・民俗学に加えて、対面での聞き取りや観察が手法として確立している心理学や教育学も含め、研究手法を検討し⁵⁾、精神世界に関する主な研究手法として現地調査を用いている。実態解明や非教義的な現象、関係者の内面を扱うという意味では池上がその有効性を認

める分野と重なるところが多い。

本項では、筆者が現地調査を主な研究手法として用いた背景、研究を実施するにあたって留意した点、研究の妥当性等をどのように担保したかについて記す。

1 現地調査による質的研究の現状

これまで、精神世界関係者やその思想についての検証は、Twitter やオープンな SNS、ブログ、関係書籍から、そこに書かれている内容や単語を先行研究に照らし合わせて類型化・分析を行う文書研究・文書分析や⁶⁾、アンケート調査などの量的研究が手法として多く用いられてきた⁷⁾。これらに対し、現地での観察や聞き取りの分析を行う研究は、存在するものの、筆者が知る限り少数である⁸⁾。筆者は、それには主に2つの理由が存在すると考えている。第1に、直接会わずとも Twitter など研究対象の観察を行えば、ツイート内容から対象の概要が掴め、ブログ記事を読めば、精神世界の現状についての多くの情報を得られること、第2に池上が、「フィールドワークによる研究はその成果を出すまでにある程度の期間が必要」であり、その理由は「多様な見解や実践形態に関するデータの地道な集積が必要となる」からであると述べている通り（池上 1996：138）、現地調査を用いた研究は、収集しなければならない事例数やそこから得られる情報の精査に必要とされる期間などを考えると効率が悪いということである。

2 ブログやホームページ等を使った研究のメリットとデメリット

確かに Twitter やブログをはじめとしたインターネットメディアの中に精神世界の情報は溢れており、多くの事例を効率よく収集し、早く分析にかかることができる。

ブログやホームページ等を使った研究手法は、文書研究・文書分析に含まれるが、時間的効率性、(情報の)入手可能性、費用対効果の高さ、そして研究対象にこちらから反応する必要がないこと、したがって研究対象と問題を起こす

可能性が極めて低いこと、そこに「書かれているという事実」(内容の真偽は別として)の存在、研究範囲の調査を行うことができるなどの点で、文書研究・文書分析のメリット（大谷 2019：158）を十分に活用した手法といえる。

一方、大谷尚は、文書研究・文書分析のデメリットとして、詳細のなさ、文書が検索不能な場合があること、そして文書の作成者によるバイアスをあげている（大谷 2019：158）。それに対して堀江は、精神世界の技法の1つである前世療法の分析にブログを利用することについて、「インターネット上の情報は信頼できないから使うべきではないという批判が根強くある。媒体の社会的信用が薄く、著者が不明の情報を、学説や理論の根拠として使うことができないのは当然である。しかし、研究対象の資料としては意味がある。（中略）体験者の『モデル』の把握が目的であるなら仮に施術者が作文したものでもかまわない」とし、複数のサイトから事例を取り上げることによって情報の偏りを無くすことを試みている。また「捏造や誇張の可能性は通常のインタビュー調査でも起こりうることである」（堀江 2019：131）と、インターネットの情報を用いた研究手法は批判されるべきものではないとしている。確かに堀江が行った「現代日本の前世療法の分析」（堀江 2019：131-152）に関して言えば、大谷の指摘するデメリットよりもメリットの方が優っている⁹⁾。

3 精神世界を取り巻く環境とブログやホームページ等を使った研究の限界

しかし、現時点における精神世界研究という大枠の中で考えると、ブログやホームページといったインターネットを使った分析には3つの問題が存在すると考えられる。1つめが表現規制の問題である。精神世界関連事業を営んでいる【0A】によると、「スピリチュアルサロン¹⁰⁾の経営者は自分の技法にこだわりがあり、『思い』と『想い』という漢字すら使い分けるほど自分のオリジナリティーを大切にしている」。しかし2018年頃からブログやホームページではそういったこだわりのもと、自分の思想を主張するのが難しくなってきたという¹¹⁾。その背景として、靈感商法被害に対応して2018年に改正された消費者契約法では、「困惑類型」の1つとして「靈感等による知見を用いた告知」によ

る契約が無効とされた¹²⁾。これは精神世界関連事業者を対象とした法令改正ではないが、【0A】によると契約無効を主張され返金に応じた業者も複数おり、事業者のブログやホームページでは、霊的なものを連想させる用語の記載を控えて「解放」、「セラピー」などの当たり障りのない用語への書き換えが進んでいるという。「こんな症状はありませんか」という文言をブログやホームページに記載することも医療行為の問診にあたり¹³⁾、自分の技法の効果について説明することも難しくなっているのが現状である。

また、医療行為に関する規制は技法者だけでなく利用者にも適用され、利用者が日記に「セッションを受けて治った」と記載したことについて、技法者側が書類送致されたケースもあり、体験談でさえも当たり障りのない用語を使用するしかなくなっているという。さらにこれがアロマなどの物販になると、薬機法や食品衛生法などにより多くの規制がかかってくる。【0A】は、「今後のブログやホームページの使い方は、技法内容ではなく、技法者個人に関心をもってもらうための導線としての比重が大きくなっていくだろう」と予測している。

2つめの問題が、養成スクールによるブログの書き方指導である。「女神のプロデューサー」として精神世界関連事業のコンサルタントをしている【0B】は、「(精神世界関連事業者の)ほとんどの人が技法を現実のビジネスに落とし込めていないので、WEBで収益を上げられていない」とし、原因は技法を教える「協会ビジネス」によるものだと指摘している¹⁴⁾。

最近になって精神世界関連事業を始める人の多くは、スクールや協会などが行う講習で技法を受講し、技法者としての認定を受ける。しかし、これらの講習では技法の認定はしても、実際のビジネスをどう展開させるかについての指導はほとんどなされておらず、「まずは人のブログの真似をするように」と教えられていることが大半だという。【0B】にコンサルタントを依頼してくる事業者の中には、自分が書いた記事が他人に使用されていても盗用されたと考えるのではなく、「自分のブログが真似をされるレベルになった」と喜んでいる人もおり、【0B】は、「これも協会ビジネスの弊害の1つだ」としている。

【0B】は、協会ビジネスに陥る人の特徴として「読み手(利用者側)だった時間が長い人が多い」ことをあげ、「同じようなブログやホームページを読み慣れてしまったことが、『真似されることは良いことだ』と錯覚する原因の1つになっている」と指摘している。1つめの問題と「協会ビジネス」の問題を合わせると、実態とは異なる精神世界関連事業者のブログやホームページ広告が相当数インターネット上で展開されているということになる。

そして3つめが「代筆者」の存在である。【0B】によれば「大手に限って言えばほぼ100%代筆者が存在している」ということで、「大手の事業主のブログは技法についての『お役立ち記事』と自分の私生活などを書く『共感記事』から成っており、この『お役立ち記事』に関してはまず代筆者が書いている」という。

【0A】も代筆者に依頼をしており、1回の代筆者募集で最低30人程度の代筆者からの応募があるという。【0A】も基本的には「お役立ち記事」に該当するものを代筆者に任せている。その理由として「ブログに手を割く時間がないこと」と、「代筆者の方が、本人が書くよりは表現によるトラブルをうまく回避してくれること」を、メリットとしてあげている。「技法者個人への関心」に繋がる共感記事に関しては基本的には自分で書いているが、さらに大きな事業者になると、これも手分けして2～3人の代筆者が書いているという¹⁵⁾。

4 現地調査の必要性及び研究手法

これまでは、ブログやSNSなどのインターネットを使った研究では複数・別々のサイトからの事例を扱うことで偏りを回避することがある程度可能であった(堀江 2019: 131)。しかし、上記に示した表現規制の問題、協会ビジネスによる類似ページの増加、代筆者による執筆が増えていることは、大谷の指摘する「文書の作成者によるバイアス」という文書研究・文書分析のデメリット(大谷 2019: 158)の占める割合がこれまでより大きくなってきていることを示している。

筆者は、インターネットを使った研究が今後は使えないとは考えてはいない。

多くの情報を収集できるインターネットを使用した調査は、書き手の年齢や性別、その技法についての記事傾向を知るには依然として有効な研究手段である。

ただ、今後も【0A】のいう「技法者個人に関心をもってもらうための導線」、「利用者の感想の画一化」の方向へブログやホームページが進んでいくのであれば、事業者が行う技法の特徴や利用者自身が抱えている問題・セッションの結果などについては、技法者や利用者から直接聞くしか詳細が得られない場合が多くなっていくと考えられる。実際、筆者も【0A】や【0B】からの聞き取りを通して初めて、現在の精神世界関連事業者や利用者の間に起こっているブログ記事に関する問題を知ることができたのである。

5 研究の妥当性の担保

筆者は、精神世界研究で主に用いられてきたこれまでの研究手法に現地調査を加えることで、研究の補完・発展を促すことが可能であると考えている。これは聞き取りや観察といった現地調査が、文献やドキュメントの分析や量的研究よりも優れているということではない。現地調査を研究手法に用いる民間信仰研究を例にとると、田中正明は、現地調査の事前調査として「できるだけ多くの関係文献を渉猟することを必要とする」としており（田中 1987：6）、これまでに蓄積された先行研究は、現地調査を行うにあたっての基礎であり、研究の妥当性を担保するためには必要不可欠である¹⁶⁾。

また、同じく民間信仰に関する研究において、北村皆雄は分析対象となるドキュメントについて、「各文書の性格を理解し、可能な限り多方面に触手を伸ばすことが望まれる」としている（北村 1987：61）。本論文において筆者は、使用するドキュメントをエティックなものに限らず、エミックな解説書や雑誌、エッセイ、インターネット記事も含めて広く用い、そのドキュメントの性格とそれを使用する意図が分かるように示すことにより、研究結果にできる限り客観性を持たせられるよう意識した。

6 留意点と研究の客観性

調査対象やフィールドとの関係については、「不可思議な次元がもっている創造的な意義や働きに対して、驚き、畏れ、感動し、共感できるだけの幅を、自分自身のなかに用意すべき」（池上 1996：143）、あるいは「被調査者を単なる情報供給装置としてみるのではなく、人格的なふれあいを通して暖かい信頼関係（ラポール）を醸成できるように努力する必要がある」（松井 2014：132）とされていることに留意し、調査終了後も追跡調査が可能ないようにアポイントの時点から配慮した（伊藤 2019：19）。筆者は磯岡哲也が宗教調査の具体的方法として定義する方法（磯岡 1994：200-202）のうち、非参与観察法を主として用いているが、必要に応じて参与観察にいつでも切り替えられるよう調査対象との信頼関係を保つようにつとめている。

また、研究の客観性に関して堀江は、インターネットからのドキュメント調査や聞き取り調査について、「結局、『完全』に客観的な証言などどこにもない」（堀江 2019：131）という。実際に筆者は現地調査から得た情報が可能な限り客観性を保てるようつとめてはいるが、筆者の聞き取りに応じてくれた時点で筆者に対して好意的、または悪意を持ってはいないという意味で既にバイアスがかかっていることは否めない。そこで、文献・ドキュメントの調査・分析でこれを補完するだけでなく、アンケートや累計などの量的研究も用いることで研究の客観性を高める工夫を行った¹⁷⁾。

なお本論文における現地調査は関西大学大学院文学研究科院生協議会の定めるガイドラインに沿って行っている¹⁸⁾。

小 括

これまで述べてきたことから、本論文における筆者の研究手法と表記について整理すると下記ようになる。

- 1、質的研究を主とするが補完のために量的研究も用いる。
- 2、質的研究は、先行研究文献及びドキュメントの精査を前提とした上で現

- 地調査を行う。
- 3、量的研究は、アンケート調査及び統計分析の手法を用いる。
- 4、対面や電話など調査対象が存在する調査は、関西大学大学院文学研究科院生協議会制定の「学術調査に関するガイドライン及び倫理規程」に準拠して行う。
- 5、上記に定められる学術調査のうち、観察及び観察を含む聞き取りは「現地調査」、聞き取りのみの場合は「聞き取り」と記す。
- 6、現地調査が適さない研究に関しては先行研究文献及びドキュメントのみを用いる。
- 1) 国際宗教研究所 (2021)、『宗教問題30』(2020)、島田 (2020) など。
 - 2) 現代では「精神世界」、「スピリチュアリティ」、「スピリチュアル」は同意に使われることが多く、厳格に使い分けている例は見当たらない。島菌は著書の中で「精神世界」と「スピリチュアリティ」の意味はさほど隔たっていないとし、類似用語も含めて適宜用いている (島菌 2007 : 4-5)。筆者も用語・用法については、第2章にて定義するまではこれにならう。
 - 3) 香山リカ 2007『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』(幻冬舎)、小池靖 2007『テレビ霊能者を斬る——メディアとスピリチュアルの蜜月』(ソフトバンク)、木原善彦 2007「データベース化する心霊——『霊』のいる場所と『私』のいる場所」一柳廣孝・吉田司雄編著『霊はどこにいるのか』(青弓社) 石井研土 2008『テレビと宗教——オウム以降を問い直し』(中央公論)
 - 4) 「私は……するように生まれついたキャラ (内キャラ) をもった人間だから……する」という例があげられている (中村 2011 : 25)
 - 5) ここでは、研究手法を大きく「研究結果を数値化する量的研究」と「数値化を行わず文章によって記述する質的研究」(サトウ 春日 神崎 2019 : 4-6 など) に分類する。
 - 6) 文書研究・文書分析も質的研究の1つの手法である。また大谷は「文書研究」と「文献研究」を分けており、研究結果が論述された書籍や論文のみを「文献」と定義づけている (大谷 2019 : 157)。本論文においてはこの定義に従って両者を使い分けるが、より明確に両者を区別するために「文書」は「ドキュメント」と記す。
 - 7) 有元 (2011) など。
 - 8) 櫻井 (2009a)、堀江 (2011) など。
 - 9) 大谷の指摘する「文書の検索不能」は公文書が閲覧不可になっている場合などを指すため、精神世界研究においてはデメリットとはならない。
 - 10) 精神世界関連事業者が施術や物販をするための事業所は総じてサロンと呼ばれる。

- 11) 【0A】(40代女性 三重県在住) への聞き取りにもとづく (2020年9月14日)
 - 12) 消費者契約法の一部を改正する法律 (平成30年法律第54条)。
 - 13) 平成9年12月24日付け健政発第1075号厚生省健康政策局長通知。
 - 14) 【0B】(50代女性 兵庫県在住) への聞き取りにもとづく (2020年9月21日)。
 - 15) ブログを注意深く読むと「……」の使い方や「!!」の使い方、顔文字の使い方などで何人の代筆者がいるか分かるという。
 - 16) 大谷は他者による調査結果に対する分析のチェックは質的調査においては研究の妥当性の担保とはならず、研究結果の妥当性は他分野も含む先行研究によってなされるべきであるとする (大谷 2019 : 190-191)。
 - 17) 質的研究に数量データを組み入れることで、情報の解釈や補強を行って客観的根拠を与える手法がとられることもある (サトウ 春日 神崎 2019 : 232-235)。
 - 18) 「学術調査に関するガイドライン及び倫理規程」(<https://drive.google.com/file/d/1efuUvwTSIKv5XyENqq7mcxya9tD50W1x/view?usp=sharing>) 本ガイドライン制定前の調査については本論文執筆時にこれに従ってチェックを行った。個人名については基本匿名とし、参考文献の著者やその中に実名で記されている人物については、そのまま記している。属性については調査時のものを記載している。
- 本ガイドラインでは学術調査を「観察」、「聞き取り」、「アンケート調査」の3つに分けて規定している。本論文では、この中で観察と聞き取りを含むもの、あるいは観察のみの調査を「現地調査」、聞き取りのみで観察を含まないものは「聞き取り」と記している。

第1章 日本の霊性思想史

精神世界が興隆してその概念が定着したのは1970年代後半から1980年代とされている（島藺 1996：220）。また、堀江はインタビューにおいて、「1970年代以降、通常ではとらえがたい次元への関心は、従来の宗教とは異なる次元で人々の間に高まってきた」とし、それ以降に現れては終息する小さなブームについて「一つ一つのブームは終息しても、その根っこには同一のものがあるということか」と問われて「そうだと思う」と答えている（堀江 時田 2020：137-138）。

しかし筆者は精神世界を、日本で1970年代後半以降に突然興隆してきたブームではなく、歴史の中で繰り返されてきた霊や超自然的なものに関する思想・文化の1つとして捉えており、精神世界の中には島藺によって「自己自身の意識を高いレベルに変容させ『宇宙意識』に融合させていく」（島藺 1992：54）と表現された根本思想が流れていると考えている。

吉永進一は、「精神世界と呼ばれる文化流行」は名前を変えつつ断続せず続いている類似した傾向の思想や文化の中にあるとし、その歴史叙述が可能だとしている。吉永は、そうした領域を「霊性思想」と総称し（吉永 2010：375-376）、一柳廣孝は日本における霊性思想史の出発点を欧米からスピリチュアリズムが流入した明治時代に求めている（一柳 1994：6-16）。

本論文において精神世界の比較対象となる新新宗教¹⁾は、戦前の霊性思想とは切り離せない関係にあり、また後述する精神世界の周辺部分や精神世界の新潮流を論じるにあたり、連続した霊性思想の中で精神世界が何を受け継ぎ、どのような変化を経てブームとして興隆してきたのかについて確認する必要がある。

1節 本章において扱う霊性思想の範囲

現在でも精神世界の活動の中心となっている、講演や展示を中心とした「ブース出展型イベント」は、1994年の「フナイ・オープン・ワールド」まで

遡ることができる。1995年の第2回フナイ・オープン・ワールドでは1万5000人の動員数が記録された（斉藤 2000：281）。現在でも「癒しフェア in TOKYO」、 「癒しフェア in OSAKA」などが開催され、「癒しフェア in TOKYO」は2019年に2日間で38208人²⁾を集め、後発の「癒しスタジアム in OSAKA」は、2005年のイベント開始時には78人であった動員数が2019年には1209人³⁾にまで増加している⁴⁾。

ところで、これら「ブース出典型イベント」では「エネルギー酔い」と呼ばれる現象が報告されている。これは、イベントから帰宅後に入眠時幻覚を起こしたり、吐き気をもよおしたりする現象で、堀江は、イベントに同行した関係者からのインタビューにあった「少しでも、靈感があったら、こんな所いられないのに」という言葉を使ってこの現象を紹介し、これを、「スピリチュアルを凝集させ、全面化させた空間にいだく違和感」であると分析している（堀江 2011：31-38）。精神世界の興隆期の中心思想は、神智学をその源流としたニューエイジで（ストーム 1993：23）、そこには、様々な霊的な思想が取り込まれ輻輳しており、樫尾直樹はこれをレイチェル・ストームの言葉を引用して「霊的ごった煮」の継承だと表現している（樫尾 2010：75-76）。

本論文では、日本の霊性思想を日本の霊性思想を「明治維新以降から第2次世界大戦まで」の前期と、戦後の後期として分ける。その上で、「宗教、研究、術式、大衆文化」という4つの視座から、それらの時期におきたできごとと、それが現在の精神世界にどのような影響を与えているかを分析する。

2節 前期霊性思想

前期霊性思想の代表的な事例・人物については、既に多くの先行研究があり⁵⁾、本論文では、周知されていると思われるできごとについては詳細を割愛し、ポイントを絞って記していくことにする。

1 霊性思想と大衆文化

(1) こっくりさん

前期霊性思想と大衆文化の最初の接点は、1882年頃から起きた「こっくりさんブーム」に求められる。1880年頃に上陸したとされている「スピリチュアリズム」に起源を持つこっくりさんは、井上円了によれば、西洋のテーブル・ターニングないしテーブル・トーキングと同じものであるが、術に使う竹の上に乗せる蓋がこっくりこっくりと傾くことから「コックリ」と呼ばれるようになったとされている（東京大学井上円了記念学術センター 1999：555）。

娯楽として広がったこっくりさんは、1907年（明治40）に「言うに云われぬ面白みあるプランセット」というキャッチコピーで玩具としてプランセット⁶が売り出されたように（一柳 1994：23）、大ブームが去った後も家庭娯楽として続けられた。

(2) 催眠術ブームと霊術の興隆

催眠術ブームは一般的に第1次（1896年頃）と第2次（1903年頃）に分けられるが、術式自体は外観や名称を変えて戦後まで存続し（井村 2014：25）、1887年（明治20）から大戦が始まる1941年（昭和16）までに「催眠」に関連する書籍は1200冊以上刊行された⁷。

催眠術は有識者にも注目され、たとえば夏目漱石は大学在学中の1892年（明治25）に催眠術を扱ったジャーナリスト、アーネスト・ハートの論文の翻訳を哲学雑誌に掲載し、連載小説⁸の中にも催眠術用語を使用していた。また、他の多くの小説でも題材にされ、大衆娯楽である落語の中にも取り入れられていった（一柳 1994：73-74）。第2次催眠術ブームのきっかけは、東京帝大を卒業後、成田中学校の校長をしていた竹内楠三によるものとされる。竹内は1903年の1年間に10冊以上の催眠術関連の著書を刊行している。これらの著書はモール・アルベルトの『Hypnotism』（1889年）を種本として書かれたものであったが、夏目漱石をして「先ず必読の書なり」と言わしめた（一柳 1994：76）。

このような背景から日本の通信販売業の祖とされる横井無隣が登場する。彼

は催眠療法家になるためのHowTo本を次々に出版した。その結果、竹内の著書を読んで開業する催眠療法家が次々と出現し、病苦に悩む民衆が奇跡を求めて催眠治療所に殺到することになった（井村 2014：24-25）。

当時の催眠術は、「霊能的な術式全体」を指しており、催眠状態であれば、「相手を金縛りにする、忍術を使うことができる、幽霊と対話できる、怪力を使うことができる、水で酔うことができる、人体を引き寄せたり飛ばすことができる」など（松原 2004：79-85）、現在でいう催眠術とは別の事象を指すことの方が多かった。この状況に対し、行政当局は1908年（明治41）警察処罰令を公布し、医師であっても場合によっては処罰対象に入るとし、厳しく取締を行った（甘糟 1908：45）。

しかし、井村宏次は「プロの催眠術師たちは催眠術の看板を〈霊術〉〈精神療法〉〈心理療法〉など書き換えて、当局の追及をすりと躲して大正期にすべり込んだ」（井村 2014：25）と記しており、皮肉なことに、この処罰令によってそれまで催眠術とされてきた多くが、「霊術」と名前を変え、大衆文化の中に霊性思想を構築していくこととなった。

2 心霊研究とアカデミズム

1900年代前半になると、日本で心霊研究が本格化し、関連書籍の流通量も増加した（一柳 1994：38）。スピリチュアリズムの上陸から15年以上経ってはいったが、ここから心霊研究、心霊主義は霊術の幹となっていった。

前期霊性思想を語る上で欠かせないのが、アカデミックな動きがこれに連動していたことである。1903年（明治36）には大沢謙二、福来友吉、呉秀三などの学術研究者による論文集『催眠術及ズグゲスチオン論集』が刊行されている（一柳 1994：91）。当時のアカデミズムは心霊研究と歩を並べ、霊術を科学的に解明しようと試みた。この流れの中心となっていくのが、当時東京帝国大学助教授であった福来友吉である。

心霊研究とアカデミズムの関係を一変させたのが千里眼事件（1909年～1911年）であった。千里眼事件は福来が行った「透視」や「念写」の真偽が社会的

な問題に発展した事件である。この事件については、寺沢（2004）、長山（2005）、田中（2019）など多くの著書が出版されているので、事件の詳細は割愛するが、この実験には多くの学術研究者が関わっていた。

千里眼事件以降アカデミズムは表面上には心霊研究から撤退したように見えた。しかし、研究自体は個々の研究者によって民間へとシフトされ、多くの心霊研究者の輩出と、その拠点となる研究所が開設されていくきっかけとなった。

3 宗教と霊性思想—大本と鎮魂婦神法

吉永は、1908年～1921年（明治41～大正10）を戦前の霊性思想の最盛期だとしている（吉永 2019：334）。同時にこの時期は前期霊性思想の転換期でもあった。

井村は、この時期に霊術的宗教の代表として現れたのが大本の出口王仁三郎だとしている（井村 1996：270）。大本と他の宗教との大きな違いは、その術式にあった。王仁三郎によって大本に取り入れられた鎮魂婦神法は、もともと修験や古神道の術式で、それ自体は珍しいものではなく、王仁三郎にこれを伝授した長澤雄楯も稲荷講社の構成員だった（宮武 2014：400/1812-433/1812）。旧来であれば神がかりという一言に集約されたこの術式を「よりリファイン」したものが王仁三郎の鎮魂婦神法で（塩谷 1985：717）、大本は、この新しい術式と、立替え立直しの予言によって信者を獲得していった。その中には生長の家の谷口雅春や世界救世教の岡田茂吉らも含まれていた（宮武 2014：1152/1812）。

4 浅野和二郎と心霊研究の拡大

前期霊性思想における「心霊研究」の底上げに大きく貢献した元海軍士官学校教員の浅野和二郎は、1916年-1921年（大正5-12）の間大本に在籍し、大本の鎮魂婦神法に西洋的心霊研究を取り入れ、その結果大本の鎮魂婦神法は心霊主義の色合いを濃くしていった。

これにより、鎮魂婦神法は、「大本研究者」と呼ばれる「心霊現象の存在を

探求する人々」に関心を抱かせ、彼らは霊的体験を求めてこれを実修しに大本の門を叩いた（川村 2017：238-239）。

大本は2度に渡る大弾圧⁹⁾により、壊滅的な打撃を受けることになるが、結果として大本脱会者によって多くの心霊研究家が育っていくことになった。弾圧を機に大本を離脱した浅野は1923年（大正12）、日本心霊科学協会の源流となる「心霊科学研究会」を設立し¹⁰⁾、福来が念写（千里眼）とその理論にこだわり続けたのに対して（寺沢 2004：279-282）、スピリチュアリズムを普及させることを目的に心霊研究を行った¹¹⁾。

5 スピリチュアリズムと神智学

後期霊性思想の中心となる精神世界の興隆期に流入してきたニューエイジは、その源流を神智学にまで遡ることができる。しかし、前期霊性思想の中心は鎮魂婦神法をはじめとした、日本古来のコンテクストに西洋心霊主義が加わった、いわば「和製スピリチュアリズム」だった。

神智学は、スピリチュアリズムに遅れること僅か2年の1889年（明治22）に神智学協会会長のオルコットの来日という形で日本に入っている。1910年（明治43）にブラヴァツキーの『霊智学解説』（博文館）が翻訳され、1902年に海軍機関学校の教員として着任していた E・S・スティーブンソンを通じて、海軍機関中佐の飯森正芳が大本に神智学を伝えている（吉永 2010：383-384）。浅野和二郎も海軍士官学校教員の時にスティーブンソンと共同著書を出版している（川村 2007：133）。ロッジ¹²⁾も開かれ、神智学の用語が紹介された（吉永 2010：383）。

また、日本女子大の創設者である成瀬仁蔵は、1906年（明治39）の倫理講話で、「神聖なる自己を発展し、その自己が宇宙の Vibration に触れて宇宙の真善美を解し、宇宙の全体意志と合体して行く所の作用であります」と話し、さらに1910年（明治43）の講話では、「我々は引力、光、電気、磁力等、力（フォース）及びエーサーに依って、他の天体と密接な関係を結んでいるが、宇宙の本体界に於ける精神的関係を説明するためには」と述べた後に、アスト

ラル・ライト、モナドなど¹³⁾、神智学の惑星進化の図を用いて講義を行った(川村 2007: 137-139)。またオーラに関する情報も神智学を紹介した出版物を通して広がっており(高橋 1921: 241-245)、神智学の思想は、大正時代以降ある程度広まっていた。

にもかかわらず、神智学は多くの支持を得られなかった。その一因は神智学側が「霊現象やスピリチュアリズムは既に解明され、克服されたと達観していた」ことにある(川村 2007: 142)。神智学は「死者の霊は(中略)例外的な場合以外は、この世に戻ることができない」、「死者の霊がこの世に降りてくるのではなくて(中略)人間が霊的魂へと上昇する」、「心靈主義者達には哲学はない」など、心靈主義を否定した(ブラヴァツキー 2018: 408/4400-452/4400)。これはスティーブソンが浅野の大本入信を知り、降霊術の危険性について手紙で訴えていたことから伺い知ることができる(川村 2007: 142)。

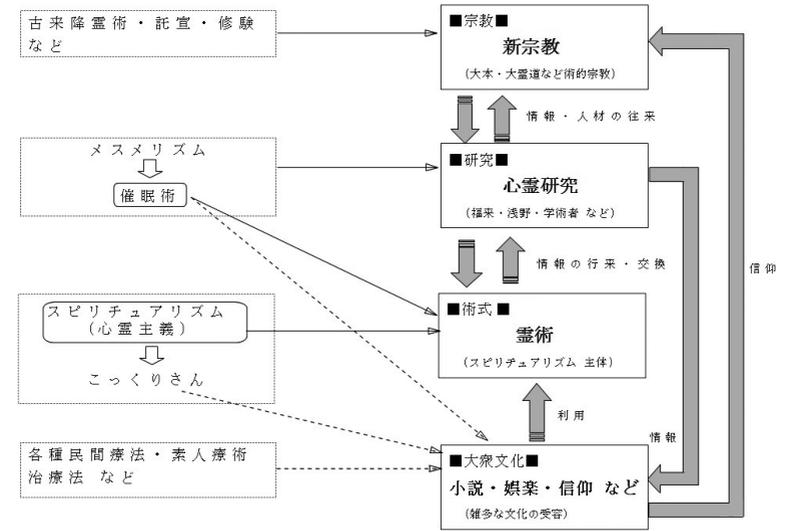
脱呪術を標榜した明治政府への反動は、不可視の靈魂と交流できるスピリチュアリズム的な術式へと、人々の関心を向かわせた。前期霊性思想の最盛期において「可視化できるか否か」、「実験可能かどうか」は重要な要素であり、日本において技法より思想を優先させた神智学は、1960年代以降ニューエイジという形で技法が入ってくるまで、大衆から支持されることはなかった¹⁴⁾。

6 前期霊性思想の衰勢一弾圧と取締

霊術は大正中期から昭和初期にかけて、大宣伝が繰り返され、秘伝の書が売りに出され、様々な術式が溢れかえり、霊術家は全国で3万人いたとも言われている(井村 1996: 301-304)。結果、増加した霊術家の施術治療による被害は甚大となり¹⁵⁾、1930年(昭和5)11月、行政当局は「療術行為に関する取締規則」を発令した¹⁶⁾。

「医政調査資料第8輯-療術行為者取締問題参考資料」によれば、取締を行う都市は増えていき、また内容もより厳しいものへと改訂されていった¹⁷⁾。資料によれば、この政令の対象には各種民間療法も含めて9項目が「霊術」とされており(日本医師会 1919: 145)、心靈主義・心靈研究も規制を受けること

(図1-1 筆者が作成)



になった。

1941年の日米開戦以降「霊術」や「霊能的宗教」の衰退は加速していった。また心靈研究も「迷信視され、淫祠邪教に類するもの」と疑われ、行政当局から拘留される者が出るなど満足な研究ができない状況へと陥っていった(田中 2020: 4-5)。

前期霊性思想を「宗教、研究、術式、大衆文化」の4つの視座に立って見ると、それぞれが何らかの形でリンクをしていたことが分かる(図1-1)。

欧米から入ってきたメスマリズムやスピリチュアリズム等の思想は心靈研究によって実証実験され、これを学識者や文化人が受容、さらに大衆にもこっくりさんや「娯楽物語」¹⁸⁾のような書籍の形で浸透した。

また大本など霊的な術式を持つ宗教もこれらを受け入れながらも、心靈研究の成果を反映し、研究者らが体験を求めて宗教に集まるというように、相互が何らかの形で影響を与えていた。

もちろん、戦前の霊術の全てを検証すれば、ブーム末期に氾濫した素人霊術家など、この図表に当てはまらないケースも存在する。しかし前期霊性思想の

概要をみれば、心霊研究を1本の幹として、宗教や大衆文化がリンクしていたということができよう¹⁹⁾。

3節 後期霊性思想

1 霊性思想の解体と再構築

第2次世界大戦が終わると、前期霊性思想の中心であった霊術は解体・再構築されていく。これは大きく分けると「宗教団体」、「疑似科学」、「心霊研究機関」の3つになる。

宗教への規制が廃され、1951年（昭和26）に宗教法人法が公布されると、行政当局と緊張関係を保っていた宗教団体は次々と法人格を取得した。しかし、疑似科学の方向に生き残りをかけた人々はGHQから非科学的治病法の烙印を押され、衰退していく運命を甘受せざるを得なくなった（井村 1996：324）。一方心霊研究は、いくつかの心霊研究団体が樹立し、より研究色を強めて存続していった。

2 研究機関の復興と団体と設立

研究機関としては、1946年（昭和21）に福来友吉らを顧問とした「東北心霊研究会」（寺沢 2004：306）、1949年には「日本心霊科学協会」、また1960年（昭和35）には医学関係者による日本心霊医学会など、次々と団体が設立されていった（田中 2020：4-6）。

1963年（昭和38）には、防衛大学校教授であった大谷宗司らにより「超心理学研究会」が設立され、千里眼事件以来この分野からは遠ざかっていた学術関係者も隣接分野から徐々に参入するようになり、交霊や念写に加えて、サイコメトリーやテレパシーなども研究対象となっていく²⁰⁾。新しいものでは、1991年に設立された「人体科学会」は日本学術会議協力学術研究団体²¹⁾、「霊障・霊視・憑依」などについて、人体科学という方向から研究を行っている²²⁾。

3 新宗教の興隆

宗教法人法の下では新宗教が次々と認可された。元大本の信者であった谷口雅春によって戦前に立教された「生長の家」も1956年に宗教法人格を取得している。当初はニューソートの影響が強かったが、戦後には神智学、薔薇十字主義²³⁾などの思想や技法を翻訳紹介し、一時はUFO関係者と関係を持つなど²⁴⁾、欧米と日本の霊的思想を自由に摂取している（吉永 2010：375）。これは同じく元大本の信者であった岡田茂吉が立教した世界救世教がその技法を王仁三郎の「御手代」をベースにし（隈元 2018：40）、大本からの影響を残したのとは対照的である。

そのような中ででてきたのが、浅野和三郎と交流が深かった小田切秀人が主宰する心霊研究団体である「菊花会」である。この菊花会に参加していた高橋信次はスピリチュアリズムと神智学を結合させた宗教団体GLAを立ち上げた（大田 2013：209-210）。高橋の思想には、大川隆法（大田 2013：217）、麻原彰晃（麻原 1991：35）、さらにオカルトビジネスのドンと呼ばれ精神世界においてブース出展型イベントを企画した船井幸雄も影響を受けている（斉藤 2000：277）。高橋は、宗教家としては精神世界の牽引者にも影響を与えた希少な存在といえることができる。

4 大衆文化

霊術の解体により、超常的なものに対する大衆の関心は薄れたかのように思われたが、大衆文化からこれらが消えることはなかった。1940年代後半（昭和21-24頃）の児童雑誌には「秘境もの」、「SFもの」や「怪獣もの」と呼ばれる読み物が連載された（初見 2014：8-9）。また、映画や小説では高度成長に伴う公害などへの反動として「怪獣」や「心霊現象」などが取り上げられ、1959年（昭和34）にはSF怪獣映画の定番ともいえるゴジラが登場している（金子 2006：18-27）。

また皮肉なことに戦後、霊術を解体したGHQの兵士が読み捨てたおびただしい数のペーパーバックSF本が古本屋に氾濫し、「日本の読書界が新たな事

態を迎えることとなった」とまで言われるようになったのも戦後すぐのことである（牧 2017：186）。SF本は英米の作品を中心として紹介が進み²⁵⁾、一般にも知られるようになっていった（徐翌 2017：45）。

1960年代にはSF作家の御三家（牧 2017：204）と言われている筒井康隆、小松左京、星新一らの登場により、日本のSFブームが開花する。彼らが作品の題材を求めた欧米では「ビートニック運動、サイコセラピー、ユング分析心理学、トランスパーソナル、エサレン心理研究所」などニューエイジ思想が台頭してきており、欧米文化の中に溶け込んでいた（高橋 鈴木 1999：76-79）。欧米のSFにニューエイジ思想が溶け込んでいたことにより、作家の意図とは別に大衆文化の根底に精神世界の基礎になる価値観が流入していたのである²⁶⁾。

これらは日本で独自に発展し、仏教系の雑誌『大法輪』の中で「夢の神秘性、不確かな人間の存在、靈魂の復帰、円盤信者の憧れ、呪術・魔術・幻術の不思議」といった大衆向けの特集記事が組まれるなど²⁷⁾、UFO や超常現象ブームともあいまって、戦後霊性思想は大衆文化の中に氾濫していった。

5 精神世界の興隆

このような中で「精神世界」という言葉が使用されるようになっていく。たま出版（1969年創業）の創業者である瓜谷侑宏が、これまでオカルト・心霊ブームと呼ばれてきた事象について、脱宗教を意味する「精神世界」という言葉を掲げたことが契機となり、書店に「精神世界コーナー」が設けられるようになった（小笠原 2019：256）。

瓜谷は、「昭和四十年代の初めの頃から、私は心霊とか超心理とか四次元とかいう言葉で言われている分野における出版活動を志し、爾來一貫してこの方面の出版を行っているが、ついこの間まで、この分野は極めて特殊なものであった」とし、60年代から70年代前半のオカルト・心霊ブームについて、「日本中がこの話題でもち切ったことがある。一方、この現象をインチキだという学者が現れ、（中略）心霊や超能力の世界はかえって世間から軽く見られるようになった」と当時を振り返っている（瓜谷 1983：20-21）。しかし、1978年

には「精神世界の本」のブックフェアが行われるなど（小笠原 2019：256）、精神世界という言葉は徐々に広まっていった。瓜谷はこれについて、「今まで日陰者的存在だったものが一転して『精神世界』という堂々たる名前の表示を持つ分類に躍進したといえる」とし、「いつのまにか自他共に認める新しいジャンルが読書界に定着した」と記している（瓜谷 1983：21）。

当時の出版物を見ると、「精神世界」という言葉以外にも、「オカルト」、「超能力」、「超常現象」、「魔術」、「占星術」といった多岐にわたる言葉が並行して使われており、まだ精神世界という言葉が完全に確立したとは言い切れなかった²⁸⁾。

しかし、1978年のブックフェア以降「精神世界」という言葉は徐々に社会に定着し、1994年に「第1回フナイ・オープン・ワールド」が開催される頃には、上記の超能力、魔術、占星術などの多岐にわたる言葉は精神世界を構成する一部の技法や概念を指す用語となっていった。

2002年11月には、精神世界イベントの代名詞ともなった「スピリチュアル・コンベンション」（スピコン）が開催され、5年後には年間10万人を動員するイベントへと急成長を遂げた。スピコン自体は終了したが、このような精神世界イベントは現在も続いている。ここに後期霊性思想における「精神世界」が開花したということができないのではないだろうか。

6 精神世界と霊の輻輳

先に述べたとおり、興隆期における精神世界は、それまでの UFO、超常現象、超能力、魔術、欧米のニューエイジなど様々な思想を包含し、霊的輻輳状態であった。

この精神世界興隆期における霊的輻輳について、筆者は2つの原因があると推測している。1つは、「フナイ・オープン・ワールド」の主宰者である船井幸雄の存在である。船井の支持層は幅広く、大手企業経営者、サラリーマン、商店主、学生に至るまで広範囲にわたっていた（斉藤 2000：287-289）。

船井は自分が影響を受けた人物として24人を挙げているが、そこにはスピリ

チュアリズムから神智学、ニューソート、超心理学など様々な分野の人物が列挙されている（船井 2005：98）。精神世界イベントの創唱者の船井自身が霊的輻輳状態にあったことは想像に難くない。

精神世界興隆期の中心思想であるニューエイジについて船井は、「ニューエイジなどよく知らないし、まったく意識していない」と主張している（斉藤 2000：296）。筆者が「癒しフェア2018 in OSAKA」及び「癒しフェア2018 in TOKYO」で行ったアンケート²⁹⁾の「あなたはニューエイジとは何か知っていますか」という問いに対して「知っている」と答えた人が14%しかいなかったことから、船井も含め、精神世界の内部にいる人たちの中にも、その中心が何であるかについて、関心がない人たちがいることが窺えた。

2つめの要因は、技法者自身の知識の欠如にある。精神世界関連の技法実践書や思想書を読むと、「悪いのはあなたではない、そのままが良い」、「思いは実現する」というニューソート的な自己肯定、「前世からのカルマを現世で浄化し、霊的界層の上昇」を目的とする神智学の延長線上にあるニューエイジ思想、「霊からの語りかけを待つことを重視する」スピリチュアリズムなどが内包されている。

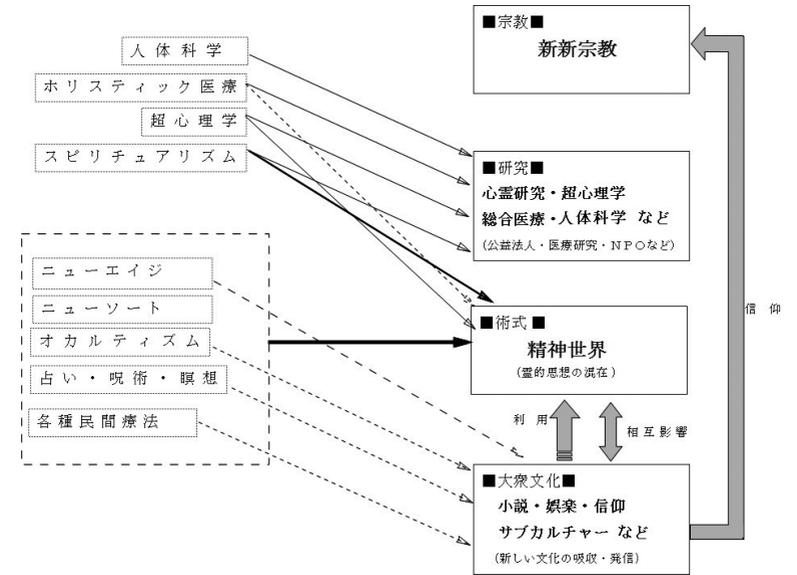
「現状で良いとする自己肯定」と「霊的界層上昇のために現状を変える自己努力」という矛盾した思想に基づく実践方法が同一書籍内で紹介されることも少なくなかった。しかし、精神世界に関わる人たちはその矛盾を受容し、書籍に書いてある情報は正しいとされ、さらにその内容が他者へと伝播し常識化してきたのである。

後期霊性思想の中心である精神世界の興隆期が霊的輻輳状態で、その出自であるイベント提唱者と技法者の霊的知識の欠如が、このような状態を作り出した原因の一端を担っていることは先述の通りである。

先の図1-1と図1-2を比べると、前期霊性思想において、「宗教、研究、術式、大衆文化」の全てが何らかの形でリンクしていた（図1-1）のに対して、後期霊性思想ではその繋がりがほぼ切れている（図1-2）。

また、図1-3から読み取れるように精神世界へ続く霊性思想と新新宗教と

（図1-2 筆者が作成）



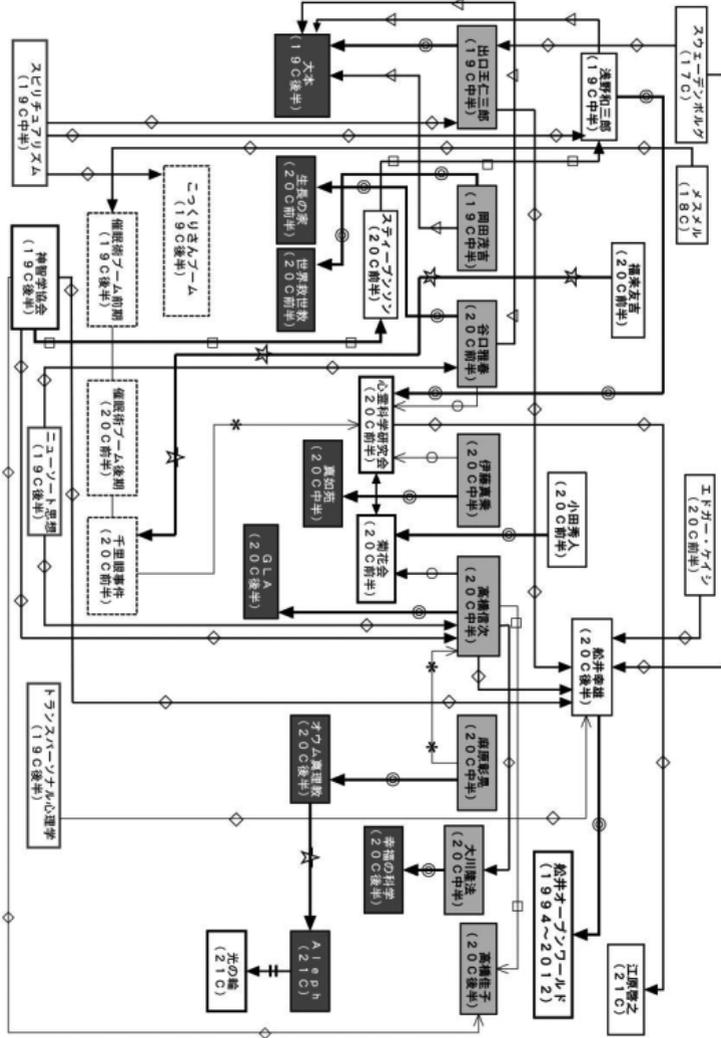
の間には深い繋がりがあり、精神世界と新新宗教には行き来があると見られるが（島藺 1996：20）、必ずしもそうとは限らない。宗教家である高橋信次が船井に影響を与えたことは確かだが（船井は24人のうちに高橋を入れてはいる）、船井が指しているのは高橋個人であり GLA という宗教団体ではない。

研究機関との繋がりが切れた一方で、大衆文化との繋がりがより強まったことも後期霊性思想の特徴である。

前期・後期の霊性思想の相違点は、前期霊性思想がスピリチュアリズムの流入以降、催眠術、霊術、療術などが入り乱れたものの、心霊主義・スピリチュアリズムを幹に統合されていたのに対し、後期霊性思想は前期霊性思想から引き継いだものに加えて、超常現象や超能力、欧米からのニューエイジ思想の流入に、「精神世界」という言葉が先行し、根本思想が宙に浮いた形で、技法の方向性はまとまることなく興隆期において霊的輻輳状態が拡大してしまった。

確かに前期霊性思想においても、娯楽物語と呼ばれる大衆書籍の中で語られる霊術や（山下 2019：2-3）、資格商法的な HowTo 本で免許皆伝した霊術家

(図1-3 筆者が作成)



①線上の記号
 ☆当事者 ◇影響 ○参加 ◎設立 △入信 ▽入信後退会 □指導 *参考 ■分離

②枠の線種及び色分け
 太字——日本に関連の深い精神世界関係者 太枠——精神世界関連団体
 灰色太枠——精神世界関連思想 点線枠——精神世界関連事象 灰色背景黒文字——宗教関係者
 灰色背景白文字——宗教団体

が存在した。

しかし戦前には、技法者が望めば、松本道別や松原皎月など研究に基づいた心霊科学の著書を読める状況にあったのに対し、精神世界の興隆期には精神世界側から発刊される著作物にはおおそ研究書と呼べるものはなく、さらに心霊科学や人体科学、超心理学の研究成果と精神世界の間には溝があった。これは、日本霊性思想史の中では精神世界の興隆期がいかに霊的無秩序の中にあっただかを示している。

2021年現在、精神世界が興隆してから約40年たつ。その期間内には本章のはじめに述べたように、精神世界という枠組の中で小さなブームが起きては終息している。しかし、精神世界興隆期における霊的輻輳状態からの変化、現在の内情の把握、宗教や周辺分野との関係について実証的な検証はなされていない。筆者は本章を踏まえた上で、次章からこれらについて具体的な検証を行っていく。

- 1) ここでは西山茂が提唱した「反復的操霊主義を特徴とする〈霊=術〉系新宗教」、「1970年代以降ににわかに台頭してきた新しい新宗教(新々宗教)」(西山 1988: 192)を指す。
- 2) 癒しフェア (<https://www.a-advice.com>) 閲覧日2021年4月5日。
- 3) 癒しスタジアム inOSAKA (<http://www.balance.join-us.jp/iyasisutajiamuosa.html>) 閲覧日2020年4月5日。
- 4) これまでの研究では「スピリチュアルコンベンション」(スピコン)をもってスピリチュアル系のイベントの中心としてきたが、スピコンの後を継いだスピリチュアルマーケットは2017年に終了しており、継続調査が不可能なため調査対象から外している (<https://ameblo.jp/yoko-mutants-annex/entry-12278123199.html>) 閲覧日2021年4月5日。
- 5) 一柳(2020)、栗田 塚田 吉永(2019)、一柳(1997)、井村(2014)など。
- 6) 誰でもすぐにこっくりさんが始められ、実験ができるように作られたセット。「家庭娯楽の滑稽具として米国の家庭には必ず1個を具うると云う」という宣伝文言がついていた(一柳 1994: 22-24)。
- 7) 「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館、閲覧日2021年4月5日。
- 8) 夏目漱石「明暗」朝日新聞、1916年5月-12月まで連載。
- 9) 大本は当局から1921年(大正10)と1935年(昭和10)に2度に渡って弾圧を受け

- ている。
- 10) 公益財団法人日本心霊科学協会 (<http://www.shinrei.or.jp>) 閲覧日2021年4月5日。
 - 11) 浅野のライフストーリーや彼が心霊研究にもたらした功績、福来との比較等については、松本 (1989)、寺沢 (2004)、井村 (1996) など多くの研究がある。
 - 12) 神智学協会が認めた正式な支部。
 - 13) アストラルもモノドも本来は神智学の独有用語ではないが、ここでは神智学協会の霊性進化論の1つ、惑星進化論の界層とその界層の霊的状态を指している (神尾 2006: 79)。
 - 14) 戦後、神智学そのものは、三浦閔造が1953年に「竜王会」を結成し (吉永 2010: 389-390)、1960年に三浦が死去した後、長女の田中恵美子によって神智学ニッポン・ロッジが開設され、1976年には出版部門の神智学文庫も法人化されたが (閉鎖登記情報 民事法務協会 2020年3月11日取得)、組織が普及することなく (大田 2013: 182-183)、2003年には竜王会は神智学ニッポン・ロッジから離れ、出版部門も本社移転をしている (登記情報 民事法務協会 2010年3月11日取得)。その後日本において目立った動きはないとされていた (杉本 2010: 173-226)。筆者が確認したところ2015年に宇宙パブリッシングの岡本直人により、神奈川県にニッポンロッジが開設されており (IP ドメインサーチ調べ「theosophy.jp」<http://www.ip-domain-search.com> 2020年3月11日閲覧)、竜王会文庫から出版されていた書籍の電子化や、勉強会があったようだが目立った活動はない。
 - 15) 当時は無資格で医療行為を行う者や、遠隔療法を行うとして患者を集めたが実際は何もせずにその時間に寝ていた霊術家などが横行していたという (井村 1996: 306-310)。
 - 16) 「医政調査資料第8輯-療術行為者取締問題参考資料」: 97。
 - 17) 神奈川県では第1条で「業として物理療法、電気療法 (中略) 精神療法、精神療法、心霊術其の他と称し医業類似の行為 (以下略)」としており、霊術を療術の中に含めると明示している (日本医師会 1919: 101)。
 - 18) 戦前の文芸分野の1つで近代文学よりも人気だったとされる (山下 2019: 2)。
 - 19) 図中点線矢印は総合的に影響を与えたもの。実線は直接的に影響を与えたものである。図2-2も同じ。
 - 20) 日本超心理学学会 (<http://j-spp.umin.jp>) 閲覧日2021年4月5日。
 - 21) 人体科学会 (<http://www.smbs.gr.jp>) 閲覧日2021年4月5日。
 - 22) 「人体科学第28回大会プログラム」(2018年12月1日2日 人体科学会)。
 - 23) 元となった薔薇十字団は、プラヴァツキーによれば、古代の建築家たちの秘密儀式を受け継いだ、秘境の導師であり、キリスト教を超越した奥義の守護者であるという (ストーム 1993: 31)。
 - 24) 1950年代後半-1960年頃まで、生長の家の多くの信者が UFO 関連団体の1つ宇宙友好協会 (CBA) の会員になっていた (吉永 2006: 54)。
 - 25) 1940年代のアメリカでは SF の最盛期を迎えており、オカルティックな疑似科学

- が扱われることもあった (ブライアン・アッシュ編 山野浩一監訳 1978『SF 百科図鑑』(サンリオ): 39-48)。
- 26) 一例を挙げると筒井康隆はタイムリープや人の超常的潜在能力について小説「時をかける少女」(1967年)の中で紹介しており (筒井康隆 1983「時をかける少女、緑魔の町」『筒井康隆全集』新潮社)、小松左京は小説「神への長い道」(1967年)の中でサイコトラベル (精神旅行) やライトランゲージ (宇宙語) などの概念を持ち込んでいる (小松左京 1969石川喬司 福島実編『日本のSF (短編集) 現代篇』早川書房)。
 - 27) 大法輪閣 1960「特集現代の不思議」『大法輪』11月号。
 - 28) 『The Meditation』(平川出版)、『たま』(たま出版)、『ムー』(学研)、『トワイライトゾーン』(KK ワールドフォトプレス) などオカルト系、精神世界系雑誌約140冊にて確認。
 - 29) 詳細は巻末資料①を参照。

第2章 精神世界とは何か

1節 先行研究の問題点——精神世界・ニューエイジと新靈性運動

精神世界という用語が瓜谷侑宏によって作られた言葉であることは第1章において述べた。島菌は「『精神世界』という語は翻訳語ではなく、日本でつくられたものだ」と述べたうえで（島菌 2020：280）、ニューエイジと精神世界の間の「相互影響関係も小さなものではなかった」としている（島菌 2020：201）。

1 新靈性運動の提唱

精神世界について島菌は、「日本だけに顕著に見られる特殊日本的な現象などではない」、「先進国を中心に、世界各地で同様の現象が深々と浸透し、広がっている」現象で（島菌 1996：20）、北米でニューエイジ（New Age）とよばれたものと大幅に重なり合うものだとしている。一方で島菌は、両者を「同じものとするのは適切ではない。またまったく独立した別個の現象と見るのも正しくない」とし、アメリカ、ヨーロッパ、日本、そして他の世界各地との比較研究を進める上で、これらを包括する用語として「新靈性運動（新靈性文化）」という言葉の提唱した（島菌 2007：46-48）。

一般にニューエイジは、19世紀の心霊主義、ニューソート、神智学の伝統から派生したものと考えられており、異次元からの霊や存在とのチャネリングの実践や、カルマや生まれ変わりという考え方を受け継いでいるとされている（パートリッジ 2009：429）。レイチェル・ストームはニューエイジについて、「神智学者はニューエイジ運動の生まれ故郷であり出生地である。神智学者がこの道を用意したのだ」と述べ、ニューエイジの中心思想が神智学であることを示している（ストーム 1993：23）。

実際、島菌がニューエイジの信仰世界の輪郭を説明した19項目¹⁾の中には（島菌 1996：31-35）、神智学の靈性進化論の要素として大田があげた8項目が含まれており（大田 2013：46）、ニューエイジは神智学の靈性進化論（靈的進

化論）を中心とし、様々な技法や思想を包括して展開されてきたといえよう。

島菌が、「同じものとするのは適切ではない。またまったく独立した別個の現象と見るのも正しくない」と述べたように、精神世界とニューエイジは相互影響関係にあり、相似点も多く、その技法や思想にも共通点は多い。樫尾直樹はニューエイジについて「仏教やヒンドゥーイズムといった東洋思想、ヨーガ・瞑想・気功などの東洋の身体的実践や、神秘主義、神智学、そして人間性心理学などの影響を受けながら、ヒーリングやチャネリング、あるいは宇宙人やUFOといった、文化上のゴミ箱に投げ捨てられてしまうような事象までも包摂しながら」展開されてきており、その中には「疑似科学的なオカルトや、荒唐無稽ないかがわしい神話や思想が混在」していることを指摘し、精神世界については、「現代日本のスピリチュアルブームは、まさにこのようなニューエイジのがらくたを継承しており、カルトに結びつく危険性がきわめて高い」と批判的な見方をしている（樫尾 2010：76）。

島菌も「新靈性運動」の持つこのようなネガティブな面について認識しており、これを宗教と比べ、（新靈性運動には）「業務遂行組織（としての宗教教団）と消費者（としての個人信徒）が存在するが、ヨコのつながりをもつ信徒同士の信仰共同体は欠如している」とし、新靈性運動に関わる人々が束縛的な教義や組織への従属を嫌った結果「実際には企業的な組織が、不特定多数の消費者に、情報や技術やサービスを販売するという形での普及が支配的」であり、「新靈性運動が広められ、受容されるのは、何よりもまず、書物、雑誌、ビデオ等のメディアとともに、セミナー、ワークショップ、講座など、料金を払って参加し、何かを習得するための場」においてで、「個々人の自己充足への志向がたいへん強いと、『奉仕による共同行為』という理念は尊ばれない」としている（島菌 1996：380）。

しかし島菌自身は、「新靈性文化が全体としてどのような社会的機能をもつのか、現代社会の公共空間において新靈性文化は何らかの役割を果たすのか、果たすとすればそれはどのような機能であり、役割なのかという問い」には深入りしておらず、「評価する前に、現象そのものをよく見ておきたい」として

いる（島菌進 2007：311）。つまり島菌は、包括的な「新靈性運動」という概念を使ってそれまで「精神世界」や「ニューエイジ」と呼ばれてきたものを世界規模で明確化しようとしたのである（島菌 2007：46-48）。

2 「新靈性運動」という概念の限界

「新靈性運動（文化）」というグローバルな概念は、世界における同種の現象を論じる際、またその中に含まれる技法や思想を説明するのに有効であった。

しかし、この概念が提唱され30年が経過した現在、少なくとも日本の靈性思想においては「新靈性運動」という言葉では説明しにくい状況が生じてきている。

(1) ニューエイジという概念の消失

現在においても精神世界の中には、島菌が示したニューエイジ運動の輪郭とその周辺の大半は受け継がれている²⁾。

しかし、肝心の日本では「ニューエイジ」そのものについて知る人々はほぼいなくなっているのが現状である。ブース出展型の「精神世界イベント」を創出した船井幸雄³⁾は自分が影響を受けた人物として、スウェーデンボルグ、エドガー・ケイシー、出口王仁三郎、高橋信次、スタニスラフ・グロフなどを挙げているが（船井 2005：98）、ニューエイジに関しては、「ニューエイジなどよく知らないし、全く意識していない」としている（斉藤 2000：296）。

筆者がブース出展型イベント、「癒しフェア2018 in OSAKA」と「癒しフェア2018 in TOKYO」で行った「ニューエイジに関するアンケート調査」では⁴⁾、有効回答数97のうち、「ニューエイジについて聞いたことはある」33%、「知らない」29%、「分からない」24%、「知っている」14%という結果を得ており、現在の精神世界の関係者でニューエイジを意識する者はごく少数になってしまったといえることができる。

(2) 新新宗教との親和性の有無

第3章で詳しく述べるが、現在、精神世界と新新宗教の間には溝がある一方、伝統的宗教との間には親和性がある。島菌は新靈性運動に一部⁵⁾の新宗教（新新宗教）を含めている（島菌 1996：53）。確かに、第1章において新新宗教の成立及び相関図で示したように大半の新新宗教が前期靈性思想との繋がりを持っていたことから考えるとこの流れは自然である。

島菌はまた、精神世界と新宗教（とりわけ新新宗教）の間には多くの接点があり、「『精神世界から新新宗教へ』、あるいは『新新宗教から精神世界へ』たどった経験がある人の数はかなりの数に上るだろう」（島菌 1996：20）としているが、上記の事情を考えれば、新靈性運動の提唱当時に新新宗教をその中に含めたのは当然であろう。しかし、現在においてこの状況は大きく変わってしまっているのである。

(3) 日本独自のセラピーと精神世界の包括性

島菌が「新靈性運動」の定義を提唱した当時、その中心となったニューエイジ運動の輪郭とその周辺については先に述べたが、この他にも島菌は、「日本の新靈性運動は、日本やアジアの宗教思想や実践の伝統を発掘し、それらを継承発展させようとする動きと結びつきつつ展開してきた」（島菌 1996：61）として、アニミズム・古神道系、密教・禅などの仏教系、平田篤胤-出口王仁三郎に引き継がれていく靈学の継承を説く流れ、中国を源泉とする東アジアの気の伝承を説く流れの、4つの有力な流れを示している。

確かに現在でも癒書セラピーや、勾玉セラピー、言霊セラピー・和魂カードなどの日本発祥の技法・思想はあるが、発案者にとって、これらのセラピーはオリジナルであり、新靈性運動の中に含まれることを拒むであろうし、この4つの中に組み込むことが難しい日本の伝統であるように見えて全く新しく日本で開発された技法もあり、これらを新靈性運動の中に含めて説明するのは難しい。

むしろ、精神世界技法者は新靈性運動の中で中心とされたニューエイジ的技

法については、(ニューエイジという言葉を知らなくとも)「技法者として知っておくべき基本」として捉え、その上で自分の技法を行っている。言い方を変えると、島藺が新靈性運動という形で靈性思想を世界的に包括しようとしたのと逆のことが日本で起きているということができるといえないだろうか(図2-1)。

2節 「精神世界」と根本思想

島藺は、「今、『スピリチュアリティ』と呼ばれているものかなりの部分は、しばらく前には『精神世界』とよばれていた」(島藺 2007:5)、『宗教ではないスピリチュアルな』領域に関心をもつ広い範囲の人びとが用いる語としては『精神世界』や『靈性』の語が優位」(島藺 2007:32)と書いているように、これらを同一のものとして扱っており、時代背景によって呼び方が変わってきたという見方をしている。筆者はここまで、「精神世界」、「スピリチュアル」、「スピリチュアリティ」という用語が同じものを指すときには適宜用いてきたが、本章以降は、引用や使用者に特別な意図がある場合をのぞき、本論文の研究対象を「精神世界」の語で統一することにし、以下にその経緯を説明する。

1 研究範囲を表す「精神世界」

(1) スピリチュアル・スピリチュアリティの指す範囲

「スピリチュアル」という用語は、江原啓之が、「靈的真理を『米』とするならば、生まれたての、たましいの幼子には、『おもゆ』、(中略)後は各自の成長の度合いに合わせて徐々に米を食べられるようにしてゆけばいい」(江原 2003:51)として「『米』を語るときには『スピリチュアリズム』、『おもゆ』を語るときには『スピリチュアル』とした」というように、もともとは心霊主義から来ており、スピリチュアリズムの前段階を指す意図で使われた用語である。

医療・福祉の分野のケアには、フィジカル・ケア、メンタル・ケアが存在する。それに続く3つ目のケアとして「スピリチュアル・ケア」という言葉が使

われている。

「スピリチュアル・ケア」について、飯田史彦は、「人生のあらゆる事象に意味を見いだすことができるような、適切な思考方法や有益な情報を効果的に伝えることによって、対象者が自分自身で、『心の免疫力』や『自己治癒力』を高めていくよう導くことである」としている(飯田 2019:460/3876)。また、終末医療で末期がん患者が持つ肉体的な痛み以外に感じる無価値感や空虚感はスピリチュアル・ペインと呼ばれており(村田 2011:1)、ここにもスピリチュアルという言葉が使われている。

「スピリチュアリティ(靈性)」という用語も大きな概念を説明するには有用な用語である⁶⁾。

大谷栄一は、「宗教やニューエイジ、新靈性運動=文化」のような実体的な定義とは区別して機能的にスピリチュアリティを定義することを試みており⁷⁾、また島藺はアルコール・アノニマスから始まった12ステップ・グループなどのセルフヘルプ・グループについて、その集まりを、宗教を信仰する者の共同体とは違う「限定された範囲の人々が、限定された問題に取り組むことを通して、スピリチュアリティに親しむ」人々だとし、これを「新しい痛みのスピリチュアリティ」の広まりだとしている(島藺 2020:286-287)。

これに対して堀江は、「精神世界」を含む幅広い意味でスピリチュアリティを使用しており、スピリチュアリティを、「(1) 通常は知覚しえないが内面的に感じられるものへの信念と、(2) それを体験して変化をもたらそうとする実践の総体であり、(3) 宗教文化的資源の選択的摂取、(4) 個人主義や反権威主義といった態度が、程度の差はあれ、ともなうもの」と定義している⁸⁾。堀江のスピリチュアリティの定義は、これまでに示した内容の大半をカバーしており、「靈魂や目に見えない不思議な力」や状況を分析するのにも有効な概念であるとされている(堀江 時田 2020:134)。

(2) 本研究の範囲とそれを表す用語

しかし、筆者が本論文で研究対象としているのは、堀江が、「日本では、『オ

カルト』『精神世界』『ニューエイジ』『スピリチュアル（名詞的用法）』などと言葉が移り変わり、指示される現象の強調点も移り変わる」（堀江 2019：2）としたもので、スピリチュアリティの領域の一部である。

この領域は変化が激しく安定しない領域に見えるため、現状の実態把握や変化の様子について実証的な調査を手法として用いるのは効率が悪いことは確かである。

しかし、この領域から派生したものは、スピリチュアル・ケアやスピリチュアル・ペインのような概念的なものだけでなく、ツーリズムやマーケットに至るまで広がりを見せており、それらの原点についての正確な把握は必要不可欠だと筆者は考えている。

そこで、この研究範囲を表すのにどのような用語を使うのが適切かということが問題になってくる。つまり、堀江のいうスピリチュアリティでは筆者の研究範囲はカバーできているものの、その範囲にある対象が見えにくくなるのである。

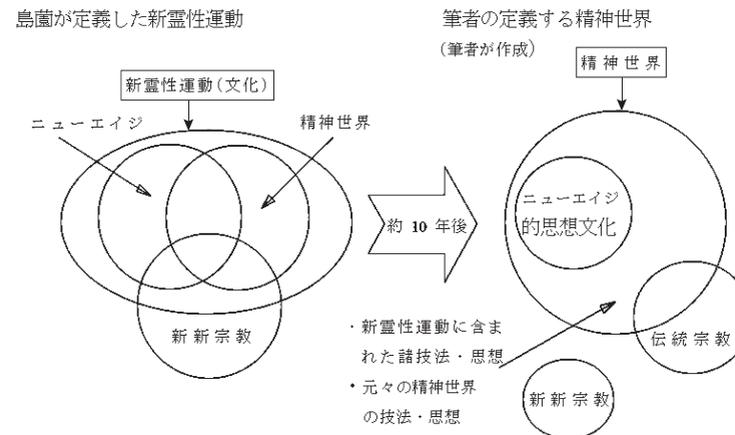
筆者は次の2つの理由から、既に序説から使用している「精神世界」という用語をあてることにした。1つ目は、日本で最初に『オカルト』『精神世界』『ニューエイジ』『スピリチュアル』などと言葉が移り変わり、指示される現象の強調点も移り変わる」現象に使われた言葉であること。2つめ目は、今もこの用語を冠した書籍が流通していること、また WEB の流通分野としても使用されており⁹⁾、大手書店のデータベースの分類でも使用されていることから¹⁰⁾、現在でも常並な用語として使われていると考えられるからである。これら2点において、「精神世界」という用語は「スピリチュアル」や「スピリチュアリティ」よりも筆者の研究範囲に合致する用語なのである。

2 狭義の精神世界と精神世界の根本思想

(1) 狭義の精神世界

本論文における研究範囲はさらに絞られる。筆者の研究対象は、「精神世界」という用語の提唱者である瓜谷が「自分の内なる世界を深め、宇宙の究極的波

(図 2-1 (鳥蘭 1996：51) の図を参考に筆者が作成)



動と一体になること」を最終目標とした人々（瓜谷 1983：194）、あるいは人間の本质である霊体の性質を進化させるために、何度も地上界への転生を繰り返し霊的な成長を遂げ、神的な存在になっていくことを目標とする霊性進化論を支持する人々（大田 2013：46-47）である。

鳥蘭は包括用語として新靈性運動を示した際に、彼らを、「自己自身の意識を高いレベルに変容させ、『宇宙意識』に融合していくこと」を支持する人たちだとまとめている（鳥蘭 1992：54）。

「新靈性運動」という用語も「ニューエイジ」という用語も、現在はほとんど使用されなくなっているが、図 2-1 で分かるように、精神世界の中には「自己自身の意識を高いレベルに変容させよう」とする霊性進化論が根付いている。霊性進化論の中でとりわけ意識されるのが「魂のレベル」である。大規模ブース出展型イベントの創唱者である船井幸雄も、その著書の中で魂のレベル上げを重視しており（船井 2005：31-42）、斉藤一人¹¹⁾をはじめとして精神世界のリーダーと呼ばれる人々の多くも、同様の内容を記している（光田 2010：46）。

大規模ブース出展型イベント「癒しフェア2018 in 大阪」、「癒しフェア2018

in TOKYO」で筆者がとったアンケートの中の、「あなたは魂のレベルを意識したことがありますか」という設問では、97人中「ある」と回答した人が64%で、精神世界に関わる人の大半は、何らかの形で魂のレベルを気にしていると考えられる¹²⁾。魂のレベルを常に気にかけ、霊的に進化しようとする人と、オーラ診断やタロット占いを楽しみに来ている人や、スピリチュアルブーム、パワースポットブームにのり神聖な雰囲気を体験するために聖地を訪れる人(門田 2014: 226-227)では、意思決定・行動の過程において、明らかに違いがある。

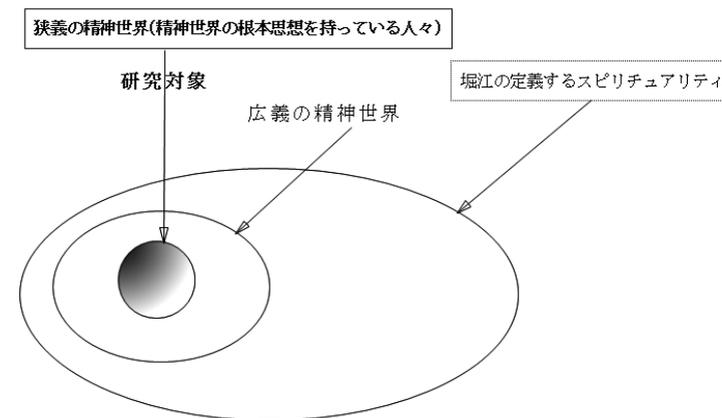
そこで筆者は、パワースポット巡礼を含む、個々の技法や思想、及びその取得や実践のみに興味を持つ人々を「広義の精神世界関係者」、霊的な進化をしていき、自己レベルを高レベルに変容させるため、魂のレベル上げを目的とする人々を「狭義の精神世界関係者」として区別したい。本論文における研究対象は後者であり、以降、本論文において「精神世界(関係者)」と記した場合は「狭義の精神世界(関係者)」を指し、「広義の精神世界(関係者)」については、必要があるときのみそのように記す。

(2) 精神世界の根本思想

堀江がいうように、精神世界は指示される現象の強調点も次々と変化し、10年前の理論で説明できないようなものが出てくることは珍しくない。しかし、一見するとそれらは変化・追加・消滅・遡行を繰り返しているように見えるが、よく確認すると根本的な思想は何も変わっていないのである。

一例を挙げると、自己意識を高いレベルに変容させて融合していくべき「宇宙意識」は人の外側にある存在とされてきた¹³⁾。しかし、ワンネスとも呼ばれるこの宇宙意識について¹⁴⁾、2015年前後から、人の内側にも宇宙意識は存在しているというノンデュアリティの思想が提唱されはじめ¹⁵⁾、「ワンネスを所有したいと思う探求者もまたワンネスである」(パーンズ 2017: 216/2386) など、宇宙意識は自分の中にも存在するという考え方が、古神道ブームとも相まって現在の精神世界では主流となっている¹⁶⁾。

(図 2-2 筆者が作成)



ところが、日本で最初に「ワンネス」という用語を用いた知花俊彦は、「みなさんは宇宙意識の中に存在して、宇宙意識はみなさんの中に存在しています」(知花 1994: 105)と述べており、実はこの概念は新しいものでない¹⁷⁾。つまり、この30年弱の間に、「宇宙意識、ワンネスをどう捉えるか」ということについて、同じ思想が一周してきただけにもかかわらず、精神世界ではこれを「新しいもの」として受け入れていたのである。

このように精神世界では、言葉や指示される現象や強調点が変わっても、実のところあまり変化していないことが多い。その代表的なものが、「自己自身の意識を高いレベルに変容させ、『宇宙意識』に融合していく」(烏蘭 1992: 54)という精神世界の目的である。本論文では、この変化しない部分を精神世界の「根本思想」とし、その時々によって変化していく考え方については、単に精神世界の「思想」として区別することにする。(図 2-2)。

3節 精神世界の現状

ここまで新霊性運動とその問題点、精神世界における根本思想、及び筆者の研究対象とする範囲について示してきた。

本節において筆者は、引き続き先行研究から精神世界の動向を探り、その後ドキュメントの調査と現地調査事例でこれを補完し精神世界の現状を明らかにする。

1 精神世界の動向

精神世界は順調に成長してきたわけではない。問題の発端は、2006年に発生した、生まれ変わりを信じた中学生の自殺事件であった。当時の新聞記事はこの件について次のように記している。

9日午前2時45分ごろ、埼玉県川越市通町の11階建てマンションの敷地内で、このマンションに住む同市立中2年の男子生徒（14）が倒れているのを主婦（50）が発見し通報した。男子生徒は外傷性ショックで死亡した。川越署は、男子生徒が10階の踊り場から飛び降りて自殺を図ったとみて動機などを調べている。調べでは、男子生徒の部屋の机の上に遺書のようなメモがあった。霊界の話を紹介するテレビ番組を家族と見たことに触れて「絶対におれは生まれ変わる。もっとできる人間になってくる。家族のみんなを忘れないでいて。必ず会いに来る。ホントにゴメン サヨナラ」と書かれていた。生徒はバスケットボール部に所属し、レギュラーを外されたことにショックを受けていた様子だったという。両親にいじめの相談をしたことはなく、8日も変わった様子はなかったという。
（毎日新聞、東京夕刊 2006年12月9日【村上尊一】）

これをきっかけに、2006年-2007年にかけての総合雑誌における喧しいほどの論議や、全国霊感商法対策弁護士連絡会による民放連やテレビ局各局に対するオカルト番組の検討の申し入れ（櫻井 2009a：254-255）、「霊感商法を助長する」、「霊視の内容が事前に用意されていた」などの批判や諸事情による「国分太一・美輪明宏・江原啓之のオーラの泉」番組の打ち切りなど、2009年頃には精神世界は終焉に向かうと思われた¹⁸⁾。

しかし、これまで述べてきた通り、精神世界は形を変えつつも持続している。

2 ドキュメント調査による現状把握

ドキュメント調査では、精神世界関係者や、精神世界関係者と接してきた人の著書やブログから精神世界の問題点に絞ってまとめた¹⁹⁾。それらは、「宗教的側面」、「経済面」、「社会との関係」、「心理状態」、「他者への接し方」の5つの項目に分類・整理できる。

【宗教的側面】

- ハンドパワーのヒーリングなどは宗教の手かざしから宗教性を取り扱っただけである。
- 癒しという本来は救済宗教にしか使われなかった言葉を安易に使ってブームを起し、本来の癒しの意味を分からなくさせてしまった。

【経済面】

- 波動の原理という精神世界共通の認識が、波動測定器や波動矯正装置なる高価な商品を生み出し、マルチまがいの商法がはびこっている。
- 疑似科学が精神世界マーケットへの勧誘に使われ、足を運びやすくしている。
- 完全になることを求めるように仕向け、いつまでもセッションを受け続けさせる。
- 無理矢理人生の意味を問い人生を見いだす努力をさせ、セッションを受け続けさせる。
- 魂の永遠・輪廻転生・アセンションで悪い世界へ墜ちないようにと魂磨きを強要する。

【社会面について】

- 精神世界市場に足を運び続けた結果、占いや霊媒などの依存症になり錯乱する。
- 宇宙意識との直接の結びつきを求めた結果「個人主義」に陥る人々が増加する。
- 全てのことは宇宙意識の導きと前向きに捉えようとしすぎて判断力が低下し、

他人に迷惑をかけても気付かない。

- 人との魂の優劣をいつも考え、差別的な思考を生み出している。

【心理状態】

- 両親を決めたのも生まれてくることを決めたのも自分自身であると教えられているので、親から虐待されるのは自分を鍛えるために親を選んで生まれてきたからと信じ、私さえ変わればいいのだと思ってしまう、被虐待児童の保護の遅れなどの社会的問題が発生している。
- 問題は社会ではなく自分であると思いつまうとするので、それで説明のつかないことは前世のせいにし、社会的に孤立していく。
- 自分の使命は宇宙意識から与えられたものだと信じているので人の話を最後まで聞けない。
- 価値観の多様性を認めず「全ては1つだ」と主張しつづける。
- 肩こりも霊現象にするなど、あらゆる事を精神世界のできごとと関連づける。

【他人に対する態度について】

- 癒しを求めてきた人に対して「魂磨き」を強要して追い詰める。
- 自殺を考える程苦しんだ人に対して「転生待ちの魂を裏切る行為だ」と責める。
- 身体に疾患が起こる＝霊性が高い＝魂のエリートなので障害に感謝しろという。
- 相手がソウルメイト（前世からの魂の繋がりのある魂の双生児的存在）だと信じ、嫌がられてもつきまとう（ストーカー行為に発展することもある）。

3 調査による事例

ドキュメント調査では精神世界のネガティブな面が目立ったが、実際にこのようなネガティブなことが起きているのかどうかについて、筆者は現地調査による補完を試みた。

(1) 東日本大震災について

【2B】(30代男性 愛知県在住 会社員)

聞き取り (2017年4月10日・11日)

——精神世界関係者との付き合い

【2B】は精神世界関係者²⁰⁾である女性(20代)と付き合っていた。【2B】が休みの日に彼女を誘うと、時折「大切なイベントがあるから」、「大切なセミナーがあるから」と断られることはあったが、単に「占いや不思議なことが好きな子」としか思わず、問題なく交際は続いていたという。また風邪を引いた際には見舞いにきて、「癒しのパワーを分けてあげる」というなど、「変であっても優しい子」と良いイメージをもっていた。

——別れるきっかけ

彼女と別れるきっかけになったのが、東日本大震災である。【2B】のところには知り合いから何本も、「お前の彼女は頭がおかしい」、「あれは異常だからやめさせろ」、「お前まで非社会的行為に加担するのか」という電話が寄せられた。

何のことか分からない【2B】が電話で詳細を聞いたところ、彼女はブログをもっており、そこには被災者の感情を逆撫でするような書き込みがなされ、また同様の意見を持つ人々へのリンクや言葉が紹介してあった。

【2B】が確認した内容は次のようなものであった。

(被災者に対して)

「あなたにとっては原発は災いの元であり怒りの矛先かもしれませんが、原発に向けるあなたの負の感情、怒りの矛先がさらなる不幸を呼ぶのです」

「ここまで頑張った原発に感謝といたわりの気持ちを持つことによってこれから先を切り開くのです」

(原発に対して)「原発をリーディングした結果、この事故のおかげで人はこれから安全でクリーンなエネルギーを求めるようになる」

「私達はにこやかでいられると原発から愛の波動を感じる」

この内容を見た【2B】はすぐに彼女に電話を入れ、書き込みや同様の書き込みへのリンクを削除するようにいったが、彼女はそれに応じず、「私にはこれを書かなければならない使命が与えられている」の一点張りであった。【2B】が「俺とブログへの書き込みとのどちらが大切なのか」と尋ねたところ、彼女は間をおくことなく「使命を伝えることに決まっているじゃない」と答えたという。

「このままいけば、自分も彼女と同様にみられるという怖さもあったが、それよりも彼女の思考が怖くなった」、「それまで不思議で可愛いと思っていた部分が急に気持ちの悪さに一瞬で変わってしまった」と【2B】はいう。【2B】はその電話で彼女に別れる旨を告げてその月には関係を切ったが、聞き取り時にはまだ「お前の彼女をなんとかしろ」という電話が時折かかっていた。

——現在

電話で確認をしたところ、現在は【2B】宛の非難の電話はすっかり無くなり、会社でそれなりのポジションにもなったが結婚はしていないという。

不躰かとは思ったが、彼女のことが関係するのかわかるところ「少しでも変わったところがあるとどうしても避けてしまうので、相手も観察されているみたいで嫌なんじゃないですか」と、少なからず彼女の影響が残っていることを話してくれた（2021年3月27日【2B】への聞き取り）。

(2) ホリスティック医療

【2C】（70代男性 兵庫県在住 心療内科医師）

聞き取り（2016年10月14日）

——精神世界に触れるきっかけ

心療内科医師の【2C】は、かつて公立病院に勤務して人工透析のセクションに従事していた。そこで、人が希望を無くし、体が弱るよりも先に心が衰弱することで、死ぬ前には廃人同然になっている姿を多く見てきた。

ところが、一部の看護師らが受け持った透析患者は、なぜか体力が低下する

こともなく元気な状態が続いていたことを不思議に思った【2C】は、その看護師たちがホリスティック医療に関わっていることを知り、ホリスティック医療への関心を持ち始めた。

その後、【2C】は心療内科医として独立し、薬物療法やカウンセリングの他、様々なアプローチでホリスティック医療をめざした。【2C】が感銘を受け、精神世界の技法を医療に取り入れるきっかけになったのが、エドガー・ケイシーのリーディングについて書かれている『転生の秘密』（ジナ・サーミナラ 多賀瑛訳 1985 たま出版）だった。

——精神世界を取り入れた診療

【2C】は様々な書籍を読み、またセミナーにも通って独自に過去世療法を研究し、身近に「逆ソウルメイト」²¹⁾がいた場合、治療をしてもうまくいかないため、まず患者の過去世を確認する必要性を感じたという。

医院の付近に別館を設け、「クォンタム」²²⁾という高額な器機を購入し、これを用いた療法も始めた。しかし、自費診療であったこともあり、前世療法や【2C】の理論は患者の大半からは受け入れられなかった。

【2C】は、できるだけ多くの治療ができるように、民間資格の養成所にも通い、精神世界の技法に魅了されていった。最初は鍼灸師の国家資格やカイロプラクティック認定医の取得など医療に代わるものが多かったが、やがて神伝レイキマスター²³⁾、真気光師²⁴⁾、アイパワー測定士²⁵⁾といった精神世界の技法セミナーに通い、各種資格の上級資格を得た。【2C】は「こういうの（精神世界技法）が西洋医学より優れているとは考えてはいない。基本は投薬とカウンセリングで、最近では脳の詳細が写る高額なMRIも導入した」、と基本は心療内科の医師として現代医療で対応し、治療が行き詰まったときにのみ精神世界の技法を使うということだった。

とはいうものの、筆者が誘導したわけではないにもかかわらず、聞き取り中何度も、「自閉症と思われた子供がスターピープル²⁶⁾であった」、「アカシックレコード²⁷⁾を解析して問題が解決した」、「看護師はその患者にエネルギーを合

わすためにチャクラ²⁸⁾の調整が必要」など、精神世界用語を繰り返し使用していたのが印象に残った。

この聞き取り時、【2C】は、「旧来医療では再生しないと思われていた脳細胞を若返らせ、その作用で心身能力と視力がアップする医療機器を導入する」とし、それに合わせて新しいヒーリング技法の高位資格を得ようとしているということだった。

——【2C】の使命

【2C】は、生活状況について、「家計や病院の経営状況だけをみれば、稼いだお金は全て医療機器や私の資格取得へ消えていく。周りからは何のために働いているのか馬鹿のように見えるかもしれない。しかし、自分はスターピープルに類別される1人であり、この地球が次のステップへと行くための道を整えている。だから、今の現実がどうあれ、死ぬまでに使命を全うできれば、次に生まれてきた時にこの地球は新しいスタートを切っており、それを見るのが一番の楽しみである」と、自分の使命は地球の次のステップのための道を整えるものだと力強く述べていた。

——経営破綻

2018年に状況を聞くためにアポイントの電話をしたが、電話での連絡を取ることはできなかった。分院を訪れたが閉鎖されており、本院を訪れ、受付の女性（40代）に名刺を渡しておいた。

後日、弁護士（40代男性）から電話があり、「【2C】先生の代理人ですが、先生は債務超過の状態では話ができる状態ではありません」とのことであった。電話を切る際、要件を聞かれたので、簡単に経緯を話した。

弁護士は「精神世界が原因でこうなってるんです」と、その後の【2C】について話を「守秘義務に抵触しない範囲で」簡単に話してくれた。

弁護士の話から判断すると【2C】は、民間療法のマスターと呼ばれる人々から次々に高位の資格取得を勧められ、全て取得していた²⁹⁾。さらに精神世界市場でよく見かけるオーラ診断機の上位機種や、見たこともない機材も購入して

いたらしく、筆者には完全に精神世界の市場に取り込まれているように感じられた。

しかし、弁護士によると【2C】自身はとくに落ち込むこともなく、「これが自分のライトワーク³⁰⁾だから問題ない」と言っており、被害者意識は全く持っていない。

——2021年2月現在

念のため、2020年の年末に【2C】が診療をしていた付近の薬局に【2C】について知らないかと調査にいったところ、「【2C】先生は今は福祉関係の医師として頑張ってますよ」ということで、場所を聞いたところ、以前の診療所からはかなり離れた場所に診療所兼自宅を構えていた。直接話を聞こうかと思ったが、2018年のこともあったので、近隣住民に風評を聞いたところ、「カウンセリングや鍼灸が中心で、話もよく聞いてくれる良い医師だ」と評判は良いようだった。

一応診療所の看板を確認したところ、ドクター・ドルフィン³¹⁾が座右の銘にしている言葉が診療所名になっていたことを確認できたので調査を切り上げた（2021年2月13日 現地調査）。

(3) ソウルメイトとDV

【0A】（40代女性 三重県在住 精神世界関連事業者）
聞き取り（2017年11月8日）

——病院からの電話

【0A】はチャネリング、リーディングの個人サロンを行う一方で、近隣のカフェにて無料で精神世界の技法にもとづくカウンセリングを行ったり、伝統工芸の教室を開いたりしている。

昔から靈感が強く、自分には見えるが人には見えないものに悩まされ、高校卒業後自分の生きる意味を探していたところ、職場で原因不明の歩行困難で苦しんでいる同僚に「何かの霊」のようなものが憑いていることが分かったので、その霊と話をして出て行ってもらったことから、「困ったときの【0A】ちゃん」

と頼られるようになり、精神世界における使命などを知っていくうちに、「地
に足をつけて、こういう相談を生業にしてみるか」と考えたという。

その後、元々社会的で積極的な性格もあり、勤務先に持ち込まれた「途上国
で作られた映画の上映」企画を会社が断った際も、自宅に開いたサロンの利用
者や近隣の人々に呼びかけてプロジェクトを立ち上げて上映会を実現するなど、
地元に着した活動をしている。

カフェでは近隣の住民からの相談だけではなく【0A】を頼ってやってくる精
神世界関係者からの相談も受け付けている。2017年10月末にカフェにいた
【0A】宛に、「助けて欲しい友人がいるので、今すぐ連れて行きたい」という
連絡があった。

夜遅くやってきた女性（30代）はあきらかに顔にアザがあり、大きく腫れて
いて【0A】らを驚かせた。【0A】が女性から聞いた内容は既に相談の域を超え
ており、すぐに警察に通報する必要があるような DV 事案であった。

その女性と彼女の夫は、互いに精神世界のサロンの利用者で、共通の話題も
あり交際を重ね結婚に至った。子供はおらず、結婚3年目までは何事もなく生
活をしていた。しかし、帰りが遅い夫の行動を不審に思った女性は、1度だけ
それを問い詰めてしまった。結果としては何もなかったのだが、以来夫は高圧
的になり、女性に手をあげるようになった。その後、夫の態度はさらに暴力的
になっていき、気に入らないことがあると手をあげるようになった。

しかし、夫自身も自分がそのような状態にあることを気にしており、2人で
ヒプノセラピーをしているスピリチュアル・カウンセラーを訪れた。そこで、
カウンセラーから言われたのは、「2人はツインソウルであり、過去からの因
縁を引きずっているのです、絶対に別れてはいけません」、「別れたら来世でさらに
辛いことが待っている」という内容だった。この日を境に、夫の暴力はそれま
でにないほどに激しさを増し、顔面にアザができるほどにエスカレートした。
しかし、女性は「ソウルメイト」、「ツインソウル」といった概念をかたく信じて
おり、「今別れたら今世でのカルマが落ちない」、「耐えることは当たり前」
だと信じ込んでいた。

女性の状態を見かねた友人が、【0A】のことを思い出して相談に連れ出し、
【0A】はすぐに警察に連絡し女性は保護された。

【0A】は、『『ツインソウルがどうかソウルメイトがどうか』とか、『過去世
がどうか、前世がどうか』とかいう人が多いが、それを知ったことによって今
を生きることの足枷になるならば精神世界なんてやめた方がよい』とコメント
していた。

(4) 不動産業者と精神世界

【2D】（30代女性 三重県在住 不動産会社経営）
聞き取り（2018年6月8日）

——土地の遠隔ヒーリング

不動産会社を経営している【2D】は、不動産の売買に関して女性のスピリ
チュアル・カウンセラーに事業の相談をした。カウンセラーの回答は的確で、
「なるほど」と思い、席を立とうとしたところ、「少し気になることがあるか
ら」と、カウンセラーは【2D】の住んでいる場所と付近についてのリーディ
ングを始めた。「何かアドバイスが他にあるのか」と思った【2D】にカウンセ
ラーは、「この土地の付近には悪霊がたくさんいるので祓う必要があります、この
ままでは子供の健康も危うい」といった。そこで【2D】は、時間を延長しても
らい、土地の遠隔ヒーリングを受けることにした。

その後も何か気持ちが悪くなった【2D】は、同じカウンセラーに相談した
ところ、彼女は、「この土地は業が深そうで、1度のヒーリングでは悪霊がい
なくならない。何度か遠隔ヒーリングを行う必要がある」と告げた。この後
【2D】は、カウンセラーの目があまりにも真剣だったことと、思い当たる節が
多少あったことから、もう一度このカウンセラーに相談をしようと考えた。

——カウンセラーへの身内からの評価

しかし、相談時のカウンセラーの顔を思い出すと急に恐ろしくなって友人に
相談したところ、「他の人にも聞いてみれば」とアドバイスがあり、映画の試

写会で出会った【0A】のことを思い出し相談に行った。【0A】が直接土地のリーディングをした結果、悪霊的なものは何も無かったので、その旨を丁寧に説明したところ、【2D】は納得しカウンセラーに断りを入れた。しかしカウンセラーは、自分の見立ては間違っていないと激昂して、「これまでのカウンセリング代は要らないので最後まで仕事をさせろ」と譲らなかった。【0A】がカウンセラーの名前を聞いたところ、そのカウンセラーと【0A】は過去に面識があり、その頃カウンセラーはヨガのインストラクターであった。

あるとき「チャクラが開けた」という話をカウンセラーがするようになって以来、会っていなかったと【0A】はいう。カウンセラーはこれまでの金銭は全て返還し今後も金銭は要らないと【2D】に告げ、【0A】にも「クライアントに気休めを言って騙さないでくれ」と言ってきた。

——カウンセラーの人物

他の精神世界関係者に聞いたところ、このカウンセラーは「チャクラが開けた」と言った日から、「あなたに憑いている霊が怒っている」、「あなたの過去世のカルマが浄化されていない」など、身内にも自分の能力を誇示するようになっていたという。

カウンセラーは本気で土地に悪霊が憑いていると信じており、「土地の遠隔ヒーリングを続けないと大変なことになる」と真剣に【2D】に訴えかけ、遠隔ヒーリングの続行について同意を求めてきた。そのせいで再び不安になってきた【2D】を、【0A】は近所のカフェに連れて行き、このカウンセラーについて知っている人たちを集め、彼女についての客観的な話を聞けるようにセッティングをした。そこで【2D】は冷静になり、着信拒否やLINEのブロックなど、連絡を断ち事案自体は収まった。

【2D】にはこの件で金銭的な被害は1円も出ていない。しかし「私は騙された」という怒りと「思い出すと恐怖がよみがえる」という気持ちが交互にやってきて精神の不安定な状態から立ち直るまで時間を要したということであった（2017年11月12日【2D】より聞き取り）。

(5) カラーセラピスト認定ビジネス

【2E】（20代女性 兵庫県在住 精神世界関連事業者）
聞き取り（2017年11月5日）

——ブース出展型イベントにて

ブース出展型のイベントのカラーセラピーのコーナーで【2E】に「セラピーを受けながら色々聞き取りをさせてもらっても良いか」と尋ねたところ、承諾してくれたので、【2E】のセラピーを受けることになった。

——マニュアルを使ったセラピー

【2E】は20代の女性で、何度も色のついたブロックを筆者に選ばせたが、思った通りに読み取れなかったようで、「少しすみません」といって荷物の中から薄いマニュアル本のようなものを持ち出した。

その後【2E】は、全てマニュアル通りに進めていき、片手にマニュアルを持ちながらそれを読み上げる形でセッションは終わった。

【2E】は最後にマニュアル本を広げて筆者に見せ、「こう書いてあるから大丈夫です」と説明を付け加えたが、横で別のセッションを受けている人はその光景を訝しそうに見ていた。

——技法開発者への尊敬

さすがに気になったので、【2E】に「今のは上手くいったんですか」と聞いたところ、「少しだけ失敗しました。でもこれは私がだめなのであって、セラピーのメソッドがだめなわけではないんです」と、【2E】が使っていたカラーセラピーの開発者の本を取り出し、「この先生は本当にすごいんです」と話しはじめ、開発者について「宇宙の真理に触れたことがある、直接他人のハイアーセルフに触られる」など、いかに【2E】の使っている技法の開発者が優れているかを説明してくれた。

【2E】は「スクールを出たばかり」だという。しかし、【2E】のセラピー中に戻ってきたスクールの先輩らしき男性（30代）は、その技法開発者が如何に

すばらしいか、そして本来は【2E】がいかに優秀なセラピストかを語っていた。

——技法取得のパンフレット

女性の方もそれを否定せずに笑顔だったが、直後に「あなたもセラピストになれますよ」と養成講座の案内を出してきた。セラピストとして完全に独立するまでに3日で15万円弱かかる。しかし2人とも営業的ではなく、3日間でカラーセラピーの技法をマスターできるようなシステムを構築した自分の師匠が如何に尊敬に値する人物であるかを筆者が離席するまで話し続けていた。

(6) 精神世界関係者の妻

【2F】(30代男性 兵庫県在住 会社員)

聞き取り(2017年1月8日)

——突然のプロポーズと結婚

【2F】はWEBデザイン関係の仕事をしていて、車で年下の女性から声をかけられ、1ヶ月の交際の後に結婚。交際時に彼女が、「大宇宙が」と話していたが、精神世界について全く興味のない【2F】にとっては気にもならなかった。しかし、生活の節目節目で「完結した」と口癖のように言う妻に違和感を覚えた【2F】は、妻にその意味を尋ねた。

——妻への不審感

妻が「完結を報告している」と言うので、誰に報告しているのかを聞いたところ宇宙意識の端末だと妻は答えた。【2F】は不審感を感じたものの、夫婦間がこじれるのも嫌なので特に文句を言うこともなかった。その後、妻は精神世界について子供に教えるようになり、「あなたが見えるようになるのは」、「あなたに与えられた役割は」など言うようになったが、【2F】は見ない振りをしていた。

——妻への抗議

しかし、子供が3歳になったとき、妻が「私の人生は今日完成したからあと

はこの子が育つのを待つだけ」と言い出したので、さすがに「何が完成したのか」と尋ねたところ、妻は「前世で途切れたレコードが補完された。今世のアカシックレコードの完了地点が見えた」、「私自身の肉体は残るが私の意思は大宇宙と結合する」と淡々と答えた。

そこから妻は、【2F】との関係を、「他のエネルギーが入ってくるから他人を受け入れたくない」と拒むようになった。妻はSNSで知り合ったソウルメイトを名乗る女性を家に迎え入れたり、娘にあまりにも社会常識から離れたことを教え始めたので、言い合いになりつい手をあげてしまった。

——離婚をしない理由

しかしその後【2F】は、怪我をしたり病気にかかるなどの状態が続き、気持ち悪くなり離婚を考えた。しかし、妻から「私と別れたらあなたは大宇宙の法則から見捨てられる」と言われたので、恐ろしくなり離婚を思いとどまり【2F】は妻に怯えながら暮らしているという。

——現在

【2F】に連絡をとったところ、現在離婚はしていないものの別居しているという。現在小学生に入ったばかりの娘は【2F】と一緒に暮らしているが、「指令が届くまでは育てるように」という妻の言葉に従ったということだった。

「ある時に急に迎えにこられても困りますね」と筆者がいったところ、「ずっと星を眺めてよく分からない言葉をブツブツいう娘ですからね、いつ引き取りにきても困りはしませんよ。可愛くないわけではないですが」と声をくもらせていた(2021年4月10日【2F】より聞き取り)。

(7) Jasmine'sLoveSharing Party——滋賀県

【50】(40台女性 滋賀県在住 精神世界関連事業者)

聞き取り(2018年6月8日)

——イベント開催のきっかけ

地域の活性化を主な目的とし、精神世界市場を1つの地域起こしとして行っている【50】は、ブース出展型ながらもセッションを受けた側が納得できる金額を自分で決めて支払う「Jasmine'sLoveSharing Party」³²⁾というイベントの主催を試みている。

——精神世界の矛盾

【50】は、精神世界の抱える矛盾点とその弊害について気づいたときから、新しい精神世界のあり方について模索し始めたという。【50】は精神世界市場の抱える矛盾について、「人間自体がそもそも矛盾している存在であり、精神世界が人の心を扱う以上はそこに矛盾があるのは当然」と認識しており、精神世界市場は人間そのものを反映していると考え、それまでの精神世界市場を静観してきた。

しかし、自らが大病を患い心を病んだ時に精神世界を知ることによって癒しを得た【50】は、精神世界市場は「癒しを人に分ける場所であって、人に押しつける場ではない」と思い、自分のサロンを何度も訪れるクライアントを見て、「何か自分がしていることは間違っているのではないか」と感じた。

——精神世界への1つの回答

【50】は「既存のイベントに一石を投じたところでバッシングが起きて終わると考えている。精神世界とは関係のない人々から受け入れられるためのイベントを考えた1つの答えが今回のイベントだった」という。

【50】が主催するイベントに参加している出展者の多くから聞き取りを行い、セッションを見学させてもらったが、それぞれの技法や思考は違うものの共通点として自分の技法はそれが自分の意思で取得したものであっても、「結果として与えられた能力」として捉えており、不安な人の癒しになることを最優先に考えていた。

——問題点の発見

【50】は「精神世界市場の中にある矛盾について気がついた時、真面目な

人ほど不安や恐れが感情が生じている」と精神世界市場の人々を分析している。

「深く考えれば考える程さらに不安になり、無理矢理自分の中で法則を作り出してしまい、そこにしがみつくなり、肯定感を強く持ちすぎて攻撃的になりやすい傾向が現れるのではないか」という。【50】は「この過剰な自己肯定感が昂じると、変な使命感を持つようになり問題に発展していくことが多いのではないか」と指摘していた。

(8) 晴レルヤマルシェ——三重県

【2G】(40代女性 三重県在住 精神世界関連事業者)
聞き取り(2017年6月23日)

【2G】が主催する晴レルヤマルシェ(旧お陽さまマルシェ)は、2013年から始まったブース出展型のイベントだが、三重県民の交流を主たる目的として運営されており、名産品の販売や工芸品の販売ブースと並ぶ1つとしてセッションブースが存在している。

託児所を設けたり、また出展の規約も徹底されており³³⁾、宣伝広告も関係者によるピラマキを中心とするなど、信頼できるスタッフによる手作りでのイベントを模索している。

(2018年6月24日「中日新聞鈴鹿・亀山版」)



このイベントは地域からの認知度も高まっており、2018年の中日新聞の地方版にも取り上げられている。

小 括

(1)から(6)の事例をみていくと、「現代日本のスピリチュアルブームは、(中略)カルトに結びつく危険性がきわめて高い」(檜尾 2010: 76)とされるのも仕方がないようにも思える。

しかし、これらの事例をよく見ていくと、果たしてこれは「精神世界だから起こり得たのだろうか」という疑問が出てくる。筆者は次のように事象を置き換えてみた。

【2B】——単なる価値観の違いによる恋愛関係の破綻。

【2C】——新新宗教のセミナーに多額の金額を支払ったり、財産を売り払って寄付するケース。

【2D】——自己承認欲求の強い人との関係のこじれ。

【0A】——溜まっていた暴力的な欲求が言葉によって解放。

【2E】——ジムトレーナーへの過剰な心酔によるジムへの熱烈な勧誘。

【2F】——妻との価値観の差。家庭内にカルト宗教が持ち込まれたケース。

こう置き換えると、精神世界が関連して起きているように見えることは一般社会においても起きていることなのである。

ではなぜ、これらが「精神世界特有のネガティブなもの」と受け止められるのだろうか。筆者は2つの理由をここから読みとることができると考える。

1つ目は、これらの事象は精神世界以外でも起り得るが、「精神世界の中ではこれらが全て起きる」ということである。つまり、それぞれを言い換えたケースでは、それぞれの舞台は違うが、彼らのトラブルは全て「精神世界」という1つの舞台上で起きているのである。

2つ目は、被害者的な立場になった人の「自己判断能力」によるものである。後述するが、筆者は精神世界に触れる人の多くは(特に自分への)探求心が強

い人であると考えている。しかし、一旦精神世界の中に入ると、精神世界の根本思想に対しての探求が強くなりすぎて、「判断基準」において精神世界関係者ではない人とのズレが生じる場合があるのではないかとということである。

今回の事例において自己判断において避けられなかった事例はいくつあるだろうか。【2C】が経済的な破綻に陥ったのは、誰からの強制でもなく【2C】自身の判断によるものである。【0A】の友人のケースも夫婦が揃って精神世界関係者であるがゆえにツインソウルという価値観を当然のものとして共有してしまっていたからに他ならない。

事例(7)の【50】がいうように「無理矢理自分の中で作り出した法則にしがみついた」ことが招いた結果ともいえるが、外への視点を失ってしまったという言い方もできよう。同じブース出展型イベントでも【2G】のイベントが社会的に受け入れられているのは、外への視点を常に持とうとしたからで、事例(6)とともに、これまでの精神世界のあり方とは違う潮流を感じさせるものであった。

とはいうものの、(1)から(5)に見る事例が、これまで述べられてきた精神世界の姿である。精神世界関係者に対しては、「ゆがんだ視点でしかモノを見ることができない」、「フラットに観る視点があれば、おかしいことだときづく」、「でも、心底信じ切ってるわけだから、本人にとっては事実」(長倉 2015: 466/535)とする声は今も絶えないのである。

また、「スピリチュアルにはまれば、まともな情報を扱えなくなる。つまり貧乏一直線」、「信者はセミナー・教材とむしり取られる。それだけでなく視点も奪われるから人生も奪われる」と、精神世界関連事業者や技法開発者を「プチ教祖」とする声もある(長倉 2015: 454/535)。

この形容は一面当たってはいるが、それでは精神世界は単なる小規模宗教集団、小規模カルトと何ら変わりがないのだろうか。そもそも「精神世界」は脱宗教を指す用語として使われはじめたものであり(小笠原 2019: 256)、彼らは「既存の『宗教』を否定し、宗教を『超えて』いこうという考え方」(島菌 1996: 301)をしているとされ、精神世界と宗教は分けて考えられてきた。

次章ではあらためて、精神世界と宗教について、これまでの研究を踏まえた

うえて現時点での両者の関係がどうなっているのかについての現状確認を行っていく。

- 1) 自己変容・霊性的覚醒の体験による自己実現、新しいレベルへの意識変化、輪廻転生とカルマの法則など。
- 2) 詳細に関しては巻末資料②を参照。
- 3) 船井は自分の戸籍の姓が船井でなく船井であることを1998年まで知らず、2013年の後半の著作物からは「船井」の表記に変えている。しかし WEB や重出版物に関しては統一されておらず、本稿では船井幸雄に統一する（船井幸雄.com - 船井勝仁執筆「船井幸雄の今一番知らせたいこと」わが深宇宙探訪記 (http://www.funaiyukio.com/funa_ima/index.asp?dno=201312003) 閲覧日2021年4月12日。
- 4) 詳細は巻末資料①を参照。
- 5) 島蘭はその条件として「教義や組織にあまり固定的な体系性をもっていないものに限られる」（島蘭 1996：53）としているが、具体的にはどの範囲までを指すのかは記されていない。
- 6) スピリチュアリティと霊性は同義とされることが多いが、「幽霊」や「おぼけ」を連想させ無意味な誤解を招く恐れがあるとしてスピリチュアリティの言葉が使われることが多い（伊藤 榎尾 弓山 2004：i）、（堀江 2019：28）など。
- 7) 大谷は例として、現代社会の重層的な宗教の特徴の分析をあげている（大谷 2004：14）。
- 8) 堀江はこれとは別に、スピリチュアリティの意味について、「欧米と日本の人々の間では『a 生きる意味や目的、b 他者・死者・自然とのつながり、c より高い神的な力や霊』が想定されている」（堀江 2019：15-16）としている。
- 9) 国立国会図書館サーチ書籍検索「精神世界」（<https://iss.ndl.go.jp/>）HonyaClub 検索「精神世界」（<https://www.honyaclub.com/>）、紀伊國屋書店 WEBSTORE 分野（<https://www.kinokuniya.co.jp/>） 閲覧日2021年4月13日。
- 10) 現地調査（2018年11月11日）。
- 11) 現代の精神世界に大きな影響を持つ事業家で、健康食品「まるかん」の販売のほか、精神世界の思想に基づく「商売繁盛や事業成功のハウトゥ本」を150冊以上出版している。動画サイトにも「魂のステージ」、「魂の成長」、「魂力を上げる」など精神世界関係の動画を150本以上アップしている。また、精神世界関係者としては唯一、1993年から12年連続で高額納税者としてベスト10入りしている（光田 2010：39）。
- 12) 詳細は巻末資料①を参照。
- 13) 天外（2002）、坂本（2009）、船井（2014）など。
- 14) 全てを超越して目指す1つのもの（宇宙意識）であることからワンネスと呼ばれる（松村 2012：284）。
- 15) 中野（2016）、パーンズ（2017）、川瀬（2018）など。

- 16) 詳細は4章にて記載するが、古神道では「自分もまた小宇宙としての神である」とする。
- 17) 国会図書館リサーチ「ワンネス」（<https://iss.ndl.go.jp/>） 閲覧日2021年4月13日。
- 18) 「スピリチュアルブーム終焉か？オーラの泉打切り決定！」日刊サイゾー（http://www.cyzo.com/2009/02/post_1576_entry.html） 閲覧日2021年4月15日。
- 19) 使用した主なドキュメントは次の通り。実際のブース出展型イベントへの調査記録から論考しているもの（櫻井義秀 2009『霊と金』新潮社）、（精神世界関係者との対話を通して書かれたもの（長倉顕太 2015『プチ教祖の秘密』Kindle Amazon）、アンチ精神世界ブログ管理者【A】（URL 非公開希望 聞き取り 2017年4月10日11日）。精神世界関連事業者からみた精神世界（ルーン魔女 KAZ 2013『スピリチュアルにつかれてしまったあなたへ』出版処てんてる）。
- 20) 精神世界に関係する人々に関して、技法に焦点をあてる場合には「精神世界技法者」と記し、それ以外では精神世界関係者と記す。
- 21) ソウルメイトの逆で前世からの仇敵で、なぜか一緒にいると波動が合わないという。
- 22) 【2C】の説明では頭に微電流を流すヘッドギアのようなもので、軽く過去の記憶が蘇り場合によっては前世まで退行できる。前世が問題になっていそうな疾患の場合、この結果を受けてから診療を始めると、一般的な診療よりも効果を上げることが可能だという。
- 23) 伝統的なレイキを基礎とし、密教と古神道の技法を組み合わせ、宇宙的能量の共鳴と魂の覚醒をうながす技法（公式 WEB <http://light.st/training> 閲覧日2021年4月15日）。
- 24) 波動的な性質がある宇宙エネルギーの一種で、人の生命エネルギーを高める。宇宙からのエネルギーを、体に入りやすい波長に変換する「氣中継器機ハイゲンキ」を購入することが推奨される（公式 WEB <http://www.shinkiko.com/ki/> 閲覧日2021年4月15日）。
- 25) 視力回復機材アイパワーに関する測定資格だが、2021年4月現在、測定士の資格は廃止されており機材のみが Amazon などで販売されている。
- 26) 第4章参照。
- 27) 宇宙で起こるあらゆる出来事の記録（日本神霊学研究会 2019：45）。
- 28) 人間のエネルギーが蓄積されているところで、生命エネルギーを循環させているとされる（日本神霊学研究会 2019：221）。
- 29) 弁護士の話では、2千万円以上は使っている筈だが当人に被害者意識がないため民事事件にすらできないとのことであった。
- 30) この世界・人々に光りを取り戻す手助けをする職・使命（松村 2012：285）。
- 31) 医療系精神世界関係者のリーダー的存在。
- 32) 現地調査「Jasmine'sLoveSharingParty」（2018年6月8日）。
- 33) 晴レルヤマルシェ公式 WEB（<https://sun-marche.jimdo.com/>） 閲覧日2021年4月16日。

第3章 精神世界と宗教

1節 宗教の概念と新新宗教

1 本論文における宗教の概念

「精神世界」と「宗教」の比較はこれまでいくつか試みられてきている¹⁾。本論文においても、「精神世界」と「宗教」について、実証的な調査を踏まえてこれを検証していくことにする。

「精神世界」と宗教を比較するためには、宗教についての概念を提示する必要がある。しかし、井上順孝は、「宗教を研究する以上は、1度は問題にしなければならないことがある。それは『宗教とは何か』という問いである」とした上で、「この問題について共通理解ができる余地はなさそうである」（井上1996：7）と、その問いの難しさを論じている。また、平藤喜久子は、宗教とは神観念や神聖さを伴った文化現象や営みだとする岸本英夫の説（岸本1961：17）を支持し、「いったいなにが宗教でなにが宗教でないのか」、「そもそも宗教という概念から見直す必要があるのではないか、という議論すらある」と宗教概念を明確にしようとする事への疑問と、「文化現象として宗教をとらえる、あるいはその社会機能に注目してとらえる」（平藤2015：7）必要性を論じている。

とはいえ、本論文においては第5章にて協働性を持った精神世界関係者の集まりである「霊性にかんする協働組織」を扱うため、現象としてではなく組織としての宗教の要素を挙げた上で、本論文における宗教の概念を提示する必要がある。

筆者は、近畿圏の大学生153人に対して行ったアンケート調査「宗教について絶対必要なものは何ですか」（2017年11月13日・21日実施）と、「癒しスタジアム in OSAKA」で精神世界関係者42人に行った同内容のアンケート調査（2017年12月17日実施）から、両者の解答数の上位5つを占めた「1神的存在」、「2神的存在を畏れる心」、「3信仰共同体の存在」、「4礼拝儀式の存在」、「5儀式執行者（聖職者）の存在」と、「研究者たちにはほぼ共有され

ている」宗教組織にとって不可欠の要素である「教え・儀礼・施設・信者（および宗教者）」（川又2015：40）とを参考にし、本論文において精神世界と比較するためにはどのような宗教概念を用いるかを検討することにした²⁾。

「神的存在」や「神的存在を畏れる心」は、大学生へのアンケート調査、精神世界関係者へのアンケート調査において共通している。本論文では、精神世界と宗教の違いを明確にするために共通するこの2点をあえて除外した。

その結果、「信仰共同体の存在」、「礼拝儀式の存在」および「儀式執行者（聖職者）の存在」の3点に、「活動拠点」と「教義の有無」を条件として付け加え、本論文において精神世界と比較するための宗教の概念を規定する構成要素として以下の5つに注目する。

- 1 神（的）なものへの、礼拝儀式。
- 2 儀式執行者（聖職者）。
- 3 信仰共同体。
- 4 信仰共同体の活動拠点となる施設及びその運営者。
- 5 教義。

2 新新宗教

序章でも述べたが日本人の宗教離れについては、2020年になってもその論調はつづいている。

数字的に見ると、2009年（平成21）には日本の神道系・仏教系・キリスト教系・諸教の信者は公称2億7030万4920人いたとされるが（文化庁2010：35）、10年後の2019年（令和1年）ではその合計は1億8310万7772人と激減している（文化庁2020：35）。

その中では新新宗教³⁾の健闘が目立つとされてきた。たとえばGLAの信者は、2006年に2万6000人であったが（島田2007：192）、2018年には4万2434人に⁴⁾、2020年4月には公称6万85人⁵⁾へと着実に教勢を伸ばしており、まさに時代の動向を反映する「たいへん目だつ小集団」（島蘭1992：6）に育って

きている。

一方教勢を大きく伸ばしている新新宗教としてしばしば取り上げられてきた真如苑は、運営状態をリセットした2012年こそ67万人の信者数だったが、そこから信者数は急カーブを描いて上昇し2019年には100万人を超える見通しだと予測されていた⁶⁾。しかし2018年10月の信者数は93万1141人で最近の見通しでは「2025年に100万人を突破か」とされており⁷⁾、その伸び率は弱くなってきている。また文化庁文化部宗務課への主要新宗教教団の信者数の届出数も減っており⁸⁾、教勢が伸びているかどうかの部分で新新宗教と精神世界と比較をすることに筆者は意味を感じない⁹⁾。

そこで、まず本章では精神世界と宗教の比較をするにあたり、仏教・キリスト教などの伝統宗教と「旧」新宗教を含めて「伝統的宗教」とし、現在の社会情勢を反映する「新新宗教」を本論文では精神世界の比較対象として扱うことにする。

2 節 精神世界と宗教

1 先行研究における精神世界と宗教

(1) 精神世界と伝統的宗教

檜尾直樹は、モダニズムが「宗教的体験の意味や価値を、社会的ないしは制度的なもの、あるいは脳内現象としか捉えないか、まったく無意味ででたらめのものとして打ち捨てるしかしてこなかった」としている（檜尾 2010：16）。同時に檜尾は、現代人の側は漠然とした不安や心配ごとがあっても、ほとんどの人は宗教へは向かわず、他方、精神世界関係者側は、実存的な苦悩の解決手段の1つとして宗教があることを知らないとして述べている（檜尾 2010：185-187）。

また島藺は、精神世界の支持者の多くは組織化された伝統的宗教に対して否定的であり、なじめない思いを持っているとしており（島藺 2007：61）、精神世界関係者は、以下の4点において宗教に対して批判的だとしている（島藺 1996：320-321）。

① 強制

「宗教」は本来個々が行うべき宗教体験、神秘体験を歪め、真理は既に決定されているとし、啓示や教義の枠をはめ、個々人がそれに従い、信仰することを強制する。

② 排他

「宗教」は人々に対して、カリスマ的指導者や教団組織のような一元的権威に依存服従させ、自由な思考や実践を放棄させるとともに、弱者への差別を正当化したり集団外の人々を敵対視するよう促す。

③ 独善

「宗教」は人間だけが超越者に接近できるとし、他の自然的存在の価値を軽んじ、人間による自然の支配・搾取を正当化し、自然との調和的交流を妨げる。

④ 欺瞞

「宗教」は人間の悪や苦しみを強調して諦めの姿勢を強め、ありもしない（あるかどうかわからない）救いなるものを約束して偽りの満足を与え、人々を「ほんものの自己」や本来的な生の喜びから遠ざける。

この4点以外にも島藺は、精神世界関係者は個人主義的で、消費者的な態度が顕著なため、共同的な関わりを受容しないとしている（島藺 1996：380-381）。

(2) 精神世界と新新宗教

島藺は精神世界側からの宗教への批判について、「これら権威体系の明確な既成宗教と新宗教をあわせて、伝統的教団的な宗教とよぶとすれば、新霊性運動・文化は一般に伝統的教団的な宗教に対して批判的である」とし（島藺 2007：61）、精神世界はこの「伝統的宗教」に対して批判的であるという。

しかし、新新宗教については、「精神世界の人々は、固定した教義を掲げたり、教団の組織で個々人を束縛したり、教祖への服従を求めたりする新宗教を、克服されるべき古い時代の遺物として退けるのがふつうである」としながらも、「しかし、実際には精神世界と新宗教（とりわけ新新宗教）の間には多くの接

点がある」とし、「『精神世界から新新宗教へ』、あるいは『新新宗教から精神世界へ』という道をたどった経験がある人の数は、かなりの数に上るだろう」としている（島蘭 1996：19-20）。また、樫尾は、新宗教の大本、世界救世教そしてオウム真理教には神智学的な身体/意識の階層モデルが流用されたとし、これを「スピリチュアリティの基本的構造」だとし（樫尾 2010：226）、大本や世界救世教などと精神世界のベースは同一線上にあるとしている¹⁰⁾。

2 本研究で扱う新新宗教

(1) 基 準

既に述べたが、数多い新新宗教の中でどの宗教をもって精神世界と比較するかということは重要である。

江原を中心にスピリチュアルブームが起きた2000年代以降も、個人レベルで「靈魂や目に見えない不思議な力」を求める動きは根強い（堀江 時田 2020：134）。また、新新宗教には伝統的宗教に比べて靈的体験の個人的な経験を重視する特徴がある。

先行研究において「精神世界と新新宗教の親和性」があるとされるのは、この両者の基本構造に似ている点が多いからである。

つまり、靈魂や目に見えない不思議な力を強調する新新宗教が、精神世界関係者との比較対象となってくるのである。

精神世界関係者と新新宗教の間にどの程度親和性があるのかを検証するために筆者は、精神世界の技法と似た技法や世界観を持っている、あるいは系譜的に精神世界と繋がっている新新宗教を精神世界と比較することにした。

(2) 扱う新新宗教

① GLA

第1章でも触れたが、GLA は心霊研究団体である「菊花会」に所属していた高橋信次がスピリチュアリズムと神智学を結合させ立ち上げた宗教団体である（大田 2013：209-210）。

現在の教主は2代目の高橋佳子である。GLA では研鑽全体を「魂の学」と呼び、全ての問題を一旦「混沌（カオス）」と捉えなおし、そこからもう一度人生を立て直すことを教義としているが、そのための実践手段を多く持っている¹¹⁾。

礼拝堂はあるが、儀式としての「礼拝」が執り行われることはほとんどなく、その意味では本論文における宗教の概念から逸れそうな部分もあるが、魂の学の中に含まれるさまざまな実践前には必ず祈りの儀式が存在する。

具体的には、『新・祈りのみち』（高橋佳子 2014：三宝出版）を祈祷書として教主（または司会者）と会衆が読んで、宇宙へ祈りを届ける儀式が必ず入っている。集会の最初にこの儀式が執り行われる形式をとっている。

研鑽は、「祈り」、「聖日の集い」、「読書」、「映像反芻」、「生活実践」の5つを基本に組み立てられ、その中にさらに様々な研鑽方法がある。

この他に、「プロジェクト」と呼ばれる特別な野外集会では子供や青年の集まりがあり、子供への信仰継承率は高い¹²⁾。「映像反芻」と「聖日の集い」では、教主が信者を指名しそれまでの生き方と今後の生き方についての対談（もしくは対談映像）の場が設けられる。教主は信者のそれまでの生き方を踏まえた上でアドバイスをを行うが、この時に教主は信者の状態を知らず、信者の内なる魂と対話しながら話し、論していく（教主によるリーディングが行われる）とされている。

またいわゆる祖霊祭祀にあたる特別供養においては、教主が信者の先祖霊を呼び出してそのメッセージを信者に伝える儀式が行われる。GLA の先祖供養の位置づけは、「『この世』（現象界）の私たちと『あの世』（実在界）の故人が、魂の絆を再結（再び結び直すこと）、互いの魂の成長と成熟をめざす営み」としており¹³⁾、同団体がスピリチュアリズムの系譜上にあることがよく分かる。

筆者が現地調査を行った集いでは、壇上で教主と話した男性と、ブース出展型精神世界イベントで人気のあるチャネラーからセッションを受けている利用者と、本人しか知らないことを言い当てられて驚き感動するなど、同様の反応をしていた¹⁴⁾。

使用される用語は高橋佳子が創出したものの他、神智学用語やスピリチュアリズム用語も多用されているが¹⁵⁾、信者は、それらの用語の出自を知らないようであった(2018年4月23日 研鑽会での聞き取り)。

インターネットを使った布教活動も早くから取り入れている。2020年のコロナ禍においても、緊急事態宣言が出る前から、信者の心のケア・研鑽のためのシステムをあらかじめ準備していたARを用いた「『一日一葉』特別セミナー」を行い¹⁶⁾、ネットのインタラクティブ性を十分に発揮できるシステムを用いて「インターネットを感じさせないで、自分の変化が見える研鑽」を可能にするなど、1人1人へのケアを十分に行えるようにしていた¹⁷⁾。

また、2020年9月の段階では、100人規模の「自分を知る力ーアフターコロナの時代を開き、次なる50年の礎となる」と題したセミナー(八ヶ岳伝道者研鑽セミナー)が行われており¹⁸⁾、これ以外にも、「万全のコロナウイルス対策」を前面に打ち出した各種集会が開催されている¹⁹⁾。

GLAでは、神智学的な魂の研鑽方法や、教主によるスピリチュアリズムの実践を取り入れているが、信者の側には神智学やスピリチュアリズムの技法が使われているという認識はなかった。

② 真如苑

マスメディアでも注目されている新新宗教の真如苑だが²⁰⁾、メディアでは「宗教行為というよりもスピリチュアルの要素を加えた『カウンセリング』」とされる霊能者による接心に加え、「霊能者には誰でもなれる」ことが魅力とされており、その修行については「昨今のスピリチュアルや自己啓発ブームに乗った“自分磨き”と相似する」といわれている²¹⁾。

真如苑の教義はGLAよりも仏教の色が濃く、また神仏が崇拝対象とされているところがGLAと違う点である。研鑽は「法要への出席」と「接心を受けること」の2点から成っている。

法要では、神仏への日頃の感謝の心や利他の実践の大切さを学ぶ。法要は大きく分けて月例法要と年次法要の2つに分けられ、さらに月例法要は「法楽法要(神仏への感謝)」、「廻向法要(亡くなった人々への供養)」、「護摩法要(神

仏の加護を祈る)」などに分かれ、その中で体験談や教主による話を(支部はスクリーンにて)聞く。年次法要は釈迦の誕生を祝う「御誕生会」、釈迦の悟りを祝う「成道会」、釈迦の入滅を覚える「涅槃会」などがある。いずれの法要でも信者は『朝夕おつとめ』という経を全員で唱和することにより信仰の基盤を作っていく²²⁾。法要の雰囲気自体はGLAの聖日の集いと違い、一定の作法が厳格に定められている。法要の中心は読経であり、参加者全員が声を合わせて経典を唱和することが重視されている²³⁾。

接心は、法要へ2回以上出席した者のみが受けられる。これにより信者は真如苑の霊能者を通じて神仏からの「霊言」を受けるのだが、これも修行の1つとして捉えられている。接心修行での霊能者からの言葉は、「最初の霊言」→「(信者の信仰を強めるため)信仰を阻害しようとする言葉」→「(神仏からの)真理の言葉」の順番で言葉が発せられ、これが終わると霊能者から「接心結びの言葉」というアドバイスが与えられる。この1から3の一連の流れにより信者は自らの信仰をより深めていくことになる(伊藤 2015: 316-319)。

霊能者は通称「ミーディアム」と呼ばれ、「真如苑実相を理解せしめる使命を果たすために現れたもの」(伊藤 2015: 308)とされる重要な存在である。すなわちミーディアムは、神仏からの霊言を取継ぎ真如苑の真理を明らかにするために存在している。ミーディアムは霊言を取継ぐ存在であり、信者が神仏と直接対話するということは基本的にはないとされる(秋庭 2001: 57)。この点で霊能者に対してミーディアムというスピリチュアリズムの用語を使用していることは適切であろう。

接心修行には「向上接心」、「相談接心」、「鑑定接心」などがあり(伊藤 2015: 317)、それぞれの接心はその霊能者のレベルによって受け持てる種類が違って来る。そのため霊能者自身も修行をする必要があり、「苑内接心」という霊能者のための修行を続け、そのレベルを上げていかなければならない(伊藤 2015: 321)。この点では魂のレベル上げを求められる精神世界と同様である。

3 現在における精神世界と宗教

(1) 精神世界と新新宗教

上述の2つの新新宗教に限らず、2019年より筆者が継続調査を開始した霊波之光も、スピリチュアリズム・神智学・ニューエイジ・精神世界と似た魂の界層構造（階層構造）をもっている（霊波之光の信仰：11）

しかしこれらの新新宗教においていえば、筆者が実施した調査からは「精神世界から新新宗教へいく人」も「新新宗教から精神世界へ行く人」も確認できなかった。

——真如苑での調査

真如苑の複数の信者から聞き取りを行ったところ、精神世界の存在を知らないだけでなく、ミーディアムという言葉も真如苑の独自の用語だと思っており、スピリチュアリズムとの関係については全く知らなかった（2018年5月30日現地調査 大阪府内の精舎）。また、職員（40代男性）へ聞き取りを行ったところ、精神世界について「ああいう霊を勝手に扱う人たちと一緒にされることがあるが、迷惑をしている」と述べた（2018年8月23日 真如苑職員への聞き取り）。

また、真如苑からの脱会支援者（30代男性 大阪府在住）に精神世界と真如苑の間での人の行き来について尋ねたところ、「元々開祖の伊藤氏は天理教や各新宗教を研究したとか、もともと占いをやっていたという話も聞いていますので、（真如苑に）スピリチュアルの要素は入っていると思いますが、私が相談を受けた中ではそういった（精神世界からの入信またはその逆の）話は聞いたことがありません」との回答を得た（2018年5月31日 真如苑脱会支援者への聞き取り）

——GLA での調査

GLA の会館や研鑽会でも複数回にわたって聞き取りを行ったが、精神世界から入信した人についての話を聞くことはできなかった。また、ある信者へ精神世界についての話をしたところ、「何かうちの良いところ取りを勝手にしてい

るようですね」という返答が帰ってきた（2017年7月11日からの継続現地調査及び聞き取りによる）。

唯一、船井幸雄を知っている男性（50代 大阪府在住）と話をしたが、この男性もコンサルタントとしての船井幸雄しか知らず、精神世界市場のパイオニアとしての船井については知らなかった。教祖である高橋信次から教団を引き継いだ直後に高橋佳子が書いた書籍²⁴⁾をこの男性から借りて読んだところ、その内容の半分近くは精神世界の基礎になっている神智学やスピリチュアリズム、ニューソート思想であった²⁵⁾。内容の類似性について男性に話したところ、「確かに似てますね。そういう色んな思想を1つにまとめたのが信次先生で、それを引き継いで研鑽方法をつくり出したのが佳子先生ということなのでしょうね。この人たち（精神世界関係者）はその点でまだ迷いの中っていうか、真理に手が届きそうで届かない人のように思えます」ということだった（2018年4月23日 研鑽会世話人への聞き取り）。

教団本部ではこの点を把握しているようで、本部職員からは（つじつまが合うという意味での）納得できる回答を得られたが、信仰の2世や、若い頃からその教団で信仰生活を送ってきた者にとっては、「教義がオリジナルなのかどうかに対する疑問よりも、教義をどう実践するかの方が大切であり、精神世界と技法や用語が同じかどうかは興味の対象外」ということだった（2017年12月10日 本部職員への聞き取り）。

——精神世界関係者に対する調査

相手のことを知らないということは精神世界側にも言える。複数のブース出展型精神世界イベントの参加者（広義の精神世界関係者を含む）や、精神世界関係のセミナーの参加者、イベント主催者らから聞き取りを行ったが、両者の関係について知っている人に出会うことはできなかった。

ブース出展型精神世界イベントの主催者やその関係者の集まりで、「宗教をどう捉えているか」を聞いたところ、彼らは、「仏教・キリスト教・神道・新興宗教」という区分で宗教を捉えており、新新宗教の技法や思想と精神世界と

の間に関係があるという意識は全くなく、漠然と「宗教というもの」にネガティブなイメージを持っていた²⁶⁾。

そこで筆者は、ブース出展型イベントである「Jasmine's Love Sharing Party」と「癒しフェア 2019 in TOKYO」で GLA、真如苑の概要や具体的技法を説明した後に、「あなたは霊能的新新宗教に体験入会してみたいですか」というアンケート調査を行ったところ、有効回答数66のうち、「体験してみたい」という解答はわずか1件で、「体験したくない」、「興味が無い」が大半を占めた²⁷⁾。精神世界関係者に対するこれらの調査を通じて、筆者が感じたことは、彼らが「どのようにして自分達の世界が形成されてきたか」については概して興味が無いことである。スピリチュアリズムや神智学、ニューソート思想だけではなく、精神世界に大きな影響を与えたニューエイジについてもほとんど知らず、30代の若い精神世界関係者になると船井幸雄も知らなかった。

彼らは、自分達の技術を向上させるための研究には意欲的に取り組んでいるが、それ以外のことに興味は持っていない。これは、見方によっては「教義成立の過程よりも教義の実践」に重きを置く新新宗教の信者と似たスタンスをとっているともいえる。

具体的に、霊的世界観や技法、用語など多くの点が共通しているにも関わらず、なぜ GLA や真如苑に興味を持たないのかを、ブース出展型イベントで出展者に尋ねたところ、「同じ技法ならスピリチュアルの中の方が自由にできるから」、「自分の行動を強制されそうだから」、「集団行動は苦手だから」という解答がほとんどであった。筆者が、「教祖が怪しそうというのはないですか」と聞いたところ、「教祖が怪しい」と答えた人はいなかった²⁸⁾。

ここでは、『精神世界から新新宗教へ』、あるいは『新新宗教から精神世界へ』という道をたどった経験がある人は確認できなかった。

——精神世界とその他の新新宗教

筆者は、上記の調査の後に霊波之光への調査も開始し、現在に至っている²⁹⁾。筆者が同教団を調査対象に加えたのは、階層構造の頂点である神的存在（大宇

宙神 宇宙の法則 大霊)からのエネルギーの受け取りや、靈魂に関する扱いなどがスピリチュアリズム系精神世界の界層構造と酷似していたからである。

霊波之光では、「人間を助け救う力の根源は、大宇宙の本体、宇宙芯（しん）すなわち、宇宙神なのである」とし、この大宇宙の本体からは膨大なエネルギー（大霊）が発せられているとされる（霊波之光 1982：60-65）。霊波之光では、この大宇宙の本体を放送局、自身を受信機と考え、心のダイヤルを正しい（エネルギーを受け入れられる）位置にもっていくことにより正しく生きることができるとする（霊波之光 1982：76-77）。

また、霊波之光では転生を認めておらず、死後の靈魂が霊的界層を上げていくというスピリチュアリズムの主流派³⁰⁾と同じ死後観をもっており（霊波之光 1982：188-190）、霊的界層を「現界・幽霊・霊界・神界」に分け、この界層の上に大宇宙神が存在しているとする³¹⁾。この「現界・幽霊・霊界・神界」という死後の界層は順序・用語ともに浅野和二郎が提唱したものとまったく同じである（浅野 1938：45）。

霊波之光の開祖は、霊を見分ける能力を重視している。この能力がないと宇宙神のエネルギーを降ろしているつもりが、低級霊と波長が合って取り憑かれることもあるとしており、催眠術など安易な霊体験を禁じている（霊波之光 1982：100-101）。霊を降ろしてくる際にその霊を見分けなければならないという点は、スピリチュアリズムの交霊会においても厳格に注意されている点であり（スピリチュアリズム普及会 1996：202-204）、立教当時の霊派之光とスピリチュアリズムは実践面でも酷似していた。

現在、霊波之光では2代目教主になっており、先代教主を「御守護神様」、現教主を「二代様」と呼んでいるが、先代教主が神になったとは考えていない。現在、信者は大宇宙神からのエネルギーを直接受けるのではなく、一旦「御守護神様」が受け取り、そのエネルギーは「二代様」を通して信者がもっている御神体に、送られるので信者は他の諸霊とチャンネルを合わせることなく（低級霊に憑依される心配なく）、大宇宙神からのエネルギーを受け取れるとされている³²⁾。

霊波之光の班長（40代女性）らに精神世界やスピリチュアリズムについて聞き取りを行ったところ、詳細な技法よりも世界観や霊との交信についての詳細をこちらが尋ねられた。班長は、「御守護神様がスピリチュアリズムとなんらかの繋がりがあったのか、それとも同時に同じような内容が与えられたのかは分かりませんが似ていますね」とした上で、「ただ、こういうところ（スピリチュアリズムの交霊会や精神世界）にいと、個人的にやっちゃう人もでてるでしょうから、低級霊に取り憑かれる危険性はどうしても避けられないのがハッキリ分かりますね」といい、「同じような世界観をもっているならお繋がり（入信）すればきっと良い信仰者になるでしょうに」と、霊波之光の信仰が精神世界の上位的な存在だと確信したようであった（2019年12月20日 霊波之光班長への聞き取り）。

(2) 精神世界と伝統的宗教

仏教、キリスト教や比較的歴史のある「旧来の新宗教」などの伝統的宗教と精神世界の関係のみてみると、伝統的宗教側から精神世界へのイメージは悪くはない。

日本の精神世界に影響を与えたニューエイジは欧米のキリスト教へのカウンターカルチャーとされ、キリスト教とは相容れないとされてきたが（カトリック中央協議会 2007：27-30）、現在は、キリスト教会の中にヒンドゥー教や中国宗教の霊性を論ずる講義がなされたり、毎週ヨガを行う教会もある（堀江 2010a：10-12）。また、ロンドン由緒の聖ジェームス教会では盛んにニューエイジ関連イベントが行われており、教会によっては内部にその事務局を設置するところもあるという（堀江 2010b：8）。

日本のキリスト教の主要な教派が所属している NCC（日本キリスト教協議会）の上部団体である WCC（The World Council of Churches）の第7回総会では³³⁾、韓国の女性神学者キュン・チュンヒュンが死者の霊を呼び出す実演をするなど（水草 1995：96）、スピリチュアリズムに対する抵抗感は薄くなっている。

ここまで海外事情を事例にあげたが、日本の伝統的宗教は精神世界とどのような関係を築いているのだろうか。「Jasmine's Love Sharing Party」と「癒しフェア2019 in TOKYO」で行ったアンケート調査では、「どの宗教が精神世界と親和性がありそうですか」という問いに対して、有効回答数79のうち、新新宗教をあげる人は0%で、仏教・キリスト教を合わせて56%を占めた³⁴⁾。

このアンケート調査からは、精神世界と距離があるのは伝統的宗教ではなく、むしろ新新宗教で、精神世界側からは「伝統的宗教との間には親和性がある」と考えているという結果を得た。

しかし、親和性といってもどのような形で伝統的宗教と精神世界は結び付いているのだろうか。筆者は現地調査結果から実態を確認し、検証を行うことにした。

4 調査事例

(1) 精神世界と仏教（真言宗）

調査対象【3A】（40代男性 大阪府在住 精神世界関連事業者、臨床宗教師、スピリチュアルケア師）
聞き取り（2016年12月6日）

——精神世界関連事業を開始するまで

【3A】は大学卒業後すぐに大手航空会社に就職し、乗客の手配をする部署に配属された。その中で、「新婚旅行から大喧嘩している夫婦」や「親の危篤に顔を青くして飛行機に乗る人」、「理由は分からないが暗闇をずっとみつめながら、夜間便に乗り込んでいく乗客」など多くの人々を見ていく中で、「本当に人にとって必要なサービスとは何なのだろう」と問い始め、仕事をしながら「癒し系」の技法を取得していった。飲み込みは良い方だと自分でも言っていたが、【3A】は「レイキなどの各種ヒーリング」、「リーディング」、「ヒプノセラピー」など一通りの精神世界の技法についてマスターした。

【3A】のいう「マスターする」とは、認定証を貰ったということではなく、

自分の技法が人に対して自分の思った通りの効果を発揮させられことを指し、「自分の中で4割の回復を見込んで施術したものが、全快してしまった場合はマスターとはいえない。自分が見立てた内容と同じだけのことができて始めて技法をマスターしたことになる」とのことだった。【3A】にどれくらいの技法をマスターしたのかを尋ねたところ、1つ1つ説明してくれたが11以上の技法が出たところで聞くのを止めた。

——密教への関心

【3A】はできるだけ多くの技法を使えるようになりたいと考え、さまざまな精神世界関係のセミナー等に通い、実際にそれをマスターしてきたという。その中であって「実際に自分が会得してきた技法は効果をあげている。しかし、自分がしたかったことはこれなのだろうか」という疑問が浮かんできた。この疑問はやがて「人を助けて少しでもよりよく生きて欲しいと思いつつも、最終的に自分は何を求めているのか」というものになっていき【3A】を苦しめることになった。

1つのヒーリング技法を使えば利用者は「楽になりました」と言ってくれる。しかし別のヒーリングの技法を使っても同じような効果が得られる。使っている技法は別であっても利用者にとってもたらされる結果は同じではないのか。超越者との交信にも様々な技法が存在するが、これも利用者にとっては得られる結果はほぼ同じである。

なぜこれほど多くの技法が存在するのか、実際に自分は利用者が一番適した技法を使うことができているのか多くの精神世界の技法の存在と、それらを「マスター」したことが【3A】にとっての疑問から重荷へと変わっていき、結果【3A】は「自分が疑問を持っている状態で人を助けるというのはおかしい」と考え、退職し取得してきた様々な技法と正面から向き合うことも考えたが、まずは初心に戻って自分が会得してきた技法について1から確認することからはじめた。

その中で【3A】は「全てを結ぶ何か中心的な思想があるはずだ」という結論

に達した。最初に技法を習った事業所の所長に相談したところ、所長も以前に同じ問題について悩んだことがあり、密教にヒントがあるのではという結論にたどり着いていたという。そこで【3A】は密教に対して強い関心を持つようになっていった。

——真言密教による技法の統一

【3A】は形式だけではなく、正式な阿闍梨になる過程を踏んでこそ分かることがあると考え、師僧を定め、在家のまま阿闍梨を目指すことにした。その過程の中で【3A】は「全ての技法は密教によって統一される」という確信を得た。そこで【3A】は退職して高野山の某寺の住職阿闍梨の元で本格的な修行を行い、正式に真言宗の阿闍梨の資格を得た。

その後【3A】は、あらためて自分がマスターした技法を真言密教と照らし合わせながら1年がかりで体系化していった。結果として利用者に対しての効果は同じであっても技法が違うものについて「なぜそれが別々に存在しているのか」、「その必要性とは何か」など、これまで【3A】が疑問に思ってきたことが理由づけられ、このことによって【3A】はこれまで敬遠していた技法に対しても必要であれば学ぶことに躊躇がなくなった。

【3A】はそれぞれ体系化したものについて「価値観を変えるもの」、「高次元の体験」、「霊能の開花」、「超越者との接触」、「霊的存在との交信」、「憑依」、「過去体験」の7つに個々の技法を当てはめ、全て「密教という軸」によって統合され得ることを説明してくれた。

とはいうものの、精神世界の技法の中には機器を使うものもあり、ヘミシンク³⁵⁾などがどう密教と関係するのかが分からなかったので質問したところ、「ヘミシンクは人間の脳に作用し、瞑想を深くするための機器といえる。密教では真言を唱えて心を統一して瞑想に入るが、瞑想の目的は真言を唱えることではなく瞑想の後に得る何かにある。とはいえ瞑想には修行が必要で誰もができるものではない。ヘミシンクを使用することによって瞑想状態に入るまでをアシストすることができ、修行の一部をサポートするものとして捉えることが

できる」とし、さらに「瞑想の先にあるものを得るのが目的なので、何かが見えて終わりなのではなく、そこから『大日如来が何を教えようとしているのかを意識すること』が大切」ということだった。【3A】は、「利用者はセッション終了時に『高次の体験をして気持ち良かった』で終わることが多いだろうが、いつかそこから利用者が大日如来にどこまで近づくことができたかを考える機会になれば良い」という。

また【3A】はその他の各種技法について、空腹であっても胃がもたれているときと、そうでないときとは食べたくなるものが違うように、その時その人に必要なエネルギーが「大地からのもの」なのか「宇宙からのもの」なのか「別の存在からのものなのか」は違うとし、「誰でも密教によって即身成仏、つまり大日如来と一体となる道は開かれているが、その修行法や行程は人によって違う。誰にでも開かれている道である以上は、心身や身の回りの諸問題に関しても修行と同様、その人に応じた技法が用意されている」と言う。この大日如来は精神世界の指す宇宙意識と同一であり、密教と精神世界が矛盾することはないということであった。これはカードについても同様で、西洋のものとしてのイメージの強いタロットでもデッキの組み方を学べば「西洋曼荼羅」という解釈ができ、密教の曼荼羅と同じ理屈で、どちらでも利用者が心を開きやすい方を使えば良いということであった。

——【3A】の精神世界観

【3A】から見ると、精神世界の現状は「むやみに技法に走りすぎている」ように見えるという。「力の使い方が分からず悩んでいる同業者に手を差し伸べることもせず、自己中心的な事業者が多い」、「マルシェ形式の30分単位での技法の切り売りでは利用者に本当に必要なものは提供できない。このようなやり方を続けていけば、事業者が自らの首を絞めていく結果になる」と、ブース出展型イベントについては批判的であった。

——【3A】の宗教観

【3A】にとっての宗教は「特別なもの」であるという。宗教には教義や祭

儀があり、この教義や祭儀の意味や深いところを理解し体感できないと宗教による救済を受けることはできないと【3A】は考えている。

そのため、「宗教は否定しないが、救済に至るまでのプロセスがあまりにも複雑で、誰でも実践するのは難しいものである」とし、自分は多くの技法を統合するための中心を持つために密教の修行と経学を修めたが、誰もがそのような過程を経る必要はなく、自分の状況を改善するためには、「まともな技法者」を利用するのであれば精神世界の技法で十分であるとしていた。

【3A】にとって宗教は身近にあるものだが、精神世界の技法者こそ学ぶべき「特別なもの」として位置づけている。聞き取り当時、【3A】のサロンには密教の法具とタロットカードやオラクルカードなどのカード類、その他各種精神世界の関連機器が揃っており、ホームページでもパワースポットツアーも行う精神世界関係のサロンであることを明記していた³⁶⁾。

【3A】のホームページを見た際、真言宗の阿闍梨が、精神世界事業を営むことについて問題はないのかという疑問が起り、【3A】を訪問するに先だって高野山大学を訪問した。

【3A】のホームページを見せて先の疑問について尋ねたところ、案内をしてくれた職員（30代男性）は、「うちを卒業したにせよ違うにせよ、資格を取れば立派な阿闍梨ですから独立は可能です」、「密教にも実は天の川占いというものがあり、これを応用すれば様々な占いと組み合わせることができるので、その方がタロットと組み合わせるのは可能じゃないでしょうか」と、【3A】がサロンを開いていることについては特に問題はないということだった（2016年10月4日 高野山大学企画課職員への聞き取り）。

——その後

現在の精神世界関係者の中には「コロナウィルスは怖くない」という人々もいるが、【3A】は「怖いと思う人と対面でセッションを行うことは、そもそも相手が恐怖を感じている時点で意味がない」とし基本はリモートでセッションを行っている（2020年5月19日【3A】への聞き取り）。一方「宗教は特別なも

の」というところから「スピリチュアリティの内奥は宗教性と結び付いている」と考えるようになり、単純に現状を改善するだけではなく「人間の尊厳に関わる領域、対症療法では決して癒やせない究極のかつ根源的な領域のケアができ、表面的でない宗教性に触れることが大切だ」として、臨床宗教師・スピリチュアルケア師の資格を取り緩和ケア病棟などでの活動もしている（2019年8月25日【3A】への聞き取り）。

(2) 精神世界と仏教系新宗教

調査対象【3B】（50代男性 兵庫県在住 整体師）

聞き取り（2016年10月7日 10月21日）

——整体師としての限界とヒーリング

【3B】は整体師を職業としている。真面目な性格で、どんな患者にも真摯に向き合っていたが、自分の技術の及ばない部分があることについて空しさを覚えていた。

【3B】が整体治療に限界を感じ始めた時に、精神世界関係の書籍でヒーリングの技法を知り、「今必要な技術はこれだ」と即決し、技法取得のためのセミナーに行って技法を取得したという。まずは患者をリーディングしてオーラを読み、相手の邪気を払う施術をすることによって、全体の治療効果があがるようになったという。

——精神世界と宗教

【3B】は仏教系の新宗教の2世信者で、定期的に宗教施設に通い、実母も信仰熱心である。家に自分専用の御本尊を置こうとしたが、ヒーリングの師から「ご神体が家に2つあるのは良くない」とアドバイスを受けてそれをやめるなど、実生活においてアドバイスはヒーラーの助言に従っているという（2016年10月21日【3B】への聞き取り）。

筆者の知る限り【3B】の信仰する宗教の死生観は仏教を基本にしたもので、精神世界のそれとは違う。筆者は、死生観は宗教から、技法は精神世界から、

それぞれとっているのかと考えていたが、【3B】と話している限り、【3B】の信仰する宗教の一部は精神世界の根本思想に入れ替わっており、【3B】の中で宗教と精神世界は既に混じったものになっているように思えた。

——生活の場所としての宗教

【3B】にとっての精神世界と宗教とは何かを尋ねたところ、宗教は自分が生きていくための基盤、ヒーリングや師からのアドバイスは具体的な問題を解決するのに必要なものとして両者は必要であるが、宗教に具体的な問題の解決を求めているというのであった。

【3B】が精神世界に関係していることは、【3B】の所属する宗教の施設では公になっているが、「他の信者を混乱させなければ問題ない」と、精神世界に関係していること自体を注意されたことはないという。

(3) 精神世界とキリスト教（プロテスタント）

調査対象【3C】（40代男性 愛知県在住 精神世界関連事業者）

聞き取り（2016年10月4日）

——カウンセラーを目指して

プロテスタントのキリスト教会に所属している【3C】は、20代の後半に癌で母親を亡くしている。広告関係の会社員をしていたが、母親の話相手をしてきたことで、カウンセリングに興味を持ち、民間資格を取得した。

——精神世界との接触

当初は会社とカウンセラーとの兼業をしていたが、徐々に「カウンセラーで生計を立てたい」と思うようになったという。

ちょうど会社の同僚の相談にのっていた際、同僚が「タロット師に見て貰うよりも【3C】にカウンセリングをしてもらう方が楽になる」と言われ、「タロットとはどういうものなのか」と興味を持ち、十数軒のタロットのサロンを回ったという。【3C】は最初の数件で「単にタロットを方便にして相手の話を

聞き出しているだけで、それが上手いかどうかだけ」と思ったという。しかし「ツールを使うと人はより話をしやすくなる」ということに気付き、もうしばらくタロットサロンを回ることにした。

そのうちに【3C】は、「最初に思っていたことは間違っているのではないか」と思うようになった。何人かのタロット師はデッキを組んだ後に【3C】から話を聞くことなく、【3C】の現状や考えていること、どこに先の分岐点があるかなどを話したという。「それが1人だったら信用はしなかったと思うんですが、本物ってというか、タロットリーディングができる人って、みんな同じことなんですよ」とし、「そこから自分でですがタロットの勉強を始めました」と教えてくれた。

——タロットリーダーとしての出発

【3C】は最初スクールへ行ってタロットを習おうかと考えていたが、【3C】がしたいことは「タロットを使った占い」ではなく「タロットを使ったリーディング」であったため、リーディングとタロットの両方について学ぶためスクールはリーディングの方を選び、タロットは独学で学ぶことにしたという³⁷⁾。

【3C】は「リーディングの技法を完成させた人もクリスチャンだったんで、自分も同じようになれたらと思ったんです」ということで、その時にサロンを開業するために仕事も辞めたということだった。

——精神世界技法者としての独立

言語を使用した技法である「カウンセリング」では引き出せなかったクライアントの心が「タロットリーディング」で引き出せることになったことで、より深いカウンセリングができるようになった【3C】の技法は口コミで広がり、なんとか食べていけるようにもなったという。

その後、【3C】はマッサージなどの手の技法を取得したが、これはタロットで相手の心を開いた後にマッサージ等によって邪気を吸い取る施術をするためだということだった。

——【3C】にとってのキリスト教

【3C】とキリスト教との関係を聞いたところ、【3C】は初代のクリスチャンで神もイエスも信じるという。しかし、「キリスト教の神は真実の神であるので自分にとってはキリスト教だけがあれば良いが、聖書の完成後に神は人に直接的に働きかけることは無くなったので、人を助けるには補助的にスピリチュアルな技法が必要になる」とし、「その技法に辿りつくことができたのもキリスト教を信仰していたから」ということだった。【3C】はサロンを開いていることを教会のメンバーにも隠していないが、牧師や役員からの注意をされたことはないという。

——その後

【3C】は現在東京にサロンの支店を持ち、愛知県と東京を往復しているという。「もっと多くの人にスピリチュアルは怪しくないものと伝えるために何かの組織を作るのが目標」だという。滋賀県に精神世界系のNPO法人があることを伝え、WEBページから連絡をしてみるということだった（2020年9月20日【3C】への聞き取り）。

(4) 精神世界と仏教（真言宗）

調査対象【3D】（40代女性 大阪府在住 精神世界関連事業者 画家）

聞き取り（2016年11月9日）

——家庭の破綻

【3D】のセッションは、向かい合って相手のイメージを絵で表し、それをリーディングしてアドバイスする技法である。【3D】は一般の画家としても現代アーティストとして画集を出すなど一部では名前も通っている。しかしもともとは、絵は得意な方ではなく、作家志望だった。

【3D】は1度夢中になったら止まらないほどの集中力があり、家庭を放置しての執筆活動を繰り返した結果、夫が愛想を尽かし、子供を連れて家を出て行ったという。

——天使の声

その時点で、【3D】は小説を書く気力もなくなりましたが、気分転換に行った旅先で娘を思って描いたスケッチに友人から「天使が映り込んでいる」と指摘されてから、天使の声が聞こえるようになったという。

これをきっかけに【3D】は精神世界イベントに出展し、相手の守護天使からのメッセージを絵にして渡すセッションを始めた。

——仏教寺院での修行

しかし、相手の守護天使からの言葉の受け止め方にムラを感じていた。その頃【3D】が尊敬している男性技法者（50代）から「正しいエネルギーの感じ方を学ぶために」ある仏教寺院へ修行に行くように言われた。

天使と仏教とは無関係に思えた【3D】であったが、男性は「天使も仏もエネルギーを発するのは同じ。本来の宗教は人間のエネルギーの根源に関する知恵や知識を持っているだけでなく、それをどのようにコントロールするかの方法も持っているもので、儀式の中にもその秘密を見いだせる」と勧められた。【3D】は指定された寺院に修行へ行った結果、何段階も高いエネルギーを使いこなすことができるようになったことが実感でき、そのまま寺院での修行も続け僧侶の資格も取得したという。

——その後

精神世界イベントに【3D】が出展しているのを見つけたので声をかけたところ、「今はスピリチュアルのセッションとは別に、エネルギーを使いながらイメージ通りの絵を何枚も書いていたら回心の一作ができたんです」と画集を見せてくれて、それがフランスの絵画展で入賞した旨を教えてくれた。

現在は絵のセッションとアーティストとの掛け持ちだが、修行をした寺院にも僧籍は残っており、多いときには年に3回ほど精神世界についての講演をするということだった（2018年3月8日【3D】への聞き取り）。

(5) 精神世界とキリスト教（プロテスタント）

調査対象【3E】（50代男性 徳島県在住 精神世界関連事業者 牧師）
聞き取り（2018年5月5日）

——余命宣告と完治

プロテスタントの教団の牧師であった【3E】は、牧師在職中に肝硬変を患い余命宣告を受けていた。治癒の見込みがない中でたまたま相部屋の患者を見舞いにきていた3人のレイキ（東洋霊気）の技法者が【3E】の部屋に入ってきて、約1時間手かざしを行ったところ、翌週には完全に治癒しており退院へと至った。

——レイキ技法の取得

その後【3E】はこのレイキ技法者を訪ねて京都の鞍馬を訪れ、そこでレイキを学んだ。【3E】が言うにはレイキは単なる癒しの技法ではなく、本来は色々な思想を伝えており（安心立命という）、レイキを真剣に学べばそれを生み出した背景の様々な思想や技法に突き当たるとのことだった。

レイキを深く学べば、西洋の神秘主義的なもの、キリスト教神秘主義的なものも理解できるようになるということ、さらにはレイキとタロットの技法も通じているとのことであった。

——精神世界思想からの説教と信徒セラピー

【3E】は、レイキの中にある安心立命を中心にそれを聖書とリンクさせて説教を考えていたが、より教会員の相談にのるためにレイキを元にした相談をすることを考えた。しかし、レイキではあまりにもキリスト教から離れすぎているように思われる可能性があるため、レイキの中の人型法（ひとがたほう）³⁸⁾と似ているタロットを使用して、信徒のセラピーを行うようになった。さらに教会の保守派の信徒に「異教的なものを利用されているのではないか」と疑われないように、中世フランスの辺境のカトリック修道院で使用されていた「マルセイユタロット」を用いた。

——タロットセラピストとしての独立

【3E】はタロットセラピー牧師として知名度も上がり【3E】が所属教団する出版部門から『牧師のタロットセラピー』という本の出版の打診を受けて、草稿まで書いていたが、牧師を辞めたことで結局出版されなかった。

筆者は、【3E】が所属教団から資格を剥奪されるようなことになったのかと考え、これを尋ねたところ、【3E】が牧師を辞めた理由は単に「牧師よりもタロットセラピスト業の方が食べていくのに困らない」、「もっと自由にキリスト教を探求したい」という理由であり、「教団から牧師がタロットを用いていたと咎め立てをされたことはない」という。

また本人も、宗教はと聞かれたら個人的にはキリスト教信者であり、まだ教団にも牧師としての籍は残っているということだった。

——その後

2020年4月現在【3E】は易と聖書の関係について研究しており、地元の大学の院生をしているという（2020年4月15日【3E】への聞き取り）。

(6) 宗教——キリスト教（カトリック）

調査対象【3F】（40代女性 兵庫県在住 カトリック系女子高校英語教諭）

聞き取り（2018年1月30日）

——聞き取りに至るまで

【3F】はパワーストーンを扱っている宝石店から紹介を受けた。店舗の常連で、カトリック系の女子校に勤務しており自身も信徒だという。

——精神世界に触れる前

【3F】は小学校の頃から「自分は人よりも運がいいのではないか」と思っていたという。

具体的には「これは欲しい」と思った雑誌の懸賞の大半を当てることができたり、小テストのヤマもほぼ外したことはなかったと言う。

また勘が鋭く、人の考えていることがぼんやりとわかるため授業中に当てられそうな時もわかった。ただ「事前にそれが分かるのではなく、教師の考えがぼんやりと心に入ってくる感じがするくらいで、予知能力ではない」と本人はいう。

特に精神世界に触れるようなことは無かったが、子供の頃から人の思念がエネルギーのように入り込んでくる体質で、大勢の人の集まる所に行くと吐き気をもよおすので、初詣も36歳まで行ったことがなかったということだった。

中学校に入ると、年相応に占いなどに興味を持って、占い系の雑誌を買うようになり、雑誌の裏についている「幸福グッズ」を購入するようになった。【3F】はもともと興味半分商品を購入しており、効果を期待してそれらを購入していたのではなかったが、あるとき「これを持っていたら絶対に良いことがあるって思い込んでいるうちは駄目だ」と分かったという。筆者が「お引きよせの法則の逆みたいなものか」と質問したところ、「お引きよせ」の逆ではなく、むしろ「お引きよせ」に近いもので、「幸福のペンダントを買った時に気づいたことなんです」と話をしてくれた。【3F】は普段は「持っていていいことありますように」とペンダントを持っていたが、ちょうどその時に出していた懸賞の賞品は絶対に欲しいものだった。【3F】は「もともと懸賞は当たる方だったんですが、それは『絶対』じゃないんですよ。けれどもその時はなにが何でも絶対に欲しいと思ったんです。だからハガキを書きまくりました。100枚は書かなかったと思いますが、中学生が書ける限界近くまで書いたと思います」とその時のことを思い出すようにゆっくりと「その時に胸のペンダントが目に入ったんです」と続けた。ペンダントが目に入った途端、【3F】は、「あ、もうやることだけやったんだからあとはペンダントに任せてたら大丈夫」と思えたという。「大丈夫」というのはどういう感情かと筆者が尋ねたところ【3F】は、「そうですね、何の疑いも持たなかったですね。もう当たるって決まっていたことが分かったんですよ。そこに景品があるように思えました」とその時のことを話してくれた。

この時に【3F】は幸運グッズについて分かったこととして、「幸福のペンダ

ントも他の幸運グッズもただ持っているだけではダメで、明確に自分が呼び込みたいものを決める。そしたらそれを手に入れるための努力はできる限りする。そして結果に疑いを持たない、言い方を変えるとネガティブイメージを持たないことが大切なんです」としたので、筆者が「確かにお引きよせに近いですね」と話したところ、「その時はスピリチュアルとか何も知らなかったので『お引きよせ』という言葉も知らなかったですがね」と笑っていた。

さらに【3F】はこの体験から、やるべきことをやった後、明確に「そのようになる」という具体的な光景が想像できるかどうかが重要で、それができたら後は幸運グッズに任せることが大切だとし、「幸運グッズを持ったのに幸福になれない」と言っている人はこのうちのどれかが欠けており、「そういう人に限って幸福が来ないのをグッズや人のせいにしてている。そういう人が望んだものを手にできるとは思わない」とした。

——精神世界との接触

【3F】は36歳になってから初詣に行けるようになったといていたが、その年に何があったかを聞いたところ「自称サイキッカー」の男性との付き合いをしたのがきっかけということだった。

この男性との付き合いにより、【3F】は以前にも増して人の思念の受信能力が上がり、人混みなどがかなり苦しく感じるようになっていた。とはいっても霊的なものを感じるようになったわけではなく、「人の思念と思念が混じり合って念の統合体」のようなものからのエネルギーを受け取ることが多くなったという。その時はじめて「なぜ自分にはこんな能力があるのか、どうして欲しかった彼氏ができた途端に余計に苦しい目に遭うのか」と自分の能力を本気で恨んだという。

苦しんでいる【3F】を見ていた彼氏から「一度生い立ちを話して欲しいと」言われ、【3F】は自分の生い立ちを彼に話したところ、彼氏は【3F】をリーディングし、「あなたはとても天に愛されている」と耳元で小さく呟いたという。「そうしたら目の前に宇宙が広がって、何かと共鳴して、気がつくとな人の

思念体とかそんなものは、ちっぽけなことに思えていたんです」と【3F】はその時の様子を語ってくれた。

筆者が「彼氏さんの一言に癒やされたってことですね」といったところ、【3F】は「もちろん彼の一言がきっかけだったのはその通りですが、一言が私を癒やしたというよりも、その時に私と宇宙が繋がって宇宙に癒されたんですね」と宇宙意識との繋がりについての大切さについて話してくれた。

「彼氏さんからスピリチュアルの世界については教えてもらったんですか」と筆者が尋ねたところ、【3F】は「そうですね、なんか色々といっていました。魂の段階がどうか。でもあんまし覚えてないですね。なんとなくぼんやりと覚えている感じで7つの界層がとかも言ってたかも知れませんが」と彼氏から聞いた精神世界の詳細についてはうろ覚えということだった。

筆者が、精神世界についての興味を持たなかったのかと聞いたところ【3F】は、「そうですね。それよりも彼の友達が色々と能力をもっていて面白くて、そちらの方への興味が大きかったんですよ」と答えたので、どういう能力かを聞いたところ、「彼の親友が過去世を見れる人で、目を合わせると、その人の過去世がみられたんです。その人は私の過去をみて『あなたは昔はヨーロッパのご令嬢でしたね』って言うてくれたんです。お嬢様とかは、あこがれで、昔から友達からも『姫、姫』って呼ばれてたんで『あ、当たってるんだ』って思いましたね」とその時のことを話してくれた³⁹⁾。

——彼氏との別れ

【3F】は1年経たないうちに彼氏と別れたということだった。理由を聞いたところ、「実は、彼の目的は私をマルチ商法にひっかけることだったんです。霊能力開発セミナーらしき活動のようなことをしているのは知っていたのですが、そこのリーダーの霊能力者から『あなたは人を幸せにする使命がある』みたいなことを言われて。しつこく、そのセミナーを受講するように勧められたんです」と彼氏と別れた原因について話してくれた。

【3F】は彼氏と別れた後も、精神世界についての興味を失わず、自分で何冊

も関係書籍を読んだ。その理由を聞いたところ、「昔から人の負の思念を感じるたびに、人を幸せにしたいという気持ちがずっとあったこと」と、「スピリチュアルの中には、人を幸せにするための方法が何かあるのではないかという期待があったからだ」という。

——ヒーリングセミナーと左腕の力

彼と別れて4年後、【3F】はあるヒーリングの技法のセミナーに参加した。彼と別れた後は書籍を読みながら時折、占いも利用していたが、あるとき占い師から、「今のあなたは人を幸せにしたいと思っているが、具体的に何をしたらいいのか分からないのでは」と問われたのでうなずくと、「それならば人を癒すことを最初の目標にすれば良い」とその占い師の知り合いが主宰するセミナーを紹介してくれた。

どのようなヒーリングの技法かについて聞いたところ、「手をかぎすのではなく、パワーストーンを用い、石の力を借りて、相手を癒す技法」ということで、まず自分が好きなパワーストーンを選び、それを基本として、自分の持っている石と共鳴しやすい（エネルギーを通しやすい）石を相手に持ってもらい、癒しのエネルギーを送るという技法であった。

パワーストーンを使った精神世界ビジネスのようにも感じたので、「自分が持ったり相手に持たせる石はそのセミナーの主宰者から買うのか」と尋ねたところ、「特にそういう指定はありませんでした。一覧表をもらったのでそれに適合すればどこで買っても大丈夫ということでした」と【3F】は答え、パワーストーンを買っている店が普段利用している宝石店だと教えてくれた。

筆者は【3F】に「どこかにサロンを開いてみようとは思わなかったのか」と尋ねたところ、【3F】は、「それは全く思わなかったですね。何かあったときに人を癒す力があつたらいいなと思ったくらいなので。最初に使ったのは家族に対してですね。特に帰省したときに祖母が『とつても気持ちいいねえ』で喜んでくれたのが嬉しかったですね。祖母はもう亡くなりましたが良い孝行が出来たなって思っています」と答えてくれた。

【3F】は、サロンを開くつもりはなかったが、宝石店の常連となり、客同士の交流や情報交換もでき、居心地も良かったという。精神世界の根本思想について語り合うこともあったが「どちらの魂の方が上か」という対立が起きることもなく雰囲気の良い空間だという。宝石店常連の主婦さんから「パワーを分けて」と言われたのが他人に技法を使う最初のきっかけだったという。

その主婦は「他人が持っているエネルギーや技法を見抜く能力もっている」ということで、主婦は【3F】を見た時から「左側の腕に女神が宿っている」と思っていたそうである。【3F】は店長からも何度も「パワーを感じる左腕だね」と言われており、特段驚きはしなかったが、どうしたものかと考えた。

主婦が【3F】にエネルギーを分けてと言った理由は、「娘が受験だが、合格する判定がきわどいからなんとかパワーが欲しい」ということだった。筆者が「それはその娘さんが来ないと意味がないんじゃないか」と尋ねたところ、【3F】も同様に思ったそうで、その旨を主婦に伝えたところ、店長が、「【3F】さんのエネルギーを石に詰めて（主婦に）持って帰ってもらえばいいよ」といい、「お嬢さんには何度か会ったことがあるから」と、主婦の娘に合った石を【3F】に渡したので、【3F】はそれにエネルギーを込めたということだった。

——高校生と左腕

結果として娘は合格できたが、筆者が「それはヒーリングというよりも、エネルギーワークというか御利益を分けたような気がするんですが」と問うたところ、【3F】は、「実際にエネルギーの使い方はヒーリングのセミナーで学んだわけですし、人に喜んでもらえればそれでいいんです。そのママさんだって娘の受験のことですとずっと悩みを抱えて苦しんでたわけですから、ある意味癒しです」とあまり自分の技法にこだわっている様子はなかった。筆者が、「それで、謝礼というのはいくらくらい貰ったんですか」と聞いたところ【3F】は、「私自身は全く貰っていません。そんなことを考えてやったらそれこそ私自身が霊的に下降しちゃいますよ」とあくまでも人助けが自分の使命だと強調した。

【3F】にとって気持ちが変わったのは、その日を境に勤務先の高校で、生徒

から「先生って不思議な力がありそうだから分けて欲しい」と言われることに不快を感じなくなったことである。【3F】はそれまでも生徒から「力わけて」、「【3F】先生に触ると良いことが起こる」などいわれていたが、ずっと不快に思っていたそうである。しかし、娘の合格を知って以来、【3F】は生徒に、「左腕触るくらいなら良いよ」というようになった。

校長が神父なのであまり大々的にはできないものの、学年で広まって受験前に大挙して生徒が集まり、その場を誤魔化すのが大変なこともあったという。筆者が「やはりカトリックの背景があるとエネルギーとかパワーとかいうのは問題ですか」と聞いたところ、【3F】は、「神父様（校長）からは、『個人的なことには口出しはしないが、大事になることがないように』といわれている」と答えてくれた。

——高校での問題（職員会議にて）

【3F】は、それ以来、エネルギーを欲しがらる生徒には個人的にしか会わないように注意していたが、個人的にであっても複数の人数と何度も会っていることで、思わぬ形で問題が起きたという。それは【3F】が科目を受け持った生徒（正確には【3F】に触れた生徒）の現役の大学合格率が95%弱になったことだという。それまでは7割台にも満たなかった合格率だったので「何が起こった」、「【3F】が不正をしたのではないかと職員会議が開かれた。

「学年主任などの教員は不正行為が無かったかを気にしていましたが、むしろ神父様やシスターは私がまじないようなことをしたのではないかと疑っていましたね」と【3F】はやや困ったような表情を浮かべた。筆者が、「カトリックの学校とはそこまで厳しいのか」と尋ねたところ、【3F】は、「正直、厳しいのは神父様とシスターだけで、他の教師はカトリックの信徒であっても別にそういうの気にしている人はいませんね」とし、「けれどもシスターは厳しいです。タロット占いをしている生徒らが見つかって親御さんが呼び出されたというのもありましたし」と答えてくれた。

【3F】がいうには、親を呼び出すのは『遊戯行為を校内でしていたことにつ

いての呼び出し』という名目だが、実際は宗教的な背景によるものだった。

職員会議は2回に分けて行われ、2回目までに【3F】と接触のあった生徒はほぼ呼び出されたが、事前に「私に触れたことは誰にもいうな」と注意をしていたため、全員が「進路指導の相談をしてもらっていた」という回答しかせず、神父やシスターは納得してはいない様子だったが、教頭や学年主任をはじめ他の教諭は「成績があがっているなら良いではないか」ということで、なんら咎められることはなく職員会議は終わったということだった。

——【3F】の聖職者観

この職員会議以降、【3F】が生徒と技法を介した接触をやめたかという、まったくそれまでと変わることなく接していたという。何度かシスターに見張られたことはあったが、見た目には生徒が左腕に触れていだけなので何をしているかはシスターの方では全く把握ができないからだという。

「同じ波動は引き合うと言いますが、学年が変わろうとクラスが変わろうと、私のところに来る子は来ますし、悩みを抱えた生徒が内容も告げずに左腕だけ触っていくこともあります」と【3F】が言うので、筆者がどうして分かるのかと聞いたところ、自分の中にマイナスの感情が入ってくるからすぐに分かるということだった。ただ、【3F】が触れて「これは危険だ」と思った生徒にだけは宝石店で石を購入しそれを渡してヒーリングを行っているということだった。

【3F】自身もカトリックの信徒なので、神父やシスターのことを宗教的な職能者としては立ててはいるが、「私は現実問題に対応できてこそその宗教者だと思っている。本当に生徒が困っている時には何の力も無いのに、自分たちの知らないことは全て悪霊だの妖術だのとレッテルを貼ることはおかしいし、実際に私は悪魔に祈っているわけでもなんでもなし」とし、「人が困っている時に手を差し伸べ、助けるのが信仰者の生き方で、自分が無償でヒーリングを使うことによって霊的に成長することは、神様から喜ばれる行為だと思っている」と自分の技法はカトリック信仰の範囲から出るものではないとしていた。

——【3F】の宗教観

【3F】はカトリック信者としては真摯的で主日のミサは欠かしたことがないという。また毎日神への祈祷も行っており、【3F】の中でカトリック信仰と精神世界の技法や思想が対立することはないようである。

霊性進化論についても、霊的な界層をあげていくことは神の心に適う行為であり、宇宙意識と一体化するということは神力を直接感じられるようになることだとし、カトリックの教義についても精神世界の根本思想についても自分の中で独自の解釈をしているように見えた⁴⁰⁾。

筆者が、「神父にもシスターにも直接的に人を助ける力がないのにどうしてカトリックの信徒でいつづけるのか」と尋ねたところ、【3F】は「確かに私の周りの神父様もシスターも何の力も持っていないし、『あの世の話はするのにこの世の人は助けられないような人たち』ばかりですが」と一旦間をおいて、「けれども、カトリックには世界的に見れば一番多くの奇跡や、奇蹟を起こした聖人がある。そういうところへ行ったり、聖人を見習うことで、自分の霊的な界層も上がるし技術もあがる。そうなれば聖人のような人助けも可能になるかも知れない」とした。

「列聖されたいか思いますか」と聞いたところ、【3F】は笑って、「私は人助けがしたいだけです。そのために霊的界層をあげて、今よりもっと多くの人の役には立ちたいけれども目立つことはしたくはありません。聖書にもその方が天での報いが大きいと書いてありますし」と話してくれた。

——現在

2021年になり、【3F】に今の状況を聞いたところ、「校長が替わり高校全体が自由な雰囲気になった」ということだった。「ヒーリングは続けているのか」と聞いたところ、以前よりも自由にできるようになったという。

「どういうことか」と筆者が尋ねたところ、「学校が社会的に困るようなことになったり、変な道具を使ったり、呪文を唱えたりせず腕に触れさせるだけならば生徒の安心感につながっている暗示効果のようなものなので問題ないと

認められた」ということだった。石を渡すのは変な道具を使うことにならないのかとも考えたが、「今は石にマリア様を彫るなどの工夫をしています」と、ほぼ公認状態で精神世界技法を使える状況になっていることを教えてくれた(2021年4月10日【3F】への聞き取り)。

(7) 宗教——教派神道

調査対象 教団教職者 (40代男性 大阪府在住)

聞き取り (2016年11月3日)

大阪府の教派神道の教会へ現地調査に行った際、「開運スマイルフェス」という精神世界イベントのトラクトが置いてあった。そこには「感情ツボ療法」、「タロット 数秘術」、「エンジェルカードリーディング」、「カラーセラピー」、「ここに優しい布生理用品販売」など、精神世界関係者5人の女性が載せられていた。

筆者が精神世界と宗教の教えとは矛盾しないのかと尋ねたところ、「あるときひょっこりと揃って尋ねてきたんですよ。うちの信者という名前が欲しかっただけでしょうけど、誰でも歓迎ですし、こういうとこ(精神世界イベント)でうちを宣伝して貰えるのは良いことだし」と教職者は笑っていたが、彼女らは精神世界イベント前後のお参りを欠かしたことはないという。

直接彼女らへの聞き取りは行っていないが、教職者がいうには、「彼女たちにとってスピリチュアルのイベント前にお参りに来るのはいつものことで、考えようによっては他の信者さんよりも熱心かもしれない」ということだった。

(8) 宗教——仏教(真宗)

調査対象 【3G】(50代女性 大阪府在住 精神世界関連事業者 僧侶)

聞き取り (2018年12月26日)

——精神世界との出会い

【3G】の実家は住職の家系で、父親からはかなり厳しく育てられたという。

親の言いつけを聞くことは当然のことであり、普段の生活も親に言われるままだった。親に反発を覚えた時期もあったが、結局は親の言いなりに生きてきたという。高校卒業後も親が勧める仏教系の短期大学幼児保育科に進学した。

幼児に対しては「言うことを聞かない、汚いから触れたくない」と好きではなかったが、「幼児教育」には興味があったので短大での生活に苦痛は感じたことはなかったという。【3G】の在学当時、大学ではタロットカードが流行しており、【3G】はタロットカードのリーディングを受けてからカードそのものに興味を持つようになり、やがては西洋占星術をはじめ占い全般に興味を持つようになったという。【3G】のカードリーディングの基礎は短大時代に友人を相手に色々試した中で培われ、同時に精神世界の根本思想についての理解も深めていった。

大学を卒業した後の進路を自分で考えることはなく、親の勧めで保育士になり、数年間保育士として働いた。寺（実家）の附属の幼稚園かと尋ねたところ、実家は幼稚園付きの寺ではなく知り合いの幼稚園にコネで就職をしたとのことだった。この親のコネということが【3G】を縛り、幼児が嫌いだった【3G】にとって就職してからの毎日は苦痛の日々だったという。

保育士をしている間もカードリーディングを独学で研究していたが、苦痛な毎日の中でこれを学ぶことは【3G】が唯一充足感を得られる時であった。そこで「やはりきちんと技法を習おう」と考え、【3G】はセミナーでカードリーディング全般の講座を受けることにした。しかし逆にこれが【3G】がカードから離れ去るきっかけになった。20万以上の受講費用を支払ったにもかかわらず、そこで教えられたのは自分で学んだ内容と何も変わらないどころか、既に短大時代には理解していたことばかりで、【3G】にとっては「お金をどぶに捨てたようなもの」であった。「レベルの低い資格ビジネス」に失望した【3G】は、カードリーディングというものに対する情熱が一気に冷めてしまい、カードを全て捨てようとも考えたがタロットカードだけにはなぜか愛着が残り、自己流での勉強を続けることにした。

——サロンの開設

そのような勤めの後、【3G】は父親から幼稚園を退職し僧侶として勤務するようにと言われた。親の寺を継ぐわけではなかったが（兄弟がいたためと思われる）、僧侶になることは既に親の中では決定事項となっていたようで、進学・就職・転職と親に逆らうことはできず、某寺に僧侶として勤務することになった。

法要のために忙しく檀家を回る【3G】に転機が訪れたのは、法要先から持ちかけられた相談がきっかけだった。「持ち主が亡くなって使わなくなった古民家があるが、駅からは近いものの敷地が入り組んでおり、再利用は難しく、取り壊すにも費用がかかるし困っている」という話に何かを感じた【3G】は、その古民家を一度見に行くことにした。

その古民家は門からは家の建物がみえず、長い通路を通って玄関にたどり着く構造となっており、第一印象は「みすばらしい家」であった。しかし建物の前に立って静かに回りを見渡していると、「草むしりをして、そこに植わったハーブ、自然さを失わない程度に木々の剪定をしてある庭のイメージ」が浮かび、そこへの結びつきを感じたという。施設の玄関奥には短い廊下があり、玄関に入ってすぐ手前にふすま部屋が1つ、そこから進むと廊下沿いと奥に2つのふすま部屋があった。「廊下と玄関の照明を全体的に暗くして間接照明だけで照らせば家屋内も静寂を保つのに適しているのでは」とさらに【3G】のイメージは膨らんでいった。結果として【3G】はここを、タロットカードを主とする精神世界関係のサロンにすることにし、カードリーダーを副業として開業することにした。これは【3G】が自分の意思ではじめて決めたことであるという。

【3G】は、古民家は場所として「たまたま与えられただけ」、「運が良かっただけ」、「イメージが膨らんだだけ」で特に何かからの力を感じたわけでも、啓示があったわけではないと言う。しかし【3G】はこの家を元の持ち主から遺贈されており⁴¹⁾、表面には出さないものの「自分のために大きな力が働いて与えられた場所である」と考えているのではないかと思わせる言い回しを言葉の

端々から伺うことができた。

——【3G】と精神世界技法

【3G】は、普段は僧侶として活動しているため、カードリーディングは、予約が入れば行うという方式をとっている。オラクルカードや各種カードを使うこともあるが、基本はタロットカードを使用しており、特に恋愛に関する相談についてのリーディングが得意ということであった。恋愛相談ならば繁華街にある占いの館でもできると感じたが、「恋愛感情は自分の意思が一番働く部分であり、ワンネスの中心となる愛に一番近い部分だからこそ重要」ということであった。

技法についていえば、【3G】自身が「独学なので趣味程度」と言っているしており、タロットをシャッフルすることをはじめ、カードの扱い方などを見る限り、これまで見てきたカードリーダーの中ではレベルが高いとは言い難かった⁴²⁾。しかし独学であることを考えるとこれは仕方がないともいえる。

普段は予約があったときのみサロンを開いているが、年に2回は一日中建物で占いの館として解放するイベントを行っている。また出張活動として年に1回（2日間）車の展示会場で占いコーナーを受け持っており、2日で40人ほど占うが、かなり疲れるので負担になっているとのことであった。

【3G】が使っているタロットはウェイト版とゼンタロット（禪タロット）の2種類である。ウェイト版はタロットのビジュアル面が強調されたもので視覚的な効果を狙って使うタロット師が多い。ゼンタロットはオラクルカード的な使い方をしているため、正確にはタロットリーディングとは違う技法のように感じた⁴³⁾。また猫タロットというものが飾ってあったが、どのように使うかについては説明をはぐらかされた。その他にも【3G】は各種カードのデッキを持っており、飾り方からカードのコレクションをしているようにも見えた。

——僧侶と精神世界関連事業

僧侶とタロットとのどちらがメインなのかを聞いたところ、【3G】は、「本職は僧侶」と即答し、一番大切なのは勤務先である寺の仕事だという。だが「趣

味程度」としながらも単なる趣味でカードリーディングを終わらせるつもりはなく、多くのカードを扱えるように独学で今後も幅を広げていきたいということであった。

カードリーディングと仏教との間に、また精神世界の根本思想と仏教との間に矛盾を感じないかと聞いたところ、「カードリーディングは仏教の教えの延長線上にある」とし、いくつかの例を出して仏教とタロットとの共通点について教えてくれたが、内容的には【3A】のような説得力のあるものではなかった。しかし、「カードは檀家の方に説法する際に自分のために（タロットを使って）足りないものを補いつつ、必要なアドバイスを別の視点で与えてくれる意味では仏道に適っている」という回答には納得できた。

勤務先の寺や父親に、カードリーディングのためのサロンを持っていることやイベントに出展していることなどについて答められてないのかを尋ねたところ、「タロットをしていることは知られているが、特段禁止も注意もされていない。サロンを始めた当時は今の仕事（僧侶）に支障のない範囲であれば問題ないと言われていたが、ブログを開設してからは、「僧侶であることを隠さずに仏教の法要に関する記事も載せたらどうか」という提案も受け、檀家・利用者（ブログ閲覧者）の双方に隠すことなく活動しているということだった。

(9) 精神世界とキリスト教（プロテスタント）

調査対象【3H】（50代女性 大阪府在住 牧師）

聞き取り（2017年11月23日）

調査対象【3I】（40代女性 大阪府在住 信者）

聞き取り（2017年11月23日）

調査対象【3J】（40代女性 大阪府在住 精神世界関連事業者）

聞き取り（2017年11月25日）

——聞き取りに至るまで

筆者が精神世界に関する研究調査を行っていることを知った旧友から、「チャネラーと懇意にしている牧師がいると聞いたが会ってみたいか」と聞かれたので仲介を頼んだところ、【3H】から、【3I】も同席の上2人から聞き取りに応じてくれるとの返事をもらうことができた。

——【3H】が牧師になるまで

【3H】の夫はプロテスタントの主流教派の教職者で、教会では夫が主任牧師【3H】が副牧師である（職能は同じ）。

夫が神学部、神学研究科を出て牧師になったのに対して、【3H】は、結婚前は看護師をしており、特に教職者になるつもりはなかったという。

【3H】が牧師を目指すようになったのは、看護師をしていた病院の配置転換でホスピス病棟に移動になったのがきっかけだという。両親もキリスト教徒で「模範的に聖書の教えに沿った生き方」を目指していた【3H】にとって、ホスピスは「愛の実践場」であったという。死にゆく人の現場に立ち会うことは辛いことではあったが、人に寄り添い心を通わせているとき【3H】は少しでも神の愛を実践できているような温かい気持ちになれたという。ホスピス病棟で働くうちに「もっと神の愛をもってこの人に寄り添ってほしい」、「イエスが言ったように、時が良くて悪くても福音を宣べ伝える者になりたい」という気持ちが大きくなっていった。しかし【3H】が勤務している病院は宗教系の病院ではなく、宗教的な話を患者にすることはできなかつたため、【3H】は一種のジレンマを抱えることになった。

そんな中、自分が通う教会の牧師に相談したところ、「働きながらでも（牧師の）資格をとってみたいはどうか」というアドバイスをもらい、「自分の職場に活かせるかどうかは別として、もっと魂の深いケアをするためには、まずは自分ができることから始めよう」と考え、働きながら、神学校へ行かず3年間かけて教派の教師検定試験を受け⁴⁴⁾、これに合格し、看護師を続けながら3年間伝道師（牧師補）として教会で奉仕し、その後牧師の試験に合格した。この頃に【3H】は今の夫と出会い結婚をしている。

伝道師として過ごしている間、心に闇を抱えた様々な人が教会を訪れた。【3H】はその1つ1つに相談にのるうちに、「普通の生活を送っているように見える人の方が闇が深いこともある。もしもこの人たちの魂のケアがなされているのであれば（病気になる）もっと手前で平安を得ることができるのではないだろうか」と考えるようになった。

そこで副牧師として夫を支えながら、自分は信徒の魂のケアをする役割を担うことを決意して職場を退職した。その後、いくつかの教会移動を経て大阪にある某教会に副牧師として着任した。

——信徒【3I】からの相談

「魂のケア」を常に考えていた【3H】に「どうしたら良いのか分からない」と思わせる事案を持ち込んだのが信徒の【3I】だった。

【3I】の悩みは確かに「魂の深い悩み」ではあるのだが、「あまりにも具体的すぎて」【3H】はどう対処したら良いかわからなかった。【3I】が相談してきた内容は、「家に何者かが侵入して汚物を蒔いていると夜中に霊（何の霊かは分からない）が知らせてきた。無視しているとゼリー状の物体が庭にまき散らされていた。しかし目を覚まして庭に出ると汚物は無く、異臭が漂っている」というものだった。

最初は警察に相談をするように【3I】に勧め、【3I】に付き添って所轄の警察署まで一緒に行って頼み込んだ結果、1週間だけ朝方に巡回してもらえることになった。

警察官が巡回するようになってからも霊は「汚物がまかされている」ことを告げてきており、【3I】が驚いて庭に出るとやはり異臭が漂っていた。【3H】と【3I】は警察に巡回の時間を増やして貰えないか相談したが、警察からは「事件も起きていないのに、そこまで人員は割けない」と言われた。【3H】は親身になり【3I】の家に泊まり込んだこともあったが、一度だけ霊が告げた日に一緒に庭に出てみると確かになんともいえない異臭が漂っていたという。

【3H】は「このままでは【3I】が心身症になってしまうのでは」と心配にな

り、なんとか悪戯をしている者を見つけてその行為を止めさせなければと思ひ、調査会社に監視器機の設置と1週間の見張りを頼んだ。しかし、異臭については確認されたものの実際に汚物がまかされている現場を確認することはできなかった。最初は調査業者のサボタージュであると考えた【3H】だったが、何度も報告書を読み、本当に誰も侵入していないという結論を出さざるを得なかった。

【3H】にとっては【3I】のいう「霊のお告げ」に関してはあまり関心がなかった。それよりも【3I】の精神状態がどんどん悪くなっていく方が心配であった。【3I】は不安になると教会を訪れ、恐怖と正体不明の悪戯相手への怒りをぶちまけ、やがて毎日のように教会に相談にくるようになった。

ここまでくると、相談にのっているはずの【3H】の方が投げ出したい気持ちになっていたが、なんとかそれを思いとどませたのは副牧師という職務への責任感であった。

——【3J】との再会

「自分は何もできない、無力だ」と感じていたときに、看護師時代の同僚の【3J】から連絡があった。【3J】も病院を退職しており、「一度退職した者で飲み会でもしませんか」と誘ってきた。【3J】は【3H】よりも4歳年下の後輩で、仕事の段取りは悪かったが、自分よりも患者に深く寄り添っており、「心のケア」の面では一目置いていたという。

飲み会の席で、再会した【3H】に対して「何か大きな問題を抱えていますよね」と【3J】は切り出した。【3I】のことを言い当てられたように感じた【3H】は、「本当にここだけの話だけれども」と【3I】の事件の概要を話した。そこで【3J】から返ってきた答えは「【3I】さんに語りかけている霊に聞いたらいいんじゃないですか」という意外なものだった。

「普段であれば、相変わらず馬鹿なことを言う子だと笑い飛ばしたかもしれない」と【3H】は言う。しかしこのとき【3H】は、実際に起こっている事象にとらわれて【3I】が言っていた「霊が告げた」という部分が自分から完全に欠落していることに気付いた。「確かに霊のことは全く気にしていなかった。で

もどうやって霊に聞くのか」と【3J】に聞かけると、【3J】はバックからゴソゴソと名刺を出して【3H】に渡した。そこには「幸福のチャネラー、スピリチュアル・アドバイザー」という肩書きで【3J】の精神世界サロンの名が書かれていた。

精神世界について全く知識がない【3H】は「これは何の仕事なのか」と尋ねた。【3J】は「簡単に言うとその人に関係している霊や、無意識の自分と話をして、そこから得られたことを元にアドバイスをする仕事だ」と答えた。【3H】が「魂の深いケア」を目指して看護師から牧師になったように、【3J】は「より魂と触れ合うこと」を目指して精神世界の技法を学び、現在のサロンを開業したということだった。

——問題の収束

【3J】をどう【3I】に紹介したら良いか分からなかったが、【3H】は思い切ってそのまま「霊と話ができる人と会ってみるか」と聞いたところ、藁にもすがる思いであった【3I】は【3J】に会うことを決め、3人で会う日が決った。【3I】の自宅へ3人で出向き、【3J】は【3I】の手を握り何かと交信をはじめ、会話するように何度も頷いた。その後、深く息を吐いて「分かりましたよ」と、【3J】が交信した内容について話してくれた。

【3J】が交信したのは【3I】のハイアーセルフ⁴⁵⁾で、実際に【3I】の庭に異臭をまいていたのは裏に住む女性の生き霊であった。汚物がまかれていたのは【3I】が出てこなかった際に、隣の女性が【3I】への憎しみから何かを投げ入れただけで、臭気の原因は生き霊そのものにあるということだった。しかし【3J】が「何か隣に恨みをかうようなことはしていないか」と聞いたところ、【3I】には全く身に覚えが無かった。

そこで、【3J】が庭全体をリーディングしたところ、猫のイメージが表れたので、【3J】は隣に猫による被害がないかについて調べることを【3I】に勧めた。とはいうものの【3I】は理解を超えた説明に錯乱気味で、【3I】の代わりに【3H】が裏の女性を訪ね「自分の信徒宅（【3I】宅）が猫の被害にあっているのだが

お宅は大丈夫ですか」という聞き方をしたところ、女性宅には夫が亡くなってから夜中になると猫が裏庭に集まるようになり、糞尿やゴミを漁られるという被害が出ていたことを話してくれた。【3I】のことを恨んでいたわけではなかったが、「ひょっとしたら【3I】が猫を飼っていて嫌がらせをしているのかも」と何度か思ったことがあるということであった。【3I】が猫を飼っておらず【3I】宅にも同様の被害が出ているということを知り、「近隣の問題として取り上げてもらえるように」と【3H】を挟んで【3I】との間で話し合いが持たれ、町内会の議題となったそうである。

なぜ生き霊が異臭を放つのか、結局まかれたゼリー状の汚物は何だったのかについて【3J】は、「実際にその場に居なかったのではなんともいえない」としつつも、「今後このような問題が起こることはないですから」と言い切った。それ以来、【3I】が霊の声を聞いたり、異臭や汚物に悩まされることはなくなった。

——牧師と信徒にとっての精神世界技法者

筆者から見れば、チャネリングは一種の霊媒であり、キリスト教的な行為ではないと思えたが【3H】の解釈は違う。自分がどうしようもないときに【3J】が電話をかけてきたこと、【3J】がそのような（チャネラーとしての）仕事をしてきたからこそ解決が与えられたこと、そこに神の力が働いたのであり、それは【3I】の問題の解決を祈った結果だということだった。

魂のケアを考えてきたのなら、キリスト教的な霊の対処方法はなかったのかと尋ねたところ、「キリスト教では口寄せや霊媒が禁止されているので、自分達（牧師）がそれに加担するようなことはできない」、「だからこそ、それができる【3J】が遣わされたのだ」と言っていた。これについては【3I】も同意しており、「今後このような問題が起きることはないと思うが、もしもあっても最初は【3H】に相談し、【3H】を通して【3J】のような人に相談する」ということだった。

最後に【3H】に、今回のように精神世界の技法者に頼むことはキリスト教の教義として問題ないのかと尋ねたところ、「自分がやるのではないから問題な

い。むしろそういう解決策が今後与えられたことによって多くの悩める人の相談に乗れるのだから喜ぶべきことだ」という。また、主任牧師の夫もこの方針（霊を直接扱う問題は今後【3J】に委託する）に賛同しているということだった。

——【3J】とキリスト教

【3J】にキリスト教の牧師からオファーがあったことについてどう思うか聞いたところ、「別に不思議なことではないし、西洋ではミーディアムが常駐している教会もたくさんある。牧師には牧師の使命があるし、自分には自分の使命がある。私たちはハイアーセルフと呼ぶが、キリスト教では聖霊と呼ぶ。私たちは宇宙意識と呼ぶが、キリスト教では創造神という。でも結局は同じことを言っているだけ」とし、さらに「宗教は駄目という業界の人もいるけれども、私は【3H】さんのように隣の家を（代わりに）訪問するなどはできない。それをできるのが、キリスト教の愛のように思えました。宇宙意識に通じる愛の実践です」と肯定的に受け入れていた。

——その後

現在のこの3者の状態がどうなのかを確認するために、【3J】に連絡をしたところ「今年の春に【3H】さんが牧師をやめてしまったので教会との付き合いは切れてしまった。【3I】以降は3人くらいの人を紹介してもらった」ということだった（2020年10月9日【3J】への聞き取り）。

一応教会にも連絡を入れてみたが2020年の春に夫婦ともに辞任しているということだった⁴⁶⁾。移転先等については、その必要性を感じなかったため確認作業を行っていない。

(10) 精神世界と仏教（真宗）

対象【3K】（60代女性 大阪府在住 主婦）

聞き取り（2016年10月30日）

【3K】の家は仏教の檀家で、父親は檀家総代をつとめていた。父親が亡く

なってからも実家の仏壇を引き取っており、朝夕のおつとめは欠かしたことがないという。

あるときから【3K】には、子供が交通事故に遭うなど現実的なトラブルがつぎつぎに降りかかるようになったという。そんな中で【3K】は、「長男の霊」を名乗る霊から凶事の原因を知らされるという体験をした。

その後、【3K】は霊との交信はできなくなってしまった。その後も先祖供養などを熱心に試してみたがトラブルは一向に好転せず、色々調べた結果「チャネリング」という霊と交信できる精神世界の技法があることを知ったという。【3K】はそこに希望を見だし、チャネリングの技法を取得し、現在は霊能者を目指している。

【3K】は、「チャネリングは自分の能力開発、仏教は自分の基盤となる宗教」だとしており、精神世界の技法や思想は仏教の教えにないことを知っているが、「寺の方からは頑張りなさいと応援を受けている」と話していた。

——その後

その後、筆者が【3K】に「チャネラーにはなれたのか」と連絡を入れたところ、「チャネリングはできるようになり、色々なものと交信はできるようになったが問題の霊とは交信はできず、悪いことも起きなくなったので使うことも無くなった」ということだった（2018年4月4日【3K】への聞き取り）。

小 括

調査結果から、精神世界と伝統的宗教の関係について10件の事例を示した。これを精神世界と伝統的宗教、それぞれの立場から類別すると下記ようになる。

(1) 精神世界と伝統的宗教信者

① 信仰している宗教

仏教	【3A】、【3D】、【3G】、【3K】	4人
キリスト教（プロテスタント）	【3C】、【3E】、【3H】、【3I】	4人

キリスト教（カトリック）	【3F】	1人
仏教系宗教	【3B】	1人
教派神道	信者5人	5人
なし	【3J】	合計16人

② 宗教に触れる前から精神世界関係者であった人

【3A】、【3D】、教派神道信者5人、【3J】8人

③ 精神世界に触れる前から宗教の信者だった人⁴⁷⁾

【3B】、【3C】、【3E】、【3F】、【3G】、【3H】、【3I】、【3K】8人

④ 宗教職能者の資格有

【3A】、【3D】、【3G】、【3H】4人

①と②をみると、みごとに「精神世界から伝統的宗教へ」、「伝統的宗教から精神世界へ」と人の移動があることが分かる。島藪が新新宗教と精神世界の関係について述べた内容と真逆のことが起きていることが事例からも分かる。

しかし、この結果は先行研究を完全に否定するものではない。島藪は、先にあげたように精神世界と伝統的宗教とは相容れないとしつつも、もう一方では、「新霊性文化の側は教団宗教的なものの全体には否定的であるが、宗教伝統の中で彼らの関心に合致するものはむしろ積極的に取り込んでいこうとする」、「伝統的宗教の側からも、新霊性文化を同盟者と受けとめて、自らの伝統的な宗教性の中の教団宗教的でない側面が好んで選び出されて、新時代にふさわしいものとして称揚される傾向がある」（島藪 2007：67）としており、精神世界と宗教の関係が今回の調査結果のようにポジティブな方向へ傾く可能性も指摘している。今回の調査結果は現在において、島藪が予測した部分を実証的に補完したということもできるだろう。

(2) 事例から読み取れる伝統的宗教との親和性

事例からは、伝統的宗教に属しながら、実際の問題に対する解決を精神世界に求めるケースが多かった。

逆に精神世界関係者が行き詰まったときに、既に構築された教理を基にして

自分の技法を体系化（理論化）するために伝統的宗教を利用することもある。伝統的宗教に対して直接的な力は求められてはいないが、「構築された理論を学べる」という意味で精神世界側から価値を見いだされている。

また、共同体が崩壊してきている日本において、信仰共同体の中にいるのは安心感を生む。これは今回の諸事例に限定されるかもしれないが、精神世界関連事業者であっても宗教団体に所属している人がほとんどであることから推測することができる。

(3) 精神世界と新新宗教の非親和性について

——精神世界側から

精神世界のセッションは1対1が基本であり、狭義の精神世界技法者にとって問題解決の最後は自分の技法による。しかし、それは「自分に必要な解決方法（技法システム）を自分で選ぶ」ことができることも意味する。

今回取り上げた新新宗教では、問題解決のための方法がシステム化され筋道ができあがっている。しかし、それは「個人主義で束縛を嫌う」精神世界関係者から受け入れられないことではないだろうか。

同じ技法なら精神世界の方が良いと精神世界関係者はアンケート調査に回答しているが、新新宗教の問題解決システムは決められた道への強制であり、共同体による礼拝・儀式は集団行動による一元的権威への服従として捉えることもできる。そうであるならば島菌が「精神世界からの宗教批判」として示したものの大半は（島菌 1996：320）、新新宗教にこそ当てはまることになる。

——新新宗教の側から

新新宗教側への調査で分かったことだが、そもそも彼らは精神世界というものを知らない。自分の所属教団に不満がなければ、わざわざ似た技法に興味を持つ必要性もない。

また、今回対象とした新新宗教の教職者（やそれに準じる人）は自らの精神世界と自らの教団を比べ、教団の教義は精神世界を「洗練したもの」、精神世

界の技法や思想は教団の「劣化版」的に扱っていたように思えた。これは信徒の「教団に満足している」という部分よりも、むしろ「同族嫌悪」の感情が強いのではないだろうかと筆者は推測する。

いずれにせよ、今回調査した新新宗教教団に関していえば、なんらかの理由でその教団を辞めたいと考えない以上、これらの教団側から精神世界に進んで触れようとする人はほとんどいないと思われる。

(4) 課題

次に、この精神世界と伝統的宗教の行き来について、肝心の伝統的宗教側はどのように受け止めているのかを確認し、1つの課題を示したい。

仏教	問題ない
キリスト教（プロテスタント）	問題ない
キリスト教（カトリック）	明らかに教義に反するならば問題とする
仏教系宗教	問題ない
教派神道	問題ない

ここで注目すべきなのは、カトリックのみが、あからさまに異教的であれば問題視する傾向にある以外、プロテスタントの【3C】、【3E】、【3H】、【3I】の教会では、彼らが精神世界の技法を用いていることを公にしているにもかかわらず一切問題にしていない（【3H】に至っては教職者である）という点である。パートリッジは、1970年代の欧米サブカルチャーの中でも重要なもののひとつがいわゆる「ニューエイジ」であり、「多くの場合ユダヤ＝キリスト教主流 からは距離をおくものだった」としており（パートリッジ 2009：74）、基本的にキリスト教と精神世界は相容れないはずである。堀江は、アメリカのリベラルな教会が「かつてのニューエイジのセンターのコミュニティ版のような役割を果たしている」としているが（堀江 2010b：10）、筆者の調査した教会はリベラルであるとまでは言い難い⁴⁸⁾。

なぜ、本来はキリスト教とは相反するはずの精神世界と信徒との接触を教会が容認するだけでなく、場合によってはキリスト教会が精神世界との接触を後

押しするような事例が存在するのか。次節では、精神世界とキリスト教に絞って考察を行うことにする。

3節 精神世界とキリスト教

前述の通り、伝統的宗教としてキリスト教も精神世界との親和性は高い。しかし本来は思想が反するはずのキリスト教がなぜ精神世界と親和性を保っているのか、日本のキリスト教の事情を確認した上で検証していくことにする。

本節ではキリスト教をいくつかに分類するが、神学的な詳細な分類ではなく精神世界と比較検証する範囲での分類に留める⁴⁹⁾。

——伝統継承教会

古代教会で成立・発展した教会統括職務の1つである主教制を保持している教会（百瀬 2002：538）。

（東方教会）正教会、（西方教会）カトリック、聖公会の3教団

——プロテスタント（自由主義神学）

リベラルとも呼ばれる。19世紀頃からはじまった運動で、信仰や教義の強硬に反対し、信仰と理性の調和、罪や救済の道德化により、教会の壁を社会へ開こうとする（寺園 2002：528）。教会によっては復活や処女降誕も現実としてとらえないところもある（奥山 1992：210）。

——プロテスタント（福音派）

「聖書は誤りなき神の言」なるモットーに要約される信仰を標榜する諸派。聖書信仰についてより厳格な教団が日本基督教団から分離独立したものや、戦後に聖書信仰を標榜したてられた教団・教派（千代崎 2002：962）。

——プロテスタント（旧来教派）

1941年に日本の2300余の教会が合同して成立した日本基督教団（戒能 2002：850）及び、戦後そこから離脱した教会及びその延長線上にある教団・教派⁵⁰⁾。

——カリスマ・ペンテコステ派（運動）

使徒時代の教会のように①聖霊の現存の個人的実感の体験、②使徒言行録やパウロ書簡に記されてる諸々の霊的賜物、ことに超自然的な異言や預言や癒しの方などの顕現、③現代世界における霊のメッセンジャーとなって他の人々にこれらの祝福を伝えようとする強い衝動を持つ運動（中村 2002：1027）。

教団・教派としてはプロテスタントに含まれることが多いが、西方教会（カトリック・聖公会・プロテスタント）を縦断する運動としての性格も持つため、東方教会の一部からは「第2の宗教改革」、「第4のキリスト教」と呼ばれることもある⁵¹⁾。

1 精神世界とキリスト教

(1) 正教会

精神世界に対する対応は、カトリックのように公式見解（カトリック中央協議会 2007）を発表していないが、精神世界的技法は痛悔（告解）の対象に指定されている⁵²⁾。

正教会がカトリックのように精神世界に対して見解を出していないのは、古くから定められている教会法が生きているため、日本で出版されたものにも明治期の霊性思想に関する扱いは明記されており、この内容はかなり厳しい。

一部を引用すると、「行妖は人を殺すと同じく論ず、妖人を信じ之を己の家に誘引する者は5年の補贖をもって定罪せらる⁵³⁾とあり、霊術技法（者）を受け入れることを殺人と同レベルの罪として扱っている。

実際には教会法の範囲内で、霊的なものとの接触に関してどのように指導を行うかは主教から司祭に任されており、規準としては「信者が1人で何か怪しげなことをしている間は静観するが、人に伝播させようとしたところで教育指導（痛悔や領聖停止処分）を入れる」という⁵⁴⁾。具体的対処が必要な問題が発生した場合でも、「ほぼ全ての局面に対応できる機密（サクラメント）」⁵⁵⁾が制定されており、そのような技法（精神世界的技法）はそもそも必要ない」とのことであった（2018年4月27日 正教会司祭への聞き取り 大阪）。

(2) カトリック

カトリックでは、『ニューエイジについてのキリスト教的考察』（カトリック中央協議会 2007）の中で、「ニューエイジとはどのようなものか」、「ニューエイジとキリスト教信仰の違いは何か」、「キリスト教徒がニューエイジに対して注意すべき点は何か」についてローマ教皇庁より公式に見解が出ており、精神世界とキリスト教とは相容れないとしている。

カトリック教会ではオカルト的なものに対して世界的に警戒感を強めており、2019年5月には、イタリア・ローマの教皇庁レジーナ・アポストロルム大学を会場に「エクソシスム（悪魔払い）と解放の祈りの講座」が5日間連続で行われた。

同講座の主催者は、「多くの若者は悪魔払いや呪術、オカルト、悪魔崇拜、魔術、吸血鬼崇拜、超自然の世界との出会いに関連するテーマに一定の好奇心や関心を示しています」とし、「欠陥のある自由や偽りの自由を提供する者たちを霊的指導者として受け入れてしまう若者がいます」と、カトリックの聖職者に対しての注意喚起も行われていた⁵⁶⁾。

【3F】に対する神父やシスターの警戒心はこのような教皇庁の姿勢を受けてのものであったと思われるが、上記講座の主催者がいうように全く精神世界に関して無関心な聖職者もいる。また日本人司祭が少なく信者とのコミュニケーションがとりにくいことで、教会に相談にくる前に精神世界の技法者を訪れる信者もいるという（2018年12月13日 カトリック司祭への聞き取り 兵庫県）。

(3) 聖公会

聖公会からは公式見解は出ておらず、基本的には各教会の司祭の判断によるところが大きい。問題について具体的な対処を必要とするようなケースは、担当司祭が祈祷文を考案し、教会全体に通達して祈るなどの対応を取る。精神世界的技法者のところへ1人で行くのであれば止められないが、教会員を誘うなどの場合は注意がなされるという。

聖公会は宗教間対話を積極的に進めており、その結果として異教的なもの

教会の中で交流が行われることもあり、キリスト教的でないものが入っていると聞いても、それが、宗教間対話のためなのか、いつの間にか教会が精神世界的なものを受容してしまっているのか、司教区からでは教会の内情が分からないので司祭に判断が任されているということであった（2018年6月7日 聖公会司祭への聞き取り 大阪府）。

伝統継承教会においては、基本的には「キリスト教の教理に従って」精神世界の技法や思想に対しては反対の姿勢だが、共通するのは「個人的なことであれば目をつぶるが教会に伝播しそうであれば排除する」という姿勢である。

これについて筆者は、「個人と神」の在り方を重要視するプロテスタントに対して、「教会を中心とした信仰形成」を重視する伝統継承教会の在り方から来るものだと考える。

(4) 精神世界とプロテスタント（自由主義神学）

精神世界とリベラルな教会については、堀江のパークレーで調査したりベラルな教会の在り方が日本にも入ってきているのであれば（堀江 2010a：12）、日本のリベラルな教会が精神世界と親和性を持っていることには何等不思議はない。

筆者が知っている限り、教会によっては占いなどを「どんどん取り入れていこう」という風潮もあり、たとえば若者向けにタロット講座を開いているところもある（2018年7月27日 信者への聞き取り 兵庫県）。

また、リベラルな教会出身の神学生及び牧師候補者10人に対して10の選択肢⁵⁷⁾を作り、個別に「教会で取り入れても（もしくは持ち込んでも）良さそうなものはどれですか」という質問をした（2018年4月6日-12日 個人への調査）、このうち8人がヨガ、7人が占星術、6人がタロット・前世療法・パワーストーン・気功・風水までは、教会で取り入れても良いとしている⁵⁸⁾。

リベラルな教会はキリスト教に反する考え方をしているのではなく、キリスト教に触れるきっかけになるならば何でも取り入れよう、もしくは「地域の中の教会」として「人々のニーズに合ったものは提供していきたい」という考えの

もと、ヨガ教室やタロット講座などを行っている。精神世界やサブカルチャーの中にキリスト教用語が、本来とは違う意味で入っていることに対しても、「どんな形にせよ、キリスト教に触れるきっかけになれば良い」と歓迎する方向にある（2020年8月27日 神学生 20代男性への聞き取り 大阪府）。

(5) 精神世界とプロテスタント（福音派）

「聖書は誤りなき神の言」を標榜しており、「聖書信仰」と言い換えられることもある。その特徴は回心、伝道、聖書、十字架と信仰の4つにまとめられ、この4つが日本の福音派の中心軸となってきたとされる（藤本 2015：46/3047）。

一方、聖書は無謬なゆえにその読み方が重視され、比喩的な表現をそのまま比喩として捉えるか字義通りに捉えるか、書かれていることを現代に置換して読むかなど、福音派の中でも考え方は別れている（中川 2019：201-207）。

現在では元 TV 伝道者であった中川健一が推奨する解釈法が支持されており⁵⁹⁾、「聖霊の賜物は教会を建て上げるためにあるので、過去には聖書に書いてあった通りに存在したが、教会が確立し聖書が完成した今では存在しない」として、個人への霊的なものからの働きかけを否定している⁶⁰⁾。また、千年王国や再臨・携拳を重要視しており、個人への霊的なもの働きは否定するが、大きな意味での神の奇跡への待望は強い。

精神世界に対しては、「聖書的ではない」という理由で完全に反対の立場をとっているが、上述の通り基本的には霊的なものを直接扱うということがないため、何が精神世界的なもので何が違うのかという見極めができず、霊的なものに対する異常なほどの警戒心とそこからくる超自然的領域の否定や消極性などの弱さが指摘されている（尾形 1996：26）。

筆者が調査を行った福音派の教会では、訪問当時、教会にヨガを取り入れることの是非について話し合いがなされていた。筆者は、精神世界に対する福音派の対応を調査するために訪れたが、逆に「ヨガとはどういう思想に基づくものなのか」、「ヒーリングとは何か」「天使が見えたという子に対してどう対

処したら良いのか」などこちらが説明をする側になった（2018年10月7日 現地調査 福音派教会 兵庫県）。

(6) 精神世界とプロテスタント（旧来教派）

旧来教派は福音派が「聖書無謬」に立つのに対して、それぞれの教派の伝統に従った教会運営がなされており、プロテスタントとしての聖書信仰は持っているが基本はその教派の伝統に従って解釈がなされている。筆者が調査を行ったカルヴァン派の教会では「神の選び」に特化したメッセージがなされていた（2019年8月18日 現地調査 埼玉県）。

起きる問題について、それが神によって（あるいは悪霊によって）なされたとは考えず、起きた事象について自分たちの信仰の立ち位置からどうそれに取り組むかを考えて祈ることを重要視している。

基本的には精神世界と自分たちは無関係と考えており、現代のキリスト教は直接霊的な事象を取り扱わないとする（あくまでも祈ることを重視）。直接的な解決のために信者が精神世界の技法に頼ったとしても「その人が平安になれるのならばやむ得ない」とし、精神世界と教会は棲み分けができている（2020年10月10日 牧師 30代男性への聞き取り 大阪府）。

2 精神世界とキリスト教（その親和性）

(1) 調査事例からの分析

筆者が、プロテスタント信者（教職者含む）で精神世界に触れた【3C】、【3E】、【3H】、【3I】の所属教派について調べたところ、【3C】、【3E】、【3H】（【3I】は【3H】に同じ）の3者とも別々の教派であったが、全てがこの旧来教派の教会に所属していた。

リベラルと精神世界に親和性があることについては、リベラルは良いと思ったものは何でも取り入れていこうとしており驚くことではないが、旧来教派と精神世界間の親和性は、そもそも旧来教派には精神世界を否定するような教派の伝統がないことに起因すると思われる。また、日本最大のプロテスタント教

派である日本基督教団はもともと合同教会だったこともあり（戒能 2002：850）、教会によって特徴が違うが教職者養成のための神学校（もしくは神学部）の大半は旧来教派カリベラルかのどちらかであり、日本のキリスト教で最大の信者数を有していることを考えると、「日本のキリスト教と精神世界は親和性がある」ということができよう。

さらに、精神世界の根本思想について深く踏み込まなければ、日本の精神世界とキリスト教の主張は似ているように見える。船井幸雄は、「この世界は根源的には1つの偉大なる意思サムシング・グレートによって創られ、今も発展させられている」⁶¹⁾、「サムシング・グレートは宇宙を造り、その分身を宇宙内の全ての個々の存在に魂として配置した」（船井 2014：66）と創造論を唱えており、また、奇蹟についても「人間が宇宙意識と同調した純粹意識の状態になったときに起きる」としており（船井 1996：102）、聖書的な読み替えが可能のため「否定するまでに至らない」ということも、精神世界を受け入れる土壌となっていると考えられる。

(2) 相互補完する精神世界とキリスト教

もう1つ筆者が問題にしたいのは、プロテスタント（リベラル・福音派・旧来教派）に共通して「具体的な問題に対する霊的技法による対処がほとんどない」ということである。中村雅彦は心理学の立場から「世間一般のスピリチュアル＝心霊（神霊）的なものに関する信仰とそれにまつわる現世利益的なニーズは絶大なものがある」としており（中村 2010：5/6）、霊性を扱う以上は宗教であるキリスト教に対しても問題の即時解決（現世利益）的なものが求められる。もちろんこれは仏教と精神世界との関係においても同じであることは、すでに述べた事例からも明らかである。

リベラルや旧来教派の信者が精神世界を容認し、また精神世界へはキリスト教的な世界観（守護天使・悪魔・終末論など）が流入している。さらにコロナ禍において黙示録やダニエル書を啓示のテキストとして何度も読み返して解説する精神世界関係者も多い。中には、「聖書の予言（本来は預言——著者註）

はキリスト教徒でない者が読んだ方が正しく読めることもある」と主張する精神世界関係者もいた（2021年4月10日 精神世界関係者らへの聞き取り 兵庫県）。

精神世界に惹かれる信者を引き留めることができない状況にあるのは、福音派も同じである。水草修治は、精神世界に繋がる技法や思想について具体例と問題点をあげ、「ニューエイジの思想を教会の福音理解や教会形成や教会一致運動に採用すべきであろうか。答は明白に否である」と結論づけているものの（水草 1995：155-156）、現実的な面にも目を向け、「彼らが環境問題や食品公害問題、専門分化しすぎた医療の問題などに発している警告には耳を傾けるべきであると思う」とし、「いずれは分離せざるをえないであろうことも、わきまえておく必要がある」が、ライフ・スタイル面で表面的な「共闘」はありえるとしている（水草 1995：154-155）。

また、伝統継承教会においても、 sacrament によって霊的技法が執行できるシステムは存在しても、それを職能者が執行するかどうかは別という問題がある。**【3F】**の事例はその1つということが出来る⁶²⁾。

では、20世紀になって教勢を急に伸ばしてきたカリスマ・ペンテコステ派についてはどうだろうか。彼らの精神世界に対する対応は完全に否定的であり、妥協点すら認めていない。これは先に述べたように彼らが精神世界的な技法を拒否し得る「諸々の霊的賜物、ことに超自然的な異言や預言や癒しの力などの顕現」（中村 2002：1027）を有しており、補完すべきものがないからだと筆者は考えている。

3 カリスマ・ペンテコステ派——精神世界を拒否するキリスト教

ここでは、カリスマ・ペンテコステ派と精神世界を比較、検証していくにあたり、成立過程とそれぞれの特徴を(1)(2)で記し、(3)から具体的な比較に入っていく。

(1) 成立と日本での教勢

西方教会全体のうち、カリスマ・ペンテコステ派と呼ばれる人々は1970年代

には約7千200万人で、世界のキリスト教人口の6%弱であった。しかし2002年の調査によるとその信者の数は約5億4千万人と、この時点での世界のキリスト教人口の26.5%を占めている。この数字はプロテスタント諸教派と聖公会を足した数を超えており、世界のキリスト教界の中ではカトリックに次ぐ大きな流れとなっている（ポール 2003：61）。

日本において2014年の時点でカリスマ・ペンテコステ派の信者は全キリスト教信者の中で9%にしかすぎないが（第6回日本伝道会議日本宣教170-200プロジェクト 2016：34）、1999年-2014年の礼拝者数の増減で見ると、2014年の時点でプロテスタント最大教派の日本基督教団の礼拝出席者が53317人で1999年から7572人減（12%減）なのに対して、カリスマ・ペンテコステ派最大の教派である日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の2014年の礼拝出席者は11415人で1999年から2608人増（30%増）となっており、その勢いを伺うことができる（第6回日本伝道会議日本宣教170-200プロジェクト 2016：27-28）。

教団としてのペンテコステ派の増加率は下ってきており、日本・アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の2017年礼拝出席者は12016人（2016年12815人 4%減）だが、これにはカリスマ・ペンテコステ派内の事情がある（後述）。

(2) ペンテコステ派とカリスマ運動

ここまで、筆者はカリスマ・ペンテコステ派を1つの教派のように表記しているが、カリスマ・ペンテコステ派は成立過程による3つの類別と神学的な3つの類別があり、どちらも第1の波、第2の波、第3の波という表記がなされる。どちらの意味で使われるかによって類別が変わる教会もあり⁶³⁾、本論文においては成立過程を規準とし「波」という言葉を使わず、「グループ」と表記をする。

① 第1グループ

「ペンテコステ派（聖霊派）」という教団・教派を構成するグループ。1901年にアメリカで始まったペンテコステ運動の流れを汲む教団教派から成り（尾形 2000：103-125）、聖霊の賜物であるとされる預言や癒し、奇蹟など数々の

技法を扱う（ダフィールド ヴァンクリーヴ 2010：464-462）。異言を語ることを聖霊が下ったしるしだとしている（カルベッパ 1978：89-90）。日本においては日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団が最大教派。

後述するカリスマ運動を新ペンテコステ主義と呼ぶことから（ダフィールド ヴァンクリーヴ 2010：15）、オールドペンテコステ派と呼ばれることもある。

② 第2グループ

既存の西方教会の全てに共通する聖霊運動で、第1グループと同じく聖霊の賜物を技法として用いる。異言もカリスマの一部であり、聖霊が下ったしるしとはしない点がオールドペンテコステとの教義上での大きな違い。新ペンテコステ主義、またはカリスマ運動と呼ばれる（尾形 2000：164-174）。

1960年にアメリカの聖公会の司祭であるデニス・ベネットにより始まった運動が有名で（カルベッパ 1978：40）、日本においても日本基督教団内に日本基督教団聖霊刷新協議会が発足し⁶⁴⁾、またカトリック教会においてもカトリック・カリスマ運動がはじまるなど（ウォルシュ 2012：79）、教派を縦断しているため「教団・教派」ではなく「運動」の名称で呼ばれる。

③ 第3グループ

旧来の教団・教派の流れを汲まずに、初めからカリスマ運動のために立てられた単立教会。日本のキリスト教会では唯一1000人規模の教会員を有する神奈川県の大和カルバリーチャペルや⁶⁵⁾、兵庫県猪名川町を拠点にキリスト教教育をするための学校やケアホームの運営をするグッド・サマリタン・チャーチなど⁶⁶⁾、1教会あたりの信者数が多い教会の大半がこのグループに入る⁶⁷⁾。

日本のキリスト教全体から見ても一番増加しているのがこのグループで、次々と新しい教会が増えるため、リサーチしきれない状態にある（2021年4月22日 東京基督教大学国際宣教リサーチセンター担当者への聞き取り）。

この中で特に重要になってくるのが、牧師や信者が「預言や癒し、奇蹟など数々の技法を扱う」という点と、教派形成することなく第3グループに属する教会が増えている点である。以降、全体を指すときにはカリスマ・ペンテコステ派と記載するが、各グループについて述べる必要がある際は、「オールドペ

ンテコステ]、「カリスマ第2グループ」、「カリスマ第3グループ」と記す。

(3) カリスマ・ペンテコステ派の特徴——技法における精神世界との酷似

ここでは、カリスマ・ペンテコステ派と精神世界の技法及び思想の酷似点の比較をする。なお、カリスマ・ペンテコステ派の技法に関しては全てが聖書とリンクしているが、ここでは特に必要な部分を除いて割愛する。

① ライトランゲージと異言

——ライトランゲージ（精神世界）

宇宙意識や宇宙人と直接繋がることのできる言葉、宇宙語とも呼ばれる。意識の目覚めやこの世の役目を促し、自分が何者なのか、本当の目的はなんだったのかを思い出す助けとなる言葉⁶⁸⁾。

——異言（カリスマ・ペンテコステ派）

言葉の内容については祈っている本人にも理解できない言葉。天使の言葉や新しい言葉とされ、祈る人の霊を「建てあげ」（向上させ）、またその人が所属する会衆を「建てあげ」ていく。自分の霊と神との直接の交流でありそこに人の思いは介入しない（ダフィールド ヴァンクリーヴ 2010：471-472）。

② チャネリングと預言

——チャネリング（精神世界）

別の次元の霊的な存在・地球外の生命体との交流をし、前世や未来を知り、それを一般に伝える（日本神霊学研究会 2019：221-222）。

——預言（カリスマ・ペンテコステ派）

信者の口を使って神が個人または会衆に向かって語る。職務としての預言と信者が語る預言があるが前者は主に教会全体や社会の方向性など大きな問題のために預言を行う。信者が前もって考えた言葉ではなく、聖霊が即座に与えた言葉を語らせる。教会を建てあげる言葉の他、信者を激励し刺激し慰めをもたらす言葉が語られ、未来の事件を予言することもある（ダフィールド ヴァン

クリーヴ 2010：467-469）。筆記によってなされることもある（2016年10月9日 カリスマ・ペンテコステ派牧師への聞き取り）。

③ ヒーリングと神癒

——ヒーリング（精神世界）

心身の癒しやバランスを取るための技法の総称。精神世界では手当療法・エネルギー療法・霊能力による治療を指すことが多い（日本神霊学研究会 2019：264）。レイキをはじめ、30以上の種類があるとされる⁶⁹⁾。またその場にはない遠距離の患者にエネルギーをおよぼせる遠隔治療も存在する（日本神霊学研究会 2019：72）。

——神癒（カリスマ・ペンテコステ派）

心身の癒しや苦しみからの解放で、様々な執行方法がある（ダフィールド ヴァンクリーヴ 2010：548-550）。信者であれば誰でも可能であるが、特別に癒しの賜物を持っている者が執行した場合は即座に結果が現れる（2016年10月9日 カリスマ・ペンテコステ派牧師への聞き取り）。直接癒しを必要としない相手に対しても執行することができるとされる⁷⁰⁾。カトリック・カリスマでは「ゆるしの秘跡」を受けていることが条件となる。

④ アカシックレコードと5職の働き

——アカシックレコード（精神世界）

過去・現在・未来にわたり、個人のできごとから世の中の流れまで宇宙のあらゆる歴史・情報が格納されているデータベースで、これを読み取ることを「アカシックリーディング」という（松村 2012：285）。

——5職の働き（主としてカリスマ第3グループ）

信者全てに先天的に与えられているキリスト教徒としての属性で、「使徒（Apostles）預言者（Prophets）伝道者（Evangelists）牧者（Shepherds、Pastors）教師（教者）（Teachers）」の役割⁷¹⁾。霊を見分ける賜物を持つ者によって明らかにされることが多い。必ずしも専属者になることを指すわけでは

ない（2018年7月10日 カリスマ第3グループ信者への聞き取り）。

⑤ スピリチュアル・カウンセリングと（霊的）知恵・知識のことば

——スピリチュアル・カウンセリング（精神世界）

クライアントの視点を霊的世界の真理に導く、また本人ではどうしようもなくなっている苦しいできごとに対する「魂の応急処置」として除霊を含めて行われることもある（江原 2003：233）。

——（霊的）知識・知恵のことば（カリスマ・ペンテコステ派）

教会（の中の1人としての信者）の霊的状态を識別し行動の基盤を形成し、霊によって語られる言葉で、争い等においては相手の対抗を不能にすることもできる。「預言よりも確かなことば」とされる（ダフィールド ヴァンクリーヴ 2010：462-463）。

⑥ 精霊説と観想の祈り

——精霊説（精神世界）

古神道系の精神世界関係者の集まりで見られる。生物・無機物を問わず全てのものの中には人間と同じように霊が宿っているという考え方で、霊界通信やサイコメトリー（物質から思念を読み取る技法）を通じて得た情報からもその存在は証明されるとしている（日本神霊学研究会 2019：197-198）。また、この精霊を通して宇宙意識と繋がりをより深め、エネルギーを受けることができるともされる（2021年3月27日現地調査）。

——観想の祈り（主としてカリスマ第3グループ）

あらゆる被造物（動物・植物・鉱石等の自然物）は神の作品であり、観想の中で（山林だけでなく磐座のような霊岩石や神木などの古くからある）被造物を通して神の創造の業を思い⁷²⁾、それらに残る造物主の業と自分の魂を一致させることによって内なる聖霊が活性化し神とのより深い交わりが生まれるとする（2020年8月22日カリスマ第3グループ牧師への聞き取り⁷³⁾）。

(4) 輪廻思想とセカンドチャンス（カリスマ第3グループ）

精神世界とキリスト教を比べたときに表立って差異が見られるのが死後観についてである。一般的にキリスト教は転生思想をとらず、未信者は死後天国へ行けないとされている。

精神世界関係者がキリスト教（リベラルや旧来教派、場合によっては用語のみカトリック）から思想や用語、儀式などを持って来ても思想の中心に置かないのは、この転生思想がないためだと思われる。「過去世を知ることによって楽になった」、「来世があるので死ぬのが怖くなくなった」というのはヒプノセラピー（過去世療法）においてはよくある。

一方キリスト教は、ネガティブに言えば、「信じないものは救われない」ということになり、「過去に入信せずに死んだ先祖を思うと自分だけキリスト教に改宗はできない」という人がいるのは当然である。

カリスマ第3グループの教会で、日本で最大規模の大和カルバリーチャペルの牧師である大川従道は、信者がキリスト教徒になることについて、「ここま で命のバトンタッチをしてくれた先祖がいたからなのだ」とし、「私の先祖は1人残らず地獄に行きました。でもイエス・キリストに罪を赦してもらったので、私だけ天国にいて幸せです」と言える人がいるならばその方が恐ろしいとする（大川2020：75-76）。

大川は2000年頃から聖書中に出てくる「陰府（よみ）」について言及し、これらについての翻訳・解釈の間違いを指摘して、西方教会全体で告白される使徒信条に「（前略）陰府に降り3日目に死人のうちより蘇り」とあるがその3日の間イエスは何をしていたのかと問うた。さらに、聖書において死者についての祈りが有効とされている箇所を例示して、「イエスは、よみでも宣教されたのです。もしも神の存在を信じる機会を与えられず亡くなった人がいたとしても、よみでその機会があたえられ天国へいくための判定（裁き）がもう一度あるのです」とし「私たちは亡くなった人のために祈ることができる」と明言している（大川 2020：82・127・141-142）。大川の唱えたセカンドチャンス論は福音派とカリスマ・ペンテコステ派に大きな波紋を投げかけた。カリスマ第3グループではこの論を支持する教会が多い。

プロテスタントにおいてセカンドチャンス論は、大川が提起するのと同時的に世界中で提起されてきているが、実は伝統継承教会において（特に東方教会においては）、4世紀前後から典礼として存在しており（宮崎 2002：1032）、日本正教会でもキリスト教徒でない死者も含めた追悼のための月例パニヒダが日本の66の正教会のうち25教会で毎月または隔月で行われており（佐崎 2017：91）、また信者の家庭祈祷書にも「主や、不幸にして未だ爾を認むるに至らずして死せし我が先祖（親族・朋友の俗名を唱える）を憐れみもて、かれらの諸罪を赦し、（中略）永遠の苦しきより免れしめたまえ（後略）」（日本ハリストス正教団 2007：22）と、死者が陰府にから天に引き上げられる祈りが捧げられている⁷⁴⁾。

またカトリックが聖典としている第4エズラ記には陰府の界層構造が記されており⁷⁵⁾、こうなると、転生は信じなくとも霊界で上を目指していくというスピリチュアリズムとほぼ変わらなくなってくる。

いずれにせよ、教勢の拡大が著しいカリスマ・ペンテコステ派から出てきたセカンドチャンス論によって、精神世界からキリスト教へ移動する敷居が低くなったのは確かである。

(5) コロナ禍に対して

精神世界関係者の多くはコロナ禍に対して、変革の時、人類が進化する時といったように前向き・肯定的に捉えており、親コロナということすらできる。これに対して諸宗教と同じくキリスト教もコロナ禍と宗教は混同しないという姿勢を見せている（伊藤 2021）。

しかしカリスマ・ペンテコステ派の大教団所属の神学校からは、「主はこの終わりの時、大きな計画を持って新しいことを始められています」（JMR 2021：17）という言葉をはじめとしてコロナ禍を肯定的に捉える声明が出されている。

(6) その他の類似点

この他にも「お引きよせの法則」と「繁栄の神学」、「スピリチュアリズム・審神者」と「霊を見分ける賜物」など、精神世界の側にある技法のほぼ大半をカリスマ・ペンテコステ派はもっており、一見すると中心としているものが「神」なのか「宇宙意識」なのかだけの違いにも見える。

実際にカリスマ・ペンテコステ派は「教会」という共同体を形成しており、礼拝・典礼（洗礼・正餐）が行われており牧師がその執行をしているという点で、本論文で宗教の概念として定めた内容に合致し、個人主義である精神世界とは違う。

この点から考えると、キリスト教という伝統的宗教でありながら、カリスマ・ペンテコステ派は「霊能的技法+信仰共同体」という形態がきわだっており、新新宗教と同じ形態であるように見える。

この点で、精神世界と新新宗教に親和性がなかったのと同様の理由で、カリスマ・ペンテコステ派が同族嫌悪の面から精神世界を拒絶するという理由は理由の1つとしては考え得る。しかし問題は精神世界側の方で、「精神世界からカリスマ・ペンテコステ派へ移動してくる人々が少なからずいる」のである。

つまりカリスマ・ペンテコステ派を新新宗教的キリスト教としてしまうことは簡単だが、そうすると一方通行的に精神世界から同教派に移動してくる人の存在が疑問として残るのである。

筆者は、精神世界からカリスマ・ペンテコステ派へ移動してきた事例を通してこの理由について考察してみることにした。

4 調査事例

4・1 利用者からの入信

(1) エンジェルナンバー

調査対象【3L】（30代女性 沖縄県在住 会社員）

聞き取り（2018年6月12日）

——スターチルドレンとしての目覚め

沖縄在住の【3L】は祖父方がユタの家系で、もともと靈感があったという。10代の後半に、「自分は他の人とは何か違う」と思った【3L】は、様々な精神世界の本を調べ、自分はスターチルドレン⁷⁶⁾だと確信した。それから【3L】はスターチルドレンの生き方を知るために、透視、タロット、手相、人相占いを受け、自分でもエンジェルナンバー⁷⁷⁾を学ぶようになった。

——講師との確執

【3L】の義理の姉も精神世界市場の利用者だった。【3L】が広島で義姉と会った際、彼女が「自分はイエスや釈迦より高波動になった」と言うのを聞き、違和感を覚えた。彼女が通っていたセミナーの講師に「そんなに簡単にイエスや釈迦よりも高波動になることなどができるのか」という内容の質問のメールを送信した。

この講師はこの地方の精神世界市場では権威的な存在の女性で、納得のいく答えを期待していたが、その返信は「そんなことくらいは自分で分かるよになれ」と攻撃的なものだった。これに驚いた【3L】は精神世界の中の何が本物のかに疑問を持ち、調べれば調べるほど分からなくなってきたという。

——技法の限界と恐怖

その頃から39や36という数字が何度も見えはじめ、エンジェルナンバーでなんとかメッセージを受け取ろうとしたが分からなかった。その時、目に見えない存在が働きかけているのを【3L】は感じたという。

精神世界の技法は何らかの宗教に繋がっている（宗教の用語や儀式や祭具を流用している）と感じた【3L】は、神道、仏教の入門書を読み、家に置いてある小さな聖書も読むようになった。

【3L】は調べれば調べるほど逆に疑問と恐怖が広がってきたという。「生き方を知るために入った精神世界にどうして苦しめられるのか」と思い、現実だけを見て生きようともしてみた。しかしそれまでの生活を変えることも怖くてできず、【3L】はあらゆる神に向かって「本当の神なら誰か何かを示してくだ

さい」と恐怖と怒りから叫んだ。

——直観と祈り

毎日何度も叫び、疲れてテレビをつけたところ神が自分のところへ招いているイメージが飛び込んできた。根拠はなかったが「キリスト教の神だ」と思った【3L】は聖書を読み直し、悪霊からの解放を願い、自分で回心の祈りをした。そして直感的にここに行ってみようと思った教会を訪問した。

——カリスマ・ペンテコステ派との出会い

そこは、カリスマ第2グループの教会で、【3L】は「全てはここに来るためだったのだ」と納得し、礼拝後に信仰告白をし、翌月には洗礼を受けたという。

——【3L】の中の精神世界とキリスト教

【3L】は精神世界とキリスト教との関係について「本当は神が用いようとしている人々」が悪霊に誘われて精神世界に入っているという。また、それを少しでもキリストの元に戻すのが自分の使命だとしていた。

——現在

2021年1月現在、【3L】は義姉と一緒に広島に住んでいる。【3L】は「2人で新しい教会を開拓したい」と考え、独立がしやすいカリスマ第3グループの教会に転籍して、神学校に通っているという。

最初に言っていた使命について覚えているかと尋ねたところ「義姉さんがクリスチャンになったことでスタート地点に立てました」ということだった。教会で牧師を目指すのかと聞いたところ「義姉さん夫婦とうちら（結婚をしていた）とで教会を始める予定です」と、自分たちで教会を開く予定であることを教えてくれた（2021年1月26日【3L】への聞き取り）。

(2) レイキ

対象【3M】（50代女性 兵庫県在住 パートタイマー）

聞き取り（2016年11月25日・2018年6月27日）

——レイキヒーラーとして

【3M】はもともと父母と兄との4人暮らしだったが、父母が交通事故、兄が自殺と1年の間に家族を全て失った。

パートタイマーはしているものの真剣に働く気にもなれず「何か趣味でも見つけなければ病んでしまう」と思っていたところ、線路のフェンスにレイキ愛好会の張り紙があるのを見つけた。

レイキというものは知らなかったが何かを感じた【3M】は、「とにかく気を紛らわせれば」という気持ちで入会した。特に精神世界に興味があった訳ではなかったが、施術で身体だけでなく心の痛みも取れる体験をしてからは熱心に通い、技法の取得にも熱心だった。数週間目には活け花が萎れるまで待つから、レイキで元の元気な状態に戻せるまでになっていた。

また、技法を通じてなぜそのような力が出るのか、どうすればさらにエネルギーを上手く使えるようになるのかについて自分でも研究を行うようになった。さらに、「安心立命」という言葉について深く考えるようになり、「宇宙意識との繋がりを深められれば自分も生きる意味を取り戻せるのでは」と思えるまでになった。

——レイキサークル脱会

【3M】がレイキから離れるきっかけとなったのは、サークルの仲間が購入を勧めた浄水器だった。「この水がエネルギーワークの上達をもたらす」、「宇宙意識から来るエネルギーを解析した水だから技法が向上する」と講師はいい、仲間も一口飲んで「エネルギーを感じる」など感動しているのでそれを飲んだところ、何のことはない濾過水だったという。しかし講師を始め大半のメンバーが、「力がみなぎってきた」、「大地のエネルギーを感じる」、「これで60万円は安い」など、まるで子供のようにしゃいでおり、「本当にエネルギーを感じられる人たちならばこんな出鱈目なものには手を出さないだろう」とサークル仲間の姿を見て冷めたという。

——教会との出会い

駅と自宅の間には教会があったが、住んでから5年以上存在を気にとめたことがなかった。しかし、本来はサークルに行く日だったが、その気にもなれず、どうしたものかと思いながら歩いていたところ、教会の中から聞こえてくる打楽器やポップ調の音楽が耳にとまり、「こんなところに教会があったのか」と思ったという。

【3M】が見上げていると若い女性が出てきて、「私たちは、預言によって与えられた『内側にある恵みの賜物』を軽んじません」と書いてあるビラを渡された。

預言という言葉が気になり、「予言でなくて預言とは何か」からはじまり、キリスト教について調べてある程度の理解をした上でその教会を訪れたところ、何かから「おかえり」と言われた気がしたという。

礼拝中に【3M】は左腕に痛みを感じ、腕を上げることもできなくなったが、牧師の悪霊祓いの祈りによって和らいだという。帰る頃にはレイキをしていた頃は時折重たくなっていた左腕が、レイキを取得する以前のように、すっかり軽くなっていたという。

——洗礼と示し

3ヶ月後に【3M】は洗礼を受けたが、最初に行った教会（オールドペンテコステ）の牧師の了承を得て、旧来教派の教会で洗礼を受けている。これは精神世界や悪霊的なものに抵抗がない旧来教派の教会だからこそ自分がそこに居る必要があると神に示されたからだという。【3M】はその教会内で霊性を重んじるメンバーを集め、2018年に祈りのサークルを教会内で作っている。そこには教会内で霊的な悩みを持つ人が時折相談しにくるということだった。

——現在

2021年1月現在も、【3M】は同じ教会に留まっているが、大きく変わったことがあるという。それは【3M】のサークルに何度か顔を出していた牧師が、第3グループ系の神学校の短期講座を何度か受け、教会自体がカリスマ第2グループになったということだった。

使命的に言えば、今後はどうするのかと聞いたところ「コロナ禍に対して教会内での意見が様々に別れているので、教会に来れない人のフォローが目下のところしなければならぬこと」ということだった（2021年1月26日【3M】への聞き取り）。

(3) スピリチュアル・カウンセラー通い

対象【3N】（50代男性 兵庫県在住 無職）

聞き取り（2017年1月1日・2018年6月30日）

——就業困難へ

【3N】の父は戦争カメラマンでほとんど家におらず、日本に戻って来てからは右翼活動にのめり込んで多くの負債を抱えていた。家族はそれを知らず、父が亡くなって負債に気付いたときには財産放棄もできない状態だった。【3N】は父のコネで入った制作会社で働いていたが、それだけでは生活費が足りず、同性愛者相手の風俗店で働くようになった。その後、母に乳癌が見つかることさらに生活状態は悪くなり、家族に見切りをつけた弟が失踪し、以降母親は【3N】に「私は歳をとったら食べさせてもらう為にあんたを産んだ」、「あんたが同性愛の店で働くから弟は出て行った」と罵声を浴びせかけた。このことにより【3N】は鬱病とパニック障害を発病し、就業困難となった。

——キリスト教への悪感情

職場を辞める直前にキリスト教徒だという同僚（男性）から、「聖書では苦しみの時こそそれを乗り越えたら希望があると書いてあるので、今の苦しみを乗り越える先に希望がある」、「神を信じれば耐えられるようになる」、「あなたは神によって造られたのだから神はあなたの苦しみを知っていてくれる」などと言われて入信を勧められたが、【3N】にとっては状況を変えられない神など必要なく、またそれを押しつけてくる同僚も迷惑な存在でしかなかった。

——スピリチュアル・カウンセラーとの出会い

失望の中にいた【3N】に対し、かつての制作会社のスタッフがスピリチュアル・カウンセラーを紹介してくれた。カウンセラーはなぜ【3N】がこのような状態にあるのか、理由を過去世まで遡って説明してくれた。そして、全ては宇宙意識の中で動いており【3N】は転生の際に魂を磨いてカルマを浄化するために、今の苦しい生活を自分で選んで生まれてきたのだと丁寧に説明してくれた。

ここで始めて【3N】は今の状況に納得することができたという。そして今の苦しい状態の中で魂を磨いていくことが来世に繋がるということに希望を持った。

——不明な声

40代半ばに入ってから【3N】は何かの声が聞こえるようになり、そのことをカウンセラーに相談した。カウンセラーから「宇宙からのメッセージなのでよく聞くように」と言われたので、その声を聞こうとすればするほど【3N】の精神疾患は悪化していった。

【3N】は布団にくるまって寝ていることが多くなったが、カウンセラーに相談すると、「ワンネスの声に背を向ける行為だ」、「その声は宇宙意識からあなたを離そうとする悪の霊だ」、「その悪い霊はあなたを訓練するための宇宙意識から送られてきている」と毎回、言うことが変わるようになってきた。

声が聞こえるという苦しい現状から解放されるためにカウンセリングを受けているのに、カウンセリングで言われた内容で悩んでいる自分に気づいたとき、【3N】は客観的に物事がみられなくなっている自分に愕然としたという。

——【3O】との出会い

同時期に故人である父親が土地を持っていたことが判り、その土地の帰属を巡る紛争処理の手続きを司法書士事務所に依頼した。その事務所の補助者【3O】（20代女性 大阪府在住）が【3N】に処理完了の書類を持ってきた。その中には書類とは別に、【3N】へのメッセージとして、「天の下では何事にも定まった時があり、全ての営みには時がある（中略）今あることは既にあった

こと、これからあることも既にあったこと」というラミネートカードが入っていた。「なんとなく示されたから」という【30】だったが、これを見た時に【3N】は「言霊が自分に入って来て、これこそ宇宙意識だと感じた」という。

【3N】は【30】も精神世界関係者だと思い、何の言葉かを尋ねると聖書の言葉だと【30】は答えた。このことはキリスト教が最も嫌いな宗教だった【3N】にとっては驚きであった。

【3N】はその後もスピリチュアル・カウンセラーを尋ねたが、カウンセラーは途中から他のセラピー技法も使うようになったものの現状は変わらず、疑問ばかりが湧いてきた。カウンセラーもそのような態度の【3N】に対して怒り、辛くあたるようになってきたという。この時点で【3N】は「宇宙意識とは何なのか」、「本当にそんなものに支配される法則があるのか」、「魂を磨くために自分は生まれてきたというが、どうしてそんなことが分かるのか」と疑いだけが心を占めるようになった。やがて、カウンセラーの言葉は【3N】を苦しめるだけのものになっていた。

——【30】との話

【3N】は【30】に連絡をとり、個人的に話を聞いてもらうことにした。【30】は【3N】に教会へ行くことを勧めることもせず、【3N】が「神が全知全能ならどうしてこんなに苦しむ自分を放置しておくのか」という質問をしても、「神様が全知全能だからこそ、私なんかは神様が何を考えているかなんて分かるわけじゃないですよ」と無理に答えることもなかった。

【30】が神という存在に完全に頼りきっている様子を見て、【3N】は案内してもらったゴスペルコンサートへそのうちに行こうと思っていた。しかし帰宅後、急に何か大きな力に押され、キリスト教嫌いの【3N】にとっては「死ぬ」覚悟で教会の礼拝へ行くことを決め【30】に連絡をした。

——教会との出会い

【3N】は礼拝の途中で自分の中の何かが暴れているのを感じて、うずくまってしまった。気付いた牧師が手をおいて何かの宣言をして祈った。その時

【3N】の中から何かが出て行った（「おそらく悪霊祓いだったのでは」と【3N】は言っている）。そして牧師から癒しの祈りを受けるとこれまでの長かった人生が全てリセットされたのが分かったという。

牧師に「これから後どうするのか」と聞かれた【3N】は、「全て神様に任せます」と答え、翌週には洗礼を受けた。そして毎日の祈りが楽しくて仕方がなくなってきたという。

——教会の奉仕者として

2018年に入ってからもう一度【3N】に連絡を入れたところ、【3N】は教会の中で癒しの働き手として活動しているとのことで、他教会からも【3N】宛に癒しの祈りをしてもらいたいという連絡が届いているという。

【3N】が言うには、「精神世界では転生で全部の説明がつくように思えても、結局は自己努力しかそこにはない、キリスト教には踏み入ってはいけな領域や理屈で分からないことが多くあるが、分からないからこそ委ねて祈り、そこに本当の癒しが与えられるのではないか」ということだった。

なぜそのような結論に至ったかに聞いたところ、「聖書に書かれている以上のことをあれこれ詮索して神の領域に足を踏み入れて苦しみたいか、それとも神の領域のことは神に委ねて静まって待つのか、どちらを選ぶか」と洗礼を受ける前に牧師から問われた言葉が今もずっと残っているからだ【3N】は答えた。

——現在

2021年1月現在、現在【3N】は神学校を出て、フリーの巡回伝道者として働いているという。「教会はやめたのか」と尋ねたところ、特に牧師と喧嘩をしたわけではなかったが、「巡回伝道者としてやっていくためにはできるだけ色がついていない方が良かった」ということだった（2021年1月28日【3N】への聞き取り）。

4・2 技法提供者からの入信

(1) ヒーリング技法提供

対象【3P】(20代男性 大阪府在住 会社員 元精神世界イベントブース出展者)

聞き取り(2016年12月7日・2018年7月2日)

——ネットゲームと【3P】

【3P】は大学時代に女性問題から引きこもりになり、自宅で毎日 MMO 形式⁷⁸⁾のオンラインゲームに興じるようになった。ゲーム内ではヒーラーの職を選択し、練習を積み重ねた結果、【3P】のキャラクターはそのゲームのサーバー内では大半のプレイヤーが知っている程に上達し、ゲームでのコミュニケーションが生活の主となっていった。

【3P】が言うにはヒーラーは高難易度のクエスト⁷⁹⁾を受ける際には絶対に必要とされ、ゲームによってはパーティー⁸⁰⁾が全滅するかクリアできるかがヒーラーの腕にかかっており、腕が悪いと自分のせいにされる反面、操作が上手いヒーラーはサーバーでは貴重な存在として自己承認欲求を満たすには最適な職だったという。学生時代、昼夜問わず「ゲーム内の住人」として過ごしてきた【3P】は徐々にゲーム内でのコミュニケーションが現実で、現実が非現実に見えるようになってきたという。

——大学卒業と就職

からうじて大学を卒業し、ゲームのためにまとまった時間が取れるという理由で運送会社の配車係に就職した【3P】は、疲れの溜まっていそうなドライバーを見た時にふと「本当に自分に回復魔法が使えたら楽になるだろうに」と思うようになり、自分はもうどうしたら良いのかを占い師に尋ねたところ、「【3P】の2つ前の過去世が従軍医師で、死んでいく仲間を助けられなかったという思いが今の【3P】の気持ちを作り出した」、「ヒーリングセミナーなど行かなくとも自分の前世と向き合えば本物のヒーラーとしてのドアが開かれる」というアドバイスを受けた。

——ヒーリングの技法者へ

その日以来、【3P】は、毎日1時間は瞑想の時間を取り、ゲームでも一緒にプレイしているキャラクターの回復だけでなく、それを操作しているユーザーの癒しもイメージするようにした。そしてチャット内で「【3P】の使うキャラクターの回復魔法はリアルでも疲れが取れるみたいだ」と言われたとき、「自分はヒーラーとして開けたのでは」と思った。

それから2日間瞑想を続け、職場で疲れて帰ってきたドライバーの腰にそっと手をあてて「お疲れさま」と声をかけたところ、「あれ、お前なんかしたか、腰がごっつい楽になってんだけど」と言われた。さらに確証が得なかった【3P】はゲーム内チャットで「最近体調が悪くてなかなかログインできない」と言っていたプレイヤーの使っているキャラクターに対して「プレイヤーが癒されるように」という意識を込めて魔法を使ったところ、「あれ、なんか今日は体だるくないわ」というチャットが流れてきた。そこで【3P】は自分が本当にヒーラーになったという確信を得るに至った。

その後も【3P】は植物や動物などで能力の実験を続けたが、「誰かにこの力を使いたい、誰かの役に立ちたい」という思いが強くなっていったという。そこで古い店に精神世界イベントのチラシが置いてあったのを思い出した【3P】はネットで検索し、利用者としてイベントへ行った。3つほど癒し関係のセッションを受けたが、「意外とたいしたことないな、これなら自分の方が上だ」と思った。

——イベントへのブース出展

早速【3P】は小規模なイベントにブース出展した。最初の利用者の男性に6-7分施術したところ「もういいよ」と言われたので、うまくいかなかったのかと思ったが「今日は胸焼けが酷く最初に癒しのセッションを受けようと思って探していたが、もうすっかり良くなった」と3000円を置いていった。

これで自信をつけた【3P】は「最初の3分無料」という触れ込みで大小様々な規模の精神世界イベントに出展し続けた。「いくら能力を使っても疲れな

い状態」だった【3P】は時折イベントが開催されない期間が続くとむしろそれが精神を逆にさせるくらいだった。発散のために連続20時間を超えるほどゲームプレイしつづけ、仲間のプレイヤーのヒーリングを行っても疲れず、「これではものたりない、もっと癒しの力を使いたい」という状況になっていた。そんな状況の【3P】に中規模のイベントの主宰者から出展の要請が届いた。「主催者から要請がきた」ということに喜んだ【3P】は、少し遠方のイベントだったが、すぐに参加の返事をした。

——体調不良と牧師との出会い

満員の会場の中には【3P】をターゲットに来ている人もおり、【3P】はここぞとばかりに施術を行い、やがて恍惚感すら覚えるようになった。ところがどれだけ多くの人に施術をしても精神の不安定は解消せず、セッションの間が空くと精神不安定から吐き気をもよおすほどになった。落ち着くために顔を洗いにいった【3P】だったが、そのときには絶叫したくなるほどの不安感が襲ってきたという。

ブースに戻った【3P】に30代後半の男性が「面白そうだね」と声をかけてきた。【3P】はその声に今まで感じたことのないような恐怖心を感じ、「帰って下さい」と言いかけたところ男性は「しんどくないの、顔色やばいよ」と笑いかけた。その顔にすら【3P】はこれまでにないほどの不愉快さを感じた。怒って離席しようとした【3P】の肩に男性は手をかけ、何かを言ったところまでは覚えていたが、【3P】はそのあと暫く気を失っていた。時計で時間を確認したところ倒れていた時間は1-2分だったが長い間気を失っていたように感じたと言う。

男性から「医務室へいきますか」と言われたが【3P】は断り着席しようとした。その時これまで感じていた不安感や吐き気が治まっており、何か身体が軽くなっているような気がしたという。男性は、「困ったことや、気になったことがあったら訪ねてきてね」と名刺を渡して立ち去ったが、名刺の肩書きには教会名と「牧師」という肩書きが書いてあった。

——教会への訪問

【3P】が困ったのはその時からヒーリングができなくなっていたことだった。セッションに来てくれた人に対しての申し訳なさもあったが、「自分はヒーラーだ」という自覚が全く無くなってしまっていることに気付いて呆然としたという。

「牧師というのは霊能者のことか」と疑問に思った【3P】は、早速名刺の裏に載っていた教会を訪問した。牧師はセッション当日何があったのか話してくれた。牧師がキリスト教の出版関係の友人と聖会⁸¹⁾の会場を探していたところ、借りる予定のホールの1階で精神世界イベントが行われており、興味半分で見えてみたところ、【3P】に危険な霊性を感じたので話しかけたという。

半信半疑だったが「とりあえず礼拝を見ていけば」という牧師の勧めに、「神官が教会でキャラクターを完全回復するゲームもあることだし一度見てみるか」という興味で礼拝に参加した。そこで【3P】が感じたのは聞こえてくるポップ調な讃美でも、牧師や信者の大きな声の祈りでもなく、「聖なる力」でヒーラーの力を得た時などよりもずっと大きな力だった。「あれは何なのか、何か解説書が欲しいな」と思っていた【3P】に「3回くらい読んだら何が起きたか分かるよ」と言って牧師は聖書（新約）を渡した。【3P】はゲームに費やした時間をほぼ聖書を読む時間にあてて2週間で3回聖書を読み、翌々週の日曜日に礼拝に行った時には信仰告白をし、洗礼を受けたいと申し出ていた。

「悪霊に憑かれていたことと、神がいることがわかった」という【3P】は、「精神世界の技法の大半が聖書にあるカリスマの切り売りなのでは」と言う。現在【3P】は在籍している教会の所属教団で癒しの奉仕をしている。「人を癒したいと思う気持ちは本当にあったんだと思います。出所は違いますけれども」と電話越しに【3P】の答えは淡々と答えてくれた。

——現在

現在【3P】の所属している教会はコロナ禍のため、礼拝堂での礼拝をとりやめ、いくつかの家庭集會に別れて礼拝を続行しているという。【3P】は必ずし

も日曜日に休みがとれるわけではないが、できるだけ多くの家庭を回り癒しや不安からの解放を祈っているという（2021年1月28日【3P】への聞き取り）。

(2) その他の入信した技法提供者たち

精神世界市場のブース出展者で聞き取りができたのは【3P】だけだが、精神世界の技法提供者からカリスマ・ペンテコステ派の信者になった例は他にもある。

① イラストレーター【3Q】（40代男性 大阪府在住）の事例

イラストレーターの【3Q】は留学先のパリでマリファナを吸ったことをきっかけに何かが開け、自分についている霊を通して何かと繋がっているのを感じるようになったという。

霊が示す通りの絵を書くと、パリでは「スピリチュアリティを感じさせる絵だ」と話題になり収入もそれなりにあったが、あるとき「ついてこい」という初老の男性について行くと地下に降りる階段で突然電気が消え、手探りで部屋に入るとぼんやり光っている十字架が見えたという。

以来「神」というものを意識するようになった【3Q】だが、その後マリファナの幻覚で様々な奇行を行い、病院に入院させられた後、日本に強制送還された。

その後、適当な教会を見つけてはそこで風景画を描くのが日課になっていたが、真冬にタンクトップに短パン姿で歩くなどの奇行は続いたという（マリファナはフランスの病院で治療し、それ以来吸っていない）。

ある日曜日の夕方、同じ姿で歩いていて偶然見つけた教会の絵を描いていると教会の中から出てきた女性に「教会は絵を描くところではなくて神を礼拝するところですよ」と中に入れられた。寒そうなのでと服を貸してくれたがそれを脱ぎたがる【3Q】に牧師が手を置いて祈ったところ、何かは抜けていった。【3Q】は世界がリセットされた気分になり、その気持ちの良さからそのまま毎週教会へ通うようになった。

3月に初めて教会に足を踏み入れた【3Q】は4月に信仰告白をし、5月に洗

礼を受けている。2018年の時点では【3Q】はプロのイラストレーターとして働きながら、教会では讚美チームの一員としてドラムを担当していた（2017年5月5日・5月17日・2018年7月3日【3Q】への聞き取り）。

2021年1月現在【3Q】は結婚し、ちょうど神学校を出たところで6月に奈良県で新しい教会を建てる準備をしているという。なぜ、新しい教会を自分でつくろうと思ったのかを聞いたところ、「アーティストには多かれ少なかれ何らかの形でスピリチュアルに関わっていて、悪霊に繋がってインスピレーションを得ようとする人が意外と多い。そういう人たちを対象とした教会にしていこう」ということだった。コロナ禍の中での立ち上げということで心配したが、「部屋の中からインスタとかピクシブを通してやっている人もいますから、最初はネットのインターフェイスで礼拝形式も24時間インできる形式を考えてます」と、新しい教会の方向性を探っていた（2021年1月28日【3Q】への聞き取り）。

② 整体師【3R】（50代男性 兵庫県在住）の事例

整体師をしている【3R】は、施術をする際に、患部を探るため、リーディングを学んだ。さらに患者の詳細な様態を知るために技法が必要だと感じた【3R】は、波動ヒーリング、波動測定器購入、食事療法、レイキさらに新型の波動測定器の購入と、自分の技法を高めるために多くの精神世界の技法を学び、機材を購入した。精神世界の根本思想にも触れ、宇宙意識と繋がることによって理想の治療が確立できると信じていたという。しかしそれによる経営破綻から愛想を尽かした妻は家を出て行き、残ったのは「宇宙意識と繋がったからといって何が幸せになるのか」という虚無感と莫大な債務だけだった。

一旦は整骨院をたたんで、宗教施設巡りをし、禅寺へ行ったり、洗礼を受けてみれば分かるかと教会へ行き、とりあえず洗礼をうけてみたりもしたが何も変わらなかった。最終的に【3R】は1人で山ごもりをするようになった。【3R】は瞑想中に全て自分の自我が問題であると分かったという。「精神世界は自我の塊」と言う【3R】は、さらに次のように言っている。「愛の波動を与えれば相手に伝わった愛の波動が自分に帰ってくるとか言いますが、波動を与えるっ

という行為そのものが自分の意思、自我なんです。どれだけ魂が、とか守護霊が、とか宇宙意識との交信が、と言っても全て主語は自分なんです」。

その後も山の中で瞑想をしていた【3R】は、「あなたの自我は私が既に引き受けている。あなたが自我だと思っているものは既に私と共に葬りさらされている」という声を聞き、同時に周囲が炎で覆われたような状態になり中に人が立っているのが見えた。それが誰か分かったと同時に、全てが新しい状態に戻った感覚を覚えたという。

山を下りて「癒し」を掲げている教会へ転会した【3R】はもう一度整骨院を始めた。現在でもリーディングや遠隔ヒーリングの技法は使っているというので精神世界を併用しているのかと思って尋ねたところ、「かつては悪霊の力によるものから今は聖霊によるカリスマ（力——筆者註）を使っているが、呼び方の名残りでそうになっている」とのことだった⁸²⁾。聞き取り時には転会先の教会が「弟子訓練」⁸³⁾を始め、教会の方向性が変わってきたのでその教会を離れ、現在は新しい形の信者の集まりを持っているという（2017年7月5日・2021年1月28日【3R】への聞き取り）。

——現在

【3R】は、2021年1月現在、「整体師とスピリチュアルは相性が良いので、そっち系の人が多いんですが、逆に色々疑問も出てきちゃうんですね。そこでこっちの診療所が実績あげてるって聞いて「なんで？」で結構な人が尋ねてくるんですが、キリストの波動によるヒーリングを見たら全員そっちが良いっていうことで、うちじゃ入りきらなくなったので、あちこちの診療所を使って集まっています。こんな時代（コロナ禍）なので」ということだった。

神学校へ行ったという話を聞かなかったので聖礼典はどうしているのかと聞いたところ、最初のうちは動画で有名な牧師に頼んで来て貰っていたが、通信制の神学校を卒業したので、今は按主⁸⁴⁾を受けて自分が執行しているということだった（2021年1月28日【3R】への聞き取り）。

4・3 調査事例の類型

事例で扱った6人が精神世界を離れた理由について改めて記すと、下記の通りである。

——元クライアント

【3L】精神世界について調べれば調べるほど不安になった。

【3M】浄水器の件で呆れて愛想を尽かした。

【3N】スピリチュアル・カウンセラーに追い詰められた。

——元技法提供者

【3P】技法を制御できなくなった。

【3Q】（絵を提供していたが）トランス状態から戻れなくなった。

【3R】技法や精神世界の根本思想を追い求めることへの虚無感。

クライアントも提供者側も理由自体は別々だが、共通する点として「不安」があげられる。クライアントでは「適切なガイドとなるものが無かった」という不安、提供者側では「コアになるものがない不安」からくる技法へ疲れてしまった（愛想をつかしたも含めて）という共通点を見いだすことができる。

この点においてカリスマ・ペンテコステ派は、伝統的宗教が持つ構築された理論（ガイド）と霊的な技法を制御するためのコアを持っており、精神世界に疲れた人の受け皿になり得た。

特に、霊的な技法を制御するためのコアについて、村川治彦は身体運動の視点から、（調査事例の）人々が求めていた精神世界的な技法や体験はカリスマ・ペンテコステ派の技法や体験と同じであり、「カリスマ・ペンテコステ派が持つ技法は精神世界技法の高次元のバージョンではないか」と位置づけて、「洗練度」が違うのではないかとする。

村川は、東洋の〈気〉についての性質を研究するにあたって主体的経験の重要性について述べているが（村川 2020：3277/4638-3300/4280）、霊的技法と体験を中心に見ると、精神世界とカリスマ・ペンテコステ派の共通点は両者と

も身体ワークを使用する点にある。しかし、主体的な経験の歴史という意味ではカリスマ・ペンテコステ派には基盤となっているキリスト教の「伝統的な教理に裏付けされた所作」が組み込まれており⁸⁵⁾、洗練度が高く、より個を深く掘り下げていけるのに対して、「精神世界の身体ワークはまだ未熟ではないか」としていた(2018年5月25日 村川治彦への聞き取り)。

確かにこれまでも述べてきたが、精神世界ビジネスにおける技法の認定講座では4日程度もあれば指導者としての認定を受けられる例が精神世界には多い。

これに比べて、キリスト教という伝統的宗教に裏付けされた中で、直接的な霊的技法を発展させてきたカリスマ・ペンテコステ派は、精神世界に疲れた人にとっての「癒し」になったということもできる。

「教義があって霊的技法がある」というだけであれば、新新宗教も同様の組織体系である。確かに教義面が伝統的宗教ということもできるが、その組織体系は新新宗教的な側面があり、基本的には宗教団体として個人主義である精神世界関係者にとって決して居心地が良いものではないはずである。

これらを踏まえて、彼らがカリスマ・ペンテコステ派にいる理由として筆者は大きく分けて次の2点があると考えている⁸⁶⁾。

(1) 技法を行うことを否定されない

① 適切なガイドがある

自分がそれまで行ってきた技法を完全否定されることはなく、キリスト教の文脈で適切に執行できるよう指導してもらえる。

② 技法をより洗練させることができる

一部、無秩序な教会があることは否定できないが、大半の教会では技法の執行にあたり組み合わせるべき祈祷や所作についての指導が行われる。

③ 執行する技法への制限がない

①②は③の上に成り立っているといえる。つまり、新新宗教では「どの段階でどのような霊的技法を使って良いか」という制限があるが(真如苑の接心が

例としては分かりやすい)、カリスマ・ペンテコステ派ではその技法がよほどキリスト教からかけ離れたもの(誰かを呪う等)でない限り、一旦は教会預かり(1ヶ月程度は使用禁止)になっても、受洗後ある程度の指導がなされた上で、自分の行いたい(あるいは行っていた)技法を執行することができ、これには「教会内で〇〇レベルになったら」という制限が付くことはほとんどない。

この「過去の技法を否定されない」という点が、宗教組織であるにもかかわらず、精神世界からカリスマ・ペンテコステ派への移動のしやすさを支えているように思われる。

(2) 直接体験からの入信

精神世界から移動してきた6人の事例から見ると、カリスマ・ペンテコステ派の教義を先に学び、これに賛同して移動してきた者がいないことが分かる。「内側への超越も含む、洗練された技法」、「自由な雰囲気での礼拝」、「単立教会の増加から来る教会選択肢の自由度」などを考えると、カリスマ・ペンテコステ派(特に第3グループ)で彼らが体験したことは、いわゆるキリスト教の教理への共感ではなく、キリスト体験(聖霊体験)という個人的体験であり、精神世界から入るには違和感が少ないと考えられるのではないだろうか。

5 カリスマ・ペンテコステ派の現在と問題点

(1) 増えるカリスマ第3グループ

現在カリスマ・ペンテコステ派では第3グループが増えてきており、比例して個性的な教会が増えてきている。

これは、より個人に合った教会や礼拝形式を選ぶことができるようになっていえる。カリスマ第3グループでは、これまでの神を外にいる存在として礼拝するスタイルから、神体験を内側に求め霊性を掘り下げてイエスとの一致を重要視し(浅原 2006:49)、「神に根ざした思考・神に全てを委ねきった状態を作り出す」ことによって内なる神(聖霊)との一致を得ようとする内側への超越を重んじる教会も出てきている(アグロー 2015:1・58-61)。つまり

礼拝スタイルだけでなく、動的なものから静的なものまで一番自分の靈性に合う教会を選ぶことができるようになってきているのである。

(2) カリスマ・ペンテコステ派の闇

カリスマ・ペンテコステ派の「適切なガイドがある」、「技法をより洗練させることができる」という点は、技法の執行という面で精神世界からの人を受け入れ、また適切な指導がなされる反面、これを指導する指導者が権威化していくという負の面を持っている。【3R】がいた教会で弟子訓練が始まったのは1つの例である。

櫻井は様々なキリスト教カルトの問題を取り上げ、教勢拡大のための宣教師制の中でカルト化しやすい教会の形としてカリスマ・ペンテコステ運動をあげている（櫻井 2009b: 180）。

これは単立の第3グループに顕著で、指導者が自由な采配をふるえる反面それを監督する教団や教派というものがなく、個人主義が（指導者）個人にも及ぶからである。櫻井が性的暴力を含む暴行事件があったカルト化した教会としてあげた6教会のうち、半数がカリスマ第3グループに属する教会であった（他は伝統継承教界1、福音派1、旧来教派1）。

(3) 事例から

筆者がカリスマ・ペンテコステ派への調査を行っていることから、最近精神世界からカリスマ第3グループに移動したものの、パワーハラスメントを受け続けてきた信者【3S】から聞き取りをすることができた。

本人から許可を得た範囲内で公開をすると経緯は下記の通りである。

——精神世界技法スクールからカリスマ第3グループへ

【3S】は大手の精神世界関連の技法や思想を教えるスクールに通っており、そのままその会社に就職したが、やがて毎日のように「魂のレベルが低い状態のまままだ」、「職員ならもっと技法を身につける」と言われ続けどこへ行って良

いのか分からない時に十字架が光っているのを見て教会に飛び込んだという。

——教会の成長

そこはカリスマ第3グループに属する単立教会で、教会は最初【3S】を暖かく迎え入れてくれたという。その教会は成長段階にあり【3S】が入信してからも次々と新しいメンバーが増えていったということだった。

——教会の変化とマインドコントロール

教会に変化が見られるようになったのは、それまで完全に単立だった教会が他の単立教会と合同で聖会等をはじめようになってからだという。「おそろく他の単立教会に負けたくなかったんだと思います」と【3S】はいう。

そして【3S】は、「自分はまた恐怖に支配されていた」とし、原因について【3S】は「靈視できる人たちの存在」をあげた。

その教会では牧師や役員から信者に言われた言葉が「神から与えられた言葉」として権威を持ち、その言葉は聖霊の示しや預言が賜物として肯定された。

さらに信者同士も何かを感じる度にそれぞれ指摘するように指導がなされていたので、「示されました」と互いが言い合うようになった。

あるとき牧師の【3T】が【3S】の頭に手を置いて、「手を洗い清めなさい」といったという。その時に【3S】の後ろにいた信徒が「罪が示されたんだ」と言い、「牧師にはわたしの罪が見えるのかと怖くなってしまった」ということだった。

——牧師と靈能力

【3T】は説教で、自分には賜物があっっているんなものが見えるといっておき、講壇に立つと「聖霊がこの教会に満ちているのが、わたしには見えます。天使も見えました。みなさんを祝福します」など宣言をしていたという。

また教会には【3T】の書いた「地獄ツアー本」もあり、そこには、どういう罪を犯した人がどういう刑罰を受けているか、とても詳しく書かれていたという。

——癒しとハラスメント

【3S】には持病があったが、【3T】から「あなたが癒されないのは罪の悔い改めが徹底していないからだ」と言われ、教会員の前で罪の告白をさせられたが治らなかった。

【3T】は【3S】に「あなたの罪の悔い改めだけでなく、あなたの先祖の罪の悔い改めもしなさい。癒されないのは先祖の悔い改めがなかったからだ」と言って、ますます教会員の前でなじるようになったという。

それでも持病が治らない【3S】に【3T】は、「悪霊が入り込んでいるからだ」とし、【3T】から毎週のように悪霊祓いがなされた。性的暴力や実際の暴力に及ぶことはなかったが【3S】はやがて「これと魂のレベル上げと何が違うんだろう」と考えたという。

——現在

【3S】は2021年1月現在、小さな第3グループの教会へ通い、日曜日の礼拝だけを守っている。【3T】の教会を抜けることができたのは、あまりにも【3T】の独善的な運営に疑問を抱いた若い世代が独立して小さな群を立ち上げる際にそれについて行ったからだという。

当初は「教会を裏切った」、「お前はそのままでは地獄に墜ちる」などのメールや電話が【3T】や教会の先輩信者からあったが、これに対して今の教会の教会員に父親が司法書士をしているメンバーがおり、そのアドバイスを受けて法廷での紛争にする旨を書いて書面を送ったところ、ピタリと止んだという。筆者が、「棄教や精神世界に戻ったり、伝統継承教会など別のところ（カリスマ第3グループ以外）に行くことは考えなかったのですか」と聞いたところ、その気は全くなかったということであった（2021年1月20日【3T】への聞き取り）。

6 課題

これまでに見たように、伸び続けるカリスマ・ペンテコステ派（特にカリス

マ第3グループ）において、【3S】の事例をはじめとしたカルト的な問題や、コロナ禍による礼拝の教会の閉鎖が教勢の伸び悩みに関係していることは間違いない。

筆者はここに1つの問いを立てたい。それは、カリスマ第3グループの牧師崇拜にも近いほどに個人主義な運営は一步間違えれば精神世界ビジネスのそれと変わらない。それならば「なぜ彼らはこのような闇をかかえていてもなおカリスマ・ペンテコステ派の中に留まっているのか」という問いである。

そして、この問いは、「霊的なものに触れる人の中に精神世界に接近する人と、近づかない人がいるのはなぜか」という問いと共通する点がある。4章では精神世界に隣接するカテゴリーと精神世界との比較を通じ、この理由について探っていく。

- 1) (島菌 1996)、(島菌 2007)、(瓜谷 1983) など。
- 2) 詳細は巻末資料③を参照。
- 3) 新新宗教については本論文第1章(島菌 1992: 6-7)を参照。
- 4) WEB「GLA の概要」(<https://www.gla.or.jp/outline/>) 閲覧日2018年3月11日。
- 5) 同上 2021年4月16日閲覧。
- 6) 2017「蘇る宗教 真如苑の明暗③」『サンデー毎日』(毎日新聞社) 2月19日号 155-156。
- 7) 2018「新宗教の寿命」『週刊ダイヤモンド』10月13号(ダイヤモンド社) 34-35。
- 8) 2018「新宗教の寿命」『週刊ダイヤモンド』10月13号(ダイヤモンド社) 31。
- 9) 神道に関しては今回第4章で述べるためここでは含めていない。
- 10) 大本の鎮魂帰神法で審神者をつとめていた浅野和三郎の心霊研究は神智学ではなくスピリチュアリズムであり、したがって大本の基礎は神智学よりもむしろスピリチュアリズムである(浅野和三郎 2014: 10-15)。また1章の図1-3でも示しているが岡田茂吉は大本出身であり、その技法も神智学のものではない。
- 11) 現地調査(2017年7月11日-継続中)。
- 12) 聞き取り(2018年2月5日 近畿本部)。
- 13) 『G.』2021年1月号(GLA 総合本部出版部): 70。
- 14) 現地調査(2017年10月29日兵庫県)。
- 15) 『G.』2017年11月号-2021年2月号(GLA 総合本部出版部)にて確認。
- 16) 「GLA 一日一葉研鑽」要 ID/PASS (<https://www.gla.or.jp/ichinichiichiyousp/>) 閲覧日2020年6月22日。
- 17) 聞き取り(2020年6月23日 近畿本部)。

- 18) 『G.』2020年12月号 (GLA 総合本部出版局) 24-43。
- 19) 『G.』2020年12月号 (GLA 総合本部出版局) 34。
- 20) 現地調査 (2018年4月11日-9月28日の期間)。
- 21) 2018「新宗教の寿命」『週刊ダイヤモンド』10月13号 (ダイヤモンド社) 57。
- 22) 2013『おかえりなさい』(真如苑) 2-3。
- 23) 経典には教師 (職員) 用と信徒用があり、一般信徒は現代仮名遣い、またはカタカナで書かれた経 (真如苑教学部編集 2017『朝夕のおつとめ』(真如苑)) を唱和する (現地調査 2018年5月15日 大阪府)。
- 24) 高橋佳子 1997『真・黙示録-地獄編』3月 (祥伝社) 高橋佳子 1997『真・創世記-天上編』7月 (祥伝社)/高橋佳子 1978『真・創世記——黙示編』(祥伝社)。
- 25) 『真創世記 (地獄編・天上編・黙示編)』にはアトランティス、レムリア、リーディングといった神哲学や精神世界で使用される言葉が多数出てきている。また高橋信次の著作『心の発見——神理編』(1971 三宝出版) の中にはニューソート思想家であるジェイムズ・クレンションの『天と地を結ぶ電話』(1955 日本教文社) と類似した内容が記されている。
- 26) 現地調査「座談会-スピリチュアル批判について考える」(2017年6月23日 三重県)。
- 27) 詳細は巻末資料④を参照。
- 28) 現地調査「Jasmine's Love Sharing Party」(2018年6月8日 滋賀県)。
- 29) 現地調査 (2019年3月12日-継続中)。
- 30) スピリチュアリズムと死後観については第4章を参照。
- 31) 『霊波之光の信仰』改訂第5版 (宗教法人霊波之光) 改訂年月日不明 (R105.01P100E) 11。
- 32) 『霊波之光の信仰』改訂第5版 (宗教法人霊波之光) 改訂年月日不明 (R105.01P100E) 11。
- 33) 1991年 オーストラリアにて開催 (西原廉太 2015「エキュメニカル運動の現在と将来」『ヨーロッパ文化史研究』東北学院大学大学院文学研究科1)。
- 34) 詳細は巻末資料④を参照。なお、神道が入っていないのは元々神道と精神世界の親和性が高いことから (4章を参照) 「その他」として、独立した選択肢から外したためである。
- 35) アメリカのモンロー研究所の特許技術。左右の耳に振動数の若干異なる音を聞かせることにより、左右の脳半球を同調させ、意識をさまざまな状態へと誘導し、超常現象体験を可能にする (日本神霊学研究会 2019: 282)。
- 36) 【3A】は前職の関係でツアーコンダクターの資格をもち、事業所は正規の旅行代理店の登録がなされている。
- 37) 筆者が知る限り、一定以上のレベルのタロット師であればカードリーディングをするので実際には【3C】のように別々に学ぶ必要はないが、精神世界には1つの技法を完成させるために複数の技法を学ぶ人も少なくない。
- 38) 人形を相手にみだてて、人形を通じてクライアントへのリーディングを行う技法。

- 読み取れる情報はタロットとはほぼ同じということだった。
- 39) 堀江はブログの調査から前世の特徴をみると、「体験談では異文化間転生が圧倒的に多い」としているが、この事例もまたこれに該当する (堀江2019: 134)。
- 40) 船井幸雄は、この世界は根源的には1つの偉大なる意思によって創られ、今も発展させられているとしており (船井 2014: 66)、精神世界の根本思想は、転生を除けば、キリスト教と似ているように見える。
- 41) 登記情報を利用した事前調査による (民事法務協会2018年12月17日取得)。
- 42) 筆者はこれまでカードリーディングを行う多くの技法者への調査を行ってきたが、長年タロットカードを扱ってきた技法者は共通して「タロットの場合、カードはシャッフルしないことが絶対である」という。
- 43) タロットカードは、人の気持ち未来を読み取るもので、カードから正確にリーディングするにはカードの上下の位置の両方から読み取るなど熟練を要するが、オラクルカードは、深層心理を含めた「今の自己」を読み取るために使用され、タロットカードに比べて使い方が単純で初心者向けとされている (ヴィジョンナリー・カンパニー「日本のタロットカード・オラクルカード全集」<https://oracle-tarot.jp> 閲覧日2021年4月17日)。
- 44) 【3H】の所属している教団では神学部や神学校を出ずに牧師になるために1年に1度ある試験に3回 (最短3年) 合格をしなければならない。
- 45) 高次元にある自己の魂の側面 (日本神霊学研究会 2019: 255)。
- 46) 【3H】が副牧師をしていた教会への聞き取りにもとづく (2020年10月9日)。
- 47) 【3H】は精神世界について認めてはいるが、自ら技法者にはなっていない。
- 48) リベラル (自由主義神学) の定義は難しいが、少なくともここでは教義の根幹イエスの神性・人生の否定、復活の否定、三位一体の否定はなされていない。
- 49) 分類は、『岩波キリスト教辞典』(2002 岩波書店)、『データブック 日本の宣教のこれからが見えてくる』(2016年 いのちのことば社)、『JMR 調査レポート』2018年度 (2019年 東京基督教大学国際宣教センター日本宣教リサーチ) などを参照し筆者が行った。
- 50) 通常は各教派名で呼ばれることが多い。
- 51) Fr. Barnabas Powell (October.24.2017) “Strange Fire: Pentecostalism as Cure for the Reformation” <https://blogs.ancientfaith.com/orthodoxyandheterodoxy/2017/10/24/strange-fire-pentecostalism-cure-reformation> 閲覧日2021年4月20日。
- 52) 現地調査 神戸ハリストス正教会 聖堂前の扉に「痛悔に当たる罪」として掲示してあるのを確認 (2018年3月14日)。
- 53) 堀江復 1886『教会法学略記-2版』(正教会): 299。
- 54) 他の管区の教会内でレイキを信者に行おうとしていた教会員が懲戒を受けている (2019年5月8日 聞き取り)。教会名・地域で本人が特定される可能性が高いため属性及び居住地は記載しない。
- 55) 対外的には sacrament の数はカトリックと同じ7つとされているが、本来 sacrament (機密) は数をきめてるものではなく、信者と神との一致に引き入れる働

- き全てがサクラメントだとされる（2018年『日本ハリストス正教会教団東日本主教教区教区報』第109号東日本主教教区宗務局：6）。
- 56) クリスマス・トゥーデイ2019年5月13日「エクソシストが集結、ローマで悪魔払いの講座 カトリック以外にも初開放」(<https://www.christiantoday.co.jp/articles/26829/20190513/exorcists-gather-in-rome.htm>) 閲覧日2021年4月20日。
- 57) 選択肢はタロット・前世療法・パワーストーン・心霊スポット地図・お祓いのお札・ヨガ・気功・風水・占星術・密教法具等の10。
- 58) 心霊スポット地図5人、お祓いのお札2人、密教法具等1人。
- 59) 中川の YouTube のチャンネル登録者数は6万人以上、アップされた動画の大半は2万再生以上再生されている。
- 60) 「預言の賜物は、今もあるのですか」(https://www.youtube.com/watch?v=dEF-wcITk_8) 閲覧日2021年4月20日。
- 61) 精神世界技法者からはワンネス（宇宙意識）と同意に扱われている（日本神霊学研究会 2019：340）。
- 62) 霊的なものを扱う司祭と、霊的なことを信じていないので儀式執行をしない司祭の間に温度差がある（2018年12月13日 カトリック司祭への聞き取り 兵庫県）
- 63) 神学的な見地から手束正昭は第1の波をホーリネス運動、第2の波をペンテコステ運動、第3の波をカルスマ運動だとし、自らは第3の波に分類しているが（手束正昭 1986『キリスト教第三の波』（キリスト教新聞社）：11-15）、成立過程を規準にすると手束は第2の波に分類される。
- 64) クリスマス・トゥーデイ2005年5月6日「日本基督教団聖霊刷新協議会手束正昭師」(<http://www.christiantoday.co.jp/articles/364/20050506/news.htm>) 閲覧日2021年4月21日。
- 65) 大和カルバリーチャペル (<http://www.yamatocalvarychapel.com>) 閲覧日2021年4月21日。
- 66) グッド・サマリタン・チャーチ (<http://good-samaritan-church.org>) 閲覧日2021年4月21日。
- 67) 2017年の資料によれば1教会ごとの平均信者数は単立教会が99人で、カルスマ・ペンテコステ派最大の日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の55人を超える（日本宣教リサーチ 2019：14）。
- 68) 「ライトランゲージで宇宙の記憶を思い出す」(<https://amanerica.com/light-language/>) 閲覧日2021年4月22日。
- 69) 「ヒーリングサロン『エンジェルオブライト』」30種類以上の全ヒーリング一覧 (https://angeloflight.net/2_healing.html) 閲覧日2021年4月22日。
- 70) マタイ8章8-13（聖書協会共同訳）。
- 71) エフェソ4：11（聖書協会共同訳）。
- 72) ローマ1：20（聖書協会共同訳）。
- 73) 筆者の主観になるが、カルスマ第3グループの技法の中には東方教会の技法をアレンジしたものがいくつか入っているように感じた。

- 74) 観想の祈りの註にも記したが、影響を受けているかどうかの調査まではできなかったがカルスマ第3グループと東方教会の思想には似た点が多い。
- 75) エズラ記（ラ）7：81-101（聖書協会共同訳）。
- 76) 別の世界からやってきた指導者的な存在が転生により目覚めた状態（ドクター・テリー・サイモンズ&アシュタールプロジェクト 2011『こうしてアセンションしよう』徳間書店：94-95）。
- 77) 2016年-2018年頃に流行した技法で、天使が数字を通じて送るメッセージ。ナンバープレートや、レシートの数字など、ふとした時に見る数字が、何度も同じ数字の組み合わせの場合それだとされる（「Timeless Edition エンジェルナンバーとは？」<https://www.timeless-edition.com/archives/12341> 閲覧日2011年4月22日）。
- 78) 大規模多人数参加型オンライン（MassivelyMultiplayerOnline）の略で、一定のストーリーはあるものの、サービス提供会社が新しいストーリーを提供しつづけるのでエンディングというものがない。ゲーム内ではチャット形式で他人との会話が可能である。
- 79) ゲーム内で先にストーリーを進めるための探索。
- 80) オンラインゲームは数人で1つのチームを作って進めるがその集団を言う。
- 81) 礼拝とは別に信者と聖職者が中心になって1つの目的を決めて集まる会を指すことが多い。カルスマ・ペンテコステ派では「預言の聖会」や「癒しの聖会」などがある。
- 82) 【3R】は精神世界に関わることは悪霊に関わることだとする。また悪霊が与える技法は聖霊が与える技法（賜物）の劣化版という位置づけをしている。とはいえ医院で用いられる用語が遠隔ヒーリングやリーディングなど精神世界と同じものなので、その理由を尋ねたところ「直接霊と関係ないので気にしていない」ということである（2021年1月28日【3R】への聞き取り）。
- 83) 「キリストの忠実な弟子を育成する」という名目で行われる修行のようなものだが、牧師に服従する信者の育成であることも多く、繁栄の神学（献金すればするほど裕福になるという神学）と並んでカルスマ・ペンテコステ派の教会がカルト化する原因の1つだと、村上密は指摘している（2016年12月1日日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団宗教トラブル相談センター担当牧師への聞き取り）。
- 84) 職位の授与の際に用いられる儀式、教派によって実践は異なる（宮越 2002：57）。通常は授与者が職位を与える相手の頭に手を置いて行われる。
- 85) カルスマ・ペンテコステ派の聖会へ行くときよく見られる光景として、手をあげる、ひれ伏す、ひざまづく、頭を垂れるなどの所作を頻繁に目にするが、これらを東方教会では「表信」として昔から身体技法に組み込んでいる（水口 2016：154-158）。
- 86) 筆者は2016年10月9日以降、定期的に第1-第3グループまでのカルスマ・ペンテコステ派に対して継続調査を行っている。

第4章 精神世界とその周辺

精神世界の興隆期において、その中心であったニューエイジ思想について島藺は、「ニューエイジと近いところにいると自覚しつつも、それとは区別されると考えている人たちもたくさんいる。そして、事実、さまざまな相違があるので、彼らがそう考えるのは当然のことである」と述べ、「ニューエイジ運動の周辺」としていくつかの分野をあげている（島藺 1996：36-37）。

現在においても、精神世界と近いところにありつつそれとは区別されている、いわば「精神世界の周辺」と呼べる分野がいくつかある。本章では現在の精神世界と周辺分野とがどのような関係にあるのかを検証し、「精神世界の根本思想に触れる人とそうでない人の違い」について分析するとともに、第3章の最後に提示した問いに対する筆者なりの答えを示すこととする。

1節 精神世界と心霊研究

第1章で述べたように、日本の戦前の霊性思想はスピリチュアリズムを中心とした心霊研究であった¹⁾。これに対し、戦後の霊性思想の1つである精神世界はニューエイジ運動から影響を受けており（樫尾 2010：73-74）、その源流は神智学にある（ストーム 1993：23）。この両者の思想は相反するものの、ブース出展型イベントでは1人の出展者がこの両者の技法を行うなど、その境界線は曖昧である。

1 これまでの研究

ニューエイジの源流となった神智学の「霊的進化論」は、前世でのカルマを今世での訓練で浄化し、転生を繰り返すことで霊的界層を上げ（魂のレベル上げ）、宇宙意識（神的存在）と一体になることを目的としている（大田 2013：45-55）。この神智学的思想と心霊研究は思想を異にしている。具体的にいうと、スピリチュアリズムは交（降）霊術・心霊術・心霊主義を中心とし、死後の魂や霊からの人間への働きかけに耳を傾けて生きることを重視するが（日本神霊

学研究会 2019：188-189）、神智学では魂のレベルを上げてより高次元へと上昇するために転生を繰り返すとしており、現世での積極的な修行を重要視している（神尾 2006：163-175）。神智学協会設立者の1人であるブラヴァツキーは、「私たちは心霊主義を信じません」とした上で、心霊研究を強く批判している（ブラヴァツキー 2018：409/4400）。

しかし、精神世界の中心的活動であるブース出展型イベントでは、ニューエイジ系・スピリチュアリズム系のブースが同時に展覧されているだけでなく、1つの精神世界関連事業者が両者の技法を同じブースで行っている光景も珍しくない²⁾。櫻井義秀は社会学の観点から「癒しの社会的機能」としてブース出展型イベントをとりあげ、技法やその効能が求められるゆえに「手段が目的と化してしまう」と指摘しており（櫻井 2009a：166-168）、ブース出展型イベントにおいては各技法に連なる思想はあまり重視されていないとすることができる。

とはいえ、精神世界の根本思想が神智学的な霊的進化論、「魂のレベル上げ」にあるという点は、精神世界関係者の共通認識である。「癒しフェア2018 in OSAKA」や、「癒しフェア2018 in TOKYO」で筆者がとったアンケートの中の、「あなたは魂のレベルを意識したことがありますか」という設問では、「ある」と回答した人が64%おり、精神世界に関わる人には何らかの形で魂のレベルを意識している人が多い³⁾。

筆者は、死後の魂や霊からの人間への働きかけに耳を傾けて生きることを重視する心霊主義と、魂のレベルを上げてより高次元へと上昇するために転生を繰り返すという神智学の相反する思想が同居し得る理由の1つに、転生（輪廻・再生）についての認識が関係していると考えている。堀江が、「輪廻転生観は、現代の広大なスピリチュアリティの文化を代表するものとは言えないが、その死生観（死後観）として重要な位置を占めている」というように（堀江 2019：115）、精神世界で転生は重要事項である。

死者との交霊を主とする心霊研究において、転生は関心事とはなっておらず、例外的にフランスのアラン・カーデックが再生を認めてはいたが（カーデック

2006：141-145)、19世紀末から20世紀初頭にかけての心霊研究のテーマは、「霊媒による物理的現象の真偽をめぐる問題」と、主観的現象ともいわれた『『霊界通信』(言霊、自動書記)の信憑性をめぐる問題』の2つに分けられ(津城 2005：119)、転生に対しての研究はなされていなかった。しかしその後、「スピリチュアリズムとニューエイジをつなぐ位置にある」とされるエドガー・ケイシーのリーディング⁴⁾の中で説かれる輪廻説の登場や(津城 2005：147)、シルバー・バーチ⁵⁾の再生説など、転生を認める心霊研究者が現れ、日本でも広まっていった(スピリチュアリズム普及会 1996：120-132)。また、心霊研究出身の江原が類魂という形で転生を認めていることが⁶⁾、精神世界における両者の壁を取り払わせたのではないだろうか⁷⁾。この「転生」という問題があまり重要視されなくなったことにより、他の差異は「癒しの社会的機能」の中に融合していったと筆者は推察する。

これを言い換えれば、精神世界が心霊研究を吸収したともいえる。たとえば堀江は、「現代日本の前世療法の体験談の分析」の中では特に心霊研究と精神世界を分けていない(堀江 2019：130-147)。

しかし筆者が知る限り、日本を代表する心霊研究機関である「公益財団法人日本心霊科学協会」は精神世界を扱っていない⁸⁾。また、心霊研究では当然の存在として扱われている霊能者について、精神世界側から説明されているのを見たことがない⁹⁾。さらに、転生を認める心霊研究は日本では普及していても世界では少数派であり、本場イギリスの心霊研究でも転生は問題にされていない¹⁰⁾。

そこで、心霊研究側から精神世界はどのように映っているのかを確認するため、心霊研究・スピリチュアリズムの実践団体への聞き取りを行った。以下は、その聞き取りの成果の一部である。

2 事 例

(1) 日本霊能師協会——愛知県

【4A】(50代男性 愛知県在住 同協会相談員)

聞き取り(2019年6月27日)

——団体概要

【4A】によると、同団体は明治時代に立ち上げられた日本霊能者協会の派生団体にあたる。霊能者協会の5代目会長は警察への霊視捜査協力を行っていたという¹¹⁾。霊能者協会は、設立当初は心霊研究の実践団体で、占い師や風水師らは入会できず、入会を許される霊能者も既存の宗教的な背景や系譜が明らかかな者だけであった。

とはいえ、占いは心霊研究の入り口にあり、「占い師を紹介して欲しい」という相談者も多いことから、門戸を広げて1985年に占い師や風水師も入会できる日本霊能師協会が立ち上げられた。両団体は看板だけ違って事務所も活動内容も同じということなので、以降は両団体を同一のものとして扱っていく。

同団体は(公財)日本心霊科学協会とも交流があり、霊能者協会の現代表が日本心霊科学協会で講演を行ったこともある¹²⁾。【4A】は心霊科学協会を研究機関、霊能者協会・霊能師協会を実践機関だと位置づけている。

——霊能者と占い師

【4A】は、「占いをしているからといって、霊能者としての能力が無くはない」としているが、心霊研究の中で占い師は低く見られるという。両者の違いは「運命を読み取るのが占い師」、「運命を変えるのが霊能者」で、占い師には何らかの霊的な力を感じてそれを伝えることができても現状を変える力はないとしている。

しかし、占い師でも真摯に心霊と向き合っていくうちに、より上位霊と繋がって霊能者に育っていく場合もあり、霊能者の前段階に占い師があるとのことであった。以降本節では、占い師も含めて霊能者と記すことにする。

——霊能者のあり方

【4A】はいくつかの点にしぼって霊能者の見分け方について説明してくれた。これは精神世界と心霊研究を比べる際に知っておくべき重要な点になると

いう。

【4A】は、霊能力があることと霊能者になることは全く別物だとする。それは問題解決能力の有無で、理論は学べば頭に入るが、相談者の問題を解決できる霊能者に育つのはその中の1%に満たないということであった。

霊能力のある人の大半は、感じたり、見えたりするが、恐れが先行するので最初は相談者側にまわることが多く、相談により恐怖心が増す人が多いのが問題だという。これは相談をされた側が、事象の「解説者」になっている場合がほとんどで、それでは相談者の恐れは増大するだけという。これは【0B】が精神世界関連事業者について、「利用者側だった時間が長い」と言っていたことにも通じる。

また、解決能力がある霊能者は水晶やお札などを最初から使うことはないという。大概の悩みや心霊相談に対して、霊能者は祈祷・祈願で解決をし、相談内容を良く聞いてから、道具を使用する必要性があると判断した場合にのみそれらを使用する。【4A】は、「最初から道具に頼る霊能者にはまず問題解決能力がない」とし、彼らを2種類に分けている。一方は霊能力など全くないのを分かっている、最初から騙すつもりの人でそもそも論外とした。問題なのは、霊能力が無いか、あるとしてもわずかであるにもかかわらず、道具の使い方を熱心に学んで「自分には強い霊能力がある」と思い込んでしまう人たちだという。このような人たちが、単に読み取るだけの力を使って相談者に恐怖を与えていくと【4A】は指摘し、この視点から精神世界について話をしてくれた。

——精神世界について

【4A】は、過去に女性誌に掲載されていた数え切れないほどの占い師が、いつの間にかオラクルカードリーダーやタロットリーダーと名前を変えたり、霊視や霊言の取り次ぎをしていた人たちがチャネラーや〇〇マスターという名前で活動していたりすると指摘する。つまり、精神世界では誰もが簡単に技法者として認められる点において、精神世界と心霊研究は全く立場が違うとする。

【4A】は、霊能者には1%しか出来ないのに、どうして精神世界のイベン

トにはそれだけの出展者がいるのだろうかとした上で、精神世界では「一定の能力を短時間で開花できたように本人に錯覚させるから質が悪い」とする。密教系・神道系・陰陽・修験などの訓練は、霊能力がある人でも時間がかかり、忍耐を必要とするという。占いであっても、ものにするには何年もかかる。しかし、精神世界では小手先のテクニックで入り口的なことができる人を養成し、多くの人たちが自分は霊と繋がっていると思い込んで勝手に開業していると苦言を呈していた。

【4A】は、「中には本当に高級霊と交信できる人もいるし、上位霊と交信して自動筆記ができる技法者も知っている」と、精神世界の中の技法者を全否定してはいない。しかし、多くのタロットリーダーやオラクルカードリーダーが道具に頼っていることを例にあげ、精神世界を「宝石とガラクタが混じって放置されている箱と同じだ」とし、純粋な霊能者を育てる心霊研究と精神世界は一線を画すべきだとしていた。

——前世・転生について

前世については、「無いとする場合が多いが、交信した霊にあると示された人もいるので絶対無いとは言い切れない」と前置きをし、協会所属の霊能者へは「前世や転生という言葉は使わないように」指導しているということであった。

理由を尋ねたところ、前世や転生は便利な言葉で、「前世が悪かったから」、「転生した際に良い道がある」と実際の解決できないことを何でも前世や転生を言い訳にして逃げ道を作れるので、霊能者はまず現世での問題解決に力を注ぐべきだとしている。

(2) 日本霊能者連盟——大阪府

【4B】(60代男性 大阪府在住 同連盟代表)

聞き取り(2019年7月9日)

——団体概要

代表者の【4B】は大学を出た後に大手電化製品会社に就職し、その後に有志とともにパソコンを扱う事業を始めた。霊的なものを見たり感じたりする力はあるが、それが使えるほどのものでないことを自覚していた【4B】は、ネット占いやネットを使った心霊相談などのポータルサイトを作っていた。1995年に旅行先の旅館で、そこに保養に来ていた、災害予知や池田小学校事件の予知で知名度をあげた霊能者¹³⁾から、突然、「君と僕で霊能者の未来を開こう」と言われた。この霊能者から、「自分は色々な未来が見えることがあるが、それを世間に公表できる場所がなかった。川を見ていたら同じ旅館に情報を上げられる男性がいると示されたので探していた」と説明され、2人で立ち上げたのが同団体である。

同団体に加盟するには、立ち上げを一緒に行った上述の霊能者による面接があり、加盟を許可されるのは80人に1人だという。これは【4A】のいう1%よりもやや多いが、狭き門であることには代わりはない。加盟している霊能者のリストを見せてもらったが、テレビ出演やYouTubeで有名な霊能者も登録していた。

——霊能者のあり方

【4B】は、霊能力の強い霊能者と長い間一緒にいると、個人差はあるものの、その霊能者の霊力が流れてくることがあり、受け取る側によっては「自分が霊能者になった」と錯覚する場合があるという。そういう人の多くは何の訓練もせずに開業をするが、霊を祓う行為1つをとっても、「埃をハタキやエアブラシで落としているのと同じで悪いものをまき散らして危険極まりない」という。また、自分が憑かれてしまうだけならばともかく、相談者に被害を与えることもあり、「霊能力があることと、霊能者を仕事とすることは別だと知る必要がある」とした。【4B】自身も電話などで相談者の状況が分かっても自身は霊能者ではないので、絶対に自分で鑑定しないという。

また【4B】は、金銭に執着する霊能者は徐々に交信できる霊の格が落ちてくるという。「金銭に執着するとどうしても相談者を怖がらせてお金を出させる

ようになってしまう」というのが一番の理由で、「相談者に恐怖を与えるか否か」を重視する点は【4A】と同じであった。

——精神世界について

【4B】は、「自分はお祭り好きだから嫌いじゃない」としながら、加盟霊能者はブース出展型イベントについて否定的であるという。加盟霊能者たちが精神世界イベントに視察に行ったことがあり、その際に数人の霊能者が吐き気を催したという。

「エネルギー酔いとかいうが、あれは低級霊が飛び交っているからで、霊能者としてやっていける人がいても低級霊との交霊が多くなり能力が低下する」とし、「ああいう所に出展せずに地道にやってる人の中には、本物の霊能者と同レベルの人もいるが」と完全否定はしないものの、やはり精神世界は玉石混合であるという見解を示していた。

——前世・転生について

【4B】は一応、前世も転生も認めているが、精神世界のそれとは違うとする。【4B】は、「本当に転生してしまったら先祖が帰ってくるのとは矛盾する」とし、再生を認めるスピリチュアリズムで用いられる「類魂」(スピリチュアリズム普及会 1996:120-132)の概念を使って説明をしてくれた¹⁴⁾。

しかし【4B】は、「自分の前世がどうか、魂がどうかという前に、高級霊の前に恥ずかしくない生き方ができているかどうかの方が大切だ」としていた。

小 括

事例(1)、事例(2)から、心霊研究側は精神世界を別もの、自分達よりもレベルの低いものとして扱っているように思われる。ここから、心霊研究側と精神世界側では互いの認識は全く違うように見えるが、必ずしもそうとも言えない。

調査に先んじてWEB上で精神世界関係者に対して行ったアンケート調査では¹⁵⁾、「スピリチュアル・心霊主義・心霊研究は同じだと思いますか」という問いに対して、違うような気がする・違うとした人が全体の60%を占めてお

り、両者の違いを説明できる・なんとなくなら説明できるとした人は40%にのぼった。これらの聞き取り結果とアンケート調査結果は、筆者がそれまでブラス出展型イベントで行ってきた調査や、先行研究が両者を同様に扱っているとは明らかに違う結果である。

この結果について、精神世界関係イベントを主催している女性（聞き取り：40代女性 滋賀県在住 2019年7月12日）は、「メールやメッセージによるアンケートでは、調べてから回答するのでさすがに6割もの人違いを認識しているとは思えない」と前置きし、「最近の出展者は、どの技法がどの思想に結びついているか最初は知らなくても、あまりにも技法の情報が多いため、自己整理しようとする人を見かける」と話していた。また精神世界関連事業のコンサルタントをしている【0B】（聞き取り：2020年9月1日）は、「調べてから回答した人が多いのでは」と同様の見解を示しつつ、「自分が扱った範囲では、『違うかな』くらいまでは分かっている人が多いように思える。ベテランになると技法や思想も無意識的に自己統合できていくのではないかと」話していた。ここからは、精神世界関係者の一部には精神世界と心霊研究は本来別物であることを理解し、これらを何らかの形で整理・統合しようとする動きが読み取れる。第3章で事例としてとりあげた【3A】も、多くの技法を取得しすぎた結果、その技法と思想に自己が振り回され、密教を学んで技法の中心に据えることによって技法・思想を体系化し、1つに組み上げていった。

最初に心霊研究に触れ、その中で育っていった者にとっては、精神世界は完全に別もので、これからもそうであろう。そして、精神世界にはスピリチュアリズムをはじめ、様々な異なった思想に基づく技法が混在しているのも確かである。しかし、【3A】の例のように、それらの技法のみを形骸的に吸収するのではなく、思想的なものも含めて精神世界の中で新たに再構成・再構築できるようになりつつあるとも考えられる。

2節 精神世界と霊体験

先に心霊研究と精神世界の関係について論じたが、ここでは個人的に霊体験

をした人と精神世界との関係を見ていくことにする。

精神世界関係者の大半は霊的なものに関心をもっている。しかし、これまでの事例で見て来たように、必ずしも彼らに靈感や霊体験があるわけではない。

また、霊体験をしていても、それをきっかけに精神世界に入ってくる者もいれば、入ってこない者、逆に精神世界を否定するものもいる。この違いはどこから来るものなのだろうか。

1 これまでの研究

松島公望は、特定の宗教集団に入信していなくとも、「神・仏・霊魂」、「超自然的な力・運命・応報」という事柄に関して日本人の60~70%が関心を持っているとする（松島 2016：2-3）。また、有元裕美子は精神世界や霊に関する複数のアンケート調査結果を分析し、「調査結果を見ると、全体の77.2%の人は、本調査の対象となった何らかの癒やし・スピリチュアル系商品・サービスを利用した経験がある」と話している（有元 2011：144）。ここから、現代においては、多くの人が霊魂や超越的なものを肯定する傾向にあり、また精神世界に何らかの形で触れていることが分かる。また、幽体離脱のHowTo本を見ると、霊現象からはじまって、最終的にはエーテル体やアストラル体、霊体の仕組みなど精神世界へと繋がっていく（大澤 2020：326/2419-513/2419）。しかし、靈感がある・霊的体験があるということと霊的なことに関心があるということは別の次元の話であり一緒に考えてはならない。

オカルト雑誌『ムー』（第194号~205号 1997年 学研）の読者投稿ページ「わたしのミステリー体験」には、「トンネルの中で見た女性の霊を連れて帰ってしまった」、「憎悪に満ちた老婆の霊のつぶやきを聞いた」、「バイク事故で死んだ友人の声で事故を避けられた」などの体験が300字~500字で毎号投稿されているが、これらの体験者の中には第2章であげた精神世界に関するものと触れた記載はなく、編集者からのアドバイスもその現象を「放置したら消える霊だから大丈夫です」、「これは地縛霊が写っています」など説明するに留まっている。

『ムー』よりも精神世界色が強い『トワイライトゾーン』(No 159~179号 1989年 KK ワールドフォトプレス)の「超常現象相談室」には、読者から写真付きで霊体験の相談が寄せられている。同誌は、クリスタル・パワー、公開チャネリング、パワー・ストーンなどを特集するなど精神世界色が強いが、このコーナーへの相談者への回答は、「霊障の心配がある」、「速やかに除霊を」、「霊障の心配はない」、「神社に相談」、「お寺に相談」、「守護霊なので写真に合掌するように」、「霊的なものではないので医者に行くように」など具体的な指示はあるものの、精神世界に触れるような回答は1つとして無かった。

近年の霊体験の記録は東日本大震災に関するドキュメントや文献に多く記されている。奥野修司は複数回にわたる霊体験をした被災者の記録をつづっており、「母親と愛猫の霊が現れた」、「遺体のおなかの辺りに青いピンポン玉のような玉を見た」、「無くなった祖父から電話がかかってきた」、「亡くなった子供のおもちゃが動き出した」などの記録が記されている(奥野 2020:79)。奥野は、「僕は、不思議な体験をした方とは三回は会うことにしていた(中略)その物語がどう変化するかを確かめたかった」(奥野 2020:190)としており、複数回にわたって体験者から聞き取りを行っているが、精神世界に触れた人は皆無で、宗教者に相談をした人も少なかった。これは、「被災者は宗教者より死者と日常的に向き合っており、宗教者にあらたまって相談する必要を感じていないようだ」とする堀江の調査結果とも一致している(堀江 2015:156)。

堀江は被災地での霊体験について、「未知の霊との遭遇にまつわる恐怖体験がある一方、身内の霊を主観的に感じるより自然な体験がある」(堀江 2015:156)としており、これは「(他人の霊も)誰かの大切な家族だったんだと思えば、ちっとも怖くないと思えるようになった」(奥野 2020:111)という体験に通じるところがある。ここでは、「誰かわからない第三人称の霊ではなく、親しい死者などの第二人称の霊」の場合、霊がポジティブな意味を持つように転換する(大村 2015:158)という現象が起きていると考えられる。

東日本大震災後の霊体験だけを見ると、霊体験がポジティブに受け入れられるとき、体験者は宗教者を必要とせず、精神世界に触れることもないというこ

とができるかもしれない。しかし、前半のドキュメントで紹介した投稿は、全て霊をネガティブなものとして捉えており、堀江のいうように未知の霊との遭遇は恐怖体験であることが分かる。

そこで筆者は、ネガティブな霊体験をしているが精神世界には関心を持たなかった人々からの聞き取り結果から分析を行なった。

2 事例

(1) 叔父と友人の幽霊

【4C】(20代男性 奈良県在住 コ・メディカル インターン 1)
聞き取り(2017年2月20日)

——聞き取りに至る経緯

【4C】はコ・メディカルのインターンをしており、小さな頃から音楽が好きで、ピアノの弾き語りの配信をしていた。配信中に【4C】が「もう駄目だ霊が来る」とピアノを止めて怯え出したので、それを聞いていた友人らが「大丈夫か」と連絡を取ったところ「大きな霊が寄ってきてしまった。もうどうすることもできない。でも誰も信じてくれない」と錯乱した状態だったという。筆者のことを知っている【4C】の友人が、「解決には至らないかもしれないが、そういう現象を研究している人を知っている。少なくとも【4C】の言っていることを否定することはないから」と筆者と会うことを勧めたところ、「誰でもいいので話したい。本当に言ってることを馬鹿にせず聞いてくれるなら会ってみたい」という旨の連絡があり、翌日に【4C】と会うことにした。

——最初の霊体験

【4C】は父・母・姉・妹の5人家族で、特に靈感が強い者が家族にいるわけではなく、一般的な家庭であった。中学に入るまでは霊的な体験もなかったという。

【4C】が霊体験したのは中学に入ってすぐのことだった。家で寝ていると枕元に誰かが立っており「～になれ」とささやいているのを聞いた。周囲を見

渡してそれが夢でないことは分かったが、「霊体験をした」というよりも「何かの幻覚をみた」ということで自己処理したという。

しかしその数週間後、首を絞められているような苦しさで【4C】は目を覚ました。すると前回と同じ男性が首を絞めながらまた「～になれ」と命じてきているのが分かった。そこで「俺にどないしろというねん」と苦しい中で答えたところ、「医者になれ」と言っているのが分かった。朝起きて「リアルで嫌な夢を見た」と思いながら顔を洗いに行くと、首に赤いアザが出来ているのが鏡で確認できた。

足が震えた状態でリビングへ行き母親にそのことを告げると、「あんたが1歳の時になくなった叔父さんの霊かもね」と笑われ、首のアザを見せても、冗談を言っているとして取り合ってもらえなかった。

その後も霊は月に何度か現れては「医者になれ」と首を絞めたり、上に乗ってきたりした。【4C】は亡くなった叔父が医者を目指していたということを母親から聞き、「あれは叔父の霊なのか」とぼんやりと理解したが、医者になっている自分を想像した【4C】は、医者になれと言われたことに対して「そんなん分からない」と霊に対して反抗したという。霊は【4C】が医者にならないという意思表示をする度に消えていくので、【4C】は「幽霊でもこっちが毅然としていれば勝手に出てこなくなるだろう」と楽観的に構えていた。

——友人の死

その後、叔父の幽霊の出現率は減っていき、1年に2、3度出てきて「医者になれ」というだけで、これを断ると消えていった。この体験で【4C】は「幽霊は存在する」という確信は持ったが「幽霊がいることと、それが怖いこととは別」という認識ができあがっていた。【4C】は霊が何を言っても NO を突きつけるようにしていた。

しかし【4C】にとって霊が恐怖の対象になる出来事が起きた。高校で仲の良かった友人の【4D】が自殺をしたのである。【4D】は心臓に病を抱えていると言っていたが、【4C】が関わっている限りは気にならない程度だったという。

【4C】とは同じクラスで、音楽のことや歌のことを語り合い一緒にカラオケにいったこともある仲だったという。

そんな【4D】が2年の秋に【4C】を教室に呼び出して、「俺もう駄目だわ」といきなり言い出した。【4C】には何のことも分からなかったので、「何が駄目なんだよ」と聞いたところ「俺の心臓はもう治らないって声が聞こえてくるんや」と言われたので、「そんなん幻聴やろ、気にするな」と励ました。しかし【4D】は「いや、声だけでなくって男性が現れるようになって、お前（【4C】）が助けてくれへんから俺は近いうちに死ぬっていうんや」というので、「意味がわからんから、もう少しわかりやすく話して欲しい」と言ったところ【4D】は、「俺の心臓はお前が治すことになっていたけれども、お前は俺を治す気なんてないってその男は毎晩いうねん。お前が悪いとかは思わへんけど、もう俺はあかんことだけは分かった」と言った直後、窓に手をかけて教室の2階から飛び降りた。【4D】は、その時には一命を取りとめただが10日後に亡くなった。その時に【4C】は「ああ、これは俺のせいなんや」と分かったという。

——2人の霊と

【4C】は筆者に、「その男性は幽霊の叔父で、俺が医者にならないって言い続けたんで、友達に取り憑いて、俺のせいで友達が死んだってことをアピールしにきたんですよ。実際に一旦は助かったのにあいつが死んだのも俺のせいです」と淡々と語ってくれた。

筆者が、「しかし、一旦一命は取り留めたわけで、【4C】さんの叔父さんの霊のせいと言い切ってしまうのかどうか」と言ったところ、【4C】は、「実は【4D】が飛び降りてから、また叔父の霊が毎晩現れて医者になれっていうんです。でも俺は何かそういうことをした叔父が許せなくて『絶対になるものか』って逆に宣言したんです。そうしたら『それならばお前の友人は助けてやらない』と言って」と、その時点から自分のせいで【4D】が死んだのだと【4C】は自分を責めるように言った。その後も叔父の霊は、現れては「医者にならないのであれば、お前は大切なものを1つずつ失っていく」と言い続けた。

【4C】は叔父の霊のことで悩み続けた。医者になれと言われても【4C】の成績や経済的な状況を考えれば、医者になるなど無理であった。しかし叔父の霊のいうことを無視すれば、また何か起きるかもしれない。幽霊が怖いことよりも、自分の周りでまた誰かが犠牲になるのではという不安が【4C】について回った。

高校3年の夏前になると、今度は【4D】の幽霊が毎日のように夜になると枕元に立つようになった。その時の【4C】は幽霊を見ること自体にはもう恐怖を感じなくなっていたという。

あるとき【4D】は「夏休みに俺が飛び降りた教室にきてくれへんか」と頼んだ。【4C】は「学校がしまっていたら不可能やん」と何度も答えたが、霊は「それが友情ってもんやろ」と言い続けた。決定的だったのは断り続ける【4C】の前で「そうか」と言って【4D】が飛び降りた時の血まみれの姿に変容したことだった。

翌日【4C】は、担任の教師に理由を話しなんとか夏休みに学校の校舎に入れるように懇願した。最初はあしらっていた担任だったが、職員室で泣きわめく【4C】を見て「私がある時に限ってだけだ」と言ってくれたので、その夜に【4D】にそのことを伝えた。【4D】は「そうして動いてくれたお前の気持ちが嬉しいからそれでいい。俺には担任の予定が分かるので日にちは指定する」と言った後、夏休みに入るまで【4C】の前に現れることはなかった。

その後、日にちを指定されて【4C】は3回にわたり【4D】に会うために教室へ行った。【4D】は、「お前の叔父さんから、お前が医者になるように説得しろと言っていわれてな」と要件を話した。【4C】は、「会ったこともない叔父ではなく、自分の家庭事情を知っている【4D】だったことで、話はしやすかった」という。3回目の話で、【4D】は「医者になるのは今の【4C】には簡単なことではないので、せめて看護師や放射線技師などのコ・メディカルではダメかと聞いたら、『医者に一方向的に使われる看護師でなく先生と呼ばれる職を選べ』ということだったけれどもどうする」と聞いてきた。

この【4D】の提案は、「もともと将来をどうするかは決めていなかったのだ

から」と【4C】は受け入れることにし、コ・メディカル養成の学校に入ったという。それからしばらくの間、叔父の霊も【4D】の霊も出てくることはなかったという。

——憑依体験

再度叔父の霊が現れたのは【4C】が19歳の春だった。その時に叔父は1人の5歳くらいの子供の幽霊を連れてきており、「この子の面倒をしばらくみて欲しい」と言ってきた。幽霊の面倒を見るという意味がわからなかった【4C】は断ろうと思ったが、断ると何が起きるかわからないと【4D】の時のことを思い出し、「何をしたら良いのか」と尋ねると「ただ連れて歩いてくれれば勝手に成長する」というので嫌々ながらこれを引き受けた。「そんなに簡単に引き受けてしまって良いものなのか」と筆者がたずねたところ、【4C】は「幽霊を見たとたん一気にフラッシュバックがおきて、もうどうでもよくなったんですよ」と溜息をつきながら答えてくれた。

その後しばらくしてから【4C】は右腕にいつも重たいものを感じるようになったという。「それがいわゆる『取り憑かれている』という状態だとはわからなかったんですよ」と【4C】はその時のことを話してくれた。腕の重さは日に日に強くなり、ついには右手がしびれて動かなくなった。医者にも行ったが原因不明で「何か重たいものを度々持ったりしていませんか」と聞かれ、この時に「預かった子供の霊では」と【4C】は直感したという。

叔父から子供の霊を預かった時には、あまり何も考えないようにしていた【4C】だが、さすがに怖くなり、夜中に鏡を覗いたところ、預かった時よりも子供はずっと大きくなっており腕に中学生くらいの子供がぶら下がっていた。【4C】と目が合うとその子にはやりと笑い【4C】は悲鳴を上げた。家族が飛んできたが事情を説明しても誰も取り合ってくれず、姉と妹からは「気持ち悪い」と罵声を浴びせられた。「なんとかしてや」と叔父に叫んだが叔父の幽霊は出てくる気配すらなかった

その後も腕の痛みはどんどん強くなり、学校も休みがちとなり1年間留年せ

ざるを得ない状態になった。さらに精神的にもおかしくなってきたことを自覚した【4C】は「もうこれ以上続いたらコ・メディカルなんて無理やんっ」と叔父に向かって叫んだという。

すると叔父の霊が出てきたので、「どういつもりなのか」と取り乱しながら説明を求めたところ、叔父は「最初は子供の頃に亡くなった霊の面倒をみていたが、人間に預ける必要があったので、お前に預けたがまさかあんな奴に育つとは思わなかった。こいつは引き取るが、他の霊については自分でなんとかしてほしい」とすまなさそうに言って右腕から子供を引き剥がしてから消えていった。

右腕の痛みは即座に引いたが「他の霊」という言葉が気になったので、鏡を見たところ、小さい頃に絵本で読んだ怪異のようなものがたくさん近くに居ることが分かった。筆者が詳細をたずねたところ、「どうも、前に憑いていた子供の霊がどんどん小さな霊を呼び込んだようで、この頃から怪異のようなものも見るようになった」とのことで、「この頃から霊を引きつける体質になってしまった」とのことだった。

——憑依霊への服従

「自分でなんとかしろ」と言われたので、【4C】はそれらの霊を除霊したいと考え、近所の神社で除霊の祈祷をしてもらった。それで一旦楽になったが、1週間も経たないうちに別の霊が憑くようになり、また除霊を頼んだが、何度除霊しても別の霊が憑依するようになった。最後には除霊できない強い霊も出てくるようになり、状況が改善することはなかった。

さらには除霊できなかった強い霊から「お前を絶対に許さない」という声が聞こえ、その後から家族にも霊障のような症状がでるようになったという。最初は妹が正体不明の高熱にうなされ、3週間熱が引かなかった。必死で霊に謝ったところ、妹の熱は引いたものの、「次は母親だ」という声が聞こえ、「何でもするから家族に何かするのはやめてくれ」と叫んだという。すると強い霊から「小さい霊（浮遊霊や怪異）を大切にすれば何もしない」と言われたの

で、【4C】はこれに従うことを約束した。その後、【4C】の元には以前よりも多くの小さな霊や怪異が集まりはじめ、昼間にも見える形で現れるようになり、この頃から【4C】は普段から霊などが見えるようになった。

小さい霊は「～へ行きたい」「～が食べたい」などの要求をしてきたということだったので、「行きたいというのは、そこへお供しろということだと思うのですが、食べたいというのはお供えを要求しているんですか」と聞いたところ、【4C】は「家には仏壇も神棚もないので、自分でお供えするための小さな祭壇をつくってそこにしばらく置いておくと、『食べる』と言われるのでそれを食べる感じですね」と答えてくれた。

ほとんど霊の言いなりのようだが、何か妥協案はなかったのかとたずねたところ、「小さい霊の要求を断ると、除霊できない強い霊が出てきて必ず家族に何かをするから断れなかった」ということだった。【4C】は家族に何かある度に、自分と霊との関係を説明したが、信じてもらえるどころか「気持ち悪いのはあんただ、これ以上そういう話をするなら出て行って欲しい」と母と姉から言われ、何も言わずにただ霊の要求に従うだけの生活になったという。

——憑依霊との共存

筆者が呼ばれたことについて、「今回はさらに特別なことがあったのか」と聞いたところ、【4C】は小さい霊のことを嫌々聞いているのが相手に悟られると、除霊できない強い霊がやってきて大変なことが起きるので、なるべく「怒り」、「悲しみ」、「恨み」といったネガティブな感情を持たないように気をつけているという。

「ネガティブな感情を持つことが、霊のことを嫌々聞いていることになるのか」と聞いたところ、「ネガティブな感情を持っているときに小さい霊から何かをお願いされると、どうしても嫌々やってしまうので気をつけている」ということであった。

筆者が行く前日に何があったのかについて、【4C】は恋愛関係で女性から裏切られて気持ちが塞いでいるときに、小さい霊からの願い事を断ってしまい、

強い霊が来るのが分かったので取り乱してしまったということだった。実際は筆者が翌日に行くという連絡を受けて気が楽になったせいも、やってきた霊に事情を話して謝ったところ、今回は許してくれたということだった。

【4C】は除霊にも行かず、宗教関係の施設を訪れることもなかったという。「逆にそれが理由で除霊できない強い霊が来て家族や周りを巻き込みたくないから」というのがその理由だという。

「それに、実際は霊との共存が一番しんどかったのは誰も話を信じてくれなかったことで、こうやって普通に話を聞いてもらえたので、問題はほとんどなくなりました」と話す【4C】に理由をたずねたところ、「小さい霊との共存は怖い反面、自分が悪い感情を持たないように生きれば良いだけでしょ。もうそうやって生きるようにされているのかなって受け入れてます」と握手を求めてきた。

——現在

今回の聞き取り事例を記載するにあたり、現在【4C】がどうしているのかを確認するために連絡をしたところ（2021年2月27日）、奈良県の病院にコ・メディカルとして勤務しており、毎日忙しいが充実しているという。霊についてどうなったのかとたずねたところ、「今も共存状態です。でも今はひとり暮らしなので、気も楽です」と答えてくれた。

(2) 霊による電子機器への干渉

【4E】（20代女性 大阪府在住 大学生）

聞き取り（2017年2月2日）

——家族構成

【4E】には姉と妹がおり両親と5人家族である。もともと父方は霊感が強く父にも祖父にも霊感があったという。姉は父の血筋を継いでおり霊体験があるらしいが、妹には全く霊感はないとのことであった。

そのような家庭環境なので、霊について家族に相談できる環境であったこと

は先述の【4C】と比べると大きな差異がある。

——不思議な体験と靈感

【4E】が最初に霊を感じるようになったのは小学校4年～5年にかけて行われるパソコンの授業で、ここで作成したファイルや保存したファイルが何故か消えることがあった。しかし小学生の頃のパソコンの授業では、それで困ることにはならなかった。

【4E】は最初から霊が見えていた訳ではない。最初は墓地や交差点などによく「むかむかする」、「吐き気がする」ということがあったという。吐き気をもよおした交差点では、そこで死亡事故が起きている場所であることを後から聞いたり、先祖の墓参りにいった際に気持ち悪くなった場所の付近には「良くない死に方をした人」の墓があったという。

しかし、【4E】は、「そこに何かの霊がいるのが分かる」程度であった。しかし【4E】が成長するに従って、黒い輪郭や、ハッキリはしていないが、霊が居ることが分かるようになったという。【4E】はそのようなハッキリしない霊には話しかけないようにしていた。その理由についてたずねたところ、よく分からない霊に対して話しかけるのは危険だと知っていたからだという。そのような知識は家族から得たのかと考えたが、【4E】は「図書館で幽霊や霊についての本を色々調べましたから」と理由を述べ、「それ以外のことは何も役には立たなかったですけども」と苦笑いをしていた。

——霊が見える孤独

小学校4年の終わりくらいから、最初はぼんやりとしか見えなかった霊が、どんな霊なのかについて分かるようになったという。

【4E】は、「一番しまったと思ったのは、友達の斜め後ろにぼつんと人の形をした霊体がいるのを見て、『あれ〇〇ちゃんの後ろに人が立っているよ』と言ってしまったことでした」という。友達からは「嘘つき」と呼ばれ、クラス全体からいじめを受けるようになってしまったのである。

【4E】にとって、霊が見えることは「一般的なことではない」程度には思っ

ていたが、「特別なこと」とまでは思っていなかったので、このことは【4E】に大きなショックを与えた。「自分が見えているものは他の人には見えない」、「自分の生きている世界は普通の人が生きている世界とは違う」、「自分のことを理解している人はこの世にはいない」という孤独感を感じたという。

「だからといって自分ではどうしようもないんですね。だから（霊が）見える自分を受け入れるしかなかったんです」と【4E】は話してくれた。その体験から、中学・高校の友達の周りに霊が見えても、【4E】はそれを絶対に口にしなかった。

それ以来、一切霊が見えることを口にしなかった【4E】は、「今回は家族以外には数年ぶりに霊が見える話を他人にしています」ということだった。

——消えるデータ

【4E】が作ったレポートなどの課題のデータが提出前になると消えてしまったり、送信したはずの課題のファイルを添付したメールが届いていなかった。これが、筆者が【4E】からの聞き取りを行うきっかけである。

電磁的な記録の消滅と霊との関連性については、【4E】は、霊が記録媒体や通信電子機器に触れるのを見たことがあるため疑っていなかったが、「データが壊れただけ」と言われることも考えて家族以外には相談しなかった¹⁶⁾。

——あきらめと覚悟

家族も最初は「物理的に問題があるんじゃないの」と聞き返したものの、【4E】の説明を聞いた父親は、「それはひょっとしたら霊の仕業ではないのか」と自分の霊体験について詳しく話し、霊について自分が知っていることを【4E】に教えた。

とはいうものの父親は、「もうこれは遺伝子に組み込まれたものだから仕方がない」と言い、「これを現実として受け止めるしかない」として、【4E】の祖父が靈感を持っていることでどれだけ苦労をしたのか、それをどう乗り越えてきたのかについて、自分の見てきたことを話したという。

これを聞いた【4E】は、「もうこのまま生きていけないといけないうのか」と

あきらめの気持ちを持ったものの、悲嘆にくれることはなく「父と祖父がどれだけ辛い思いをしてきたかを聞いて、『私は1人じゃない』、父や祖父も私と同じ重荷を負って生きて来た。自分はその血を継いでいくのだという気持ちを改めて持てました」とその時の心境を語ってくれた。

——憑依と霊能者

【4E】は、「基本的には霊は放置しておいたら勝手に消える」という。亡くなった犬や猫の霊が飼い主の肩に乗っているのを見ることもあるが、次に飼い主にあったときには消えており、「ペットの霊は死んだらしばらくはその人の近くに留まっていて、自分が死んだことを理解したら消えて行く」という。またキツネの霊も見たことがあるが、基本的に「霊」と呼ばれるものは生き物の魂で、「悪魔」とか「悪霊」とか言われるものも、「死んだ人間の霊がそのように言われているだけだ」としていた。

また、「霊は普通は人体に影響があるものではなく、自分自身が取り憑かれて大変なことになったということはない」という。

筆者が「憑依や霊障という言葉があるが、そういう体験をしたことはないのか」とたずねたところ、【4E】は「大変なことになったということがないだけで、取り憑かれたことはあります」と話し始めた。【4E】は、「最初に取り憑かれた体験は中学2年か3年の頃で、その後も何度かはありました。大学に入って高野山のフィールドワークに行ったときも憑いてきましたが、大体除霊すれば消えるレベルです」と霊に憑依された体験はあってもそれが大事になったことはないということだった。

「除霊すれば消えるレベル」という言葉が気になったので、「消えない霊もあるのか」と聞いたところ、【4E】は「大事に至ることはなくても、消えない強い霊はいます。私は霊は見えますが除霊はできません」と、霊が見えるということと除霊ができることは別だとした。

【4E】が、「除霊はしてもらうことはあっても『霊能者は必要のない存在』です」としたので、除霊と霊能者の関係について聞いたところ、一度母親が見

つけた霊能者のところへ連れて行ってもらったが、全く除霊できず、自分で近所の神社の神職に除霊をしてもらって、その時の憑依霊はいなくなったことから、「インターネットや雑誌で除霊を宣伝している霊能者は偽物だと思った」ということだった。

「大概の霊は放置しておいたら消えるというのに、どうして除霊できないような強い霊に憑かれたのか」と聞いたところ、正確には強い霊というものではなく「霊波レベルが自分とピタッと合う霊と出会ってしまうと、取り憑かれたら離れなくなる」ということで、「そのような憑依はよっぽど波長が合わない」と起り得ないですね」ということで、希なケースだということだった。

——霊障と実害

霊がそのようなものであるならば、霊障と言われる現象について【4E】がどう思っているのかをたずねたところ、【4E】は「霊障はあると思いますし、それで苦しんでいる人もいます。ただ、たぶん私は守られているのと、危機察知能力が高いからそういう状態になったことがなかったんでしょうね」と答えてくれた。

【4E】は生まれてすぐに親が神社に奉献し、物心ついた頃から毎年神社に行ってお祓いを受け、お守りをもらっていることが、霊障が自分に起こらない理由ではないかという。また、【4E】は危機察知能力も重要で、「霊がよりハッキリ見えるようになって『これはなんとなく危ない』ということが分かるようになってからは、その場所から早々に立ち去る、そこには近づかないなどの対処をするようにしています」ということだった。

そういう意味では、霊感体質であることや、霊による実害に関しては「データが消えてしまってレポートの提出ができない」という程度なのかと尋ねたところ、「最近では少し気になることもある」と答えてくれた。

【4E】が直接霊を見るのは年間に2～3度程度だが、最近では霊が居る時の悪寒が強くなってきており、「あきらかに出てきている霊が強くなってきている」ということで、「波長が合いそうな霊が増えてきた」ということだった。「今の

ところ霊障は起きていないが、とにかく霊を感じたら逃げるようにしている。長い目でみると不安材料である」ということだった。

【4E】の父も高レベルの霊に「携帯電話の中身を全て破壊されたことがある」ということで、段々と強い霊と波長が合うようになってきていることには懸念を抱いており、「データのように物理的でないものから物理的な物へ破壊が及ぶのは怖いです。今後何が起きるかについては考えたくはありませんね」ということだった。そして【4E】は「だからといってどうしようもないから放置するしかないんですよ」言い、虚脱感を顔に浮かべていた。

——宗教施設と聖地

【4E】は霊能者を否定するが、同時に職業的な聖職者の肯定もしておらず、どちらも信用できないという。しかし【4E】は「神社仏閣の境内や敷地、自由に出入りできるカトリック教会の聖堂などは落ち着く」という。【4E】はそれを宗教の聖職者ではなく、その施設の立地条件によるものだとしている。

「それはパワースポットの的な意味ですか」と聞いたところ、そうではなく「信仰心が染みこんだ土地が良い」ということで、「昔からの徳の高い人などが修行した場所にある神社やお寺は特に良いですね。そういうところには変な霊はいませんし、そういう所に行くと心が洗われて新しくなったような気持ちになれます」と答えてくれた。

そこで、「生まれたときに奉献されて、毎年お祓いを受けているので守られているということでしたが、お祓いをするのは職業神職ですが、そこは少し矛盾しませんか」とたずねたところ、【4E】は「形式的に見れば確かに矛盾をしていると思います。けれども、実際のお祓いの効果は、それをする神主さんではなくて、毎年行くという私や家族の信仰心と、そこに集まってくる人々の信仰心の力、聖なる地で神主が儀式をするから効果が発揮されるのだと思います」と、信仰心によりそこが聖なる地になっていることが重要だとした。

筆者が「そういうところから Wi-Fi とばしてデータを送信すればデータが消えないかもしれませんね」というと、「そういう考え方はありますね。それ

は気がつきませんでした」と少しだけ笑顔を見せてくれた。

——【4E】と精神世界

【4E】は自分がなぜ祖父や父から靈感体質を受け継いでいるのかについて、「それを解説してくれる人がいたら教えて欲しいけれども、それは最後でいい」という。

筆者は、精神世界でいう「生きる意味や使命」に関係することを想像したが、【4E】のいう「解説が欲しい」という意味は「(靈感体質が) 遺伝する仕組みが知りたいんであって、自分が靈感体質である意味はどうでもいいですし、なおしたいと思って無駄なので思ってもいません」という。

【4E】は精神世界について、ある程度の知識は持っており、「生まれてきた理由や生きる意味について教える」というスピリチュアル・カウンセラーの存在も知っている。しかし【4E】は、「明らかに自分よりも靈感が低い人が、実際にそんなことができるはずがありません」と精神世界と関わる気持ちは皆無で、「そういう解説(自分の生きる意味)を本当に知りたくなったら、自分の家の宗教である曹洞宗の教えを真剣に学びます」と言っており、むしろ今さしあたって一番必要な事は「とにかく作成したレポートのデータが消えないことです」と現実的な回答が帰ってきた。

——前途について

【4E】は目の前のレポートがなんとかなったとしても、卒業後に「パソコンなどの機器を使わない会社に就職できるのか」、「むしろそういう会社があるかどうか」についての話に及ぶとかなり暗い表情を見せ、靈感体質が電子機器に与える影響について深刻な状況にあることを訴えていた。

しかし、聞き取りの最後に、「家族以外に私の話すことに耳を傾けて、信じてくれる人がいたことが本当に嬉しかったです」とし、「たとえそんな会社が無かったとしても、『勇気を出して人に話すことって大切だっ』て思いました」と答えてくれた。

小 括

今回、取り上げた2つの事例に共通することは、双方とも「どうして自分がこんな目に遭わないといけないのか」、「どうして自分だけこんな状態が続くのか」ということよりも、霊の存在と現状を受け入れた上で、現実生活においてどう生きるかを考えているという点である。

2人とも普通に生きるよりも不自由さはあるものの、「自分が靈感体質であること」や「霊と自分との関係」について当たり前のこととして受け止めており、これは靈感があったり霊体験をして苦しんだ精神世界関係者が、自分の体質や状況について「何か大きな意思が働いているのか」、「この体質や体験が与えられたのには何か特別な使命があるのではないか」といった理由を追求していき、精神世界に辿り着いたのとは全く逆の方向である。

「霊を受け入れて生きる」という表現をしたが、奥野は霊体験をした遺族について「納得できる物語が創れたときに、遺された人ははじめて生きる力を得る」(奥野 2020: 114)としている。事例で扱った人々は遺族ではないものの、霊を受け入れることに納得しており、それを前提に生きている。最初にあげたオカルト誌での相談も回答を読み返せば、「理由を考えさせるもの」ではなく相談者が「納得を得られるよう」アドバイスをしている。

靈感や霊体験の理由をいつまでも考えずにそのまま受け入れ納得して生きることと、自分がそうなった理由を考え抜いた末に精神世界に触れることのどちらが良い生き方かは、筆者の判断するところではない。しかし、同じように霊性に触れていても、「靈感がある、霊体験がある人が必ずしも霊的なものに関心の対象としない」、「個人的に霊を受け入れた人は精神世界に接点を持つとしない」ことは、「心霊研究の側から見た精神世界」とともに、押さえておくべき重要な点であると考えられる。

3節 精神世界と聖地

聖地に関しては、現地調査に基づく研究が数多く行われている。しかし、近年の研究において精神世界と関連して論じられているものは堀江(2019)を除

いてほとんどなく、その中でも、「パワースポットで体験される具体的効果、およびご利益を通じて神社信仰とスピリチュアリティとの接近」などが論じられているが（大道 2020：69）、一部の聞き取り記事を除き、文献やブログを含むドキュメント調査・ドキュメント分析が研究の中心となっている。

1 先行研究における聖地と精神世界

聖地は、「ある区切られた場所や時間が神聖なものとして意識され、他の場所や時間から切り離されて、聖と俗の分離が生ずる」場所、「人間に神聖な力と接触する機会を提供し、新たな生の活力を与える」特定の場所とされる（市川 2010：410）。

精神世界では聖地をパワースポットと呼ぶことが多い。パワースポットは清田益章¹⁷⁾によって「精神エネルギーを満タンにして肉体と精神のバランスを矯正する」場所、「運やチャンスと呼び込んでくれるスポット」（清田 1991：59・63）と説明されており、これ以前にもパワースポットという語についての説明はあったが¹⁸⁾、精神世界におけるパワースポットについて小寺敦之は、「清田の著述の意味に近いと思われる」としている（小寺 2011：87-88）。

現代のパワースポットは神社に集中しているが、小寺によれば2011年5月-6月に実施したアンケート調査によると、女子大生が考えるパワースポットには、日比谷公園や東京タワー・水族館・図書館などの空間、さらには屋根裏部屋といった身近な空間も含まれていた（小寺 2011：95-96）。この他にも特定のガソリンスタンドや焼き肉屋なども同様に扱われることがあった（寺石 2008：31-33）。また、清田が「パワースポット観光マップ」で示したパワースポットのうち宗教と関連した場所は27カ所のうち全体の2割にも満たず（清田 1991：90-208）、堀江も同様の指摘をしているが（堀江 2019：174）、これは特段驚くことではない。堀江はパワースポットという言葉について、「すでに80年代中頃から、この言葉は日本のニューエイジ関係者のあいだで十分に広まっていた」（堀江 2019：161）とし、「この時期のパワースポット論は神道に偏っていない」と述べている。

また、「聖地やパワースポットとは別の言葉」で同様に説明される場所は以前から存在しており、船井幸雄は1960年頃に檜崎阜月¹⁹⁾の文献から「心の癒しや魂の癒しの場所」であるとして「イヤシロチ」を取り上げ、1985年頃から本格的な研究に取り組んでいた（寺石 2008：24-25）。さらに戦前に遡ると、浅野和三郎が「神聖なる機関」として神社を取り上げており、「神社は神と人の心のエーテル波動の感応を可能にできる機関である」としている（浅野 1938：204）。戦前に神社が現在の聖地と同様に扱われてきたことは興味深いが、吉永は、「日本の霊性思想はつまるところ最後は古神道に突き当たる」としており、近年の聖地が神社に集中するのは当然の帰結だという²⁰⁾。

現代のパワースポットが神社に集中してきた理由について堀江は、江原が日本の様々な神社を聖地として紹介したことを原因の1つとしてあげており（堀江2019：178）、聖地が神社に集中した結果として、「ニューエイジャーから見たauthenticなパワースポットとの関わり方は古くからの神社参拝に融合され、その目的・方法・結果には強調点の移動が生じた」とし、「スピリチュアルな成長から物質的なご利益」、「自由な瞑想やリラクゼーションよりも定型化した儀礼行動」などの変化をあげている（堀江2019：185）。

また、そこで得られる効果や現象について堀江は、「地域の集団に属さなくても、また宗教的儀礼に参加しなくても、場所のパワーだけを切り取って、個人的に享受することが可能」なこと、「少数者が実践してきた、呪力や霊験などの『パワー』を獲得する行為が、観光化によって普通の一般人に開かれた」ことの2点をあげ（堀江 2019：226）、「パワーの脱文脈化と一般化」として、先行する巡礼研究とは異なる視点で述べている。特に1つ目にあげられている、場所のパワーを切り取る行為については、実際に筆者が2つの神社で行ったアンケート調査からも確認することができる。

京都の清明神社で行ったアンケートでは²¹⁾、本殿に参拝せず厄除け桃や御神木へ直接行った人が半数弱で、神社の訪問目的に参拝をあげた人は僅かであった。また恋愛のパワースポットと言われる氷室神社（通称「恋愛べんてん」）で行ったアンケートでも²²⁾、参拝を目的とした人はほとんどいなかった。

とはいうものの、上記の神社を例にあげた研究は広義の精神世界関係者を含む精神世界関係者全体と聖地との関係について述べたものであり、本論文で扱っている狭義の精神世界関係者にこれら全てが当てはまると結論づけるのは難しい。筆者はこれまで、神社だけでなく聖地やパワースポットと呼ばれる場所で現地調査を行ってきたが、(狭義の)精神世界関係者がパワースポットとして扱っていない場所は対象としてこなかった²³⁾。

そこで、筆者の現地調査記録から事例をあげ、あらためて「聖地と(狭義の)精神世界関係者」について分析を行った。

2 事 例

(1) ベっぴん Life プロデュース——神社 (三重県鈴鹿市)

【0A】(40代女性 三重県在住 精神世界関連事業者、イベントプロデューサー) 他5名

聞き取り (2017年2月20日)

——企画概要

【0A】が企画した「ベっぴん life プロデュース」は、女性の中にある「美しくなりたい」という願いに対して「念じていれば引き寄せられる」といった、ぼんやりしたアドバイスではなく、何をしたら良いのかを的確に指導し、精神世界の技法を用いながら現実化していくことを目標にした企画である。「内面だけでなく外見も十分に整う」ことによって、意識だけではわからなかった成長を感じ取り、本当にしたいことを「引き寄せる」ことができる女性に成長することを目指した企画で、【0A】を含めて6人の、精神世界の違った技法を持つ女性が企画スタッフとして集まった。

——初回会議

この企画の初回会議に参加させてもらったところ、企画趣旨、具体的活動、カリキュラム、最終目標などが話題となった。現実的な経費や会場の話の他にも、それぞれの持っている技法についての説明やそれをどう活かすかなどにつ

いても話し合われていた。内容については今回の論文趣旨から外れるので割愛するが、「精神世界関係者が企画する事業」としては興味深いものがあった。

——椿大神社へ

会議自体は約5時間強を費やして行われ、会議後に全員で三重県鈴鹿市にある椿大神社へと向かった。

椿大神社は猿田彦大神を主神としており、【0A】は、「この神様は導きの祖神と呼ばれているので、良いスタートが切れるように参拝に来た」、「企画の活動中心地である場所の神様に挨拶するのは当然のこと」と説明してくれた。

6人はまっすぐ本殿へ向かい、2拝2拍手1拝で参拝を済ませた後に、境内にある「かなえ滝」という滝の前で記念写真を撮っていた。かなえ滝についてはスマホの待ち受け画面にすると幸運を呼ぶというパワースポットの要素があるものの²⁴⁾、あくまでも主神への参拝が最重要ということであった。

(2) リーディングによる化粧品開発——自然 (京都府京丹波市)

【4F】(50代女性 京都府在住 精神世界関連事業者 化粧品会社社長)

聞き取り (2016年11月8日)

——【4F】の背景

【4F】は化粧品販売会社の社長をしており、顧客をリーディングして顧客にあった化粧品を販売するというので、地道に営業成績を伸ばしている。

【4F】は化粧品の販売店に勤務していたが、10年前に突然アトピーを発症し、どこの皮膚科へいっても改善する兆しがなかった。民間療法も行い、ステロイド外用剤を中止し、自宅温泉療法を行ったがステロイドのリバウンドで症状が悪化した。全身引っかけ傷と体液で下着が身体にへばりつき、あちこちから出血し、まさに「血だるま状態」だったという。

入浴すると湯船は体液でドロドロになり傷口に湯がしみて「入浴は苦行」だった。仕事も辞め、2年間で温泉療法に100万円以上使ってもまったく改善する兆しはなく、自分の姿を鏡で見ても落ち込み、家に引き籠もるようになって

た。

——聖地にて

自分の見た目と服がこすれる痛みなどを考えると、外へ出る気は起きなかった。そんな折、遠縁の精神世界関連事業者の女性（30代）が、「身体を清めてくれる水が湧いているので行かないか」と誘ってくれたという。「自分は汚れている」と思っていた【4F】は治ることよりも「少しでも清められるのなら」と考え、そこへ行くことにした。【4F】は「知られざる神社」のようなものを想像していたが、そこは小さな湧き水が流れる山の中だった。

靴下を脱いで足をつけるように促され、その通りにしたところ、足から全身に水とは違うぬるっとしたものが通り抜け、自分の中にある汚れを拭き取ってくれる感覚があった。【4F】がTシャツ1枚になり背中を水で濡らしてみると、ゼリー状のようなものが自分全体を覆い、痛みが引き、自分から皮膚がポロポロとはがれ落ち、それが清められてすっと自分の中にもどっていくような感覚を覚えた。

完全にアトピーが治ったわけではなかったが、明らかに改善の兆しは見え、【4F】は「もう汚れてはいない」という気持ちになった。【4F】は、「山の高エネルギー体が私の心身の状態を読み取っていった」と体験を話してくれた。

——リーディング～化粧品チャネラー

アトピーが改善するに伴い、【4F】は少し化粧を試みようと考え、化粧品をいろいろと取り寄せてみた。しかし肌に優しいものを探して成分を調べると、自分に合いそうなものは無かった。【4F】はさらに多くの化粧品を取り寄せ調べ続けた。化粧品とだけ向き合っていると、化粧品が自分に対して「親しみをもっているか」、「親しみをもっていないか」、「嫌っているか」などが分かるようになったという。

山へ連れて行ってくれた女性にその話をしたところ、女性はヒーリングマシンを製造している事業所の代表（50代男性）を連れてきて【4F】に紹介した。男性は【4F】に「化粧品と対話ができるのは珍しい。まるで化粧品チャネラー

だね」と言い、【4F】のところに男性が仕入れた化粧品や整髪剤を持ってきてはリーディング実験を行った。

【4F】の能力を評価した男性は、「相性をリーディングして化粧品を選ぶのはビジネスになる」と、【4F】に出資を申し入れた。

自分に合った化粧品を探し当てた結果、【4F】のアトピーは完治した。【4F】は「市販品であっても相性が大切で高級品でなくても良い」とし、現在はその能力を活かし、化粧品と対話をした後に、その人に合ったものを販売している。

——その後

現在の状況を聞くために電話連絡をしたところ（2021年3月13日）、現在もリーディングをしながらの化粧品の販売事業を続けているが、「これがリーディングという能力ということは知っていてもそれ以上に最近では興味がない」としており、今は事業を安定させていくことを重視しているので精神世界そのものについての関心は薄れたということだった。

(3) 聖地でのエネルギーワークセッション1

【4G】（40代男性 東京都在住）

精神世界関連事業者 エネルギーワーク指導者
聞き取り（2017年3月20日）

——聞き取りに至る経緯

晴明神社でアンケート調査をとっていた際、御神木に手を触れる指でOリングのような形をつくっている男性がおり、エネルギーワークのようなことをしていたので、何をしていたのかを尋ねたところ、聞き取りに応じてくれた。

——【4G】の神社訪問理由

【4G】が、「名刺をもっていないのでまずは私の Facebook をみてください」というので Facebook で検索したところ、「霊気・神気・光のセッション」という言葉が並んでいたため「スピリチュアル関係の先生ですか」と聞いたところ

る、「せっかく私の存在に気づいてくれたのでお話ししましょう」と話しはじめた。

この日【4G】はクライアントにエネルギーワークを教えるために晴明神社に来たと同時に、自身は挨拶に来たという。「挨拶とは参拝のことか」と聞いたところ、【4G】は、前世は陰陽師で平安時代に権力者に首をはねられたという。「過去世に開いてから」まだ一度も晴明神社に来ていなかったの、過去の自分への挨拶とこれからの自分のエネルギーの安定のために、クライアントのエネルギーワークも兼ねてやってきたということだった。

——御神木のエネルギーの受け取り方

【4G】は、晴明神社の御神木からのエネルギーの受け取り方は特殊で、【4G】が実践した後にクライアントにそれを教える必要があったという。御神木には多くの人が手を当てており、特に難しいことはないように感じたが、【4G】によれば「本当はこの御神木からエネルギーを受けるには2人1組でやる必要がある」ということだった。

晴明神社の御神木のエネルギーは他の神社の御神木よりも高純度で、直接手をかざしても人には馴染まないという。【4G】は、「簡単に言えば水があまりにも綺麗なところには魚が住めないのと同じ理由です」と水と魚の例えを用いて説明してくれた。

【4G】は、「晴明神社の純度の高いエネルギーを御神木から吸い取っても、それを直接自分に溜めると聖なるエネルギーによって吸い取った人自身が苦しむことになる」とし、2人で手をつないで一旦流れてきたエネルギーを御神木に触れている人を經由させて手をつないだ先のタンク役の人に貯めるのだという。

このエネルギーを經由する人には一定のレベルが必要で、指でリングをつくって調整することにより、エネルギーの聖なる値を人が貯め込めるまで下げたタンク役の人に渡すのだという。また御神木に触れている方の技能者（今回は【4G】）は、タンク役の人からエネルギーを分けてもらうのが適切なエネル

ギーの得方ということだった。

——聖なるエネルギーの危険性

【4G】のいう理屈は分かったが、実際には多くの人が御神木に手をかざしていることについて聞くと、【4G】は、「あの人たちは、そもそもエネルギーを吸い取れていないので大丈夫です」と言い、「『癒される』と言っている人もせいぜい『感じている』程度で実際は御神木のエネルギーの10%も得られていないでしょうね。でもそれぐらいがちょうど良いんです。本当に高純度な聖なるエネルギーがどれだけ人にとって危険か分かっていないので」と付け加えた。

——【4G】と精神世界

【4G】が、「まだ人間が聖なるものを受け取るには早すぎる」というので、やがて人はそれを受け取れるようになるのかと聞いたところ【4G】は、「今はまさにアセンション中で、宇宙のエネルギーはどんどん強くなってきており、嫌でも受け取れるようになる」とした上で、それに脱落してしまう人がいることを指摘し、「だからエネルギーを受け取れるようになるように世界をつくりかえていく必要があるんです」と言った。

【4G】は、「自分には世界全体をつくりかえていく使命がある」としていたので、その使命はいつ頃から感じるようになったのかを尋ねた。【4G】はもともと東北出身で「陰陽師が過去世だったというのが明確になったのは東北の震災の直後」ということだった。

【4G】はもともと弱い靈感をもっており、小学校の頃から何かを感じる体質だった。しかし自分が何を感じているのかも分からず、友人や親に相談するとそれははじめや親からの罵声に変わり、どんどん孤立していったという。

しかし、【4G】は、「自分が感じているものは何か」、「どうして自分はそうなったのか」、「同じような体験者がいないか」などを熱心に調べ、精神世界に触れるようになったという。やがて、自分が感じているものが宇宙から与えられたメッセージと分かったとき、【4G】はその直後に、「これは霊体験ではなく宇宙意識に触れる体験をした」と話してくれた。宇宙意識から「開くまでは待

て」という指令が来ていたので、学生時代も精神世界関係の書籍を読んだりWEB などを見ながら、「自分が開くときを待っていた」ということだった。

——過去世を知る必要性

東日本大震災がきっかけですぐに使命に目覚めたのかと質問をしたところ、【4G】は、「正確には違います。あまりにもマイナスエネルギーが入ってきてコントロールが効かなくなったんです。そのときに私に『過去世は陰陽師だったよ』と教えてくれる人が現れたんです。それを聞いた瞬間に過去世まで記憶がバックして自分の首がはねられるところまで見えたんです」と、その時の状況を詳細に教えてくれた。

【4G】が、「過去世を知ると人は呪縛された魂が解放されるようになる」というので、過去世を知ることこそここまで大切なことなのかと尋ねたところ、「人間がエネルギーを受け取れるようになるには先ず過去世を知る必要があるというのが私の持論です。そうでなければレベル4の地球では逆に生き残れなくなる」と言い、今の若い人の気持ちは過去世に向かっており、それは地球の次元上昇に合わせた動きだということだった。

人は自分が何者であったかを知り（過去世を知り）、過去に自分に与えられた使命を思い出し、そして今自分に与えられている使命を知ることが大切で、その為には目覚める努力が求められていると【4G】は言い、「そういう私も、開いてからやっと宇宙意思が何を考えているか、宇宙の真意とは何かを正確にキャッチできるようになったのですが」と付け加えた。

——【4G】からの質問と過去世鑑定

【4G】が、「伊藤さんは宗教学の研究をしていると仰ってましたが、ご自身も宗教をしておられるようですね」と尋ねてきたので、筆者が自分の宗教について話すと、【4G】は「ほおキリストさんですか。キリスト教の方とは実は初めてお話するんです。今日ここで、自分に気がついた（【4G】に興味をもった）人と話をするようにと（宇宙から）指示があった理由がわかりました」と、【4G】は何かに閃いたような表情になり、「『キリスト教は業が深い宗教なので

宇宙の仲間に入れないと最初（宇宙意識から）聞いていたのですが、つい最近宇宙から『キリスト教徒ももうすぐ宇宙の一員とする』というメッセージを受け取っていてそれを伝える必要があると思っていたんです」と話してくれた。

この後、【4G】は筆者に興味を示しはじめ、「過去世を覗かせてください」と、セッションを始めた。【4G】は、「なるほど、過去世は宣教師だったんですね」、「その昔もずっと宗教家ですね」、「宣教師の前は密教の修行者ですね」と解説していたが、途中から「あーでもその先が見えないです。でも少なからず殉教経験があるようですがいつだろう」と考えこみだしたので、「それだけ見ていただければ十分です」とセッションを終了してもらった。

——【4G】の正体

セッションを終えた後に、【4G】は「これはお話するのは伊藤さんで2人目なのですが」と前置きし、「実は今日ご挨拶にきて、そこで過去の自分から本来の私は地球人でないことを教えられたんです」と切り出した。筆者の方から「もしかしてプレアデス星人ですか」と聞いてみたところ、「さすがですね、その通りです、いつから分かっていたんですか」と聞かれたので正直に「なんとなくです」と答えたところ、「伊藤さんも実は開いている人なのかもしれませんね」と握手を求められた。

断る理由もないので、手を握り返したところ【4G】は、「今宇宙エネルギーを流し込んだら、ちゃんと反応がありましたよ」と言い、「今日はありがとうございます、今からまた次のクライアントのエネルギーワークがあるので」とその場を立ち去っていった。

(4) 聖地でのエネルギーワークセッション2

【4H】(30代男性 愛知県在住 会社員)

聞き取り (2017年3月20日)

——聞き取りに至る経緯

【4G】と分かれたあと、筆者は晴明神社から貴船神社へと調査場所を移し、

一通りの調査を終えて帰ろうと準備をしていたところ、清明神社の御神木で【4G】からエネルギーを受け取るためのセッションを受けていた男性を見かけたので声をかけたところ「短い時間でよければ」と聞き取りに応じてくれた。

——使命に目覚めるまで

【4H】は生まれたときから靈感が強く、見える訳ではなかったが自分を呼ぶ声が聞こえており、それを友達に話してしまったために小学生の頃はいじめられたという。しかし、家族全員に靈感があり、家族はいつも【4H】の味方だった。中学に入るといじめ自体がなくなり、高校に入るところには靈感もなくなって声のことも忘れた。【4H】は高校を卒業して工場に就職、結婚して子供も生まれ、「ごく普通の家庭」を築いていた。

【4H】に転機が訪れたのは29歳の時で、工場で足が機械に挟まれるという大事故に遭い、1年間まったく働けなくなった。ベッドの上にいる【4H】に妻が離婚届を持ってきたが、気力が抜けていた【4H】はそれに応じるしかなかった。身体は回復してきたが、さらに職場から戦力外通知が出され、退職せざるを得ない状況となった。そのような状態の中で長く止まっていた声が再び聞こえるようになったという。

声は【4H】に1人の精神世界技法者（40代男性）を訪ねるようにと指示をした。【4H】が訪ねたところ、相手は【4H】が来ることを知っており、【4H】にこれまでであったことの確認をした。全てが当たっていることに驚いた【4H】に男性は「ブロック解除²⁵⁾を受けて使命を得るように」と指導した。

——【4H】の使命

ブロック解除を受けた【4H】は、「地球の次元上昇に備え、聖地の地下に縛られている龍のエネルギーを解放して地脈を繋げる」という使命を受け取ったという。大手自動車会社の系列の工場に就職も決まり、資金が貯まると、エネルギーの解放のために神社など「示された聖地へ赴いている」という。聞き取りを行った日も京都の清明神社、貴船神社へ「解放」に行った帰りということであった。

小 括

清明神社や氷室神社でのアンケート調査、そして事例(3)(4)からは、これまでの研究で指摘されてきた「パワーの脱文脈化」が起きていることが読み取れる。

また事例(2)と事例(4)からは、聖地で精神世界に目覚める人と、精神世界の思想を持っているから聖地に行く人の両者がいることが分かった。【4F】はそれまで精神世界に触れたことがなく、聖地で超越的なものに触れて精神世界の技法や思想を知った。これは宗教施設の中で神秘体験をするのに似ている。逆に使命感をもって聖地を訪ね歩いている【4H】の姿は宗教の巡礼者と重なって見える。確かに神社という場所と精神世界関係者の間において脱文脈化は起きている。しかし逆に事例(1)に見られるように、精神世界関係者の全てが「神社側が用意している信念体系や神話に則っていない」（堀江 時田 2020：140）わけでもない。

精神世界関係者が中心となって運営している NPO 法人心髄研究会 SEW が、地域の聖地とされる場所で開催したイベントの中で行ったアンケート調査「スピリチュアル・精神世界の可能性のある分野は？」というアンケートにおいて²⁶⁾「信仰心や神性の回復」と回答した人が43%おり²⁷⁾、このイベントに来た精神世界関係者の半数近くはなんらかの形で宗教への回帰を求めており、これは堀江のいう「個人主義的な伝統回帰」（堀江 時田 2020：140）とも違っている。

「聖地と精神世界」の関係は、聖地が宗教施設の場合、もともとあった信仰形態とは違っていることが多いが、本来の伝統的宗教の形をそこから求めていく人も存在している。脱文脈化している人々も伝統的宗教の信仰の形を求めようになった人々も、向き合い方は違うが「彼らは彼らなりに真剣な気持ちで対象に向き合っている」（堀江 時田 2020：140）ことには変わりなく、宗教と精神世界との境界線が曖昧になってきていることは確かである。一方、宗教施設でない聖地で目覚めた【4F】は現在でもリーディングを用いて仕事をしているが、「事業の安定」という目標に落ち着き、精神世界の根本思想を探究することから離れ、また宗教に向き合うこともない。ここから、精神世界の中で聖地については

「1つの文脈では語れない思想の再構築」が始まっていると考えられる。

4節 精神世界と古神道

これまでに述べてきた通り、精神世界の中心は神智学を源流とするニューエイジと心霊主義（スピリチュアリズム）にある。これに加え、2010年代に入って古神道の世界観や思想・技法を精神世界と関連付ける動きが盛んになっている。

本研究の中心である「霊性にかんする協働組織」の多くが神社を活動拠点していることから、古神道と精神世界の関係についての考察は避けることはできない。

現在、「神道」といえば、「神社本庁が定めた作法や信念体系や神話に則った教え」（堀江 時田 2020：140）を指すことがほとんどだが、「古神道」はここで説明された神社神道とは別のものである。

古神道は神道の教義が決められる前に存在した神と人とのかかわり方で、様々な流派があるが、共通点として、あらゆる自然の中に神性を見出し（自然の中に神を見る）、大宇宙の大造化に関与する天之御中主神に対して主体的な修養を通して（祈願や祈禱をしてもらうだけでなく自ら修行を行う）、自分もまた小宇宙としての神であることを知り（人も神の末裔である）、生活の中に起きる出来事から神々の通信を受け取り、神霊の光に触れて神と一体化していくことを目的としている（神と融合していく）²⁸⁾。

1 これまでの研究

保江邦夫²⁹⁾は、古神道の秘儀「神降ろし」に開眼したとしており、この秘儀は神人合一で、「神を降ろすことによって我々人間が神の視野をとおして周囲を眺めるといふ、すばらしい体験を得ること」だとその価値について述べ（保江 2014：33・38-39）、「神の視野」を通し精神世界に関連する様々な事象について説明を行っている。

保江は、物質の世界と神の世界の間にある縄文ゲートが開くことによって、

縄文人のように宇宙と繋がってワンネスは実現する（神と一体化する）と主張し、その縄文ゲートを開く奥義は、自らが継承した古神道の1流派である伯家神道の祝之神事の中にあるとして（保江 2019：2-3・12-15）、ここでも精神世界と古神道を密接に関連づけている。

また、大野百合子は、「(人間が) 神そのものの存在である分け御霊であることに、再び焦点を当て始めたのが古神道」、「古神道では陰陽のエネルギーを魂魄とって、陽が『魂』、陰が『魄』で、魂は魂のエネルギー、魄は肉体意識のエネルギー」、「私たちが目指すのは、魂魄の統合で、これは神人合一の状態と呼ばれます」と、古神道の世界観を説明している（大野 2017：711/2085・144/2085・914/2085）。使用される用語は違うものの、精神世界の一部で近年再び話題になっている「ノンデュアリティ」³⁰⁾はこれと同様の思想である。

さらに大野は、古神道はレムリア³¹⁾の叡智を伝えていることを前提にしており（大野 2017：114/2085）、その叡智に基づくレムリアの時代へ今の地球がシフトしていくことや、それに関係してくる精神世界の技法や思想についての説明を行っている。

精神世界関係者と古神道に関連づける書籍は、『ニューエイジとしての古神道』（中村陵一 2011 出版サービス会）、『2013年太陽系大変革と古神道の秘技』（山田雅晴 2012 たま出版）、『すごい金運財布の作り方：古神道の秘法でお金ザクザク！』（中井耀香 2017 マキノ出版ムック）など、現在に至るまで続々と発刊されており³²⁾、2010年以降、古神道と精神世界を関連づける動きは活発化している。

しかし、古神道そのものに関する書籍は1950年代から既に存在しており³³⁾、古神道と精神世界の関連をうかがうことができる記述は、精神世界興隆以降すぐに出版された文献やドキュメントの中に既に記されている。たとえば、『古神道は甦る』（1985）の中で菅田正昭は、しばしば古神道で使われる「神ながら」という言葉の説明として、一番初めるとき虚空に出現したアメノミナカヌシを生み出した作用の存在が宇宙意識であり、「神ながらの極致は、この宇宙意識と自己が一体化することだ」と述べている（菅田 1985：25）。

また鎌田東二は、古神道について、「宇宙の存在の声を畏怖畏敬の念を以って聴き取ろうとする根本的な態度」である神からの道と、「人間がいのちあるものとしてこの宇宙の中に存在するようになったことを、心からの感謝と畏怖畏敬の念を以ってその根源的な力の源に向かって帰依し、祭り、祈っていこうとする」神への道の2つから成る「宇宙教」であるとし（鎌田 2003：32-33）、精神世界に近い古神道観を示している³⁴⁾。

古神道を体系的に復活させようとした日本神学運動の中野裕道は、古神道における神と人間との関係について、(人間は)「“魂磨き”の修行によって浄化し、前世からのカルマ(業)を消し去る必要がある、そのために己の力の足りないところは、神に助けをもとめたらよい」としており(日本神学連盟 1997：30)、精神世界の界層図と類似した霊界の構造図を示している(日本神学連盟 1997：35-41)。また、『古神道の秘術』(1995)には古神道を体験できる多くの団体が紹介され、中にはオーラの視覚やチャクラ願望達成などを掲げる団体もあった(別冊歴史読本 1995：317-321)。

とはいえ、先に述べた通り精神世界と古神道を直接的に関連づける動きは2010年以降からで、それ以前の古神道に関する文献や「ドキュメント」³⁵⁾からは、精神世界の根本思想との共通点は読み取れるものの直接的に両者を結びつける記載はない。

筆者は、古神道が精神世界と直接関連づけて語られるようになったことに聖地・パワースポットが深く関わっており、日本で「スピリチュアル・ブーム」を巻き起こし、オーラ・前世・守護霊などを人々に受け入れやすく提示した江原啓之(堀江 2019：178)の影響が大きいと考えていた。

しかし、江原は、「本来、神社とは願い事のために訪れる場所ではありません。(中略)現世利益を求める心が、かえって神様との距離を隔ててしまう」(江原 2005：72)とし、「むきだしの現世利益は、スピリチュアル・サンクチュアリとは無縁のものであり、かえって神様との距離を広げてしまいます」(江原 2009：87)という。江原自身は、近年の古神道と精神世界・現世利益を関連づけた大野や中井とは正反対の姿勢を取っていたのである。

「聖地=神社」という形を作った一因が江原にあることは確かである。しかし、精神世界の中で起こった古神道ブームと江原との間に直接の関連性を見いだすことはできなかった。

堀江は、パワースポットが神社中心になったことと、神社を中心とした本格的なパワースポットブームの始まりとを分けて言及し、本格的なブームのきっかけは2009年に清正井を紹介し、物質的なご利益を全面的に押し出した芸人の島田秀平によるものだとしている(堀江 2019：181)。島田のガイドブック『全国開運パワースポットガイド』には、神社での正式な参拝の仕方や自分に縁がある氏神を大切にすることなど、江原の主張と同様の内容も記されているが(島田 2010：50-53)、ガイドブック全体は恋愛&婚活のパワースポットをはじめ、仕事運・金運・ギャンブル運・健康運など、ご利益があるパワースポットの紹介で占められている(島田 2010：3)。また、島田は(本殿への)参拝以外にも「御神木などパワーみなぎるものに触れることで元気になれる」(島田 2010：50)と、菅田の(古神道は)「自然界の万物に神性を見、自然界に起きた諸々の現象を神々からの通信として感じる」(菅田 1985：24)という説明に通じる内容を記している。

インターネットで「古神道 スピリチュアル」のキーワードで年代別に検索したところ³⁶⁾、2000年0件だったものが、2010年95件、2020年には130件ヒットとなった。機械的なキーワード検索なので全てが精神世界と古神道を関連付けた記事とは限らないが、この数字の推移は10年の間に精神世界関係者の古神道への関心度が増加している1つの指針であり、堀江が「本格的なパワースポット・ブーム」は2009年頃から始まった(堀江 2019：181)とすることと合わせて考えると、精神世界関係者の古神道への関心はこの頃から高まっていったと考えるのが妥当ではないだろうか。

堀江は、「神社本庁はご祭神への参拝を重視するかもしれないが、御神木や御神水や岩座への信仰は、明治政府による神社の組織化以前から存在するものである。神祇信仰と自然崇拜をいかに調和させるかは、個別の神社に委ねられており、対応は様々である」とし、東京の愛宕神社の神職の「神道には教義が

なく、神社はもともとパワースポットである」という言葉を紹介した上で、「神道の逸脱形態と見下すのではなく、神道がニューエイジ的なパワースポットのアイデアを乗っ取ろうとしている（takeoverしようとしている）のではないかと疑うべきである」とする（堀江 2019：184-185）。

その一方で堀江は、「スピリチュアリティに関心のある人が個人的に既成宗教に接近していくケースもあるし、逆に宗教者の側がスピリチュアリティを取り入れようという動きもある。いま生まれつつあるのは、両者が影響を与え合うような関係なのだと思う」とも述べている（堀江 時田 2020：139）。

これまで述べてきたように、精神世界の中において古神道は年々重要な位置を占めるようになってきている。精神世界が古神道をどう捉えているのかについては書籍やブログ等のドキュメント、また精神世界関係者へのインタビューから知ることができる³⁷⁾。しかし、訪問される神社側が現在のブームをどのように捉えているのかについては、御神木に手を触れることを禁止する神社もあれば、木に触れる行為は古くからの信仰にもとづいているとして禁止しない神社もあり（堀江 2019：184-185）、「『ご祭神にもお参りをせずにご神木ばかりに注目されるのは嘆かわしい』といった意見もあるようだが個々の神社からは好意的な声も聞く」（堀江 時田 2020：140）と説明されるように、一貫していない。

そこで筆者は、狭義の精神世界関係者が多く集まる、神社本庁所属の神社に焦点をあて、神職からの聞き取りを行うことにした。

2 事 例

越木岩神社（兵庫県西宮市甕岩町 5-4）

【4I】（30代女性 兵庫県在住 権禰直）

聞き取り（2021年2月18日）

——聞き取りに至るまで

兵庫県西宮市の越木岩神社は、最近、精神世界関係者が聖地・パワースポットとして訪れるようになった神社の1つである³⁸⁾。社務所にアポイントをとっ

た際に「聖地としての越木岩神社について聞きたい」と伝えたところ、「1時間弱ならば」という条件付きで聞き取りを行うことができた。訪問当日は同神社の神職である権禰直の【4I】が対応してくれた。

——越木岩神社について

まずは、WEB ページにも掲載されている行事である「泣き相撲」をはじめ、同神社の特徴や歴史について尋ねたところ、【4I】は神社のパンフレットを片手に、「歴史は縄文まで遡るとあるのですが、実際には不詳ですね」と読み上げるようにして説明をし、過去の神社に関して尋ねても、一旦社務所に戻り聞いて戻ってくるなどあやふやな回答が多く、ぎこちなく感じた。

【4I】が同神社に赴任したのが2年少し前ということだったので、同神社についてまだあまり知らないのかとも感じたが、「そもそも神社が過去の広報誌や新聞など神社が紹介された資料を捨ててしまったために、昔どのような活動をしていたかについての記録が残っていない」ということだった。

——【4I】と聖地

聞き取り時間が1時間ということもあり、「越木岩神社は最近聖地としてスピリチュアル系のブログなど、ネットで紹介されていますが、そのように言われたのはいつ頃からですか」と担当直入に聞いたところ、【4I】は「古神道というのはご存じですか」と自ら古神道の話を持ち出し、聖地としての越木岩神社についての説明を始めた。

【4I】によると、現在の社殿は「1644年頃に建てられたもので、本来この神社の神様は磐座などでした」という。【4I】は、「神社としては、関西圏で地震があった時に建てられた4つの神社のうちの1つがおそらくここではないか³⁹⁾とし、外来宗教の影響もあって「後世になってから社殿を建築するようになったのが今の神社の歴史」であり、実のところいつから神社があったかについてはハッキリしていないという⁴⁰⁾。

【4I】は、「(古)神道の信仰は磐座信仰と、山に榊を立てて神奈備として信仰する2つがあり」神座信仰を重視する同神社の歴史を考えると、その源流は

縄文時代まで遡るのではないかとしていた。

筆者が、「本殿に祀られている神様は、神社ができてから新しく祀られたものですか」と尋ねたところ、「本殿は蛭子大神様が祀られていますはまだ新しいです。それから（越木岩神社が）特殊というか変わってるのは下にある大国主西神社、あと菊理姫、水神社、修験道の関係で不動明王、稲荷もありますし、伊勢の遥拝所も敷地内にあります。越木岩自体は市杵島姫大神という女性の神様で、本来はここが神社の中心です」ということだった。

——【4I】と古神道・精神世界

予想外に神職側から古神道について話がでたので、精神世界との関係も聞いてみたところ【4I】は、「一般的にパワースポット・聖地というのは水が綺麗なところと言われていますが、このあたりは水がとてもきれいなので、磐座は UFO の着陸場所と言われてます」と、神社のパンフレットを横に置いて UFO やその飛来について細かく話してくれた。

要約すると、近くの六甲山付近自体が UFO の基地で、西宮市は地名に「神」という名が付いているところが多いことから分かる通り⁴¹⁾、「多くの祈りが土地に染みており UFO を呼び込みやすいエネルギーを溜め込んだ土地」であるということだった。また【4I】は、古代の人は UFO の宇宙人を神としたのではという仮説をたてていた。

自身と精神世界関係者との出会いについては、自宅付近に住んでいる自称聖徳太子の子孫との出会いが最初だとし、聖徳太子が政治的に敗れたあとに子孫が（霊力が強い）甲山を目指して逃げてきたという話を聞き、最初は疑ったが数々の不思議な体験から、信じられるようになったという。

【4I】が聞いた話では、甲山にある神呪寺と甲山のふもとにある廣田神社を直線で結んだ線がレイライン⁴²⁾となっており、それを（エネルギーを発する）三角形にしようとするとその点が越木岩神社にあたるため、聖徳太子はこのエネルギーのトライアングルの中を目指していたのではないかとということだった。また、【4Q】は、越木岩神社の磐座付近はシャーマンの霊場で、祈祷の効果が

あらわれやすい土地と言われており、レイラインの中心ポイントに当たる廣田神社について「見る人が見れば、天上界とつながっているのが分かる場所だ」としていた。

この後【4I】は弘法大師・聖徳太子・シャーマンと廣田神社・鷲林寺との関係を語った後に、蘆屋道満⁴³⁾は芦屋付近を拠点としていたが、元来西宮は陰陽道を大切にしており、それにまつわる話として「西宮には安倍晴明がかかった少年がおり、交通事故で心停止していたが安倍晴明がかかったことにより生き返った人がいる」と話してくれた。西宮市のマークは六芒星であることなどについても説明してくれ⁴⁴⁾、先に話したことも含めて「西宮市はそれらを隠している」と述べていた。

さらに【4I】は、西宮とカタカムナには関係があるという。カタカムナは古代日本に存在したとされる世界最古の文明で、家相・顔相・風水・手相・数学・植物エネルギーの取り入れ方などを含んでおり（天野 2020：5/1625）、【4I】はこれを「現代物理学を凌駕するこの世界を知るための科学」だとし、カタカムナ文献⁴⁵⁾は難解で、読んで自分には理解できず、ここを訪れる精神世界関係者から内容について学ぶところが多いという。

また神社の持つエネルギーについても「例えば廣田神社だと大きい光に包まれるような太陽のような感じですが、こちら（越木岩神社）は、もっと鋭くて純度の高い、色で表現すると白みたいな感じです。癒しのエネルギーというイメージです」、「（越木岩神社は）女性守護の神社なのでそういうものが降りているのかなと思います。私としては、イケイケな神社のエネルギーよりも、じんわりとしたものを浴びてずっと座っていたい」としていた。

「イケイケな神社」という言葉が気になったので、確認をしたところ、「例えば、コロナの対応は神社本庁で一律に決まっており、それに準拠してるはずなのですが、エネルギーが強い神社の宮司さんは、そういうことを全く気にしないところもあって」と、特定の神社への言及は避けていた。羽賀ヒカル⁴⁶⁾や桜井識子⁴⁷⁾などの精神世界関係者の著作にも明るく、彼らの言葉を引用しつつ、「コロナ報道で恐怖を煽ってワクチン接種させようとしてる部分もあるといい

ますが、こうなると何がほんとうか分からないです。ファイザーのワクチン打つなとかもありますし」と言葉を選びながら話してくれた。また保江の著書もほとんど目を通しており、縄文ゲートや霊界にまで話は及んだ。

——越木岩神社と参拝対象

本殿と磐座とどちらが重要な信仰対象になるのかについて聞いてみたところ【41】は、「保江先生の関係者の方は、『本当の祈る場所はこっち（磐座）で、レイラインで日がさす場所はこっち（磐座）だから』と言っておられました」、「小さい祠や磐座をないがしろにしないのが本来の日本の感覚で、大きい本殿が良いというのはアメリカ的な、物質的な感じだと思います。今は男性的な価値観が崩れてきている時代ではないでしょうか」とし、「オモテヒロアキ⁴⁸⁾さんは『神社は研究する場所ではなく、巡って神を感じる場所だ』と言ってますからやはり（神を）感じる場所が一番大切なのだと思います」としていた。

——越木岩神社と精神世界関係者

この他にも【41】は、他の神社や、並木良和⁴⁹⁾などが主張する「本来の参拝は三拍手」ということについての解説などを細かくしてくれたが、時間が大幅に1時間を超過していたので、最後に越木岩神社を訪れる精神世界関連の人々について神社としてどのように対応をしているかについて聞いた。

詳細は5章で述べるが、この神社では5年前から精神世界関係者が神社の清掃や環境整備をするため定期的に活動しており、これに触発され氏子会も活発に動くようになり清掃や神社の行事などへの協力をするようになったという。「両者が険悪になったりしないか」と尋ねたところ、「うちの宮司が積極的に氏子会と精神世界関係者の間が悪くならないように調整役に回っているのです、両者の間に問題は起こっていない」とのことだった。

小 括

越木岩神社ではパワーストーンや精神世界関係者が身につけそうなデザインのお守りを販売しており、これについては【41】も「スピリチュアルブームに

乗っからせてもらってます」という。その意味では「神社が精神世界における古神道ブームを利用した」という一面はある。

しかし、同神社では普通に参拝に来る人に対しては本殿で祈祷を行っており、神社の伝統として行われている泣き相撲や祈年祭などの行事も毎年定期的に行われており、神社本庁に属する神社としての機能を果たしている（泣き相撲はコロナ禍のため中止されている）。また、WEB ページでも特に精神世界的な内容を謳い文句にはしていない。そういう意味では同神社に関してのみ言えば、「神道がニューエイジ的な考え方を引き継いでいる」とも「乗っ取ろうとしている」とも言い難い。

また、筆者が見る限りは【41】の方が精神世界へ関心を向けており、同神社を訪れる精神世界関係者や関連の著書から影響を受けているという点において、思想的な影響に関しては一方通行に近く、「両者が影響を与え合うような関係」であるとまで言い切れない。

しかし、同神社では精神世界関係者と氏子会や一般の参拝者との関係がこじれることがないように宮司が調整し、精神世界関係者が同神社で独自の活動を行うことができるよう協力するなど、思想面からだけ見ると一方通行のようでも、活動面では神社側が精神世界関係者を支えている面も大きいと言える。つまり思想面・機能面の両方に目を向ければ、両者は「影響を与え合う関係」を構築しているということができるのである。

もちろん、これは同神社に限ったことであり、堀江のいうように基本的に神社の精神世界関係者に対する態度は個別対応であることを考えると、全ての神社が古神道的な考え方を受け入れているということとはできないだろう。

しかし、自己充足的で他者との接点を持つことが少ないとされてきた精神世界関係者が、古神道を通して神社や神職との関係を深めていっていることは確かである。

5節 精神世界と UFO・宇宙人

UFO や宇宙人に関しては、精神世界よりもオカルト⁵⁰⁾にジャンル分けされ

ることが多い（初見 2012 松村 2012 など）。しかし UFO・宇宙人と精神世界は関連づけられることも多く、転生などの精神世界における重要な問題に関わっていることから、両者の関係は無視することはできない。

1 これまでの研究

1・1 UFO・宇宙人の分類

UFO や宇宙人が現在まで、どう扱われてきたかについて、木原善彦は UFO にまつわる事象を「UFO 神話」と名付け、70年代半ばまでを「空飛ぶ円盤神話」、90年代半ばまでを「エイリアン神話」、95年以降を「ポスト UFO 神話」の時代とし、さらに第2次世界大戦後の前期 UFO 神話、ベトナム戦争後の後期 UFO 神話と分け、直線的歴史観で説明を行っている（木原 2006：18-19・58）。確かに「UFO の発見」、「コンテクティ」⁵¹⁾、「アブダクション」⁵²⁾などの事件や事象を時間軸で並べると UFO や宇宙人に関する事件や出来事は理解しやすい。

しかし、UFO や宇宙人に関する解釈は時代によって新しいものが出てきても、以前の解釈が消滅しているわけではなく、新しい現象の発見や解釈が出てくると同時に、以前と同じ解釈も並行して存在している。一例をあげると『ムー』（創刊号 1979学研）では「異星人は敵か味方か？」という特集が組まれているが、この約20年後の『ムー』（No 206 1998 学研）の特集記事「エイリアン UFO 驚愕の真実」では、創刊号に比べて詳細な疑似科学的要素が追加されているものの、「宇宙人が人類にとって敵か味方かについて」が根幹にあり、同じテーマを扱っている。

そこで筆者は、UFO や宇宙人がどう解釈されてきたかという時系列に沿ったものではなく、UFO や宇宙人に対する解釈のグループ分けを行い、どのようにして UFO・宇宙人と精神世界が接近していったのかについて考察することにした。

UFO・宇宙人をどう捉えるかは、大きく、「存在の有無を証明」しようとするグループと「存在が前提になっている」グループの2つに分けることができ

る。さらにそれを細分化すると下記の通りになる。

（存在の有無の証明からスタートしたグループ）

このグループでは、まず UFO や宇宙人が存在するか否かを問題としており発足当初はその発見を目的としていた。

① UFO・宇宙人の存在を科学的に探求する人々

代表的団体は高梨純一によって1956年に設立された近代宇宙旅行協会 SFA（後に日本 UFO 科学協会と改称）で、現在もこれを継承する団体が存在している。

代表者の高梨は、英語の文献を翻訳するなど、精力的に UFO・宇宙人について研究を行った。同団体では、実在する UFO・宇宙人の要件として、「接近目撃」、「円盤の偵察行動におけるパターン的一致」、「比較対照〈ママ〉による外見の一致」、「円盤の推進原理の憶測可能」、「円盤のいわゆる物理的効果」、「物理的証拠」、「写真」をあげている⁵³⁾。また高梨は貝塚事件⁵⁴⁾での UFO 目撃はトリックであることも見破ったと言われている⁵⁵⁾。

コンタクティーの存在には懐疑的で、1961年に宇宙友好協会（CBA）から「宇宙の密使」として日本に招かれて宇宙考古学の講演を行ったジョージ・H・ウィリアムス（唐沢 2007：117）に対して、「ウィリアムスのようなニセモノをまつり上げて、教祖扱いするとは、とんだお笑い草でお話にならない」と批判している⁵⁶⁾。

同団体は1997年10月に高梨が他界するまで存続しており、1950年代に設立された UFO 研究団体の中では一番長く活動していた。また彼の研究に続く者も数多くおり Kz. UFO 現象調査会の丹羽公三などが WEB を中心とした活動を行っている⁵⁷⁾。

また、同団体以外でも、UFO・宇宙人の存在については、雑誌『マヤ』（Vol. 13 1991 学研）で大槻義彦（早稲田大学理工学部教授）と P・A・スターロック（スタンフォード大学宇宙物理学研究所所長）による「科学は UFO を無視できない」という対決記事に11ページの紙面が割かれたこともあった。

② UFO・宇宙人存在の意義を問う人々

このグループの代表的団体は、荒井欣一によって1955年に設立された日本空飛ぶ円盤研究会 (JFSA) で、日本で最初の UFO 研究会である。

この団体には当時の多くの文化人が所属しており (唐沢 2007: 75-77)、機関誌発行、講演会、他団体との交流イベントなどを中心に情報を交換し、研究成果を社会に広めることを目的としていた、その活動は「円盤運動」と呼ばれ、次第に啓蒙団体的な色合いが強くなったとされる。サブカルチャー研究家の初見健一は、ここから派生した団体について「ほとんど思想団体、あるいは宗教団体的なものが多かった」としている (初見 2012: 200-201)。

しかし JSFA に集った文化人達も当初は UFO・宇宙人の存在を確認したいと思っており、三島由紀夫は自宅の屋根に小さな天文台を造り、仲間と毎晩円盤観測をしながら手を繋ぎ、「ベントラ、ベントラ、スペース・ピープル (UFO を呼ぶ呪文)」と宇宙に真剣に呼びかけていたという (唐沢 2007: 76-77)。

(存在が前提となっているグループ)

このグループでは UFO・宇宙人が存在することは前提になっており、彼らを崇拜の対象にする人々、人類の危機を知らせに来たと考える人々、地球に攻め入ってくると考える人々、人類の進化を促すためにやってきたとする人々など、その「飛来目的」を追求している。

③ UFO・宇宙人を神的に崇める人々。

UFO・宇宙人を神、もしくは神の使者だと崇める人々もいる。世界で最初のコンタクティーとされるアダムスキーは、宇宙哲学に基づく人類救済を目指すロイヤル・オーダー・オブ・チベット (「チベットの高貴なる騎士団」という宗教の教祖で、宇宙人とのコンタクトによって宇宙船内にて神的存在である「偉大なる指導者 (マスター)」と出会ったとされている (朝松 2016: 2520/3550)。

NASA の元職員であったトム・ジェームズは、それまでの体験から、地球も人類を創造したのは宇宙人であり、地球人にとっての神とは宇宙人であり、

その乗り物が UFO であることを示している (ジェームズ 2018: 12/32~13/32)。

これらの集団の中でも、「ハールボップ彗星に隠れてやってきた宇宙船」に乗り込み、高次の世界 (超越者の世界) へ行くとした宗教教団ヘブンズ・ゲートと、1997年に彼らが起こした集団自殺事件は有名である (唐沢 2007: 81)。

その他にも宇宙人を神、UFO をその乗り物という見方は数多くあり、オカルト雑誌『トワイライトゾーン』(139号 1987 KK ワールドフォトプレス) では「月は ET の前哨基地だった」という特集を組み、月の先住者を神々の正体とする記事を掲載した、またこの人々の中には聖書のいう神とは宇宙連合の最高責任者の尊称、キリストの再臨の雲とは UFO だと考える人もおり (楓月 1998: 3)、UFO や宇宙を神的存在として捉えている。

④ UFO・宇宙人は宇宙人が地球の危機を知らせるために来ているとする人々。

雑誌『ムー』(130号 1991 学研) では、「UFO 新時代の幕開け」と題した特集の中で「戦争、環境破壊、食料問題、貧困、民族対立 (中略) これらの問題を解決することによってはじめて地球人の本当の未来がある」、「同じ宇宙に生きる兄弟として異星人がわれわれを正しく導こうとしている」など、「環境問題に関する危機を宇宙人が知らせに来ている」とされており、また、将来地球に起こる大規模な地殻変動などの天変地異を知らせに来ているなど、その警告の種類は多岐に渡っている (唐沢 2007: 109-110)。

これらの問題を扱った中でも、「宇宙人からの救済を任命された」と自称する航空ジャーナリストの松村雄亮らによって1957年に設立された宇宙友好協会 (CBA) は急進的な団体であった。松村は自己を特別な存在だとし、自分のことを「サーティーン様」と呼ばせた (同上)。コンタクティーと連絡を取り合い、UFO 召喚の呪文「ベントラ、ベントラ、スペース・ピープル」を公開、UFO 関係者だけでなく興味を持つ一般人にも普及した (初見 2012: 205-206)。

CBA は最大時には数百人以上の会員を擁し、天変地異による地球の壊滅と、UFO・宇宙人によるそこからの救済、また救済を阻止しようとするゴースト

の存在などに言及した。CBA の言説に感化されて自分の土地を売り払って UFO に乗せて貰おうとする者や、「どうせ滅亡するならば勉強しても無駄だ」と授業を放棄する学生が出てくるなどの社会問題になり、マスメディアでも取り上げられた（唐沢 2007：112-114）。

また、CBA の会員には生長の家の信者が多くおり、後々谷口雅春を「ゴーストの使者だ」としたことにより、生長の家も巻き込んだ大問題にまで発展した（吉永 2006：254-255）。

CBA は1963年には北海道沙流郡平取町に土地を購入し、会員たちだけの手でライフラインも含め「UFO 神殿」を建造した。雑誌『SPY』（8月号 1991 KK ワールドフォトプレス）に掲載された写真を見る限り、かなりの巨大建造物であるが、地域との問題は起きなかったようである（唐沢 2007：119-121）。

⑤ UFO・宇宙人を人類に対する敵だとする人々。

オカルト雑誌に掲載された記事の中で最も多かったのが UFO・宇宙人を人類の敵だとするもので、「宇宙間戦争が起きる」、「人類はエイリアンに狙われている」、「この情報を公表したベネウイッツ博士は消息を断った」など危機をうったえて人々の好奇心を煽る記事が繰り返し掲載された⁵⁸⁾。

また宇宙人によるアブダクションは地球人の解剖実験のためだとして宇宙人の危険性が訴えられ⁵⁹⁾、これらも含め政府は UFO の飛来や情報を隠匿しているという隠蔽説・陰謀説も出回った⁶⁰⁾。

筆者が確認した限り、2000年以降には UFO・宇宙人に対する危機をうったえる記事少なくなっており、ほとんど見かけない。そんな中で UFO・宇宙人の来襲に危機感を覚える以下のような閣議答弁がなされているのは興味深い。

——政府は27日の閣議で、未確認飛行物体（UFO）について「地球外から我が国に飛来した場合の対応について特段の検討を行っていない」とする答弁書を決定した。

立憲民主党の逢坂誠二衆院議員が、2016年に施行された安全保障関連法で定める「武力攻撃事態」や「存立危機事態」に該当するかを問う質問趣意書を出

していた。（中略）

答弁書は「政府として（UFO の）存在を確認したことはない」「個々の報道について答弁は差し控えたい」とした。——（『毎日新聞』 2018年2月27日夕刊）

⑥ UFO・宇宙人が人類の進化のために来ているとする人々

一柳は『週刊プレイボーイ』（5月1日号 1990 集英社）の記事で取り上げられたチャネラー、エドワード・メイブへのインタビュー記事の中で、チャネラーが「イタコ」と対比され、アクセスする対象が死者の霊か宇宙意識かの違いだけだとされ、さらに「宇宙意識=宇宙人」が問題にされていることから、「この時点（1990年代—筆者註）で既に、概念としての『宇宙人』は一般化されている」としており、1970年代における宇宙人の存在の有無をめぐる問題設定自体がすでに無効化し、「70年代オカルトが『精神世界』に接続することで息を吹き返し、従来の情報を更新、再生しつつ特異な場を作り上げていくプロセスを見いだすことができる」としている（一柳 2020：221）。

実際に筆者が調べたところ、1978年には『The Meditation』（2号 1978 平川出版）の特集「精神世界のベスト100」の中で『宇宙からの訪問者』（ジョージ・アダムスキー 久保田八郎 訳 1976ユニバース出版社）が紹介され、また「UFO リーディング」と題した記事が『アクエリアス革命』（#004 1988 たま出版）に掲載されるなど、精神世界と UFO・宇宙人とを関連付ける記事が描かれるようになってきている。また、「スピリチュアルマガジン」と銘うった『たま』（85号 1993 たま出版）の中では、エドガー・ケイシー財団⁶¹⁾では UFO も精神世界に分類されているとし、「植物には宇宙意識が感じられるから UFO を認識できる」という内容の記事が掲載された。『たま』88号からは精神世界系の UFO・宇宙人に関するサークルの募集記事も掲載されはじめ、UFO・宇宙人と精神世界との関連性がより強まっているのが分かる。

また、初見は宇宙をキーワードに「宇宙意思を獲得する」、「宇宙の真実を知る」といった形で「宇宙と繋がる」運動が現れ、UFO と「精神性」が密接に

結び付き始めたとし、日本では80年代前後から瞑想やヨガの本とならんで UFO の本が精神世界の棚に並ぶようになったとしている（初見 2012：193）。

これらの中に出てくる UFO・宇宙人の特徴は、彼らは人類が次元上昇をするにあたって必要なことを教えにきたり、どうすれば宇宙意識と繋がることのできるのかなど、人類がより高次元に昇るための知恵を授ける存在として書かれていることである。

1・2 宇宙人と転生

UFO や宇宙人を人類の進化のために必要な知恵を与えるために来ている存在と捉えることから、UFO・宇宙人と精神世界がどのように接近したかについて一定の理解は得られるが、この場合の UFO・宇宙人は人にとってはあくまでも外的な存在である。しかし、UFO・宇宙人と精神世界の関係は、2章に記した「カルマを浄化するために転生を繰り返し魂のレベルを上げて宇宙意識（ワンネス）と一体化（融合）する」という精神世界の根本思想から考えると、「カルマが浄化し魂のレベルが上がった結果、前世が宇宙人であったことを思い出した」と主張する人がでてくるのは不自然なことではない。

転生ということだけに絞れば、堀江は WEB を使用した調査で『『前世の特徴』を見る（中略）83%が外国人である。つまり、体験談では異文化間輪廻が圧倒的に多い』という結果を得ており（堀江 2019：134）、筆者が聞き取りを行った中でも前世が宇宙人であったという事例に出会うことは希であった。

しかし、「前世が宇宙人だった人」については1999年頃から書籍が流通し始め⁶²⁾、その後解説書が続々と出版されている。前世が宇宙人だったとする人は、主に精神世界のリーダー的な存在や、技法伝授者に多い。たとえば保江は「僕はアンドロメダ星雲から来た魂で、銀河系ではシリウス星系宇宙センターのアシュタール司令官だった」としており（保江 2019：61）、また医師の松久正は自らを「宇宙のリーダー」であり「宇宙組織、宇宙の星の社会、プレアデス、シリウス（中略）彼らのエネルギーを私が全て書き換えています」（松久 2020：503/648）、「地球を良くするという役割を全うしたら、地球での私の人

生はこれで最後にしようと思います」（松久 2018：45/119）としている。

彼らは一般的にスターシード・インディゴチルドレン・クリスタルチルドレンなど呼ばれることが多く、概ね下記のように分類されている⁶³⁾。

① スターシード

過去世が異星人で、地球人の魂の進化のために使命をもって地球に来たが転生を繰り返しているうちに使命を忘れてしまった人のことである。彼等が持っている使命のことをライトワークと呼ぶ。

② インディゴチルドレン

転生後にスターシードを持つことを思い出した人々の中でも特別な能力に長けた人々。大人になると医者や科学者、エンジニア、弁護士、政治家などになる者も多いが、子供の頃には地球の環境にはあまり馴染めず疎外感を持つことが多い。ADHD（注意欠如・多動症）と診断されることもある。

③ クリスタルチルドレン

地球での輪廻のサイクルを卒業し、もう転生して学ぶことはないが「地球人の魂の向上のために」あえて地球に戻ってきた人々。転生して戻ってくる場合と、地球外から UFO で戻ってくる場合がある。

この他に転生のサイクルの中で「生命の書」の全ての段階を習得し、宇宙意思の片腕的な存在となった人は、アセンデットマスターやマスターティーチャーと呼ばれ、UFO 母船にて地球に来ているとされている。

スターシード（やインディゴ・クリスタルチルドレン）に目覚めた人は宇宙意識（や宇宙人）とコンタクトをとれる言語であるライトランゲージ（宇宙語）を話せるようになるとされており、これは一般人でも（すなわち宇宙人からの転生者や UFO で地球に来た人でなくとも）、精神世界のエネルギーワークの水準が一定以上になれば話せるようになるとされている。

UFO・宇宙人は現在では上述したように精神世界の中で転生や意識の上昇と関連して語られるだけでなく、本章の中の古神道や聖地とも合わせて語られており精神世界と密接な関係を持っている。

とはいうものの、一柳が指摘したように1970年代における「宇宙人の存在の

有無をめぐる問題設定」は無効化しているのか、また、過去世が宇宙人であったとする人は精神世界においてどのような指導をしているのかをはじめ、UFO や宇宙人を探求する人々についての実態については必ずしも明確ではない。

そこで、筆者が行った現地調査の中からこれらに関する事例を取り上げて具体像を明確にした上で分析をすることにした。

2 事 例

(1) 道頓堀 UFO 撮影会

【4J】(20代男性 兵庫県在住 自営業)、【4K】(50代男性 大阪府在住 日本 UFO 協会会長)

【4L】(60代男性 千葉県在住 UFO 撮影家 UFO コンタクティー)

現地調査 (2020年12月6日 場所 大阪府大阪市中央区)

——調査に至るまで

筆者が同会の活動を知ったのは、阪急電鉄の駅沿いに貼られていたポスターを見たことによる。ポスターには大きく「道頓堀 UFO 撮影会」と書いてあり、UFO 撮影成功率100% OVER という宣伝文言とともに、総合 MC の【4K】と UFO 撮影家【4L】の名前と連絡先電話番号が書いてあった。主催者が分からなかったが、注意事項として「マスクやフェイスガードをお願いします。日本 UFO 協会の会員様はマスクをお願いします」と書いてあったので主催が日本 UFO 協会という団体であることが分かった。

アポイントを取るために、ポスターに書いてある番号に何度も電話をかけたが、数日にわたってかけたにもかかわらず電話がつながることが無かったため、ポスターに書かれていた集合時間である13:00に現地に直接赴くことにした。

——参加者と合流

撮影の開始が13:00からということだったので、少し早めの12:40には道頓堀に着いて周囲を見渡していたところ、40代の女性がこちらへ近づいてきて

「撮影会参加の方ですか」とたずねてきた。プロの UFO 撮影家が主催者にいることや、UFO は高速で飛ぶ(と思われる)ことを考えて筆者はデジタル一眼レフカメラや望遠レンズ、一脚などできる限り機材を持ち込んでおり、それが目についたということだった。

女性は、「初めての参加者は久しぶり、【4K】さん紹介するからこっちに来て」と、MC の【4K】のところに筆者を案内してくれた。

【4K】は恰幅の良い男性で G パンに緑のポロシャツ、その上に真っ青なジャケットを着用していたが、何より目立ったのは胸に大きな銀色の十字架をかけていたことである。【4K】は、「今日は UFO が撮れるようにこの時間は晴れているねえ。お、装備もしっかりしとるなあ。しっかり良い写真をとって帰ってな」とにこやかに話してくれた。この日はもともと天気予報でも晴れだったが、【4K】の横にいたモスグリーンのダウンジャケットを着た60代の男性が「そりゃあ、使命を全うするために集まったんだから当たり前」と言っており、精神世界と何らかのつながりがあるのかと考えた。

【4K】が「彼も初参加でゴっつい装備やで」と20代の男性を紹介してくれた。男性は「【4J】です」と自己紹介をしてくれ、兵庫県からこの撮影会のために装備をバイクに積んできたということであった。そこでこちらから声をかけ、初参加同士一緒に行動することにした。

【4J】に「UFO に興味があったんですか」と尋ねたところ、特に UFO に興味があるわけでもなく、精神世界にも興味がないという。そこで理由を尋ねると、【4J】は人間関係が苦手で、派遣社員として清掃業をしていたが、コロナ禍で契約更新ができずに仕事がなくなってしまった。ちょうど趣味で撮っている写真がカメラ雑誌のコンクールで入賞したのをきっかけに、自営業でバイク便を始め、同時にクラウドを通してカメラマンの仕事を買えるようになったという。今回の撮影は「多分オカルトマニアばい人からだと思う」と、今回の参加がクラウド経由の仕事であることを明かしてくれた。

——撮影会の開始

【4K】が MC ということだったので、この撮影会には何らかの司会進行があるかと思っていたが、「これから呼ぶわー」という【4K】の声に反応して、道頓堀沿をデジカメやスマホで撮影していた男女50人くらいが集まりはじめた。

集まってきた人々は20代後半～50代くらいまでで、中には筆者のようにデジタル一眼レフを持って来ている人もいたが、多くがコンパクトデジタルカメラかスマホで、筆者が「本格的な撮影会ではないのか」と呟くと、【4J】は「ほんまにそれっすね。でも中にはガチ勢もいますよ」と教えてくれた。【4J】は仕事としてカメラを扱っているだけあって、機材に詳しく、何人かについて「あの人、レンズだけで60万くらいするやつ使ってますよ」など教えてくれた。

印象的だったのは、集まってきた人は皆マスクを着用していたが、「ほなそろそろ始めるで」と【4K】が言った後にすぐにマウスシールドに着用しなおしていたことである。【4J】がいうには、「一応『マスクの繊維や籠もった息がカメラに入らないように』というのが建前なんでしょうけれども、マウスシールドでもあんまり変わらないんですよ本当は」と話しながらもマスクからマウスガードに着用し直していた。

しかし、撮影が始まると会員がマスクからマウスシールドに変えた理由が分かった。【4K】が手を宙に伸ばし、その横で【4L】が何か祈りをささげていたので、UFO が現れたらそれを撮影するのかと思っていたが、「あっちらへん」という声に合わせて全員がとにかく、移動を繰り返しながら、場合によっては小走りしながら、とりあえずシャッターを切っていた。

一応、方向の指示に従って移動し続けて適当に空を撮影し何かそこに写っていたら【4K】の所にもって行って判別してもらおうというのが、この撮影会の通常らしく、筆者も【4J】も走り回ったが、マスクしかもっていなかった筆者は酸欠寸前になった。

——UFO の判別

それらしい物体が写っていれば【4K】のところへ持って行ってそれが UFO かどうか判別してもらおうのだが、筆者のカメラには何も写っていないため

【4K】の所へ行き、写真の判別を受けている人の写真をのぞかせてもらったところ、【4K】は雲らしきものを指して「これ、これな。これが UFO やけれども、多分〇〇型 UFO やな」とそれが UFO かどうか、どんな種類の UFO かの説明をしており、会員は熱心にそれを聞いていた。

——撮影者たち

筆者はこの UFO 撮影会がサークル活動のような趣味の撮影会で、撮れた写真を見せ合ったり、互いに UFO について談義したりするものかと思っていたが、【4K】と会話をしている会員を除けば、会員同士が話している様子もなく、ほぼ個人行動で筆者と【4J】が、会話をしながら撮影をしているのが珍しく見えるくらいだった。

撮影は17:00までということだったので、ある程度撮れたら【4K】や【4L】からの話が聞けるものかと思っていたが、【4K】に写真を判定してもらった会員は UFO が写っていると判定をもらった者から順番に帰って行き、15:00にはほとんど人がいなくなってしまった。

——会員の活動

どうやらこの日はイベントとしては大イベントで、『大阪スポーツ』の記者も取材にきており（後述）、流れ解散ということになっていたらしい。入会すると200人の会員のグループ LINE と、小さなグループ LINE に分かれており、普段は小さなグループで「UFO の存在を証明するための」撮影会や仲間内の研究会をしているということだった。

入会を勧められたが、【4J】は入会したものの筆者の方は入会せず、【4J】と連絡先を交換して、【4J】の方から何かあれば連絡を貰うということにした。

——取材記事

12月12日に【4J】から「LINE に流れてきた」と『大阪スポーツ』の記事を送ってもらった。内容は「まさかの宇宙人もコロナ感染!？」と題した記事で、「コロナは宇宙人にもうつる（衝撃!）」ので一時 UFO の飛来が減りましたが、

彼ら是对応策を見つけた」という【4L】のコメントが掲載されていた（『大阪スポーツ』2020年12月8日）。

——日本 UFO 協会と精神世界

一柳がいう「存在の有無をめぐる問題設定は無効化」としている点について、この団体では確かに UFO の存在は前提とはなっているが、UFO の存在を証明するために活動するグループが存在している以上、「UFO の存在を信じない人がいる以上は、UFO の存在が問いとして設定できるのではないか」という印象を受けた。

また撮影会と『大阪スポーツ』の記事から筆者は、同協会と精神世界には接点はなく、1・1①②（UFO・宇宙人の存在を科学的に探求し、その意義を探求する）に該当する人々が集まっていると感じた。

しかし、12月17日に【4J】から、「なんか、あそこスピリチュアルにもつながっているみたい」と LINE が送られてきた。内容は「宮崎～別府周航☆船釣り&温泉&スピリチュアル観光ツアー☆に行きましょう♪」というもので、11名のグループで「スピリチュアルスポットで UFO 撮影」、「釣り船」、「別府温泉」へ行くというものだった。確かにコンタクティーと精神世界関係者の間には「未知との存在との交流があった」という共通点があるため、WEB で日本 UFO 協会や【4K】ではなく、「【4L】 コンタクティー」、「【4L】 スピリチュアル」などのキーワードで検索したところ、精神世界関係者のブログがいくつか見つかった⁶⁴。

とはいうものの、【4L】が自主的に精神世界的な発言をしているものはなく、記事の内容からは精神世界関係者が【4L】の体験を聞いて、アセンションや宇宙意識との意思疎通について自分の思想を深めるという内容がほとんどで、日本 UFO 協会と精神世界との接点は見つからなかった。また【4J】からはその後も同協会の「スピリチュアル」と冠したイベント内容が送られてはくるが、全て「スピリチュアルスポットで UFO を撮影しよう」という内容のもので、精神世界と UFO が密接に関係を持ち、聖地で UFO を見たという記事のプロ

グが多くアップされていることから、「聖地には UFO が頻繁に飛来するので、撮影しやすい」と、あくまでも UFO を撮影することが目的の人々が集まっていることが分かった。

(2) 六甲山頂 UFO 交信会

【4H】（30代男性 愛知県在住 会社員）他4名
現地調査（2017年6月10日 場所 兵庫県神戸市 六甲山頂付近）

——UFO 交信会への誘い

本章3節（精神世界と聖地）では聖地のエネルギー解放を使命とした【4H】を紹介した。彼は、そのための力を高めることや次にどこに向かうのかを知るためには、宇宙や違う次元との交信は欠かすことができないものだという。そのため、別次元との交信のためのエネルギーワークを行っており、「宇宙語が話せるようになってきた」という連絡を受けた。ただ、「まだ1人では話せないで、今度兵庫県に UFO や異次元との交信と基地を探しに行くので一緒に参加しないか」ということだった。

宇宙語が話せたり UFO・宇宙人との交信会に参加するなど、かなり精神世界の技法者としてのレベルがあがったのかと思ったが、「自分のエネルギーワークレベルはやっと1になった」と言い、まだまだ駆け出しだからこそ、今回の UFO との交信や基地探索は自分の訓練として必要ということだった。そこで筆者は【4H】が案内してくれた交信会に参加することにした。

【4H】は、便宜的に「UFO 交信会」と呼んでいるが、【4H】によれば特別な呼称はなく、毎回固定のメンバーで交信会が行われており、【4M】（40代男性 精神世界関連事業者）を中心として活動しているということだった。

【4M】は精神世界では有名な男性で、自らの正体をプレアデス人だとしている。【4H】から聞いた話では、【4M】は重病を患い余命宣告をされたにも関わらず、宇宙意思との交信でエネルギーを受け取ることに成功して全快した。その際に自分がインディゴチルドレンであることを思いだし、会社を辞めて精

神世界サロンを経営するようになったという。

【4H】によると、「複数人一緒に集まるのが、UFO・宇宙人とのコンタクトを取るためには重要」ということであった。

また、UFO・宇宙人との交信と同時に基地を散策する目的をたずねたところ、「六甲山全体が UFO の巨大母船」ということで、そこから漏れてくるエネルギーを得ることによって波動を高め、異種の生命体（植物や鉱石など）との交信力を高められるということだった⁶⁵⁾。

——午前中の交信

交信会は【4H】と【4M】（40代男性）と30代女性、40代男性2人の合計5人で行われた。5人は六甲山頂上付近に集まり、手をつなぎ宇宙語で UFO を呼び始めた。【4H】は「まだ1人では話せない」と言っていた通り、しばらくは手を繋いだまま黙っていた。

交信の後半になってやっと【4H】は宇宙語で話しはじめ、最終的には全員が UFO と交信をすることができた。

筆者には UFO は見えなかったが、【4H】は「UFO は確かに来ており（宇宙語で）話せば話すほどその交信が深まっていった」という。また、「飛来した UFO に乗っているのはプレアデス系かシリウス系の宇宙人」ということだった。

宇宙語が最後に話せた理由について【4H】は、「複数人がいた場合、誰かが宇宙語で交信を始めることができれば、その交信によって UFO より得たエネルギーが手を繋いでいる仲間にも流れ込み、それぞれが交信できるようになっていく」と述べ、「そのために複数と一緒にいることが重要」と言った。

——基地散策

午後からは UFO の基地を搜索した。搜索方法は登山客などに「くぼみ」やそれらしいところを教えてもらい、そこまで歩いて行って波動測定機⁶⁶⁾を使って確認するという方法をとった。

数時間山中を歩き回った後に3箇所それらしき場所を発見したが、波動測定

機には反応があったものの、地中に埋まっており中に入ることはできなかった。しかし「UFO には物理的な出入り口は必要ない」ので、次回はその地点を中心に搜索を行うということで散策は終了した。

——夜間の交信

夜になると異次元生命体との交信を行うことになった。交信方法は基本的に午前中と同じだが、午前中のワークによって受け手側が「より自然の波動を感じやすくなっており交信しやすい状態にある」ということであった。

この日【4H】が交信した異次元生命体は川の水の中にある「何か」だということで、【4H】は「自分のレベルがまだ低いので、相手の言葉のリズムは分かって、何を伝えているのかまでは理解することはできなかった」という。

【4H】によると UFO や異次元生命体との交信は、自らのエネルギーを引き上げ、魂のレベルを地球の次元上昇に合わせていくためには必須ということだった。

——交信会と【4H】の当面の目的

交信会の目的は UFO・宇宙人との交信だが、交信の目的は「より高次元存在」が乗っている UFO・宇宙人との交信を通じて、「自分の魂のレベルを地球の次元上昇に合わせていくため」とされている。

【4H】個人の目標は、先ず宇宙語を1人でも話せるようになり、「自分に課せられたライトワークを、しっかりとこなせるようになることが目標」ということであった。

小 括

UFO 交信会に参加した【4H】や主催者の【4M】は、上述の1・1⑥（UFO・宇宙人が人類の進化のために来ているとする人々）に該当し、精神世界と強い関係を持っている。

本章3節で紹介した【4G】も自分のことをプレアデス星人であると言っていた。UFO や宇宙人が人類の進化のために来ているとか、前世が宇宙人だった

とする人は現実に存在し、【4M】も【4G】も「交信会の主催者」、「エネルギーワーク」の指導者という立場におり、やはり前世が宇宙人であったとする人は精神世界のリーダー的な存在や技法伝授者に多いと考えられる。

一方見逃してはならないのが、1・1①②（UFO・宇宙人の存在を科学的に探求し、その意義を探求する）に該当する人が依然として残っていることである。【4K】は撮影者にどのような写真が本物の UFO の写真であることを示し、その飛び方や特徴を教えており、また【4L】は新聞の中で UFO の飛来理由について述べている。

さらに、閣議答弁書の内容から読み取る限りは、1・1⑤（UFO・宇宙人を人類に対する敵だとする人々）に該当する人も一握りであっても残っていることがうかがえる。

確かに現在 UFO・宇宙人は精神世界との関係で語られることが多いが、依然としてオカルトの文脈で語られることもあり、この関係は本章1節で述べた一部の心霊主義と精神世界の関係に似ている。純粋な心霊主義は精神世界と距離を置いているが、精神世界側は心霊主義をその中に取り込んでしまっている。この両者と、UFO・宇宙人を扱う人々の違いは、オカルトとして UFO・宇宙人を扱う人は「撮影場所としてスピリチュアルスポットを選ぶ」など、精神世界を利用しており、精神世界に対して距離を置こうとしていない点である。

心霊主義と UFO・宇宙人を考える際に押さえておくべき共通点は、精神世界側はこれらを根本思想の中に取り入れて再解釈しているにもかかわらず、依然の文脈も消滅せずに残って残っていることであろう。

6節 精神世界とサブカルチャー

サブカルチャーと精神世界には用語や概念での共通点が多い⁶⁷⁾。しかし、サブカルチャーが精神世界関係者に影響を与えているかどうかについては、単に同じ用語や概念がサブカルチャーで利用されているだけなのか、何らかの形でサブカルチャーが精神世界に影響を与えており、その入り口になっているのかについては、明らかにはなっていない。

1 これまでの研究

サブカルチャーと精神世界の共通点を論じる上で重要なのが転生観である。精神世界において重要な位置を占めている転生観がサブカルチャーと精神世界では非常に似通っている。小笠原英晃は前世・転生をテーマにした少女マンガ『ぼくの地球を守って』（日渡早紀 1986年-1994年白泉社）が1986年以降に当時の若い女性の前世観に影響を与えたとしており、これを「日本のスピリチュアルムーブメント」の流れの1つに入れている（小笠原 2019：256-257）。本作では異星からの転生者が主人公となっているが、精神世界でも異星からの転生という概念は存在している。彼等は「スターシード」と呼ばれ（本章5節）、日本では2000年頃から話題にされるようになった⁶⁸⁾。その概念自体は古く1856年にはカードックが高級霊との対話の中で異星からの転生について問答を行っている（カードック 2006：80-87）。これと良く似た概念として異世界転生や、中矢伸一が主張する並行世界という概念も精神世界・サブカルチャーの共通の中心的世界観となっている（中矢 2014：129-137）。また、用語や使い方に関する共通点も顕著で、筆者が行ったドキュメント調査では、「SF・超常現象・ファンタジー・精神世界」の全479用語中78.9%がこれに該当した⁶⁹⁾。

しかし、これだけではサブカルチャーが精神世界への入り口になっているとは言えない。堀江は精神世界に関わった4人の若者から聞き取りを行い、「ファンタジーの影響力は相当に強い」としながらも、「彼らは宇宙人や魔法など存在しないという見解を十分に承知した上で、それを“信じている”」としている（堀江 2011：162）。また、堀江はファンタジーの中で中心的に扱われる魔法について、「サブカルチャーにおける『魔術』への関心の高まり」について、SNSを通して「『スピリチュアル』に関心のあるユーザーと継続的に交流しながら」観察を行い、彼らについて「実践魔術への関心がまったくないわけではない。たとえばスピリチュアルの延長上で占いに関心を持ち、その中で占星術やタロットに関心を持つと西洋近代魔法につながる」としている。

しかし、彼らにとって「魔術的なものへの関わりは、あくまでも『リアル』な世界に持ち出してはいけない（このタブーを冒すと『中二病』と嘲笑され

る)」ため表向きには虚構・趣味だと装っており、彼らにとってサブカルチャーは本当に虚構なのか、リアルなものであるのかについては「理論的に突き詰めると決してシンプルには答えられない問いである」と結論づけている(堀江 2019: 233・269-271)。

一方、大田俊寛は『幻魔大戦』と新新宗教 GLA の関係に言及し⁷⁰⁾、「日本とスピリチュアル」の関係について、複数のアニメ作品に含まれる神智学的な霊的進化論がサブカルチャーの領域で当たり前のように浸透し、人を魅了してきたと指摘している⁷¹⁾。精神世界側にも両者の関係について、「精神世界とか宗教を、どんどんアニメ、漫画に取り込んだ結果、世界の神学構造は、身近なところに投影されていく」(松村2012: 33)と両者を関連付ける者もいる⁷²⁾。筆者が精神世界関係者に対して行ったアンケート調査では「あなたがスピリチュアルに興味を持ったとき、アニメやマンガ、ゲーム、ライトノベルなどが好きでしたか?」という問いに対して「はい」44%、「いいえ」28%、「分からない」28%という結果を得ている⁷³⁾。

しかし、神智学やスピリチュアリズムが新新宗教である GLA に影響を与え、精神世界もこの両者を包含しているということだけでは、サブカルチャーが精神世界の入り口になっている理由とはならない。松村の説が精神世界を代表するともいえず、精神世界に興味をもった時にサブカルチャーに興味を持っていたことが、サブカルチャーが精神世界に入る原因になったとするには論拠に乏しい。

一方、堀江が行った対象からはそのサンプルに限って言えば実態に即した状況が見える。その調査対象である若者は、精神世界については「秘密主義」であり(堀江 2011: 163)、また継続して関わってきた SNS ユーザーは精神世界に「関心のあるユーザー」(堀江 2019: 242)であった。筆者はこれとは逆に調査対象を「スピリチュアリティ文化の担い手」である中高年(堀江 2011: 159)や、現在も精神世界関係者であることを「隠していない若者」にすることで、状況の補完と分析ができると考えた。

2 事 例

(1) アニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」を通して統合思念体・並行世界と接触

【4N】(20代男性 兵庫県在住 学生)

聞き取り(2017年1月14日)

——【4N】の背景

【4N】は2006年にアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」を見たことで、生活の変化が始まったと言う。【4N】はどこから聞こえてくるか分からない声のようなものを受け取るようになった。最初【4N】は、その声について家族に相談したが、とりあってもらえずしばらくは声を無視するようしていた。

無視していると声の間隔が開くようになり、そのうちほとんど聞こえないようになっていた。しかし、高校に入ってからより鮮明に声が聞こえるようになったという。「このままでは(進学など)自分の進路に支障をきたす」と考えた【4N】はその声と向き合い、それが何かを探ることにしたと言う。ネットで調べたり様々な著書を読んで、並行世界やタイムリープ(時間の巻き戻し)などの概念が存在することを知った。そのとき【4N】は、ふと2006年にみたアニメを「もう一度見直そう」という気持ちになり、レンタルしてきたDVDを何度も見返しているうちに、まずは自分に語りかけられる声に従うことが重要で、作品の舞台となったところへ行けばより鮮明に声を受け取ることができ、「自分の使命が開かれる」と確信できたという。

そこで【4N】は進路を同作品の聖地とされる場所に近い兵庫県西宮市の大学に決め、「当然」入学することができた。【4N】の友人は「彼はアニメの聖地に憧れてこの大学に入学した」と言うが、本人はそう思っておらず「確かに努力はしたが、それはそうなるように決まっていたから入学できた」とする。【4N】は、それは統合思念体の意識操作によって決定されていたとしており、自分の生き方はその意識によって既に決まっていたとした。

——アニメ聖地と並行世界

【4N】は西宮市が同作品の「聖地」になっていることを当然知っている。

しかし、【4N】はそうなった理由を、統合思念体の意識によって並行世界が作られた結果だとしている。「原作者がいるのはどう説明するのか」という筆者の質問に対して、「原作者は並行世界の存在を分からせるために、無意識に統合思念体に作品を書かされた」としていた⁷⁴⁾。【4N】は、自分は本来は並行世界側に生まれるはずだったが、「意識」が働いたことによってこちら側の世界に生まれてきたのだと言う。しかし、その使命が何なのかはまだ示されておらず、作品に出てくる場所を訪ね歩き、そこで意識との繋がりを強くすることが必要だとする。

また、【4N】はそのために大学1年生を2回やっていると言ったが、実際には【4N】は留年しておらず、それについて訪ねると、「タイムリープ現象が起きて自分はもう1度1年をやり直している」ということだった。「使命が全て開かれるまでこれ（タイムリープ）は何度も繰り返すだろう」と【4N】は当たり前のように語っていた。

——統合思念体と宇宙意識

統合思念体は同作品に出てくる設定であるが、これと精神世界の宇宙意識には違いがあるのかと尋ねたところ、【4N】は、「全く同じもの」とし、自分にとっての入り口がアニメ作品の中で統合思念体と呼ばれていたのでそう呼んでいるだけで宇宙意識と呼び変えても問題はないとしていたが、「自分が使用する際には統合思念体という言葉を使うように指示されている」ということだった。

(2) ハルヒウォーク「涼宮ハルヒの憂鬱」のゆかりの地を尋ねて

【4O】(40代女性 兵庫県在住 精神世界関連事業者 健康アドバイザー)

【4P】(50代男性 兵庫県在住 自営業)

【4Q】(50代男性 兵庫県在住 会社員)、他6名。

現地調査(2020年11月3日)

——企画背景

【4O】は栄養指導のための潜在意識の書き換えに、勾玉セラピーという技法を用いている。【4O】は特にサブカルチャーに興味があった訳ではないが、いつも掃除をしている神社で勾玉の形をした石を拾い、掲示板を見ると神社内の掲示板に「涼宮ハルヒのスタンプラリー」のパンフレットを見つけた。ラリーは終了していたが、気になって作品を観たところ、自身の技法に使用している統合思念や勾玉セラピーで使用している図象、描かれている世界観と自身の世界観があまりにも似ており、「もしかしたら作中の舞台は何かと繋がっているのではないかと考えてイベントを企画した。

当日は、精神世界関係者だけでなく原作者の友人である【4P】や、アニメーション制作会社勤務の【4Q】など、筆者も含めて9名が参加した。【4P】によれば原作者本人もこれに興味をもっていたが、新刊の「執筆が遅れているために今回は見送りにする」ということであった。

——企画趣旨

企画自体はいわゆる「聖地巡礼」なのだが、一般的なアニメの聖地巡礼がアニメの背景を探して写真を撮ると言う「アニメファンが勝手に行き行って満足して戻ってくる」(鈴木 五十嵐 岡本 2016:39-40)ものなのに対して、この企画の訪問先は、先に述べたパワースポットのな場所として、精神世界関係者が中心となって決められたものである。

原作者の友人からみても、同作品の聖地は他のアニメの聖地と違う点がいくつかあるという。【4P】の話では、アニメ化にあたっては制作会社側の作画監督の方が映像化する場所を次々と決めていき、むしろ原作者には「西宮を聖地にする意図は全くなかった」そうである。また、【4P】は「行政は当初全くブームを利用する気が無くむしろ迷惑がっていた」という。実際に西宮市では、作品中で重要とされている場所が次々と移転、閉店、取り壊されており⁷⁵⁾、行政が同作品に関する企画を行ったのは2012年の夏頃ということで、作品終了後から6年が経過している。

また当時の制作会社の動向を知る【4Q】によれば、原作が持ち込まれてから

の制作会社の対応は通常作品よりも熱が入っており、作画監督が何度も現地取材を行って 映像化する場所を決め、同じ場所を何度も歩き、作中に出てくるマーク（【40】が勾玉と関連づけたもの）のデザインも何度もやり直させたことなど、「再現性よりも感受性重視で作業が進められていたように思う」ということだった。制作会社や作画監督がどのような意図でそうしたのかについては、同監督らが亡くなっているため、聞き取りの申し入れをすることはできなかった⁷⁶⁾。

——イベント当日

【40】はこの企画前に下見でいくつかの場所を訪れているが、「アニメ化されたから聖地になったのではなくて、何かのパワーがあるから聖地として選ばれたのではないか」という。この企画には精神世界と関係のない2人（【4P】・【4Q】）とは逆に、同作を知らない精神世界関係者（【40】の友人50代女性2人）にも含まれていた。

最初に「症状」が出たのはこの女性らで、舞台となった高校の給食室前の通りを歩いているときに「何かマイナスのエネルギーを感じる」と言い、「ちょっと気分が悪い」ということだった。【40】と【4Q】が作品との関連を調べると、作中ではこの場所で主人公が襲撃されており⁷⁷⁾、偶然の一致に2人とも驚いていたが、【40】らは「もともと負の力が働いていたからここが舞台に設定されたのだろう」としていた。

また、正門前で撮影した写真を昼休みに確認したところ、筆者や【4Q】・【4P】が撮影した写真は普通に正門が写っていたが、先の「感じた人たち」が撮った写真には全てフレアやゴーストのような光の帯が映り込んでいた。フレアやゴーストはレンズを使った撮影で写真やその周りに写り込む光やカーテンのような光などである。このような巡礼地だけでなく、神社などのパワースポットでも映り込むことがある。

堀江はこれらについて、『『不思議な光』としてパワースポット特有なもの」とらえる記述をよく目にする」とし、精神世界関係者のブログについて、光学

的な説明を知っている者でも意図的に通常のフレアとは違う不思議な現象だと解釈するとしている（堀江 2019：202-203）。

この現象について彼らがどのように受け止めているのかについて質問したところ、【40】の友人のうち1人は「そんな霊とか天使が写るわけありません。専門用語はよく分かりませんが、光学的な現象であるのは間違いありません」とした上で、「どうしてそれが聖地で撮影できるのかということの方が大切」、「誰でも簡単に撮れるならばスピリチュアル関係者は自分でパワースポットを作り出せてしまう」とした。また【40】は、「それと同じ場所、同じ時間、同じスマホのカメラを使っても人によって違う光の写真が撮れる」とっていた⁷⁸⁾。

【4P】が、「作画監督らがそういうこと（精神世界的なこと）を意図していたとは聞かないが、まあ何かあったのかもな」と軽く言ったところ、【40】の友人は、「いや、ここは高波動を感じるので（宇宙意識と）繋がっている」と断定していた。

その後、甲山森林公園へ移動した。この付近は元々シャーマンの修行場で龍脈が走っており⁷⁹⁾、何らかの体験をする人がいるだろうと予測はしていた。筆者には体験できなかったが「妖精がいた」、「木が手を振ってくれた」、「龍が昇っていくのを見た」など様々なことが起き、全てがアニメで映像化されている場所と一致していた。

——イベント終了後

終了後、筆者と【40】、及び【40】の友人2人の4人が残り、喫茶店へ入って談話をした。【40】の友人らは、「作品があって聖地があるのではなく、何かと繋がっている場所だから作品の舞台に選ばれたに間違いはない」と口を揃え、【40】もこれに同意していた。勿論【40】らは、周りはそうは見えていないことを知っており、「次回の企画では原作者からの意見も聞いてみたい」としていた⁸⁰⁾。

3 現地調査を終えて

「超越的な意識・並行世界・未来からの意識移動（タイムリープ）」など、【4N】はそれを誰にも隠しておらず、【4N】にとって同作品で起きていることは（並行世界で起きている）現実である。一方【4O】らは同作品と宇宙意識の繋がりを確認するための企画を立ち上げた。【4N】が作品の中に生きているのに対して【4O】は外側からアプローチをしていることになる。しかし、「精神世界と重なる場所が実在している」とする点で、両者は共通している。

これに対して同じサブカルチャーと関係した精神世界関係者でも、第3章3節で取り上げた【3P】はネットゲームを通じてからヒーラーとしての使命に目覚めたものの、ネットゲームは自分の技法を試す場所ではないとして、そこに何かの意味を見いだしてはおらず、精神世界の根本思想に触れることよりも、自分の技法を向上させるための場所だった印象が強い。そういう意味では【4N】や【4O】らにとって彼の地が聖地であると受け入れるに値する場所であるのに対して、【3P】にとってのネットゲームは自分の技法が試せる場所の1つではない。

筆者はこれまで、用語の共通性やアンケート調査による量的研究から、太田が指摘するように、精神世界に関する用語が当たり前前に浸透した結果、単純接触効果が高まり（宮本 太田 2008：6-10）、精神世界を容易に受け入れられる下地をサブカルチャーが作ってきた部分大きいと推察してきた。

【0B】は、「実際にはじめての人にオーラの話をしてもらうとすぐに受け入れられる」ことを例にとってそれ（単純接触効果）は十分にあり得るとしつつ、「もうスピリチュアルをスピリチュアルと呼ばない時代に突入している」と言う。【0B】によれば「サブカルチャーそのものがスピリチュアル」で、「今のJ-POPにはUFOや霊、宇宙や未来からの通信という言葉が普通に入っている。（【0B】が若い頃には）アーティストが曲にそんな歌詞を入れていれば、キワモノ扱いされる時代だったが、今の若者はそれを聴いて普通に感動して涙を流す。習わなくても宇宙意識を知っている時代が到来している」と続けた。

堀江は、「今後のスピリチュアリティの行方をどう見ているか」と問われて、

「特定の世代とはあまり関係のない『サブカルチャー』として定着していくのではないかと」言っており（堀江 時田 2020：142）、【0B】が言っていたことはこれを具体的にあらわしていると言もいえる。

小 括

堀江の調査からは、サブカルチャーの世界について「虚構、趣味だと装わなければならない」人の姿を見ることができた。そして第3章3節の調査結果は、サブカルチャーが単にツールとして使用されているケースととらえることができる。また、本章の現地調査からは、サブカルチャーの世界を「現実に繋がれる世界が描かれている」として受け入れ、それを隠していない人たちの姿を見ることができた。

そこで、これまでの研究と今回の事例を含めて精査してみることにした。まず、今回の事例及び3章3節の【3P】の事例を図にすると下記ようになる。

（表4-1 筆者が作成）

	根本思想の有無	サブカルチャーは精神世界に触れるきっかけになったか。	サブカルチャーは自分の思想にどの程度関連しているか。
【3P】	×	○ ネットゲームをしていなければヒーラーになりたいと思っていない。	△ 関連性はあるが、思想的ものより技法を試す場所。
【4N】	◎	◎ アニメを通じて何かが聞こえ、アニメを手がかりに精神世界に触れる。	◎ 舞台背景のパラレルワールドにある自分の使命を与えてくれるもの。
【4O】	○	× 精神世界関連事業に従事していく中でたまたま触れた。	○ 集合意識(宇宙意識)への気付きを与えてくれるもの。

◎大きく関係 ○関係あり △関係性はあるが薄い ×関係性なし

表4-1から、精神世界の根本思想を持っている【4N】や【4O】は、「サブカルチャーを自身の（精神世界における）使命と何らかの関係あるもの」として受け止めていることが分かる。

また堀江の調査では、現在「スピリチュアル・ブーム」から離れて、「愛を学ぶための孤独な努力」をひっそりとしている若者（20代女性）が紹介されているが（堀江 2011：116-119）、彼女は堀江が整理した「インタビュー結果の項目別整理」の「スピリチュアル・スピリチュアリティ観」において、「魂

の成長と関心、高次元とのつながり」をあげており、また「スピリチュアルに関心をもった経緯」の項目では「宇宙人との遭遇、ファンタジーへの興味」をあげている（堀江 2011：156-157）。

堀江の調査内容からは、この女性が現時点においてサブカルチャーと接点があるかどうかは不明だが、筆者の顔見知りの高校の養護教員（20代女性）に堀江のインタビュー対象のようなケースの場合その後どうなるかを聞いてみたところ、「きっかけになったものはその人の中でポジションは変わっても何らかの形で続いている」と分析していた⁸¹⁾。

いずれにしても、精神世界の根本思想を持っている人は、「中高年か若者か」、「隠しているか、いないかに関わらず」、サブカルチャーとの間に親和性が高いと言えよう。

現在、宗教・オカルト・心霊関係の用語など精神世界で使われる用語がサブカルチャーに入り込んでいることだけではなく、サブカルチャーに出自を持つ用語や概念が精神世界で使われるようになっており⁸²⁾、精神世界とサブカルチャーは両者が互いに影響を与えながら、精神世界の根本思想の中で1つになりつつあるとも考えられる。

これは、精神世界について【0B】が「サブカルチャーそのものがスピリチュアル」とった言葉や、堀江の、「特定の世代とはあまり関係のない『サブカルチャー』として定着していく」（堀江 時田 2020：142）という言葉通りにはいかないように思えるが、【0B】も堀江も、誰もが精神世界に触れやすくなっていくという意味でこのように言っており、広義の精神世界関係者が増えることを示唆していると考えた方がよい。

そして、精神世界の根本思想を持っている者からは、サブカルチャーが「入り口」になったかどうかにかかわらず、サブカルチャーは精神世界の一部として受け止められているのではないだろうか。

7節 精神世界とその他の周辺分野

精神世界に隣接している分野は前節までにあげたもの以外にも様々存在する。

CD や動画によるヒーリングや意識開発、「人を全体から診よう」とするホリスティック医療、精神世界の現象を説明するのによく用いられる量子物理学、マクロビオティックをはじめとする健康食、パワーストーンやオルゴナイト⁸³⁾など「物づくりや物販」も周辺分野の1つである。

1 周辺分野の現在

1・1 音楽療法

音楽療法は本来医学領域の分野で、「現在の意味での音楽療法が発展したのは第二次世界大戦後で、欧米で傷病兵士の慰問やリハビリテーションに音楽が用いられたのがきっかけ」とされている（佐藤 2018：422/2354）。医師の佐藤正之⁸⁴⁾は、音楽療法を患者自身が歌唱や演奏を行う「活動的音楽療法と」、音楽鑑賞による感動や身体に生じた変化を治療の契機として用いる「受容的音楽療法」との2つに大別し、さらに後者を、精神活動を刺激する「刺激療法」、音楽聴取により患者の感情を誘発し表出させる「精神分析的な心理療法」、リラクゼーションを達成することにより、患者が自己とその状況を客観的に眺められるように援助する「弛緩訓練的音楽療法」に分けている（佐藤 2018：398/2354-422/2354）。この受容的音楽療法の延長線上にヒーリングや潜在意識を引き出す CD・動画は位置するが、作成者によってこれに対する姿勢は違う。

【4R】（60代男性 兵庫県在住）は、音響工学の専門学校を卒業した後に会社員をしていたが、40代になって「この世における自分の役割、宇宙の中にある自分」について考え退職した。現在【4R】は「振動によるヒーリング・潜在意識を引き出すサウンド CD や動画」の開発販売や宇宙意識と神社との繋がりに関する講演等を中心に活動している⁸⁵⁾。

一方、同じようにヒーリングや潜在意識に関するサウンド CD を開発している【4S】（40代男性 東京都在住）は、精神世界と関係を持つとしていない。【4S】は音楽大学を卒業後にオーケストラで指揮者をしていて、あるときオーディオで音楽を聴いているときに幽体離脱を経験し、音楽と霊的なものの関係に興味をもって実験をするようになった。この幽体離脱の実験中に意識研究を

している事業家と出会い、同人が新しく立ち上げる「『水と音と意識の研究所』の音部門の責任者にならないか」と誘われたので、オーケストラを辞め、研究施設の責任者となった。【4S】は作曲もできるが作曲は人に任せ、編曲と実際のサンプリングや収録を中心に行っている。これらの作業は「自分の意識が入らないようにする」ことや使用する電源（太陽光発電によるものが一番良いという）に左右される重要なもので、「曲・周波数・供給される電源・天候」など、収録の環境によって完成した CD の内容が変わるため、【4S】の興味は専ら「その違いがどう CD に反映されるか、どう人に影響を及ぼすか」に向けられていた。仕事について【4S】は「オカルトっぽいですね、でもそもそも CD 自体もオカルトです」と笑っていたが⁸⁶⁾、本人は精神世界については知識もなく、「興味を持つこともないだろう」ということだった⁸⁷⁾。

1・2 ホリスティック医療

身体だけでなく、心や霊性、環境まで含めた全体的な視点で人間の健康を考えるホリスティック医療の分野では、一般社団法人日本スピリチュアル医学協会の講習会で、学術研究者による前世研究のデータが公開されたり⁸⁸⁾、医師が開発した「障気を祓う術式や障気除去スプレー」が公開されたりしている。筆者が同席した研究会では、医師やコ・メディカルだけでなく、ヒーラー系の精神世界関連事業者も同席し、活発な意見交換がなされていた（現地調査 2019年7月27日 大阪府）。

また、同じく医師らによって設立された NPO 法人日本ホリスティック医学協会では、機関紙に精神世界の技法を紹介するだけでなく、ブース出典型の大型精神世界イベント「癒しフェア」の無料招待券が会員に送られるなど⁸⁹⁾、精神世界との距離は縮まっている⁹⁰⁾。

この両団体の機関紙を読んでいて気づいたのは、「持病の状態が緩和した」など治療に重点を置いて書かれている記事と、精神世界の根本思想に通じる技法が書かれている記事が混在しており⁹¹⁾、「ホリスティック医療」という分野の中でも狭義の精神世界に関心を持つ人とそうでない人が混在していることが

分かった。

小 括

上述したようなことは、これ以外の分野でも同じで、食事療法⁹²⁾に対して「身体を浄化しより宇宙意識と繋がれるように」と考える人もいれば、単に「健康な生活ができるように」と考えている人もいる。パワーストーンやオルゴナイトを「意識を浄化してより宇宙からのエネルギーを入れる」ためのものだと考えている人もいれば、単に御守りや魔除けの感覚で付けている人もいる。筆者はこれを1つの分野の中が分裂してきたとはみなさず、精神世界が根本思想を軸として周辺分野とのリンクをより強め、その一部としており、第1章で述べた「リンク切れからくる霊的輻湊」から再編へと向かっているのではないかと考えている⁹³⁾。

8節 総 論

これまでの研究結果と現地調査・聞き取りから、精神世界と周辺分野との関係において、「何らかの形で精神世界とリンクさせる人」と「精神世界と接触を持つとしない人」がいることが分かった。

筆者は、両者が別れる理由について検証するために、本章の事例で扱った霊的・超常的な体験をした人々を「精神世界の根本思想の有無」、「霊的・超常体験の種類」、「精神世界への接触の有無と理由」、「現在の活動」の項目ごとに分けて表4-2を作成した⁹⁴⁾。

1 精神世界に触れる人

表4-2から読み取れるように、精神世界に接触した7人のうち、根本思想を持っている人は6人で、その全員が精神世界に触れた理由に、「自分が生きている意味や自分の使命の探求」などをあげている。

つまり「生きている意味、使命の探求」などからその分野に入ってきた人は、精神世界の中で自分の生きている意味を再構築され、根本思想を軸とした体系

(表 4-2 筆者が作成)

	根本思想の有無	霊的・超常的体験	精神世界への接触 その理由	現在の活動状況
【4C】	×	叔父・友人の幽霊との遭遇。霊障	× 現状を受け入れ	コ・メディカルとして勤務
【4E】	×	霊による電子機器への干渉	× 現状を受け入れ	
【4F】	×	聖地での浄化リーディング取得	○ アトピー治療のため	化粧品販売会社経営
【4G】	◎	過去世体験が宇宙人であった	◎ 自分が霊感体質であることへの疑問	精神世界関連事業者 エネルギーワーク指導者
【4H】	◎	靈感。声が聞こえるUFOや宇宙人との交信	◎ 自分が霊感体質であることへの疑問	会社員をしながら自分の使命を果たすために、エネルギーワーク等を実践
【4K】	×	UFOとの遭遇	× 興味はUFOのみ	日本UFO協会会長
【4L】	×	UFOとの遭遇 宇宙人と直接出会う	× 興味はUFOのみ	コンタクティーとして講演会などを行っている
【4M】	◎	宇宙意識と交信し 不治の病が全快	◎ 自分の過去世を 思い出し使命を求める	精神世界関連事業者 UFOとの交信指導など
【4N】	◎	アニメを通じて何か の声を受信する	◎ 自分への声の正体 の究明と使命を求める	
【4O】	○	聖地での霊体験 何かの意識への働き	○ 親族の病や食事 療法を通して生きる 理由について考える	精神世界関連事業社 健康アドバイザー 潜在意識の書き換えなど
【4R】	○	何かに語りかけられる 感覚	○ 宇宙の中で自分 が生きる理由を求める	音響・振動に関する研究 宇宙意識に関する講演
【4S】	×	幽体離脱	× 興味は音楽とそれ に関する実験のみ	「水と音と意識」に関する 研究所、音部門責任者

の中に組み込まれたということになる。

逆から言えば、そこに目的を見いだしている人や、「自分がいる位置に納得できている人は精神世界には触れない」ともいえる。このことは本章以外の事例にも共通している。【4C】と【4E】が苦しい霊体験をしているにもかかわらず、境遇に納得しているから精神世界には関わらないのは顕著な例である。同じ分野においても、精神世界の根本思想に触れる人とそうでない人が存在する理由といえよう。

この、「自分がいる位置に納得できている人は精神世界には触れない」ということは、第3章で残した問いである「なぜ教会内で様々な問題が起きてても、カリスマ第3グループに触れた人の大半は棄教することなく、『キリスト教』の中に留まっているのか」という問いの答えにもなる。

「なぜ生きているのか、自分の使命は何か」という問いに対して、明確にその意味が「教義」として与えられており、かつ現世における現実的な回答とそれを可能にするための技法が与えられている。この点では新新宗教と同じだが、カリスマ第3グループは第3章で述べたように、(教義の範囲内で)より個人主義的な信仰の持ち方を認めている。これは第3章で述べたようにカルト的な牧師を生み出すこともある反面、実は「誰でも教会を建てられる」という部分にも繋がっている。

第3章で論じたように、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の教勢がゆるやかに落ちた反面、単立カリスマ教会の増加は著しく、「3人-4人集まれば教会を建てる」ことも珍しくない⁹⁵⁾。これについては、「実際はデータの入手ができないのでデータには反映できないが、キリスト教人口は減っているかもしれないが教会数だけでいえば実際は増加の一途ではないか」ということだった(2021年4月22日東京基督教大学国際宣教リサーチセンター担当者への聞き取り)。

そのため組織に束縛されることなく「解答を持ったままで」自分に居心地の良い場所を探すことができ⁹⁶⁾、手探りで生き方を探す必要性がないのである。

2 探求者としての精神世界関係者

一方、精神世界には根本思想はあっても、「宇宙意識に繋がったり、魂のレベルを上げて霊的に進化するためにどうすれば良いのか」という問いに対する共通の認識や正解が記された経典のようなものは存在しない。それゆえ、精神世界は様々な技法や思想が存在し、また周辺分野を体系的に取り込んで変容し続け、人々は到達点を目指してそれぞれに試行錯誤を繰り返す探求者となっていくように思われる。

この個々が探求者であることが精神世界関係者のネガティブな面を反映してしまっていることは否定できない。その内実は第2章の事例で見た通りである。しかし逆に探求者であるがゆえに、内側から精神世界の現状に疑問を持つ人々も出てきているのである。

一見ネガティブな面が強調される精神世界ではあるが、檜尾直樹は、「スピリチュアリティの定義を提示」するにあたり、その特徴の中に超越性や利他性を含めており、精神世界関係者の利他的行為についても指摘している（檜尾 2010：37-47）。三木英も、精神世界関係者を、時代や社会に囚われている現状に覚醒し、自らを癒して本来の自己へと意識を進化させて、更には他者・自然・宇宙と調和することを望む人々だとした上で、同じテーマに価値を見いだした人々は単独に留まることなく相互につながるとして、これを「スピリチュアリティ探求者群」と名付けた（三木 2014：46-47）。

とはいえ、これまで三木の示したような精神世界関係者らは表に出て来ておらず、三木も「現在どれほどのスピリチュアリティ探求者群が国内に活動するのか、それを確認することは一この『集団』の性格上一極めて難しい」（三木 2014：47）としており、精神世界関係者が利他性を持って集まることについては、既に先行研究において議論されていたものの、筆者の知る限り、実質的な検証はできていなかった。

しかし、筆者は、現地調査を続けていく中で、2017年頃から廃神社寸前だった場所を「聖地として復興するため」、またそこを「維持・管理するため」、といった特定の目的のために、精神世界関係者が集まり、かつ地域社会からも受け入れられつつあるというケースを複数確認することができた。

なぜ、「個人主義」、「共同行為という理念を尊ばない」と言われる彼らが、個人主義に留まらず集まって活動し、地域社会から受け入れられつつあるのか。次章ではここまで述べてきた近年の精神世界の動向をふまえた上で、現地調査結果を分析し、これらを明らかにしていきたい。

1) 福来友吉は1928年に(財)大日本心霊研究所を設立(寺沢 2004：305)、浅野和

- 三郎は1922年に現在の(公財)日本心霊科学協会の前身である心霊科学研究会を設立している(松本 1989：170)。
- 2) 現地調査「癒しフェア2018 in OSAKA」(2018年3月10日)。
 - 3) 詳細は巻末資料①を参照。
 - 4) 施術者が相手の心身の状態や人間関係などを読み取る技法(日本神霊学研究会 2019)。
 - 5) イギリスの『サイキック・ニュース』誌編集者に1920年に降霊したとされる、霊界の指導的立場にあるとされる高級霊(日本神霊学研究会 2019：166)。
 - 6) 江原は、精神世界ではなく心霊研究の出身で、スピリチュアリズムの簡約版をスピリチュアルと定義付けていた(江原 2003：51-52)。
 - 7) 正確にはニューエイジの転生とスピリチュアリズムの再生には違いがあるが、詳細については本論文では割愛する。
 - 8) ドキュメント調査(『心霊研究』2019年4月号～2021年3月号)。
 - 9) ドキュメント調査(スピリチュアリズム普及会 1996：198-201)など。
 - 10) 津城寛文の発表による(「無きものとされた近代知——心霊研究の諸事実と諸説明」2020年9月19日、日本宗教学会第79回学術大会)。
 - 11) 武富健治 2015『狐筋の一族秘境と因習編』Kindle(太陽図書：14/73)にて確認。
 - 12) 「公益財団法人日本心霊科学協会にて発表!」2016年6月27日(<http://senntenn.jp/blog/2016/06/27/>) 霊泉館(日本霊能者協会)閲覧日2021年3月10日。
 - 13) Google 検索「(霊能者名)池田小学校事件」38100件「(霊能者名)震災予知」14300件、霊能者名で検索451000件(2021年3月11日検索)。
 - 14) 同じような自我を持つ靈魂の集団を指し、グループ内の靈魂と靈魂は互いに感応し合うとされる。
 - 15) 詳細は巻末資料⑤を参照。
 - 16) 電子機器や電波と霊についての関係については、奥野も死者からの電話やメールを例にあげて「電波と霊体験に親和性でもあるのか、携帯電話にまつわる話が多い」(奥野 2020：61)としている。
 - 17) 清田益章は超能力者として少年時代からテレビに出演し、注目を集めていた(堀江 2019：173)。
 - 18) 1986『現代用語の基礎知識』(自由国民社)。
 - 19) 古史古伝・超古代文書であるカタカムナを解説し、カタカムナ文献を世に出したとされる研究者(寺石 2010：1)。
 - 20) 研究会における吉永進一の発言による(「戦後のオカルト流行と『日本神学』」2021年2月28日)。
 - 21) 詳細は巻末資料⑥を参照。
 - 22) 詳細は巻末資料⑦を参照。
 - 23) ツーリズムの文脈で語られることが多い場所であっても、精神世界関係者が集まっている場合は現地調査の対象としている。
 - 24) 堀江はブログの調査から、「待ち受けにすると恋愛運がアップ」するとしている

- (堀江 2019 : 230)。
- 25) 本当の自分をブロックするもの(牧野内 2017 : 292-371/674)を取り除く技法。
 - 26) 資料提供 NPO 法人心髄研究会 SEW (2019年7月14日)。
 - 27) 『私』が『わたし』であるために～スピリチュアル&セラピーマルシェ』2019年7月14日』アンケート『『スピリチュアル』・『精神世界』の可能性について、希望があると思われる分野は?』有効回答数33 (<https://www.facebook.com/npo.sew/photos/pcb.566170357245601/1297221227120021/>) NPO 法人心髄研究会 SEW Facebook (閲覧日2021年3月11日)
 - 28) 菅田 (1985 : 24)、大宮 (2004 : 94/2602・200/2602)、山陰 (2010 : 6/2493)
 - 29) 博士(理学)。
 - 30) ワンネスは自分と分離しておらず、自分の中にも存在するという考え方。トニーバーンズ (2017)、中野真作 (2016) など。
 - 31) 超古代に存在した愛と調和で満ちた理想社会。
 - 32) 国立国会図書館サーチ (<https://iss.ndl.go.jp>) 閲覧日2021年2月26日。書籍流通ポータルサイト「HonyaClub」(<https://www.honyaclub.com>) 調べ、閲覧日2021年2月26日。
 - 33) 国立国会図書館サーチ (<https://iss.ndl.go.jp>) 閲覧日2021年2月26日。
 - 34) 鎌田は(鎌田 2003 : 56) の中で「私自身は根っからのスピリチュアリスト」と述べている。
 - 35) 序章で示したように、本論文では大谷 (2019 : 157) にならい、研究を目的とし、その結果を論じたものを文献、個人や組織がその他の目的で記したものを文書(ドキュメント)として分けている
 - 36) GoogleChrome ツール(期間検索)を使用(2021年2月23日)。
 - 37) 精神世界関係者の多くは、自然に宿る神(精霊)を宇宙意識からの分霊としたり、神社の社や境内を宇宙へのゲートや UFO の飛来場所として、魂のレベル上げを助ける存在と捉えたりしている。
 - 38) GoogleChrome で越木岩神社と入力すると、予測変換でスピリチュアルと表示され、「越木岩神社 スピリチュアル」で検索すると90件以上のヒットがある(2021年2月17日検索)。
 - 39) 筆者が16世紀-17世紀における大地震について調べたところ、1596年に M7.5の地震が起きているが、1644年頃に地震があったとの記録を見つけることはできなかった。
 - 40) 神社の由緒書には「神社の創始は、600年-700年頃と推定される」とされている。
(<https://www.koshikiwa-jinja.jp/koshiki>) 閲覧日2020年4月10日。
 - 41) 神楽町、神垣町、神園町、神呪町など。
 - 42) 大地を流れるエネルギー流の噴出口の連なり。古代遺跡跡どうしが繋がっていることが多いとされる。
 - 43) 安倍晴明のライバルとされる呪術師。
 - 44) これは西宮市の WEB ページでも確認できる (<https://www.nishi.or.jp/shitsumon/>)
 - shiseijoho/shinogaiyo/symbol/shisho.html) 閲覧日2021年3月2日。
 - 45) カタカムナ文献はカタカムナ文字という古代文字を橋崎卓月が解説し、カタカムナ文献として世に出したとされている(寺石 2010 : 1)。また橋崎は船井幸雄の提唱するパワースポット論「イヤシロチ」についても言及している(寺石 2010 : 13)。
 - 46) 作家・占術家・精神世界・神社参拝専門家 (<https://hagahikaru.com>) 閲覧日2021年3月2日。
 - 47) スピリチュアルブロッガー。ソウルメイトと輪廻の関係をはじめ、守護霊などについての解説もしている(桜井 2019 : 766/2566-888/2566)。
 - 48) エンタメ観光マイスター (https://www.mlit.go.jp/kankochu/topics05_000108.html) 2021年3月2日。
 - 49) スピリチュアルカウンセラー (<https://ameblo.jp/namikiyoshikazu>) 閲覧日2021年3月2日。
 - 50) オカルトと精神世界を厳密に分けるのは難しいが本論文においては、1970年代前半の日本において「霊魂、UFO、超常現象などの『不思議なできごと』を『研究』すること」という通俗化されたもの(一柳 2020 : 189)とオカルトを定義する。
 - 51) UFO 搭乗員と接触したと主張する人物(羽仁 2001 : 18)。
 - 52) UFO や異星人に目撃者が意に反して誘拐される事件(羽仁 2001 : 11)
 - 53) 『天文と気象』(10月号 1962 地人書館 : 11)。
 - 54) 1958年に貝塚市の中学生が撮影した UFO の真贋に関する事件。
 - 55) 『科学朝日』(9月号 1959 朝日新聞社 : 120)。
 - 56) Kz. UFO 調査会「サンデー毎日1961年(昭和36年)9月記事“私は宇宙の密使です” CBA G. H ウィリアムスン」(<https://ameblo.jp/kz0222/entry-12303797139.html>) 閲覧日2021年4月21日。
 - 57) Kz. UFO 現象調査会 (<https://ameblo.jp/kz0222>) 閲覧日2021年3月8日。
 - 58) 「スターウォーズ(星間戦争)かそれとも平和共存か」『トワイライトゾーン』(161号 1989年 KK ワールドフォトプレス) / 「今、アメリカでは何が起きている!? エイリアン情報漏洩事件に揺れる UFO 研究界」『ムー』(110号 1990 学研) など。
 - 59) 「UFO人間誘拐事件の謎」『ムー 59号』、1985年、24頁～51頁。
 - 60) 「墜落 UFO 48年目の真実——対 UFO の地球防衛組織がある」『ムー 171号』、1995年。「極秘文書 M ファイルが警告する NSA の恐るべき陰謀計画!」『ムー 206号』、1998年。
 - 61) リーディングの開発者であるエドガー・ケイシーの没後、米国バージニア州に設立された。現在日本には同財団公認の NPO 法人である日本エドガー・ケイシーセンターが存在する。
 - 62) 「HonyaClub」(<https://www.honyaclub.com>) 調べ、閲覧日2021年3月10日。
 - 63) 用語の説明について参考にした書籍は『こうしてアセンションしよう』(ドクターテリー・サイモンズ&アシュタールプロジェクト 2011 徳間書店)、『あなたはいまスターシードとして目覚める』(パトリシア・コーリ 小林美香訳 2011 徳間書

- 店)。『ピュア・インディゴ&ピュア・インディゴクリスタルの子供たち』(アニ・セノフ 石原まどか訳 2015 ヒカルランド)、『精神世界の教科書』(松村潔 2012 アールズ出版)。『宇宙語で遊ぼう!!』Kindle (ゆうわ 2018 Amazon)。
- 64) 無限の宇宙と繋がっていく【アセンションと覚醒の旅】(<https://ameblo.jp/sympathy777/entry-12511164230.html>) 閲覧日2020年3月9日など。
- 65) 本章4節で聞き取りを行った【4I】も「六甲山付近自体が UFO の基地」と語っていた。
- 66) 高エネルギーの波動を感知すると反応する器機。
- 67) 用語事典やライトノベル・コミックやアニメ関係からの文書調査による。
- 68) GoogleChrome ツール (期間検索) を使用、「スターシード」で検索 (2021年3月12日検索)。
- 69) 比較は、『神秘オカルト小辞典』(1984 バーナード・W・マーティン C+F コミュニケーションズ訳、たま出版) に収録された479語を中心に、北山篤『ゲームシナリオのためのファンタジー事典』(北山篤 2010 SB クリエイティブ)、『ゲームシナリオのための SF 事典』(クロノケープ著、森瀬繚 監修 2011 SB・クリエイティブ)。『ファンタジー用語事典』(小谷真理 監修 2015 辰巳出版)、『クリエーターのための SF 大事典』(スタジオ・ハードデラックス著 高橋伸之 監修 2013 ナツメ社)、『超常現象大事典』(羽仁礼 2001 成甲書房)。『スピリチュアル用語辞典』(春川栖 編 2009 ナチュラルスピリット)、『精神世界の教科書』(松村潔 2012 アールズ出版)、『スピリチュアル事典』(武藤悦子 2011 主婦の友社)、『SF 事典』(横田順彌 1977 広済堂)、『超常現象の事典』(リン・ピンクネット 編著 関口篤訳 1994 青土社) などを用いた。
- 70) 平井和正によって1979年から『野性時代』誌に連載された長編 SF 小説。1983年にアニメ化された。同作は GLA の教主、高橋佳子をモデルにしたと言われている (井上 1985: 12)。
- 71) 東洋経済 ONLINE 「なぜ人間はオカルトにハマってしまうのか?」大田俊寛 2013年8月23日 (<https://toyokeizai.net/articles/-/18156?page=2>) 閲覧日2021年3月13日。
- 72) 同著の中で松村潔は「この世界の神学構造」という言葉を精神世界全体を指す言葉として扱っている (松村 2012)。
- 73) 詳細は巻末資料⑧を参照。
- 74) 実際、原作者は単に自分が住んでいたところが使いやすいので舞台にしたにすぎない (原作者友人【4Q】50代男性からの聞き取りにもとづく2020年11月3日)。
- 75) 例外として、作品の中心であった時計台は2009年に取り壊されたが、ファンの声を受けて2014年に再設置されている。
- 76) 2019年7月18日の「京都アニメーション放火事件による」。
- 77) 映画「涼宮ハルヒの消失」(2010年)。
- 78) 本章5節で記したが、筆者もそれなりに光学機材は揃えており、意図的にこれらの写真が撮影できるか実験を行ったが、実験の成功率は極めて低かった。確かに特定の場所の方が撮影しやすかったが理由は不明である。
- 79) 西宮市自然の家職員 (男性40代) への聞き取りにもとづく (2016年12月28日)。
- 80) 【4Q】が「次は原作者も呼んでくる」と言っていたことを受けての発言。
- 81) 聞き取りにもとづく (2021年3月16日)。
- 82) 例をあげると、現在の精神世界において使用される「異世界」、「異世界転生」は、「異界」から派生したサブカルチャーを出自とする言葉である (goo 検索「異世界」<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E7%95%B0%E4%B8%96%E7%95%8C/>) 閲覧日2021年3月16日など。
- 83) 天然石や金属片などを配列し、レジン樹脂で様々な形に固めたもので、ポジティブなエネルギーを発したり、場を浄化したりする。
- 84) 博士 (医学) 神経内科専門医、認知症専門医、内科認定医。
- 85) 【4R】への聞き取りにもとづく (2020年12月12日)。
- 86) 【4S】はデジタルをアナログに変換する一番重要な部分に関しては、根本的な仕組みは解明されていないという。なお、CDの開発者である土井利忠 (元 SONY) は精神世界関係者で、天外伺朗のペンネームで100冊以上の精神世界関係の著書を執筆している (国立国会図書館サーチ <https://iss.ndl.go.jp> 閲覧日2021年3月19日)。
- 87) 現地調査 (2020年3月19-20日)
- 88) 中部大学教授・バージニア大学客員教授 大門正幸による。
- 89) 機関誌『HOLISTIC News Letter』Vol. 108にはブース出展型精神世界イベント「癒しフェア2020 in TOKYO」(2020年11月22日-23日)の無料招待チケットが同封してあった。
- 90) 現地調査 (2019年7月27日)。
- 91) ドキュメント調査『HSMA』Vol. 1-5 (一般社団法人日本スピリチュアル・医学研究会 2015-2019)、『HOLISTICNewsLetter』Vol.100・103・105・106・108 (NPO 法人日本ホリスティック医学協会 2018年6月・2019年6月・2019年10月・2020年6月・2020年10月)、『HOLISTIC MAGAZINE』2020-2021 (NPO 法人日本ホリスティック医学協会 2020-2021)。
- 92) 食事療法と精神世界との繋がりに関しては『超健康のコツ』(船井幸雄 2001 ビジネス社) に詳しい。
- 93) アカデミックな分野とのリンクはまだ進んでいないが、先に紹介したように大門正幸 (人体科学) が「海外のスピリチュアル研究」と題して過去研究のデータ発表を精神世界関係者がいる場所で行うなど、学術分野によってはリンクは回復しつつある (現地調査: 2019年7月27日)。
- 94) なお【4A】・【4B】・【4I】(体験者としてではなく解説者として聞き取り)、【4D】(【4C】の友人で当事者ではない)【0A】(体験事例は2章に掲載されている)【4I】・【4P】【4Q】(イベント自体への関心で参加。霊的・超常的なものに最初から関心なし)は括弧内の理由により対象外としている。なお記号の意味は6節に同じ。
- 95) これには「一定の条件を満たせば教団や牧師の推薦状が無くても入学できる」神学校の存在も関係していると思われる。

- 96) 第3章でも述べた通り、霊的指導者さえ見つければキリスト教として起教すらできる。

第5章 精神世界の新潮流——靈性にかんする協働組織

序 説

第2章の後半では、精神世界に疑問を持つ人々や新しいイベントを模索する人々など、精神世界に新しい潮流が生まれつつあることを示した。

第4章の最後でも述べたが、筆者の調査では2017年頃から、「放置された神社を聖地に復興するため」、「聖地までの林道を整備するため」、「活動地域との交流やまちづくりに参加するため」、さらには「精神世界の技法をもって何かを社会に還元するため」といった特定の目的を共有して精神世界関係者が集団で活動し、かつその活動が地域社会から認知されつつあるというケースをいくつも確認している。

彼らは、個々人では靈的進化論、魂のレベル上げ、宇宙意識とのつながりなどの精神世界の基本思想を持ちつつも、自分の為だけでなく特定の目的のため「利他的な行為を積極的に行おう」としている。

このように目的を同じくする部分において協働行為を行っている点で、「利己主義で自己充足的」であることが特徴とされてきた精神世界関係者とは違っており、筆者はこの態様から、これらの人々の集まりを「靈性にかかわる協働組織」¹⁾と名付けることにした。

本章では彼らの全体像・構成・活動等について現地調査の記録をもとに検証を行い、精神世界の中で新しく起きている動きとその背景について明らかにしていく。

1 調査対象とした協働組織

筆者はこれまで多くの多くの協働組織にかんして現地調査を行ってきたが、本章ではそのうち、2021年5月の時点で調査を継続している4組織と、1度のみ現地調査を実施した1つの組織の、合わせて5組織を取り上げる。その理由は、これらに精神世界の新たな潮流が読み取れるからである。

継続調査を行っているのは、「一般社団法人たまや」(世話人【5A】岡山県津

山市 調査時期2018年10月-2021年5月現在)、「大杉神社を守る会」(世話人【5H】とその妻【5I】滋賀県彦根市 調査時期2019年7月-2021年5月現在)、「特定非営利活動法人 心髄研究会 SEW」(代表理事【5R】発起人【50】、業務執行理事【0B】滋賀県東近江市 調査時期2018年6月-2021年5月現在)、「禊カフェ」(世話人【5W】兵庫県西宮市 調査時期 2020年8月-2021年5月現在)で、「レムリア会議」(世話人【5Y】、【5Z】北海道札幌市)へは、遠距離でかつコロナ禍ということもあり、1度のみ調査となった。このうち NPO 法人心髄研究会 SEW については、設立準備委員会の発足以降は参与型の調査を行っている。

「禊カフェ」については、調査開始時期がコロナ禍と重なっており、新型コロナウイルスそのものに対する独自の見解を発信するイベントもいくつかあったが、本章では普段の活動を中心に記載するようにした。また、1回のみ調査となった「レムリア会議」にかんしては世話人からの聞き取りにもとづいて活動内容を記している。

2 協働組織の世話人

これら5つの協働組織に共通するのは、いずれの組織にも世話人は存在するがその役割は主として案内人や連絡係であり、強力なリーダーシップによって運営がなされているわけではないという点である。

例外的に NPO 法人心髄研究会 SEW は発起人・代表理事・業務執行理事がそれぞれ役割分担をしているため、誰を世話人とするかは難しい部分があるが、同組織自体が普段は会員・役員とも自由に活動し、NPO 法人として活動する場合にも会員からの提案を総会・理事会で諮った上で活動を決めており、一部の重要事項²⁾、を除いて会員主導の法人運営がなされている点で、やはりトップダウン形式の運営ではない。

3 協働組織と地域社会

また、彼らの活動は、程度の差はあれ地域社会から受け入れられつつあると

いう特徴を持っている。地域の神社を中心とした、一般社団法人たまや、大杉神社を守る会、禊カフェの3組織にかんしては、協働組織と関係する神社だけでなく、神社の近隣住民との関係も良好で、また NPO 法人心髄研究会 SEW は主たる事務所の近隣住民との関係だけでなく、NPO 法人として特定の他の公益団体や地域行政との関係も良好である。レムリア会議については時間をかけての調査が十分にできていないが、活動拠点となっている宗教施設のある地域の自治会と合同の清掃をしていたということである。

地域社会とのこのような関係は、精神世界関係者と社会との間には懸隔があるとしてきたこれまでの研究には見られなかった点である。

1 節 一般社団法人たまや

—所在地 岡山県津山市加茂町

一般社団法人たまや(以下 たまや と記す)は、2017年11月に設立された一般社団法人で、設立時の登記情報によると³⁾、「神社の広報及び管理、神社地域及び周辺地域の整備」などを主な目的としている。

1 協働組織の成立経緯

登記情報に「神社」とあるのは、岡山県津山市のサムハラ神社のことである。このサムハラ神社は、パワースポットとしてネットで取り上げられることが多くなって以来、訪問者のマナーの悪さが目についていた。観光客が持ち込んだゴミがそのまま放置されていること、神社に常駐管理者がいないため環境整備に手が回らないことや、施設の老朽化などが問題になっていた。この現状に対し、世話人をしている【5A】(50代女性 岡山県在住)が、パワースポット探索で何度もこの地を訪れていた精神世界サロン経営者の【5B】(40代女性 東京都在住)に声をかけたところ⁴⁾、【5B】もこの現状を憂いており、「具体的にこの場所を守る活動をする必要がある」という話になった。

【5B】はもともと東京都でサロンを経営していたが、霊障のような症状で体調を崩し、守護霊に、「都心部の邪気を吸収しすぎなので、空気の良いところ

で自身を浄化してくるように」と告げられたという。その際、夢の中で山中の神社が浮かび、そこがサムハラ神社であると分かったので、津山市に引っ越してきたという。それから【5B】は、サムハラ神社へ通うことが日課になり、体調は回復へ向かったが、サムハラ神社には特別な参拝の仕方があるということを知り、それを知りたいとずっと思っていたという。

【5A】と会うことによって、【5A】からサムハラ神社での参拝の仕方などを教えられた【5B】は、インターネットで精神世界関係者に神社の情報と現状を伝え、保護活動への協力を呼びかけた。また同時に【5B】は、サムハラ神社の案内人として【5A】をブログで紹介した。その結果、それまでバラバラにパワースポット巡礼に来ていた人々が、徐々に神社の環境保護活動に参加するようになり、境内でサムハラ神社に降り注ぐエネルギーについての勉強会や、神社の清掃なども、行われるようになった。

この活動は精神世界関係者の中で賛同を得、定期的に奉仕活動に集まるメンバーは60名を超え、2016年11月に「たまやファンクラブ」が結成された。

たまやファンクラブの会員は日程を決めて神社の清掃や整備、補修のためのボランティアを行い、支援金も募った。支援金が一定額以上集まったため、会員の提案で2017年11月22日、一般社団法人として登記がなされた。

2018年の西日本豪雨では、この協働組織のクラウドファンディングによって、倒壊した施設の修繕のための費用の大半が拠出されている。

一方、「浄化による高波動との縁を結ぶ集い」、「エジプトのエネルギーを受け取るためのエネルギーワーク」、「宇宙のゲートを開くための講習」などの、精神世界の思想にもとづくイベントも定期的に行われている。

最初の聞き取りで【5A】は、「自分が好きなのは神様ごとで⁵⁾、神社の案内と正しい参拝の仕方を教えることが自分の役目」だとしており、「チャネリングやエネルギーワーク、ヒーリングなどを教える役割は【5B】やその関係者にある」としていた(2018年10月9日【5A】への聞き取り)。

たまやでは、サムハラ神社に複数回参拝に来ていることと、この神社をなんらかの形で支えていこうという志を持っていることが入会条件となっており、

入会後は独自の連絡網に登録される。

2 活動拠点について

たまやや岡山県津山市にあるサムハラ神社奥宮(写真5-1)を活動拠点としている。サムハラ神社といえば、「持ち主の身を守る指輪」で有名になった大阪市のサムハラ神社を指すことが多い。本論文で取り上げている「サムハラ神社奥宮」は、津山市観光協会によれば、大阪市のサムハラ神社の建立者である田中富三郎(1868年生)が、津山市加茂町の出身で、ここを熱心に信仰していたことから、サムハラ神社の奥宮として扱われるようになった。しかし、津山市のサムハラ神社が奥宮と呼ばれ始めたのはここ4、5年のことで、事実関係については不明な点が多い⁶⁾。

サムハラ神社奥宮は、加茂町にある金刀比羅神社の敷地内にあり、ここに祀られるサムハラ大神は、宇宙の森羅万象を創造したといわれる「天御中主大神・高御産巢日大神・神産巢日大神」(造化三神)の総称であるが、精神世界関係者の間ではなぜか「サムハラ龍王と呼ばれる天の叢雲、九鬼武産龍王が祀られ、覚醒の波動をもたらす」と紹介されている⁷⁾。

【5B】によれば、2004年に現在の場所に移築され、2010年頃に斉藤一人⁸⁾がここを参拝してから、口コミで徐々に精神世界関係者の訪問者が増え始め、2014年頃からはブログで、「ピラミッドと時空が繋がった」、「宇宙語が話せるようになった」と紹介され、「エジプトのエネルギーを受け取ることができる場所」とも言われており、境内の聖域の地下はシャンバラ⁹⁾に通じているという。

【5A】によれば、この神社の参拝の仕方は他の神社の2礼2拍手1礼とは違い、3礼3拍手1礼が正しく、そうでなければ参拝したことにならず、また、参拝の後の1ヶ月以内に願い事がかなえられたか否かにかかわらず、お礼の参拝に来なければ2度と耳を傾けて貰えなくなるということだった。

(写真 5-1 筆者が撮影)



3 世話人と精神世界

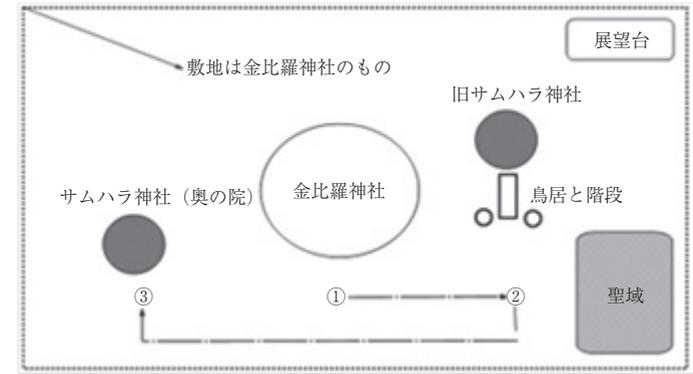
【5A】は、岡山県津山市加茂町に住んで50年になる。生家は造り醤油屋で、たまやの名称はそこに由来する。一時期は中学の教員として岡山市に出ていたが、数年後に加茂町に戻って来て、暫くの間、自宅で塾を開いていた。

特に霊体験は無かったが、子供の頃から金刀比羅神社境内にあるサムハラ神社に親近感を覚えており、「自分の神様」として参拝を欠かすことはなかった。通学時も、遠回りをして参拝してから学校に行ったり、犬の散歩に行く際も必ず一旦は立ち寄って参拝したりしていたという。

子供の頃から正義感が強く、曲がったことが大嫌いで、自分と無関係であってもいじめやサボリなどの不正を見ると介入し、大事になることもあった。そのような性格であったため、特に神社の訪問者のマナーが低下していることには、人一倍怒りを感じていたようである。

齒に衣を着せぬもの言いで、参拝作法が違ったり、マナーが悪かったりする訪問者に直接注意を行うなど、一部からは疎ましく思われることもあるが、

(図 5-1 筆者が作成)



「そんなことは一向に意に介してはいない」ということだった（2018年10月9日【5A】への聞き取り）。

たまやの設立当初、【5A】は、会員がイベントを提案すると、場所とスケジュールを合わせて開催ができるようにする調整役のみをつとめていた。

会員からの提案で、意識物理学者の半田広宣¹⁰⁾を招いて、サムハラ神社とエジプトのピラミッドパワーとの関連に関する「宇宙集会—サムハラ神社御祭神の造化三神」と題した講演会と参拝がセットになったイベントが開催された際も、【5A】は調整役に徹していた（2019年3月24日現地調査）。

この日には、岡山、愛媛、京都、滋賀から、約80人の精神世界関係者がこのイベントに参加していたが、【5A】は前面に出ることなく淡々と会場側との打ち合わせ等を行っていた。

それから半年弱が経過後、世話人に変化が現れていた。これまでは単に神社参拝のための案内をしていた【5A】は、精神世界の技法や思想についての見識を有するようになり、筆者が訪問した際には（2019年6月15日 現地調査）、独自の参拝ルートを作成し（図5-1）、参加者に聖域手前（写真5-2）で、手のひらを上にして両手を上にあげて、一定時間経過後に今度は手のひらを地面に向けながら手を下ろす動作を教えた。これはエネルギーを吸ってシャンバラに落とす動作だということだった。また、サムハラ神社境内での参拝後は、

(写真 5-2 筆者が撮影)



神社裏手で両腕を上げてエジプトのエネルギーを吸収する動作をするように促した。境内を一周して戻ると、【5A】が宇宙から受けた言葉を1人1人に告げて案内は終了となった。この一連の流れは、2020年には若干変化しているが(2020年9月12日現地調査)、定型化されている。

参拝の際に【5A】は祝詞のようなものを唱えていたが、サムハラ神社に一番ふさわしい祝詞を、高次元から受け取ったということであった(2019年6月5日【5A】からの聞き取り)。

また、前述のイベントが行われた頃に、【5A】は自宅の離れにサロンを作っている。中には【5A】の夫(60代)がサロンの横の工房で作っているオルゴナイトや、多くの不思議写真¹¹⁾、「綿棒ピラミッド」¹²⁾が置いてあった。サロンに置いてある配布物や物の配置には半田の影響があったともいわれているが¹³⁾、【5A】がサロンを持つようになった直接のきっかけは【5B】の帰京が関係している。【5B】はサムハラ神社で「あなたには東京で別の使命があるので、ここ(サムハラ神社)のことは【5A】に任せて東京に戻りなさい」と(サムハラ神社の神から)言われたことをきっかけに、「東京に戻るまでに技法的なことも含めて、できるだけのことを【5A】に引継いでおこう」と考えたという(2018年11月10日【5B】からの聞き取り)。

神社で示されてから引越すまで期間が短かったことについて、「サロンの

開設はともかくとして、技法を教えることは可能だったのか」と訪ねたところ、【5B】は、サロンについて「東京の人はセッション後に『ではこうしてみます』と自分で決定していくのに対して、加茂町の人たちは『ではどうすれば良いですか』とまず聞いてくる」ので、【5B】がすることが増える反面、形にしやすい面もあったという。

また、技法については、【5B】は、「加茂町付近の人々はエネルギーが高く、年配の人の中には大きな霊力を持っている人も多い。普通にチャネリングやリーディングが出来る人、中には遠隔ヒーリングができる人もいたのでこちらが勉強になった」とし、「加茂町の人には『神様の言葉や精霊の言葉が聞こえた』、『人の心が読めた』、『お祈りしていたら遠方の親族が治った』という言い方をするが、直接話していて宇宙意識からのエネルギーだと分かった」ということで、「【5A】さんはまだ開けていないだけで、やり方さえ教えれば後は自分で成長していけると思った」と言っていた。

サロンにおいてある神棚(写真5-3)には中心に加茂町のサムハラ神社の神、その周りに大阪のサムハラ神社の神、1番外の枠には金刀比羅神社の神のエネルギーが注入された封印紙が入っていると【5A】は説明してくれたが、この作業は【5B】が大阪と岡山を往復して行っており、これも自分が帰京するにあたって示されたことの1つということだった。

(写真 5-3 筆者が撮影)



また【5A】の夫にオルゴナイトを作るように勧めたのも【5B】だという。【5A】の夫はもともと加工業をしており、【5B】はそれを知らなかったが、最初

(写真 5-4 筆者が撮影)



(写真 5-5 筆者が撮影)



に会ったときから「パワーを封入する力があるのでは」と感じていたので、岡山を離れる際にオルゴナイト作りを提案したところ、「教えてもらえるなら是非」ということになって教えたという。

【5B】がいうには、オルゴナイト作りは実際の工作に慣れることよりも、いかに中にエネルギーを込められるようになるかがポイントで、その点でサロンに置くオルゴナイトは全て【5A】の夫が作ったものが理想だと思っていたということだった。

【5A】によると、「最初のうちは小さなものを作るのがやっとだったが、今ではかなり大きくエネルギーの強いものが作れるようになり（写真 5-4、5-5）、他所から求めにくる人もいる」ということだった（2020年9月12日【5A】からの聞き取り）。

2019年の現地調査時には、【5A】はゼロ磁場¹⁴⁾を作るためのワークショップを行っており（2019年6月15日 現地調査）、2020年には【5A】は、「自分もどんどんパワーアップしていっており、今はエネルギーワークも自由に行えるようになった」ということだった。また、麻を利用した魔除けとエネルギーを吸収するための紐を考案してハンドメイドで作成したり、「宇宙意識とサムハラ神社の関係」、「高次元のエネルギーとサムハラ神社の関係」などについての独

自研究をまとめるなど、調整役・案内人だけでなく、精神世界関係イベントの講師の役も兼ねているようであった¹⁵⁾。

筆者は、「【5A】が精神世界的な技法を行ったり、思想を語ったりすることによってこれまでの世話役から牽引力をもって組織を統率するようになるのでは」と考えていたが、後述するようにイベントの形態は変化しても会員と【5A】との関係は変わらず、その後のイベントも会員が提案し、それに対して【5A】が公民館の使用許可や必要なものを手配し「会員の要望が形になること」が重視されている。また、会員側も案内で【5A】の手が足りない時はこれに協力し、サロンに必要な物を持って来たり、また遠方の会員が他の神社で撮れた不思議写真を LINE で提供¹⁶⁾、【5A】も自分が受け取ったメッセージを会員に流したりするなど、設立時よりむしろ会員と世話人が相互で支え合う形が出来上がっているように思えた。

4 活動内容

たまやの活動の中心は神社の清掃や整備、施設の保守管理であるが、設立すぐの2017年12月5日には最初のイベント「サムハラ神社奥宮、金刀比羅神社の神様と人と地域を結ぶ始まりの会」が行われた。

このイベントは、【5B】が受けた啓示である「火を燃やし負のエネルギーを燃やし、浄化しなさい」、「全てのものが良しとされる、人々の出会いの縁を結びなさい」という言葉から始まっており、一通りの参拝を終えた後に、敷地内で「コンロを使って皆で鍋を食べる」という「儀式」を行った。「火を使うことで人の感情を浄化し、神と人と地域を結ぶ始まりの会の発足」という意味がこの鍋には込められており、たまやの会員だけでなく地元からの参加者もおり、イベントは盛況であった（2018年11月10日【5B】からの聞き取り）。

また、たまやの設立以前より、サムハラ神社が雑誌やブログなどで紹介される機会が増え、口コミでたまやのサムハラ神社案内についても広がり、神社の案内希望は2019年の調査の時点では1日に2-3組だったが、2020年になってからは予約者が増え始め、2020年の8月には緊急事態宣言が出ていたにもか

ならず20人を超える日もあり、9月の時点では既に10月末までの予約は埋まっていた（2020年9月12日【5A】からの聞き取り）。

会員主体のイベント企画も続いており、2020年9月12日には心と身体のリフレッシュを目的として「全倍音・シンギング・リンセラピーとサムハラ参拝」という音響楽器を使ったイベントが行われた。

——イベント形態の変化

たまやのイベントは、設立時より「参拝＋精神世界関連セミナー」という形で行われてきた。順序としては参拝が先で、サムハラ神社の案内・参拝が終わった後に、昼食と休憩をはさみ、その後にセミナーが行われるという順序だった。しかし、筆者が2020年9月に参加したイベントは、順序が逆になっており、セミナーが先に行われていた。2020年の春以降にたまやのイベントに参加した会員によると、「体験型のワークショップが多くなってからは、参拝が後半になることが増えた」ということであった¹⁷⁾。

この「全倍音・シンギング・リンセラピーとサムハラ参拝」では、一般社団法人シンギング・リン協会の代表【5D】（50代女性）と、そのインストラクターらが来ており、シンギング・リンという楽器を使ったワークショップが行われた。この日の参加者は約20人で、たまやの会員が約半数、初参加者が半数だった。初参加者は、たまやの会員から誘われたか、【5D】の関連WEBページでイベントを知ったようであった。

——使用される音響楽器の説明

シンギング・リンは、2004年に臨床心理士であった【5D】が医学関係者や音楽療法家の協力を得て開発されたもので、同形状楽器のシンギングボウルやクリスタルボウルとは違い、銅とケイ素を中心としたオリジナルの合金で作られており、日本の職人によるハンドメイドで、全てにナンバリングが施されている。長期の保証が付けられているが、発売以降17年間、これまでに破損した報告は1件もないという（2020年9月12日【5D】への聞き取り）。

【5D】は、シンギング・リンによってもたらされる効果について「音響を

魂レベルで勉強できるので、宇宙が分かるようになり、どう叩いて音を出すかで、理解できる宇宙の側面も変わってくる」、「製造された全てのシンギング・リンは互いに共鳴する。つまり、1つのシンギング・リンを鳴らせば世界中のシンギング・リンが鳴るので、1打を打った人の心が世界に広がり、融和と愛をもたらすことができる」、「シンギング・リンの1打は、細胞と共鳴する。これはコンサートに行った際に気持ちよくなる体験と同じである」、「人間は楽器と同じで、身体の色々な場所の調律が狂ってくるが、シンギング・リンの響きは自然治癒力を上げ、正常な状態にする調律師でもある」、「響きは、肉体のマッサージとは違い、血流だけでなく、場の気流もよくなって来る。通常であれば人が集まりすぎて気分が悪くなる場所でも浄化され、気分が良くなる」、「一番よい宇宙と融合された状態に、チューニングしていくことができるので、家庭も円満になる」、「水を入れるとエネルギーが形になり、波動水ができる。あらゆる細胞に共鳴するので、音を聴かせると味が変わる」、「これからの社会の変化は変えることができない。だからこそ身体のチューニングが必要である」など、さまざまな話をしていった。

解説の終わりには共鳴音のデモンストレーションが行われ、4を表す波動、6を表す波動、8を表す波動が伝わる鳴らし方で、水を入れたシンギング・リンを【5D】が演奏すると十字・六芒星・八角形の模様が水に浮かびあがった。

——音響楽器体験

【5D】は話した内容について参加者ができる限り体感できるように、持参した体験用のシンギング・リンを参加者に渡して、インストラクターが叩き方や使い方のアドバイスを行い、それぞれが演奏体験を行った。叩き方による「宇宙（とされる何か）と繋がっている感覚」、「シンギング・リンの中に入れた水と、そうでない水との飲み比べ」、「疲れている人へ音の振動を送り、身体を調律する」など、参加者の大半がシンギング・リンの効果を体感できたようだった。

昼食後には「音浴体験」が行われた。これは、セミナー後にサムハラ神社の

参拝に行くにあたり身体を浄化する目的も兼ねており、約20人分の布団が敷かれた場所で参加者が横になり、その側で【5D】とインストラクターがシンギング・リンを癒しと浄化の周波数で演奏するものである。「寝ている間に浄化される」ということだったので、筆者は、自分は寝ないで状況を確認しようと考えていたが、気付くと眠っていた。

——サムハラ神社参拝

音浴を終え、全員でサムハラ神社へと移動し、図5-1の順路で参拝を行ったが、これまでと違いがあった。聖域前のエネルギーワークで、エネルギーを受けてシャンバラへ落とすという所作はこれまでも行われていたが、【5A】は初参加者の中から何人かを指名し、本当にエネルギーを受け取れているかどうか、すなわち「体感できているかどうか」を確認し、体感できるようになるまで、会員らがこれをサポートしていた。また【5D】が聖域でシンギング・リンを演奏して聖域に変化が起きるかの実験も行われた。

サムハラ神社の境内では、音によるエネルギーワークとして、サムハラ神社に降り注いで境内下に蓄積されたエネルギーの音による取り出しが行われた。このエネルギーを取り出すワークでは、参加者が境内に手を差し出して、場の

(写真5-6 筆者が撮影)



空気を確認した。【5D】がシンギング・リンを演奏し始め、エネルギーが境内に放出し始めたかと判断すると、【5A】は参加者に対し、もう一度境内に手を伸ばして熱を体感できたかを確認させ、全員が熱を体感できるまで【5D】はその場で演奏を続けた(写真5-6)。

最初に記した通り、たまやでは、これまで通り「神社の清掃や施設の修繕・維持活動」、「神社の案内」と「精神世界に関するイベント」を中心に活動している。しかし、筆者が参加したイベント以前にも「霊魂の分離」、「空中浮遊」などの体験会が行われており(2020年4月9日【5A】への聞き取り)、「案内」や「イベント」に関しては、実際に「体験する」、「体感する」ことに、重点が置かれているようだった。体験や体感を重視するようになってからサムハラ神社案内の予約は増加し、【5A】だけでは手が足りず会員が案内を手伝っている。

5 地域社会とたまや

たまやの活動中心地であるサムハラ神社奥宮は、ここを統括管理している大阪市のサムハラ神社、奥宮の管理者、そして金刀比羅神社の総代との関係も重要になっている。

——大阪のサムハラ神社との関係(2019年7月15日聞き取り)

大阪のサムハラ神社の宮司【5E】(40代男性)は、サムハラ神社奥宮が精神世界の関係者の活動拠点になり、イベント活動がされていることについて、「監督責任は大阪の自分にあるんですが、今更ながら詳細な内容はほとんど知りませんでした」とたまやの活動内容について知らなかったようで、「金刀比羅神社の総代長さんや、こちらの管理人は知ってるはずなんですけれども、知らないのでしょうかね」と、あまり話をしたい様子ではなかった。

活動に対しては内容が分からないだけに積極的に肯定はせず、「ここ(境内)で石(パワーストーン)を売りつけるとか、ここでのイベントが事件や事故に発展すればこちらの責任問題にもなるので、そのときは使用禁止にするしかないのですが」と懸念を示しつつも、「実は、代表の【5A】さんとは1度だけ

あったことがあって、金刀比羅神社や奥宮の再建の手伝いをしてもらったという付き合いもあるんで、全くの無関係な方とも言えない部分もありまして」と言葉を濁していた。

——奥宮管理者との関係（2019年7月28日聞き取り）

奥宮の管理を、大阪の宮司より任されている【5F】（70代男性）はたまやのイベントについて、「一定数以上の人数のイベントをする際は、必ず報告をしてくれているので活動（内容）は知っています」と答え、要望があれば、社務所も開けているということだった。

【5F】は父の代からサムハラ神社の管理を任されており、御朱印やサムハラ神社のステッカーなどのグッズは【5F】が管理しているため、たまやの大きなイベント時には社務所を開けに行くのだという。

たまやと【5F】との関係が悪ければ、たまや経由でサムハラ神社へ参拝した人は、何もグッズを手にはできないが、【5A】と【5B】がサムハラ神社独自のグッズとして考案した「ぎんなん袋」を奉納し、【5F】や金刀比羅神社総代の【5G】（70代男性）が社務所で売っているということもあり¹⁸⁾、悪い関係ではないように感じた。

たまやの活動自体については、「サムハラ神社にピラミッドパワーが降りているとか、宇宙のエネルギーが降りてくるとか、何をやっているか分からないし神社の伝統とは違う」と参拝方法については否定的であったものの、「ただ、境内が綺麗なのもあそこが（掃除を）やってくれてるおかげなのも確かで、社に対しての実質的な貢献度は高い」とし、「サムハラ神社の伝統を引き継いでいる人がどうかは怪しいが、人に迷惑をかけない限り問題ないと言わざるをえない」と一方的にたまやの活動を否定をすることはなかった。

——金刀比羅神社総代との関係（2019年7月28日聞き取り）

サムハラ神社の敷地を管轄している金刀比羅神社の総代【5G】は、「サムハラ神社のおかげで、金刀比羅神社も息をしています」と言い、西日本豪雨被害からの復興についても「うちの氏子だけでは復旧などとてもない状態でし

た」と話してくれた。

【5A】のことは良く知っており、「おそらく、金刀比羅神社やサムハラ神社について、私よりも詳しいんじゃないかな」と言い、ぎんなん袋についても具体的に話してくれた。【5G】は長年、神社の総代長としてつとめており、【5F】と相談して奥宮でも、指輪を売れないかと何度も大阪に出向いて交渉したが実現せず、【5A】に相談したところぎんなん袋に関する提案があったということだった。

サムハラ神社には最初、精神世界の関係者はたまに来る程度だったが、たまやが案内を始めるようになってから訪れる人数が一桁違うようになったということで。パワースポットとして扱われることに対しても「元々神社にはパワーがあるからパワースポットには間違いありませんよ」と、【5F】とは違って参拝面でも活動を肯定的にとらえていた。

また、【5A】やたまやの会員がサムハラ神社を案内した後に、寄付金を持ってくるとに連れ、「【5A】先生はサムハラ神社（金刀比羅神社も含めて）の案内料しか取らず、神社への寄付金があったときはそのまま（封をしたまま）持って来てくれるんです」と寄付金が入っていた封筒を2つ見せてくれた。

たまやの名前の由来を教えてくれたのも【5G】で、「おそらく、【5A】先生自身もあまり覚えておられないでしょうが、廃業するまで、『たまや』はあの辺りではちょっと有名な醤油屋でして、その頃はあの辺りも栄えていたんです」と言い、「でも結果として、今は【5A】先生がまた金刀比羅さんに活気を取り戻してくれてるんですよ」と話していた。

——神社以外との関係

神社以外との関係について見ていくと、サムハラ神社の近辺には宿泊施設や食堂、商店などがいくつか存在するが、雑誌に取りあげられるような地域になったことで観光協会での扱いが変わったり、売り上げがあがっているという経済的効果がでていること、たまやの設立以来、サムハラ神社の清掃や保守管理、参拝者のマナーの改善がなされ、無秩序な訪問者¹⁹⁾が減少するなど地域の

治安維持にも繋がっており、地域社会からは肯定的に受け入れられているように感じた（2019年7月28日 現地調査）。

また筆者の印象に残ったのは、世話人と近隣住民との関係の良さである。筆者がたまやを訪問する際には車かオートバイを使用して行くが、世話人宅の近くまでいくと必ず近所の誰かがやってきて、車の誘導や止めるのを手伝ってくれる。また手荷物が多いときには持ってもらえることもあった。「たまやさんの方ですか」と尋ねても「いんや近所よ」と、【5A】ともたまやとも関係ない人が大半だった（2019年3月24日【5A】自宅近隣住民への聞き取り）。

小 括

案内日によっては「サムハラ神社では『不思議写真に妖精が写っている』」ということで、LINE で【5A】から動画を貰うことがあるが²⁰⁾、2021年5月時点での【5A】とサムハラ神社との関わり方は第4章の精神世界と古神道の関係、精神世界と音楽療法との関係に通じており、たまやのあり方からも精神世界と周辺分野のリンクが進んでいることが分かる。

今でもたまやの活動に対して「勝手なことをしている、おかしい拝み方を教えている」という声も無くはない。とはいっても、この問題はたまやの設立前からあったもので、たまやの設立によってそれが表に出てきたにすぎない。【5F】はその理由として、「【5A】の居住地は川を一本隔てており、別の氏神の地域。サムハラ神社は本来【5A】の氏神ではないのに小さい頃からサムハラ神社に参拝に来ていた」ことをあげており、「精神世界と神社の関係」以前に「神社と氏神の関係」という地域特有の問題があったことを話してくれた（2019年7月15日【5F】への聞き取り）。

とはいえ【5A】に対する近隣住民からの信頼度は高く、「【5A】がサムハラ神社関連で何をやっているかは分からないが、【5A】がやっているのだから変なことではないだろう」と見られている（2019年3月24日 現地調査）。

サムハラ神社の参拝の仕方に関して批難があったとしても、地域の人にとっては神社の参拝の仕方は小さな問題でしかなく、【5A】が世話人をしているこ

(写真 5-7 筆者が撮影)



とで、たまやという組織が行っている活動自体に対する理解が進んでいるように感じた。

2節 大杉神社を守る会

——滋賀県彦根市西沼波町

大杉神社を守る会は、30年前に過疎化が進んで、無人となった滋賀県彦根市武奈町にある大杉神社（写真5-7）の維持・祭祀のために設立された「大杉神社奉賛会」が前身となっており、2006年に同会を引き継いだ世話人【5H】（50代男性）が2017年頃から奉賛会と同時に「大杉神社を守る会」の名称を使いはじめ、翌年からは独自の活動内容となった²¹⁾。

1 協働組織の成立経緯

【5H】が大杉神社奉賛会を受け継いだ2006年には、奉賛会の中に彦根市武奈町の関係者はほとんどいなくなっていた。【5H】は、2009年に【5I】（40代女性）と結婚したが、【5I】は、斉藤一人の弟子で精神世界指導者でもある高津りえの公認スピリチュアル・カウンセラーで、斉藤一人のサプリメント「まるかん」や、書籍の販売代理店を営んでおり、自身もレイキ（ヒーリングの一

種)の施術ができたという(2020年2月11【5J】への聞き取り)。

2014年に聖地ツアーをはじめた当初は、「天照皇大御神から、生命誕生の仕組みを知らされた3人の神職のうちの1人」と自称する加古藤市(故人 男性)を【5H】は師と仰いでおり、加古の行う説法を目的に集まってくる人が多かった。奉賛会への加古の影響力は大きく、大杉神社の神器や境内の旗、由緒書の写真にも書かれている六芒星は、同神社のシンボルになっており、のほりも立てられている(写真5-8)。しかし、これは本来の大杉神社のものではなく、加古が説法の中で六芒星について盛んに説いていたことに起因するようである(岡崎 2018:6・28)。「大杉神社を守る会」という名称が使われはじめたのは2017年頃ということだが、この時期には奉賛会の名前も使用されており²²⁾、「大杉神社を守る会」として新規スタートしたのは、ツアーのコースを変更した2018年からのようで²³⁾、翌年には奉賛会が設置していた祠と鳥居(写真5-9)が撤去されている(2019年7月1日現地調査)。

たまやと違い、彦根市武奈町付近の神社は、世間であまり知られていないこともあり、この協働組織について知る人は少ない。しかし、大杉神社付近を中心とした植樹活動や神社の清掃、神社までの林道上にある土砂の崩落石・枯れ葉を毎月清掃整備するなど、活動は広範囲に渡り、「神社のために何かしたい」という精神世界の賛同者が参加し始め、【5H】が奉賛会の代表を引き継いだ当時に会員数は10人以下だったが(岡崎 2018:30)、2019年7月の時点では30人を超えているという(2019年7月1日【5H】への聞き取り)。

(写真5-8 筆者が撮影)



(写真5-9 写真提供 岡崎梓織)



(写真5-10 筆者が撮影)



大杉神社を守る会では、神社への奉仕活動に定期的に参加し、自主的に大杉神社のために奉仕をしようとする人を会員として認めている。

2 活動拠点について

同神社の由緒書には、「大杉龍宮」と「北原龍宮」(総称「大杉龍王」)が祀られていると記されているが、これは奉賛会が作成したもので、もともと祀られていたのは同地の鎮守神であったという(岡崎 2018:6・28)。

2008年にWEBサイトが開設されてからは²⁴⁾、「大杉龍王・北原龍宮」は神社仏閣マニアの間で話題になりはじめた。また、神社の整備が進んだ2010年以降は「隠れた聖地」として多くのブログ開設がなされている²⁵⁾。

2014年に【5H】が聖地ツアーをはじめると、利用者の中に精神世界関係者が混じりはじめるようになった(岡崎 2018:6・28)。2018年に当時の【5H】の師が亡くなった頃から、ツアーの参加者の層の大半が精神世界関係者となり、2019年以降、大杉神社には「大杉龍王」が祀られている聖地としてだけでなく、「金星のエネルギーが降り注ぐ場所」、「UFOの着陸場所」として多くの精神世界関係者が訪れている²⁶⁾。

【5H】によると、参拝対象は神社の御神木そのものであり、降り注ぐエネルギーは、多くの神々や精霊を癒し、他の神社の神々がやってきては、ここで休んでいるという。また、神社の奥の磐座群(写真5-10)はUFOの着陸地

点とされ、見えない結界のため、その場には選ばれた者しか入れないということであった。

3 世話人と精神世界

【5H】は、彦根市内にある仏具店の店主で、2001年に父から店を引き継いだ。若い頃から自転車を趣味としており、トライアスロンの選手として大会に出場したこともあった。トレーニングとして滋賀県と三重県の山脈の間を走ることもあり、その頃から霊場とされる場所を走る度に何かを感じるようになった。そこから「聖地」に興味を持つようになり、大杉神社の付近にある比婆神社を、自らの霊場として定期的に訪れるようになったという。別の調査報告（岡崎 2018：30）によると、店の顧客から「商売繁盛に良い」と紹介されて、20年以上参拝しているということであったが、筆者の聞き取り時には、商売繁盛のくぐりには触れられなかった。

【5H】の生家は代々浄土真宗本願寺派の檀家で、聖地というものに対する崇敬の念はあっても、精神世界そのものに対する興味もなければ、造詣が深いということもなかった。信念が強く、奉仕活動として神社とそこに通じる林道の定期的な清掃整備を欠かすことはなく、これを自分の使命と考えている（2019年7月1日【5H】への聞き取り）。

2018年の時点では、【5I】がスピリチュアル・カウンセリングやレイキ、斉藤一人のサプリメントや書籍の販売代理店を営んでいたもの²⁷⁾、【5H】自身は、「自分がやっていることは古神道をベースにした神様ごと」と言っており、精神世界についての知識を特に有してはいなかった（2019年7月1日 岡崎梓織への聞き取り）。

しかし、2019年に加古が他界してから【5H】は、はせくらみゆき²⁸⁾に師事し、精神世界色を濃くしていったように思われる。

—— 【5H】のサロンと思想

店舗の2階には【5H】のサロンがつくられており、エネルギーを引き込むた

めの「綿棒ピラミッド」をはじめ、たまやのサロンの中にあったものは一通り揃っていた。

筆者の聞き取りに【5H】は、大杉神社の御神木について「杉は、神の目から見ると右に8回転、左に5回転しており、13次元という一番高い次元を表している。人間がいるのが1次元2次元3次元、これまでは、行ける人によっては4次元までだった」とし、「いまはもう2012年からのアセンション²⁹⁾で人によっては5次元まで行けるようになっているが、それでも人間が到達し得る魂の界層の最上部の12次元にはまだまだ遠い」とした。しかし、大杉神社からのエネルギーはその上の神の領域である13次元から降り注いでいるということで、それが大杉神社が特別な理由なのだと教えてくれた。

【5H】からは「今の世の中を浄化するために、大杉神社に降ってくる金星エネルギーを受けて、それを地下のシャンバラに流し込む必要がある」という話や、斉藤一人の「言葉の波動」についての解説などがなされた。また、【5H】は、神様ごとは、単に神社へ行くこととは違うという。【5H】が名前をあげた「波動の高い人」の中には斉藤一人やはせくらみゆきのような精神世界の人だけではなく、車のパーツ開発者や弁護士など様々な職種の人が入っていた。しかし弁護士でも先生と呼ばれる人は魂のレベルが低いという。【5H】は「先生と呼ばれる人は転生の数が少ない人で、議員などは生まれ変わってる回数が少ない」としていた。

また【5H】は、「神社ばかりお参りするの宗教。それは神様ごとではない。自宅でも職場でも良いので、身近なところに神様のエネルギーを降ろして、それをいつも感じて感謝して生きないと人は偏っていき魂のレベルが落ちる一方になる」という。そうならないために一番良いのは12次元を実際に体験することだという。1度でも12次元を体験しておくことは魂のレベルを上げることに非常に有効で、そのためには特別なセッションを受けることが近道であるとしていた³⁰⁾。

ここでの会話では確かに「神様ごと」という言葉は使用されるものの、内容に関しては精神世界で言われているものとほとんど同じで、時折使われる専門

用語は精神世界関係者が使うものと一緒であった（2019年7月1日【5H】への聞き取り）。

——祠と鳥居の撤去について

また、2018年までの訪問者のブログ等に写っていた祠や鳥居が撤去されたことについて、【5H】は、「本来大杉神社のご神体は御神木そのもので、ここに龍神さんが住んでいる。金星のエネルギーが降りてくるこの場所には、他の神社の神様も休みに来るので祠や鳥居は邪魔になるので撤去した」ということだった。しかし、【5H】の父親（70代）によると、「祠も鳥居も老朽化して、放置しておく危険なので撤去したと聞いている」とのこと（2020年4月8日【5H】の父親への聞き取り）、会員の話では、奉賛会のメンバーが内部になくなった時期にあわせて、組織の再スタートとして祠や鳥居の撤去を行ったのではないかということだった（2020年4月6日【5J】への聞き取り）。

2019年7月の現地調査では【5H】のサロンでは、大地の浄化のために、大杉神社から店舗に引き込んだ金星のエネルギーをシャンバラに落とすためのエネルギーワークが行われた。これは【5A】が、サムハラ神社の聖域で教えていたものとはほぼ同じものであった。この際、【5H】は金星から受け取ったという特別な祝詞をあげていた（2019年7月1日現地調査）。

——大杉神社のシンボル 六芒星

2020年には【5I】が共同代表に就任し、同組織はさらに精神世界色を深め、【5H】らは2人でヒーリングの出張や講演に出かけるようになっている（2020年4月8日【5H】の父親への聞き取り）。店舗の一階では、斉藤一人の本、癒しの絵、精神世界の関連書籍やグッズが販売されるようになり、店舗全体が精神世界関連事業所ようになっていた。

奉賛会が神社のシンボルとした六芒星は、【5H】の再解釈を加えて引き続き使用されており、大杉神社と店舗・サロンを繋ぐためのツールとして店舗・サロンの各所に配置されていた。この六芒星についての【5H】の解釈は、「基本的に六芒星はエネルギーを吸収する形であるが、エネルギーを吸収しすぎるた

め、円でこれを囲む必要がある」、「囲まないでくと余剰エネルギーを周囲にぶつけ始める」ということで、【5H】は、「円で囲むことにより、吸収したエネルギーが融和のエネルギーに変わる」、「イスラエルに争いが絶えないのは（六芒星を）円で囲んでいないためである」と六芒星を円で囲む重要性を説いており、【5H】や会員が着用している作務衣の背中にある六芒星も円で囲まれていた（2020年8月11日現地調査）。

同日、境内に立てられていた六芒星の描かれたのぼりが撤去されていたので、理由を尋ねたところ、【5H】は、「一度風雨でボロボロになったので外した。今は日本の危機のため、（のぼりの修繕を）考える時期ではない」とのことであった。

4 活動内容

(1) 普段の活動

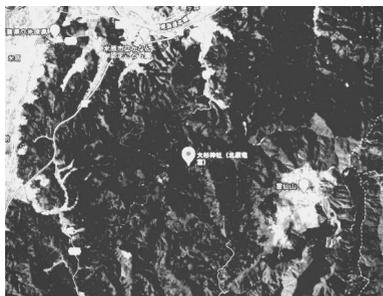
同組織の活動はたまやに比べて大がかりなものが多い。神社周辺の清掃活動や管理などは会員のみでできても、そこまでの林道の落石の撤去や植樹など、世話人があるていど率先して動かなければならないものも多い。

またサムハラ神社と違い、神社が山の中にあるため（地図5-1）、月に1度の会としての清掃だけでは追いつかない季節もあり、会員が自主的に訪問して清掃を行うことも多い。

会員らは何人かで来ることもあるが、慣れた者は1人でやってきて設置されている清掃用具入れから道具を出し、ゴミを集めて焼却炉に入れるという。焼却炉はいつでも使用可能だが世話人のいないときには火を使うことは避けているということだった（2020年2月11日【5J】からの聞き取り）。

月1で集まって清掃に来る際には世話人が弁当を準備し、ワークなどもあるが、1人で来た際には御神木と磐座からエネルギーだけ受けて帰るということだった。植樹活動を見たいと思っていたが、【5J】と同地を訪れた際には既に植樹が終わったあとだった（写真5-11）³¹⁾。

(地図 5-1 GoogleMap より)



(写真 5-11 筆者が撮影)



(2) 大杉神社大祭 (2020年8月11日)

——大祭の参加者

同日9時頃から【5H】の店舗前に人々が集まりはじめ、店舗内に入っていった。筆者も入店したが、店内はさらに精神世界色が濃くなっており、パワーストーンを始めとした様々なグッズが販売されていた。陳列棚も増えており、五角形をかたどった商品が目についた。【5H】によると、五角形はエネルギー的に身体に良いため、店内にいただけでも癒されるように、五角形をかたどった商品と専用の展示棚を作ったということであった。特に大きな宣伝をしていなかったこともあり、参加者は15人前後で(途中参加者や途中で帰った者もいたため正確には把握できなかった)、初参加者は4人だった。そのうちの1人に参加の経緯を聞いたところ、「前から大杉神社が気になっていたが、行き方が分からなかった。それを同僚に話したところ【5H】を紹介してもらった」ということだった。

今回のイベントに来ていた参加者の中には、個性的な会員が何人かいた。ヒーリング・ハーブ奏者の【5K】(40代女性)や、磐座から放出された霊気を読み取れる磐座学会の会員【5L】(70代男性)、鹿皮太鼓の奏者【5M】(50代男性)、精神世界関係商品製造業者【5N】(50代男性)など、普段のイベントでは同時に見かけることがない人々が揃っていた。大杉神社へ向かう車内で【5H】は、大杉神社へ参拝している者には、金星のエネルギーや龍神が発する浄化エネルギーが働くので疫病も無効化するなど、大杉神社に降り注ぐエネル

ギーの力について語っていた。

——大祭の開始

大祭は【4H】が最初の聞き取り時に「自分がやっている神様ごとのベースは古神道」と言っていたのを表すように、神道の行事のような形で始められた。御神木に向かって並べられた机には酒・米・塩・小豆・榊・昆布・イカの干物・ろうそくが並べられていた。【5H】は、木札に名前と願い事を書いた後に、これらを机に供えるようにと促していた。

【5H】は大祭が始まる前に、全体の流れと独自の参拝方法を教えたが、通常の2礼2拍手1礼は、「GHQが、神国日本の神の力を発揮させないために日本に浸透させた参拝方法であるため間違っている。本来正しいのは3礼3拍手1礼である」と説明していた。これはサムハラ神社と同じ参拝の仕方であり、精神世界関係者が関わる神社ではこの3礼3拍手1礼が推奨されることが多いようである³²⁾。また、開会にあたって歌った国歌の歌詞も「君が代」ではなく「我が君」が正しいとされ、訂正された歌詞が配られた。儀式的なものに関しては、神社を中心に活動する協働組織では、共通認識のようなものがあるように感じた。

その後に参加者が一人ずつ玉串を奉納することになったが、この際【5H】から各自に、両手を上にかざし金星のエネルギーを吸い込み、そのまま地下のシャンバラへと落すように指示がなされた。この所作は、前回訪れた際にも行っているが、今回は【5N】が、「せっかく来たのだから、エネルギーを感じ取れない人は言って下さいね、形だけだと勿体ないから」とエネルギーを吸収していることが分かるようになるまで、何度も奉納の練習に付き合っていた。初参加の4人だけでなく会員でも3人ほど【5N】からのレクチャーを受けており、奉納後に、筆者が「どうでしたか」と3人に聞いたところ、「練習させてもらった後で奉納したら、手を上にあげた途端に一瞬何か、ずしっとするようなものが両腕に乗かって、それがスルッと身体に入っていき感じがした」、「シャンバラをイメージしてそれを落とすようにすると、今度は手からそれが

土の中に入っていくと同時に、地球からの熱を感じた」ということだった。

——精神世界的な色合い

玉串の奉納の後に、はせくらみゆきから【5I】が直接学んだ舞が奉納された。ここまでは、神道行事に近いものを感じたが、奉納の前後からは精神世界的な色合いが濃くなっていった。舞の直前【5N】は、小さな六芒星が埋め込まれたシールを配り、額に貼ることを勧めていた。理由を聞くと、「シールに埋め込まれた六芒星がエネルギーを吸収し、自動的にエネルギーを身体に入れることができるため、金星のエネルギーを体感するためには、ちょうど良い」ということだった。

シールを配られた数名がこれを額に貼った後に、【5I】の舞の奉納が始まったが、シールを額にはった1人が、「【5I】が何かを御神木に願い、降ろしてくるような動作をする度に額がズキズキする」というので、その旨を【5N】に伝えると「もともと感じやすい人には、これ（シール）は逆効果なので外すようにしてください」ということだった（2020年8月11日【5N】への聞き取り）。舞が終わった後に、シールをはっていた人に何かを感じたかどうかを聞いたところ「力強い暖かさを感じた」、「矢が頭に突き刺さった後に、溶けて脳内を癒してくれるような感覚だった」など、感想は人それぞれだったが、何かを体感したようではあった。

昼食後、境内の中に設置された六芒星をかたどった焚き火台の上で、「お焚き上げ」が行われた。【5H】が説明する大祭で重要な要素は「ひ・ふ・み」の3つで、それぞれ「火・風・水」を表すという。このお焚き上げは最初の要素である火であり、燃やすものは先述した願い事を書いた木札と、【5H】の知り合いの書道教室の生徒が書き溜めた半紙で、火の中にそれらを投入する際には、「ありがとう」と言いながら投入するようにとアドバイスがあった³³⁾。また、【5H】は、お焚き上げの火は写真に撮ると「その人だけの龍」が写るから積極的に撮影するようと言い、様々な角度からの写真の撮り方をアドバイスしていた。

【5M】は、炎の中に何かが入る度に、鹿皮太鼓を鳴らしており、一通りの投入が終わると、参加者に鹿皮太鼓を叩くことを勧めていた。【5M】がいうには、鹿皮太鼓の音は、炎の力を強くし、投入されたものを完全燃焼させ、投入した木札に書いた願い事を引き寄せるということであった。また、何度も太鼓を打っていると、風の妖精がやってくるのが耳元で聞こえることがあるので、「ありがとう」と挨拶をすると良いとしていた。

火が弱まるまで、参加者は叩き方を教えてもらい、鹿皮太鼓を叩くか、「自分だけの龍」を撮ろうとしていた。数人が、「ありがとう」と挨拶をしており、【5M】は、「何人かは本当に風の精霊の体験をしているはずだ」と言っていた。

炎の勢いが一番弱くなってきた頃に、【5K】がヒーリング・ハーブをもって御神木の上にある磐座へ行き水の精を呼び出すというので、これに同行した。【5K】が弾く旋律は、特に曲になっているわけではなく、どちらかというと、シンギング・リンのように響鳴を起こすことに主眼が置かれているようであった。【5K】は、ときどき演奏を止めて、見えない何かに向かって手を振っていた。【5K】がいうには「楽器の音を気に入ってくれた水の妖精が、疲れを癒してくれている」ということで、妖精や生命エネルギーが多いところでこそ、ヒーリング・ハーブは真価を発揮するということだった。【5K】は「下手でも自分で奏でた方が効果を体感できる」とし、希望者にヒーリング・ハーブの弾き方を教えていた。

——磐座搜索

大杉神社での儀式を終えて、車両に乗り込んだところ【5H】ではなく、【5L】が乗り込んだ車が先頭に行くので、【5H】に理由を尋ねたところ、「【5L】さんが、大杉神社でのお参りが終わったら霊力が高まっているので、これまで見つけられなかった近くにある磐座を、今日は見つけられると言っているから」という答えが返ってきた。

【5L】は磐座の霊気の研究をしており、隠れた磐座を探すことをライフワークにしている。「大杉神社付近に、まだ見つけていない磐座の気配は感じるも

のの、どうしても見つけられなかったが、この日は大祭によって霊力が上がっている、見つけられる筈だ」ということだった（2020年8月11日【5L】への聞き取り）。

当初筆者は、これはプログラム外の出来事かと考えていたが、【5H】によれば前もって【5L】から、予定に組んでおいて欲しいと言われていたらしく、それも含めての一日のスケジュール管理をしているということだった。「大杉神社の近くにあるのに、【5H】さんにも分からないのですか」と尋ねたところ、【5H】は「人にはそれぞれ使命があるから、それ以外のことには示しが与えられないようになっている」と淡々と答え、「あの人（【5L】）は、埋もれた磐座を見つけ出すのが使命、それがどう役に立つかは分からないけれども、自分がそれを使命と感じたらやるしかない、それを応援する」と強い口調で言った。

そこから12～3分林道を走った後、ガードレールの切れ間で【5L】を乗せた車が止まったので参加者全員が一旦は降りたが、【5L】が、「かなり危険なところにあると分かったので、体力的に自信がある人だけついてきて下さい」と言ったので、6人だけが【5L】についていくことになった。道とは思えない廃道（写真5-12）を進んでいったところ、放置された神社と磐座があった（写真5-13）。当日は猛暑日だったが【5L】が持参した温度計で測ったところその

（写真5-12 筆者が撮影）



（写真5-13 筆者が撮影）



場の温度は15度であった。

——サロンに戻ってから

【5H】のサロンに戻ってきてからは、ディスカッションが行われた。最初は【5H】が講演会をするようなイメージをもっていたが、実際は会員がそれぞれに意見を出し合い、初参加者からの質問に対しても、【5H】は、「その話なら【5M】さんの方が詳しいから」、「それは【5L】さんに教えてもらった方が良さ」と言い、【5H】以外が答える場面も多くあった。大杉神社や大杉神社と関連付けられる技法などについては【5H】か、【5H】のことをよく理解している【5N】が答えることが多かったが、大杉神社から離れた精神世界全般の話になると、会員も初参加者もそれぞれ持っている思想や技法も違うため、「そこは違うな」という話もでていたが、いがみ合うこともなくディスカッションが成立していた。【5H】は「使命も示されることも、それぞれが違うのだから、それぞれの持ち場で答えを見つけていけば良い」と言い、集まった会員の思想が1つである必要はなく、「大杉神社を守っていく」ことについて一致できればそれで良いとしていた。

筆者は、今回の大祭も【5H】の企画・立案かと考えていたが、【5H】は大祭を行うことを決めただけで、「ひ・ふ・み」を実現するために鹿皮太鼓を使って風の妖精を呼んだり、ヒーリング・ハーブを使って水の妖精を呼ぶなどは、【5M】や【5K】から企画として出てきており、また【5L】が、大杉神社の近くには、まだまだ多くの霊的な場所があることを示したいと、今回の磐座散策を大祭の中に組み込むように言ったことなど、大祭全体を見ると【5H】は、大祭をすることを決め、会員の企画を組み込んでプログラムとスケジュールを作る役割を担い、大祭を会員のやってみいたいことや、実現したい内容が詰め込まれたイベントに仕上げており、この協働組織の「世話人」であることを改めて確認する結果となった。

5 地域社会と大杉神社を守る会

大杉神社が所在している武奈町は既に廃村になっており、住人がいないため神社があることを知っている人自体もほとんどない。そのため、奉賛会時代も含めて、この協働組織の存在自体を知っている人は少なく、地域社会からの認知度という点においては、たまやのように大きな反響があるわけではない。【5H】の店舗所在地の自治会関係者（50代男性）は「大杉神社を守る会」を知らないだけでなく、大杉神社についても「聞いたことがない」というので、地図で場所を示してやっとそこに神社があったことを思い出した³⁴⁾。

しかし地道な植樹活動や、雨天や積雪時でも行われている林道の整備、安全なルートへの看板の設置などの活動は、周辺集落へ行く人々や林業従事者から評価されており、少しずつではあるが認知度はあがっている。ただ、この点について【5H】は、「生業として毎日ここに携わっている林業の人たちの方が立派だ」という（2020年8月11日【5H】への聞き取り）。これは「自分が賞賛されると魂のレベルが落ちる」という【5H】の見解による部分もあるが、このような【5H】の姿勢も好意的に見られる要因と言える。近隣住民の話では、大杉神社への経路途中にある食事処では、時折会員と地域の人が話をする光景も見られるということであった³⁵⁾。

小 括

先の大杉神社大祭の参加者は、滋賀県だけでなく大阪府や福井県からも車であって来ており、車も数台になったが、【5H】だけでなく近隣住民数名が出てきて車の車庫入れや交通整理を行ってくれ、「お参りご苦労さまやね」とねぎらいの言葉をかけていた。

【5H】の店舗が町内で仕事が丁寧ということもあり³⁶⁾、【5H】と近隣住民との関係が良好なのは分かるが、ここを訪れる人に近隣の人が話しかけている光景も見られ、【5H】の店舗（サロン）に集まってくる精神世界関係者に対しても悪感情を持っていないように見えた。

また、聞き取りをした後に大杉神社へ向かおうとしたときに、自治会関係者

が「今日は【5H】が不在で道もぬかるんで危ないから」と途中まで案内をしてくれたこともその表れの1つと言える。

先の近隣住民の言葉から分かる通り、大杉神社を守る会の会員は信者集団のように見られている。また先に述べた通り同会の活動を知っている人はほとんどいない。しかし、【5H】を訪れる人が多くいることは近隣から知られており、かつ受容されている。

3 節 特定非営利活動法人心躰研究会 SEW

——滋賀県東近江市

特定非営利活動法人心躰研究会 SEW（以下 SEW と略す）は、東近江市を中心に、ブース出展型イベントの開催や地元との交流会を主催していた精神世界関連事業者【50】（40代女性滋賀県在住）が、精神世界が抱える問題について切実に「どうすれば自分たちが社会から受け入れられるのか、どうすれば業界は変わるのか」を考え、自ら発起人となり、同様の問題意識をもっていた【0A】がこれに賛同して立ち上げられた協働組織である。

SEW とは Spiritual・Emergent・Workshop の略で「ソー」と発音し、様々な事象や現象、立場や組織、意識や概念などの壁を超えてゆるくつながりあう、見えないもの同士を「縫う」という意味を表している。

なお、筆者は、発起人らが「NPO 設立準備委員会」を立ち上げてからは参与型の調査を行っている。

1 協働組織の成立経緯

（概要）

【50】と【0A】が出会ったのは、【0A】が【50】の主催するイベントに参加したことに始まる。【0A】は三重県の中で地域社会と交流し、互いに何らかの形で地域の中で靈性にかかわる活動をしていることで意気投合し、精神世界の抱える問題について話すことが多くなった。

2017年以降は SNS のグループを通じて同じような疑問を感じている技法者

への呼びかけを行ったところ、15人近い賛同者を得て2018年6月にはこれまでは全く違う形式のイベントを行うなど試行錯誤を繰り返し、同年8月には賛同者らと「新しい組織作り」を考え、地域社会との連携も視野にいれ、NPO設立準備委員会が設置された。

2019年からは NPO 設立準備委員会主催でのイベントや講習会が行われ、2019年8月7日に滋賀県より NPO 法人の認証を受け、同20日に設立登記がなされた³⁷⁾。

SEW では、活動理念に賛同し、理事会の承認を受けたものを会員にしているが、会員は精神世界関連事業者に限っていない。コロナ禍までは設立準備委員会の段階から入会希望者は理事会で対面面接を行っていたが、2020年3月時点ではリモートでの面接もしており、中部や関東方面の会員も増えてきている。2021年度は社会状況を鑑みて、窓口を増やすために滋賀県以外の窓口を設置予定とのことである（2020年3月22日【0A】への聞き取り）。

(NPO 法人認証まで)

【50】から「新しい企画を考えているので、ミーティングを見に来ないか」という連絡があったので筆者は、新しいイベントを企画していると思いこれに参加した³⁸⁾。会場は三重県鈴鹿市にある喫茶店で³⁹⁾、筆者が到着した時点で貸し切りの部屋には、既に【50】と【0A】を含む女性4人が着いており、真剣な表情でメモを出して話し合いをしていた。

【50】がいうにはこのミーティングは3回目で、各自が疑問点を出し合っていく中で、直接会ってみようかということになり、6月のイベント後に⁴⁰⁾、最初に顔合わせのミーティングをしたという。その際に【50】は自分の知らなかった滋賀県内の精神世界ビジネスの内情に驚いたという。

これまで滋賀県で様々なイベントを主催してきたことや、地域社会との交流もある【50】は新しく精神世界関連事業に入ってくる人に「滋賀県の権威者」のように映っており、【50】が内部向けに作った資料のコピーが開業のハウトゥ冊子のような扱いをされ、開業する者が増えているばかりでなく、少なからず【50】の冊子を参考にして精神世界関連事業を始めた人が他者ともめ事を

起こしているということだった。

【0A】も悩みを抱えており、小さな団体からの海外映画の自主上映会の共催の申し出をはじめ、地域交流のために行っている近所のカフェでの座談会が広がりを見せ、他の喫茶店や飲食店からも談話会をして貰えないかという打診はあるものの、「【0A】に任せてみれば取りあえずなんとかしてくれる」という雰囲気ができあがっており、「自分が伝えたいことと、相手が自分に求めているものがあまりにも違う」ことから、「いま、自分が発信したいメッセージはこれだ」というものを正確に発信する必要があると感じていたという。また、滋賀県でクライアントのオーラから食事改善のアドバイザーをしている【5Q】(40代女性)は、自然食を用いた弁当の販売もしている。彼女の事業所は発注元が団体だった場合、会合の目的や集まっている層に合わせて弁当を作っており、最近売り上げも好調だという。しかし自分がどのようなコンセプトで弁当を作っているのかについて毎回説明をしているものの、その真意は発注者には全く伝わっておらず、本来は同じ土台のはずの2つが離れてきており、もっと正しく情報を発信する方法を考えていたという。

もう1人来ていた精神世界関連事業者の女性(30代女性滋賀県在住)は大きな事業場の悩みを抱えているわけではなかったが、精神世界における情報の氾濫に、正確な情報発信をする必要があるのではとずっと考えていたという。

2回のミーティングを経て、情報発信のために何らかの組織作りをする方が良いのではないかという話になり、今回のミーティングが持たれたということだった。2回目までのミーティングへは10人程が参加しており、4人が中心になり組織の骨子を作り、それが具体的になった時点で講習会のような形でのミーティングをすることにしたということだった。

(1) 組織化の理由

筆者がこのミーティングに参加するのが初めてのため、【5Q】がこれまでのミーティングの内容をまとめて話してくれた。これまで各々が持っていた疑問を話し、問題整理がなされていったということで、そこで整理された内容を教

えてくれた⁴¹⁾。

1. 技法者が「自分に合っている」と思っている技法と、その人がもっている霊性が違いすぎる。このため自分に自信が持てず他人のいうことに左右された結果、それがクライアントに跳ね返ってしまう。
2. 自信のない技法者を見つけてはアドバイスと称して、その技法者の権威的な存在になろうとする人がでてくるが、技法者自身が権威者を欲してしまっている現状がある。
3. 実際につながりやすい人やインディゴチルドレンかもしれない人がいたとしても、情報がないので自分に自信が持てず、「この人には伸びて欲しくない」と感じた権威者によって逆方向の修行的なことを勧められたり、「霊性開花」ビジネスの顧客として取り込まれたりしていく。
4. 認定団体は資格を出したあと、技法者を放置するので、技法者は孤独になることが多く、自分のコミュニティを探した結果、その認定団体が別に運営している協会に所属させられてしまう。
5. 技法を学んだことのある人がクライアント側になった際、中途半端に業界のことを知っているので「〇〇さんのところで勉強した」と言われると安心してしまい、自分が大火傷⁴²⁾するケースが多い（技法者の意識の低さと情報の不足）。
6. あまりにも多くの技法を取得しているために、自分で何をしているかの整理ができなくなってしまう、技法者自身が迷子になってしまっている。
7. 自分達（【50】、【0A】）も周りに人が集まってきている時点でコミュニティの権威者と思われる可能性は十分あるので、常に「見る側」としてではなく「見られる側」としての意識を持たなければならない。自分達はお花畑系⁴³⁾とは違うと思っても外側から見れば同じに見られているという意識が常に必要である。

上記をあげたうえで、【0A】は精神世界の問題点として「自分に自信を持ってない技法者が多すぎる」とこと「自信がないので権威者やグループに取り込ま

れてしまうところ」をあげ、「【50】が組織や団体を嫌っているのは知っているが、残念ながらすでに本人の知らないところで【50】グループはできあがり、権威者に見られてしまっている。それならば問題意識を持った者同士で組織を作り、正確な情報を発信していくしかないという結論になった」と集まった目的について話してくれた。

(2) 組織の理念

筆者が、「組織にすると、結局は技法の認定団体や権威化していく可能性があるのではないか」と質問したところ、【50】は、「それはその団体で技法資格の認定や、スピリチュアル関係者向けのコミュニティにしようとしているからで、技法の認定や個人向けのセッションは行わず、基本的には今のスピリチュアルの問題点を発信する客観的な立場に自分達を置くことである程度のリスクは回避できると考えている」とのことだった。

筆者が4人からの話を聞いてどのような情報を発信したいのかをまとめたところ次の通りとなった。

- ① 精神世界にいる人に自分で自分のいる位置に気づいて欲しい。
 - ・体験のための体験をしようとしている人がいる。
 - ・思い込みと霊体験の区別が付けられていない人が多い。
 - ・自分の技法を言葉で説明できる正確な知識が乏しい。
- ② 精神世界技法に優劣はないと気づいて欲しい。
 - ・「優劣を付けることで自分に安心感を持つ人」が多い。自己を確立できていない人がいる。
 - ・コミュニティに属することで自分は選ばれた集団の1人だと思ってしまうことが弊害になっていること。（地域コミュニティを初め、社会的に浮いた存在になり孤立集団化する原因になっている）
- ③ 精神世界の技法は「今のケア」であるということに気づいて欲しい。

- アプローチの仕方によっては、精神世界技法が興味の無い人にも何らかの影響を与えられる可能性があること。
 - 宇宙意思やワンネスは、繋がるためにもがく存在ではなく、「繋がっている安心感」を与えてくれる存在であることへの理解。
 - 1つの技法で成功しなければ、次々と新しい技法を会得するのではなく、「何が成功しない原因か」を立ち止まって考えられることが大切だということ。
- ④ 自己受容という意味は、自己完結とは違うということを知って欲しい。
- 「自己投影が大切」と「自己主張を強くする」ことを混同し、技法認定団体のコミュニティの外に出ると浮いてしまうこと。
 - 「手放すことによる解放」について考えすぎると、「手放さなければならぬ」という強迫観念にとらわれて、逆に自分を縛り付けてしまう可能性があること。

筆者は、上記にあげられた内容は第2章でもとりあげた精神世界の問題点ではあるが、個々のブログや SNS で発信しても同様の情報発信は可能で、「組織である必要はないのではないか」という疑問が浮かび、この疑問を4人に投げかけてみた。

【50】は、「10人で集まった際にみんなが興味のある技法は何かを書き出してみたところ、具体的な内容は違っても精神世界の技法は『心の技法』と『体の技法』の2つに集約されるという当たり前の結論に落ち着いた」という⁴⁴⁾。その上で「これまで漠然とスピリチュアルと呼んできたものを心系と体系に分け、それぞれについて正しい知識を学びながら、各々の活動を外部向けに一括して発信するには個々のブログや SNS では誰も見てくれない。『対外的にスピリチュアルを知ってもらう』ためには個々の思想や技法の共通点を組織としてまとめて、具体的に動いていくことで気づいてもらいやすくなるはず」と答えた。【0A】は、「内部に対する疑問や問題は内部からではなく、外部から指摘される方が効果があると考えた。スピをやっていない人たちと積極的に関わっ

ていくことが一番の近道だと思う。自分をもっと外の人と接触する機会を作りたいし、外からも自分たちに関心をもって欲しい」と、組織化することで外部との接触の機会を増やしたいと話した。

また、「内側には権威者が多く存在し、個人でスピリチュアル関係者に何かを発信しても意味がなく、外からは『スピリチュアルの人が書いていることから』と読んでももらえない」とし、これまでの個々の技法者による情報発信がいかに独りよがりのものが多いかを説明し、筆者が到着するまでに4人で考えた構想について話してくれた。

【50】らが考えている組織の構想は内部の問題や情報自体を精神世界の外へ流すのではなく、実際の活動を通して外側から「自分たちが発信しようとしている情報」に気づいてもらえるようにしたという。筆者から「それを実現するために具体的に何が必要と考えているのか」とたずねたところ、下記の通りであった。

① 自分達自身についてよく知る

- 自分達の技法について他者からの情報を鵜呑みにせず、一度検証しなおす必要がある。
- そのためには精神世界の中からの情報だけでは不可能で、客観的に精神世界を見ている人や、技法についての歴史背景、本来の姿について知っている人たちとの交流は不可欠。
- 一度自分達の技法を心と体に分けてみて、それぞれを自分達で類別し、何が欠けているかを吟味しなおす必要がある。
- 人からの情報を鵜呑みにしなくて良いように、自分たちのためのガイドラインを作り、それに照らし合わせて活動をしていく。

② 業界に対しての自浄作用と影響

- 業界に対して苦言を呈する団体にするのではなく、精神世界技法を持つ者が社会に受け入れられ、理解される存在であることを示し、それを見て他者が変わっていきってくれることに期待をする（優良事業者の認定団

体⁴⁵⁾のような存在にはしない)。

- 内部の講習会や外部との交流のための座談会・勉強会の機会を設け、自分達の立場を認識していく。

③ 地域社会との交流と社会貢献

- 地域との交流に関しては現状を維持しつつも、範囲を広げていきたい。
- 精神世界の技法者を、その中だけの特別な存在ではなく、社会の中で足りない部分を埋める存在として見て貰えるようにしていきたい。

④ 霊的進化は社会との交流の中でこそ大きく前進する

- 自分たちの中で魂のレベル上げをするよりも、社会から受け入れられること（人類や地球から受け入れられること）によって「宇宙意識との繋がり」はより強くなるもので、組織では技法を磨くこと自体は目的とせず、それぞれが成長できるようにしていきたい。

【50】は、組織の目的を、「自分たちが持っている技法が社会的にも役立つことを外部発信し、社会との交流を通して自分たちの魂のレベルもあげていく組織を作り、社会的なつながりを強くしていくことによって、内部の目も自分たちの発信したい情報へと向いていくことを考えている」と話していた。

これは、【50】や【0A】が地域社会や行政とのつながりがあるからこそ思いついたことであると考えられる。表面的に聞けば単なるボランティアや啓蒙活動のための組織のようであるが、最終的な目標に組織内の技法者の霊性の進化が含まれていることから、「社会とかかわることで霊的成長を促す組織」の構想であると感じた。

(3) 組織形態について

4人のうち【50】と【5Q】は一般社団法人化を考えており、【0A】ともう1人は理念さえしっかりしていれば任意の組織でも良いのではないかと、組織の形態については意見が分かれていた。【50】らは、情報発信先や今後の提携先

を考えた際に法人である方が信用度があると考えており、逆に【0A】らは法改正で一般社団法人の設立が容易になっており、これまで任意団体や会社法人だった技法の認定団体が次々と一般社団法人化し、今後も増えていくと思われるので逆に信用されないのではないかとしていたが、両者とも「組織の信頼性」ということを考えている点では同じであった。

【50】も一般社団法人が最善の形だとは考えてはおらず、このミーティング前に、蒲生町の自治会やイベントを手伝ってくれた人たちからヒアリングを行っており、何人かから「NPO 法人にしてはどうか」というアドバイスを受け、自分なりに調べたところ、組織の目的や、活動理念を考えると一番合致する形態とは思っていたが、引っかかる点があり提案するのをためらっていたようだった。

【50】の様子をみていた【0A】が「【50】は本当は既に構想があるのでは」とたずねたところ、【50】は NPO 法人の話を持ち出し、地方自治体が認証してくれていること、最初から市民活動のための団体であること、事業目的に合致することなどをあげたうえで、提案をためらった理由の1つに「非営利であること」をあげた。

実際に活動していくには利益をあげる必要はなくても、活動費用や手伝ってくれた人へのお礼などの人件費も発生する。「非営利だから謝礼を渡せません、ボランティアでお願いしますというのは無理」という【50】に3人もうなずいていたので、筆者から念のために非営利の意味を理解しているか確認したところ、4人ともが「利益を上げてはいけないこと」と答えたため、踏み込んで良いのか躊躇したが、法人における非営利の意味について説明している WEB ページを見せた。「結局は会費以外にも事業をしても良いのか」と聞かれたので、問題がありそうな業種について記載されている WEB ページを教え、あとは自分で調べるように伝えたところ、4人ともがその場で調べて「ハードルは高そうだが、一番自分たちがしたいことに近い組織形態だ」と NPO 法人を目指すことで同意をしていた⁴⁶⁾。

【50】と【0A】から、「残りのメンバーと相談して同意を得られたら、NPO

を設立するための準備委員会を作りたいので、気付いた点への助言などをしてくれないか」と頼まれたため、「問題が生じる範囲を超えなければ」という約束で参与調査者としてこれに参加することにした。

【50】から、「8月のミーティング以降、2回のWEB会議を行い、NPO法人設立準備委員会もでき⁴⁷⁾、法人名も決まった」、「来年の3月には設立準備委員会として最初の活動として講習会形式のイベントを行うということになった。そろそろ法人の具体的な役員を決めたいので参加して欲しい」と頼まれ、滋賀県甲賀市でのミーティングに参加することにした(2018年9月25日現地調査)。

実際に機関設計をしていくと、役員と社員についての問題がでてきた。もともと組織化する一因が滋賀県で【50】を精神世界の権威者的にみなす人が【50】グループを作っていることにあったため、【50】を代表理事にすると「公式【50】グループ」を作ったのと同じになってしまう。【0A】が代表になるという案も出たが今度は「三重県での活動で同じことが起きてくるのでは」ということが懸念された。【5Q】から、「事業内容が外部とスピリチュアルの架け橋的な役割になるのだから、【50】に監事、【0A】には内部の業務執行理事になってもらい、代表理事と対外活動をする理事はスピリチュアル関係者以外から入ってもらってはどうか」という提案がなされた。

とはいうものの、その場で簡単に外部から精神世界の組織の理事を引き受けてくれそうな人の名前をあげることはできなかった。筆者から「誰が引き受けてくれるかではなく、どういう職種の人が適任かを具体的にあげた方が良いのではないか」と提案したところ、「滋賀県外の人でも代表は可能か」と尋ねられたので、問題ない旨を伝えると「それならば代表理事はあえて滋賀県外、【0A】が三重県なので理事は滋賀県から探すという方向で考えたい、職種についてはそれぞれのイメージを考えて欲しい」と【50】から提案があり、WEBで会議を行い、代表理事と理事についてどういう職種の人に依頼するのが良いかを考え、決まった時点で次のミーティングをすることとなった。

WEB会議ではNPO法人の活動分野を「保健・医療・福祉、まちづくり、

学術・文化・芸術・スポーツ」の3分野に決めたため、代表理事は何らかの形で霊性に関わる人が良いが、理事は滋賀県の中でこの活動分野に携わる人が良いのではということになったようで、具体的な職種は対面で決めることになり、再度同じ場所にてミーティングを行うことになった。

当日は筆者以外に7人が集まった(2018年12月4日現地調査)。既に【5Q】が理事と代表理事の候補者を5人ほど提示し、2人に絞り込むための話し合いとなった。候補者にはコ・メディカル(50代女性 滋賀県在住)・セレモニー会社代表(60代男性 兵庫県在住)・南湖方面の青年団長(30代男性 滋賀県在住)・ヘルパー(20代女性 兵庫県在住)・漁協の職員(50代男性 滋賀県在住)が入っていた。

最初は代表理事をコ・メディカル、理事を青年団長に頼むのが良いのではという話になり、理事に関しては滋賀県在住でまちづくりに関わっているということで青年団の団長をしている【5S】に頼んでみようということになった。しかし【0A】が、「スピリチュアルの内部の人向けのアピールとしては葬儀関係のお仕事をしている人の方がインパクトがあるのでは」と言ったため、コ・メディカルかセレモニー関係者かどちらが良いかという話になった。【50】は、「医療関係者にはスピリチュアル・ケアにかかわっている人もおり、スピリチュアル理解についてのギャップがでてくる可能性を考えると、常に事業として死を扱っているセレモニー会社の代表の方が良いのではないかとしたが、逆に「葬儀社の社長が代表というのはちょっとインパクトがありすぎるのでは」という意見も出た(2018年12月4日 参加者40代女性への聞き取り)。

筆者にも意見が求められたので「葬儀業者は医療関係者や遺族だけでなく、行政や公益団体、宗教団体とも親密にしていなくて大変な職種なので、人によってはコネクションが得やすいのでは」と見解を述べた。「社会的コネクションを作る」という視点は無かったようで、【50】が、「そもそも引き受けて貰えるかも分からないので、一度直接話をしてみて、そこで決めたいかどうか」と提案したところ、全員が賛同し【50】が直接会いに行くことになった。

【5S】は滋賀県在住ということで、【5O】と【5Q】が直接会いに行き活動理念を伝えたところ即答で了承を得られたが、セレモニー関係者である【5R】は、「理念には同意できるが、スピリチュアルというものがいまいち分からないので、どういうことをしているのかを見たい」ということだった（2019年1月12日【5O】への聞き取り）。

そこで、「3月に予定している講習会についての打ち合わせを見て貰うのはどうか」ということになり、筆者もこれに参加することにした（2019年1月12日現地調査 滋賀県）。

当日は前回と同じ甲賀市のカフェで【5O】・【0A】・【5Q】を含む9人と筆者、そして【5R】が集まった。【5R】から「分からないことは質問してよいか」と聞かれ全員が同意し、講習会のコンセプトや準備などについての話し合いが持たれた。この日はカフェの開店時間の10:00に合わせてミーティングがスタートしたが、終わった時点で既に18:30を過ぎていた。

3月の講習会については既にプログラム自体は決めてはいるものの、「この講演会をブース出展型イベントではない形式のスピリチュアルイベントの1つとして考えた場合にスピリチュアル関係者が『なるほど』と思えるか、外部の人からスピリチュアル業界がどう受け取られるのか、また『SEW とは何をしているか』を理解してもらえるかなどの実験になる」とし、どのように外部にアピールできるかが論点となった。

【5R】からは、用語の意味だけでなく、「スピリチュアルを理解してもらうことによって、誰が何を得られるのか」、「そもそも理念だけで運営ができるのか」と経営者らしい質問がなされたが、理念については【5O】や【0A】が答えており、【5Q】が運営面での質問に答えていた⁴⁸⁾。

【5R】は、「スピリチュアルのセッションが亡くなった人の慰めになるようなものであれば、利用しないでおくのはもったいないが、やはりそういう業界は怪しいと思う人が多いのは確か」とし、「情報発信や外との交流によって安全にスピリチュアルを使える（利用できる）ならば、うち（葬儀社）としても協力はしたい」と言い、当日来ていたメンバーも「代表理事は【5R】さんに

やってもらるのが一番良いと思う」としたため、両者合意のもと、【5R】がNPOの代表理事を引き受けることになった。

(4) 申請上の問題

このミーティングから1週間とたたないうちに【5O】から連絡があり、「NPO設立のため、書類作成のアドバイスをもらいに県庁の担当者に打診したところ門前払いに近い扱いを受けた」ということだった（2019年1月16日【5O】への聞き取り）。

電話で内容を確認したところ、担当者との面接でどのようなNPOを考えているのかを伝えたところ「そういうものは市民活動ではない」と言われたという。どのようなことを聞かれたのかと尋ねたところ、「心と体に関する研究や情報の発信が漠然としていて具体性がない」と指摘されたとのことだった。しかし筆者の知る限り、最初の相談で具体的な活動の詳細までを求められることは珍しいと感じたので、担当者の指摘に対してどう回答したのかを聞いたところ、これまでのミーティングの経緯などを話したということだった。そこで、翌日筆者から県庁の担当者へ電話し、法人の設立案内を断ったことについて知ることができた⁴⁹⁾。担当者がいうには、「占いや、霊能者の団体を市民活動として認めるわけにはいかない」ということで、【5O】が説明した内容と担当者の認識にズレを感じた。「そういうものではなかったと聞いているが」とたずねたところ、半年ほど前に大津市の占いの館の経営者の男性が「占いも市民活動だ」と何度も威圧的に庁舎を訪れていたことが分かった。筆者は精神世界自体が否定されたのかと思っていたが、担当者の方が求めていることは、占いや霊能者と何が違い、「どう市民活動として有意義であるかの具体的な説明」であることが分かった。

そこで、その旨を【5O】に伝え、説得性を持つ説明書類を作成することを勧めた。「言われた内容の理解はできるが実際に何を示せば良いか分からない」ということだったので、筆者は専門家に話して実際に設立可能かどうかを相談すべきだと助言したところ、「1度（専門家に）会って相談したい」というこ

とであった。

【50】の方では心当たりがないということだったので、筆者の方で元行政職員⁵⁰⁾だった行政書士の【5T】（60代男性 大阪府在住）を紹介し、急遽2月にミーティングを行うことになった⁵¹⁾。

【5T】はミーティング前に県庁を訪問し、担当者の【50】への対応に関して「滋賀県庁は過去に色々あり、書類審査が厳しくその上に占い師の男性が帰らず警察沙汰になったようで、担当部署自体がかなり神経質になっているので（先方の）対応としては仕方がない」とした。しかし、代表理事が【5R】であることや、理事に地元の青年団の【5S】が入っていることを話したところ、「危険がなく市民生活に寄与できる団体」であることが示せれば書類の受理まではするところまでは話ができたということだった。

どのような形で書類でそれらを証明するかという問題について、【5T】は3月に【50】らが講習会を行うことを知っており、その講習会の様子を報告書として添付するので最初から「NPO 法人として活動をしているという気持ちで取り組む必要がある」とした。

講習会は3月16日に予定されており、内容に関しては WEB 会議と1月のミーティングでほぼ決まっていたので、SNS や WEB 上の告知者を「心髄研究会 SEW-NPO 設立準備委員会」に書き換え、重点を講演とワークショップに置き、内輪の実験的な講習会という位置づけから NPO として今後活動する組織の講習会という位置づけに変更して行うことになった。

(5) 認証-設立

3月の講習会には【5R】らを含む準備委員会と筆者、SNS の告知を見た精神世界関連事業者だけでなく、精神世界と関係の無い参加者も2名来ていたが、【50】は特に緊張する様子を見せず淡々と司会をし、最後のワークショップまで大きな問題もなく終わらせた（2019年3月16日現地調査）。

【5T】は自分も参加しながら、講習会中メモをとっており「あとは任せて貰えればなんとかなると思う」とし、「少し【5R】と打ち合わせがしたいので

先に2人で出たい」と【50】に話し、会場を出ようとしていたので筆者も同席をして良いかを確認し、ついていくことにした。

筆者は深刻な内容を予想していたが、内容はごく事務的なもので、【5T】は、「今回の講習会の報告に【5R】の経歴書を添付したいので項目を埋めて欲しい」と準備してきた用紙を渡し、項目を埋めながら仕事や SEW に関わる経緯などについてのヒアリングを行っていた。

【5T】がいうには、「実際の申請には設立趣意に関して今回のイベントも踏まえてしっかりしたものを作成すれば良く、これは本来必要のない書類。役所も正式な受理ではなく参考資料としてコピーだけするだろうが、必ず目を通すので念には念を入れておく」ということだった。また【5T】は【5R】に「あと2回の訪庁で書類は受理されるだろうから、【50】には次のイベントの準備を始めるように伝えて欲しい」と言っていたので、筆者が理由を尋ねたところ「書類が受理されてから公告されるまでに3ヶ月ほどの審査期間があるが、書類の審査だけでなく実際に市民活動をしているかを確認される可能性もある」と既に書類の受理は問題ないという様子だった（2016年3月16日【5T】への聞き取り）。

その後、【50】から「書類が受理され、審査に入った」と連絡を受けた（2019年4月4日【50】への聞き取り）。

次のイベントの準備をすぐに始めるように【5T】は【5R】を通して【50】に伝えていたが、既に【50】は次のイベントの準備に入っていた。【50】が準備していたのは、ブース出展型イベントで、「スピリチュアル&セラピー・マルシェ」とされており、主催は「心髄研究会 SEW-NPO 設立準備委員会」になっていた。書類の審査期間に明らかに精神世界に関係する名称でのイベントに筆者は不安を覚えたが、【50】は、「普通のマルシェと同様にブースも出展してもらおうし、ワークショップもするが、目的は別にある」ということで、【5R】と【5T】とも話をして決めたということだった。

筆者はイベント前の下見や手伝いも兼ねて会場となる東近江市の集落にある古民家レストランで【50】、【5T】、【0A】らと会い事情を聞いたところ、今回

の目的は3つあり、1つは露骨に「スピリチュアル」という言葉を入れることでイベントがどう変わるか、2つめに、来た人に対して心や体のケアや SEW に期待したいことなどについてのアンケート調査をすること、3つめに、今回の打ち合わせで使っている春に新しく開業した古民家レストランを会場にすることによる起業支援をあげていた（2019年5月11日【5O】への聞き取り）。

スピリチュアルという名称でこれまで通りのイベントを行いながらも、今後の NPO 法人としての活動目標を定め、また地域社会への新しいつながりを目指すことを示すことによって組織の活動を明確化するのが【5O】の考えで、このイベントの開催については【5T】の方から「案内」という形で関係者に伝えられた。

予定通り「スピリチュアル&セラピー・マルシェ」は行われ、10:00~15:00という短い時間で1日のみの開催だったが約200名を動員し、この地域と場所でのイベントとしては大規模なものとなった。さらに16:00からの反省会では【5T】から書類審査が通り公示期間に入っていることが告げられた（2019年7月15日現地調査）。

SEW は翌月7日には滋賀県より正式に認証され、8月20日、最初の組織化構想から約1年で特定非営利活動法人心髄研究会 SEW が設立された。

2 活動拠点

SEW の主たる事務所は滋賀県東近江市の【5O】のサロンに置かれているが、他の協働組織とは違い、主として活動する「聖地」というものを持っていない。これまで【5O】がブース出展型イベントを行って来た東近江市立ガリ版伝承館・ガリ版ホルの敷地や付近が精神世界関係者にとってのパワースポット化している部分もあるが、特にその清掃や環境保護を目的としているわけではない。

連絡手段としては Facebook の会員専用ページとグループページ（以下グループと記す）⁵²⁾、世話人（役員及びスタッフ）のグループ LINE が存在し、グループで互いの情報を交換し、会員からのイベント提案や精神世界の思想や

技法についての議論がなされている。

会員から提案があれば、グループ内で話し合い、具体的活動内容が決まったら役員会 LINE で決議するという形をとっており、拠点はインターネット上にあると言える。

ただ、「精神世界技法やその周辺に関する書籍や漫画、メディアを集めた図書館を作りたい」という展望も持っており、これが実現すればそこが活動拠点になっていく可能性もある。

3 世話人について

SEW の機関は理事3人、監事4人から構成されている。【0A】に関しては第2章で紹介したため、ここでは設立発起人の【5O】を中心に、【5R】と【5S】についても記す。

(1) 設立発起人について

対象【5O】（40代女性 滋賀県在住 精神世界関連事業者）

役職 監事

聞き取り（2017年9月18日・2019年3月28日）

——職歴

【5O】は理系大学の農学部で応用昆虫学を学び、食品医療品のコンサルタント会社にて寄生虫等の混入管理や製造衛生管理をしていた。

結婚してからも仕事を続け、大阪市内で7:00-22:00までのハードワークをこなしていたが、重病を併発し休職せざるを得なくなった。幸いにも治療がうまくいき、復職をすることができたが、術後は当然ながら以前のようなペースで仕事を続けることはできなかった。

——精神世界との出会い

休職中【5O】は時間をもてあまし、特にしたいことも思いつかなかったが、「身体を壊すまでのハードワークをしてきたが、一体それに何の意味があった

のか、それが何の役にたったのだろうか」と自分の生きている意味を考えることが多くなったという。また「本当に自分はしたいことをしてきたのか、すべきことをしてきたのか」という疑問が何度も頭をよぎったという。

そのような中で、以前より興味があったアロマの講習会が近所であるということを知り、【50】は「少しでも『したい』と思うことをやってみよう」と思いこれに通うことにした。【50】は、1年間通ったアロマの講習でその技法の中心思想は「抑圧からの解放」、「自分と向き合う」、「価値観のリセット」と、そこから宇宙意識の中にある自分を知ることであると分かったという。「これまでは会社に合わせた自分であったが、これからは自分に合わせたことをやってみよう」と思うようになり、【50】は講習修了の2年後に退職し、ハーブとアロマのサロンを自宅に開いた。

——サロン開設まで

【50】は講習終了後、すぐにサロンを開かず2年弱の期間をおいている。受講者のほとんどが修了してすぐの開業を考え、アロマやその効果をどうすれば引き出せるかではなく「どんなサロンを展開しようか、どう顧客を獲得しようか」を優先し市販のエキスを購入することを考えていたのに対し【50】がこの期間をおいたのは、「自分が体感もできていないのに、認定書もらえば『はい今日から先生です』となるのはおかしくないか」と考えたこと、解放や自分と向き合うためにはアロマを作るところから知る必要があると考えたからだという。

【50】はこの講習会に限らず精神世界に関連する講習会全般について、「そういう人（認定されたらすぐに開業する人）が多いことが今の利潤追求のみの業者が多い一因になっている」とし、「まずは自分がまともな事業をしないと、他人には何も言えない」と考え、自分でハーブ園を持つことから始めた。

「やっていることは家庭菜園と同じで、自分でハーブを育てて、エキスを抽出して添加物を入れずに、効果を感じてもらえるようなものを作るだけ」、「実際のやり方は『講習会で教えて貰ったのだからできるようになっていて当たり

前』と言いたいが、多分（自分が）農学部をでていたから（講師が言っていることを）実践できただけだろう」と講習会で教えている内容が、実際には誰でも簡単に実践できないことに対する問題点を指摘していた。また【50】は自分でハーブの育成を実践することで、「植物を育てるにも自分ではない力が働いていることが実感できた」とし、その体験があるから自信をもって宇宙意識やエネルギーについて話すことができるとした⁵³⁾。

実際にサロンを開業するまで1年以上かかったが、その時間がなかったら「自分が楽しいと思う仕事にならなかったと思う」ということだった。この「技法者が地に足をつけた自信を持つ」という点が今の SEW の理念の基になっている。

——レイキの導入

サロンの経営が順調になってきた頃、【50】はレイキ⁵⁴⁾を導入することにした。理由を聞いたところ、「アロマの自己解放効果や自己の内観の効果が強くでた場合、最初に絶望が表れる場合もあり、癒しの段階に行く前に『ずっと死にたかったのですが決心ができました』と言って自殺を実行しそうになったり、頭痛や腹痛、手足のしびれという症状がでてくる場合もあり、実際にでてくる心体的な症状を緩和することによって、大きな事故を防ぐための対処の必要性を感じた」ということだった。

レイキの技法は、クライアントが技法者と知り合いだったので、アロマの補助的技法として学ぶだけのつもりだったが、1年間通った結果「レイキマスター」の認定を受けた。「わずか1年間でマスターというのはおかしい」と【50】はいう。筆者が「4日で認定コースもあるので長い方では」と言ったところ、「そういうところは」と言いかけてそれを飲み込んだのち、「自分はアロマが主体で、セラピー後のケアをレイキでできればと考えたが、それによってクライアント数が増えて予約待ちが発生する程になった」とし、それが精神世界の中に存在する大きな問題にきづくきっかけになったという。

——レイキを併用することへの疑問

【50】が精神世界への疑問を感じるきっかけになったのは、予約が増え、カレンダーを見て、クライアントによっては1ヶ月にサロンに予約を入れる回数が3回を超えるなどレイキを併用した人に限って予約と予約の間隔が短いことに気づいたことだった。確かに売り上げは上がってはいたが「これはとんでもないことをしているのでは」と直観的に感じたという。

【50】は「自分は心理学の専門家でないのであくまでも傾向としての話だが」と前置きし、ネガティブな心身症状がでてレイキでそれを治めた人は、ほぼ毎回似たような悩みをもって来る傾向にあることをあげた。アロマは本来「抑圧からの解放」、「自分と向き合う」、「価値観のリセット」の3点から成っている、短いスパンで同じ悩みをもって来るというものはあり得ないはずなのに、これはおかしいと疑問を感じたという。

アロマで抑圧から解放されて自分と向き合った結果、ネガティブな自分と向き合ってしまう心身症状がでるのは、その際に向き合った自分が高次の自分ではなく、低次の自分であるので、その心身症状をレイキでおさえてきたが、たとえ向き合ったのが低次であろうとも、それまでの価値観を変えていくのが本来のセラピーの趣旨であるのに心身症状をレイキで一時的におさえてしまうと、価値観が変わるのではなく「ネガティブな面を吐きだせば癒される」という錯覚に陥るのでないかと【50】は推測した。

——精神世界ビジネスへの疑問

【50】のサロンのリピーターには、「もっと違うやり方も試して下さい」とリクエストする人が少なからずおり、別の技法を用いると、同じ人から間隔を開けずに予約が入り、さらに「前と違うのをお願いできますか」とリクエストしてくることが多かったという。

クライアントへのアンケートから、リピート率が高い人は【50】のサロン以外にもなんらかのヒーリングサロンに行っており、癒やしの掛け持ち状態になっているということが分かった。【50】はこれを「掛け持ちというよりも癒し中毒と言える」とし、「いったいこの人は癒しにいくらつぎこんだのだろう」

と不安になり、それが、自分の感じた「とんでもないことをしているのでは」という感覚の正体だったという。

ここで「4日で認定されるレイキ」について【50】は話しはじめ、「4日で認定ができるということは、それだけ小手先を変えたヒーリング技法が氾濫していくことになる」とし、癒し中毒になった人は、少しでも違う技法があればそこに行って、さらに次を試したくなっていく。しかしその一因を作っているのは実は自分も含めた技法提供者側にもあるのではないかと考えた。【50】は、『セラピストとしてビジネスをすること』と『スピリチュアルをビジネスにすること』との間には大きな開きがあるのではないかと、何度もセラピーを受けなければならないようにするというのは医者が中毒性のある毒を患者に注射するような行為と同じではないのか」と悪寒を感じたという。

そこから【50】は自称セラピストを俯瞰するようにし、その結果精神世界におけるビジネスが持っている闇について考えるようになった。

【50】は、「悪意をもって毒を盛っている人は論外としても、人によっては『断り切れない人』、『不要なことは分かっているけどどうしても生活のためにお金の要る人』、『自分自身がそこ（精神世界ビジネス）にしか居場所がない人』も存在する。悪意がなくともそれで（精神世界の技法で）生活をしているシングルマザーの女性が頼まれて不要なセラピーや技法を使っても『やめろ』とは言えない。社会に馴染めなくてスピリチュアルの世界でしか生きられない人もいて、『なんとかその世界（精神世界ビジネスの繋がり）の中で居場所を作りたい人』がいることも分かる」とし、「だからといってそれを認められるかといえばノーで、やはりそれには賛同できない」と顔を曇らせていた。

——精神世界と癒しの難民

【50】はこの精神世界ビジネスの中にある負の部分には、精神世界の根本思想に関わるものがあるとする。精神世界の根本思想については第2章に記したが、この中の「宇宙意識」に対する認識の違いに問題があるという。それは、自分が行っていることが宇宙意識に繋がり、魂のレベルを上げることになって

いるかどうかを客観的に判断する方法がないということである。【50】は、「『技法を扱っているときに自分は宇宙意識とつながっているから使命を果たしている』と思えば、たとえクライアントを煽ることになっていても罪悪感を抱かないし、逆に常に『自分のやっていることは宇宙意識に合致するのか』と疑問をもって技法を扱っている人はクライアントを癒し中毒にするような行為か、どのような行為かを分かっている」とし、精神世界技法者の中でこの「疑問をもつ系の世界観を持つ人が少数派である」ことに問題があるとした。

【50】は精神世界自体の根本思想は否定しない。しかし、精神世界ビジネスについては、「この業界は、システムの言え『スピリチュアル難民になる人』と『スピリチュアル難民を作り出している人』の2種類の人から成り立っている」とし、「それには技法提供側なのか、クライアント側なのかは関係ないことが分かった」という。2章の事例では技法提供者が精神的・経済的な加害者になっている事例を取り上げたが、【50】は技法提供者自体がスピリチュアル難民になっていたり、その提供側をスピリチュアル難民に仕立て上げるのがクライアント側であることも多く、互いに依存しあう関係を作り上げると、技法提供者が必ずしも中毒者をつくっているのではなく、技法提供者もまた中毒者になっているのだという。

【50】のこの言葉は、櫻井義秀の「実践者と学習者によって癒しのネットワークや特定の技法に関わるスピリチュアルな世界が拡大する」（櫻井 2009a：172）と指摘してきたことが、その10年弱後には内部からもでてきたことを表しているといえよう。

——被害者と加害者

ここまでのやり取りで筆者は、【50】が精神世界ビジネスについて「被害者」、「加害者」という言葉を使用していないことにきづいたので、その点についてたずねたところ、社会的にみればスピリチュアル技法を提供する人が「加害者」でクライアントは「被害者」とみられていると感じるし、ケース数から考えると否定はできないとしながらも、「内実を見るとクライアントが技

法者を難民にしている一面もある」こと、「そもそも社会的にそのように見られているのを知っているながら、スピリチュアルというものに、被害者や加害者という概念を当てはめて良いのかどうかについて、内部で誰も考えないことの方が一番の問題」だとし、内部の意識が変わらない以上精神世界は変わらないと断言していた。

——地域社会と発起人

筆者がこの聞き取りを行ったのは【50】と関係者が主催するブース出展型イベントの中だったが、このイベントはそれまで筆者が現地調査してきたものとは雰囲気はかなり違っていた。

イベント会場となったガリ版伝承館・ガリ版ホールは東近江市の公共施設であるが、施設の敷地だけでなく施設内にもブースが出展されていた。自治体が公共施設のホールの一室を団体に貸し出すことはあっても、公共施設そのものを貸し出すということは珍しい。有元裕美子は「スピリチュアル・コラボレーション型ビジネス」、「スピリチュアルでまちおこし」として地方自治体が観光産業の1つとして神社・仏閣にストーリー性を加味して集客に活用する事例をあげ、若い女性層をターゲットにして「この層はスピリチュアルな関心だけでなく旅行需要も高いため、パワースポット・ツアーのコアターゲットになっている」と述べているが（有元 2011：78-83）、ガリ版伝承会館もガリ版ホールもパワースポットでもアニメの聖地でもなく、神話があるわけではない。

そこで行われているのは単なるブース出展型イベントではなく、精神世界とは無関係の地域のカフェやオーガニック食料品店、エスニック料理店からのブース出店や、伝承会館の中でガリ版体験ができるなどあきらかに地域社会や行政とのつながりがないと不可能なイベントであった。

その背景を聞いたところ、【50】は「声をあげてもスピリチュアル業界は変わらないし、社会も耳を傾けてはくれない。それならば社会の中で自分達が地道に活動するしかない」と、意識が同じ方向を向いている事業者に口コミや紹介で全国から出展してもらい（沖縄からの出展者もいた）、運営からはできる

限り精神世界関係者を外し、地域の人たちに頼んで運営スタッフになってもらっているということだった。

【50】は、休みの日にはできる限り地域社会とのつながりを持つように意識をしており、蒲生町が東近江市に編入される前には、蒲生町の町おこしの企画に積極的に参加しており、イベントをすると決めたときには、ガリ版会館に限らず関わってきた地域施設から場所の提供の申し出があったという。

——2021年5月現在

2021年5月現在、【50】は SEW では監事をつとめているが、理事には入っていない。これは自分のイベントやサロンと SEW を分けるため「SEW = 【50】」となってしまうとはこれまでと何も変わらないこと、SEW が理念をもった精神世界関係者と賛同者の集まりであるならば、自分もまた事業者の1人でありたいという自身の考えからである。

(2) 代表理事について

対象【5R】(60代男性 兵庫県在住 厚生省認定葬祭ディレクター1級)

役職 代表理事

聞き取り(2019年4月13日・2019年12月23日・2020年1月28日・2021年6月24日)

代表理事である【5R】は、葬祭セレモニー・海洋セレモニー会社を経営している。仏教式・キリスト教式のどちらの葬儀もしており、小型船舶を所有し、海洋散骨葬儀も行っている。

船舶を導入してからは、大阪・京都・滋賀・兵庫での海洋葬の下請け業や⁵⁵⁾直葬⁵⁶⁾に関するアドバイスや講演も行っており⁵⁷⁾、天津市内にも営業所を持っている。

精神世界とは無縁であったが、事業展開として「ボート・セラピー」や発達障害児に対して海や湖から命について学ぶ「海洋ワークショップ」を行っており、船舶を使った「心の癒やし事業」について積極的に活動していた。

また体験会として「棺桶体験」を定期的に行っており、体験者が棺桶に入り斎場まで行き、葬儀をされる体験をする機会を設けていた。この体験会で、この体験を通して「死ぬことについての不安が何故か消えた人もいる」ということであった。

【5R】は、「霊能的な技法を自分が得たいとは別に思わないが、最近よく耳にする霊性、スピリチュアリティという言葉については気になっていた。ひょっとして自分がしていることにも関係する部分があるのかと考えていたところに今回の話しを貰った」とし、「セッションのようなセラピーは出来ないが、市役所や公益法人、宗教団体との付き合いや、病院・医療関係者とのパイプ、宗教者との関わりは相当数もっている。今後大型のワークショップができないかと思っていたので、イベント慣れしている【50】と目指すところで共通点は多いと思う」ということだった。

NPOの代表に就任することで生じる責任問題について聞いたところ、「現実的にこういう団体を立ち上げた場合、カリスマ的な指導者が代表になるとその色で見られてしまうのは仕方ない。名義的に別に人を立てるのは分かるが、ミーティング⁵⁸⁾で、『名誉職ではなく実際に自分も立案して動いて良いならば』という条件を提示したときにそこにいた人たちに『逆にどんどん提案して欲しい』と言われたので、放置して責任が回ってくる立場ではなく、自分が何かを提案して責任問題になってしまうくらいの方が良い」と笑っていた。

2020年の5月には【5R】の提案で、SEW主催のイベントを準備していたが、コロナ禍により中止となった。【5R】の事業所ではコロナ禍によって直葬やLIVE葬、また葬儀に関する相談も増えており、SEWを通してこれまで寄せられた相談等についての情報発信を行っている。また役員会LINEでは経営者として運営方針についてアドバイスをすることも多く、名義上ではなく実際の代表理事として活動している。

(3) 外部理事について

対象【5S】(30代男性 滋賀県在住 南湖地区青年団団長)

(1) 大切にしたいわたしの体とココロ～がんの不安へのアプローチとリラクゼーション (2019年11月2日現地調査 三重県総合文化センター内「フレンテみえ」)

SEW が NPO 法人化してすぐに、【0A】に「講演会会場に SEW としてブース出展してもらえないか」という連絡があった。この講演会は医療関係者と婦人グループが三重県津市の後援を受けて行っている連続講演会の1つで、「乳癌に関する正しい知識、医療とメンタルケア」を目的に行われたものである(写真5-14)。

この会の代表の【5U】と【0A】は以前より付き合いがあった。津市の担当者と【5U】との間ではこの年の講演会では例年の写真の展示ではなく、何らかのセラピーの体験会ができればという話が出ていたが、「スピリチュアルなものは怪しいので受け入れられないだろう」と両者とも考えていたところ、SEW が NPO 法人となったということで、即【0A】に打診が入ったものである。

費用は交通費等の実費しかでないものの、SEW の案内を置いて良いということだったのでグループ内で【0A】から会員に SEW として出展してみたい旨を伝えたと、全員が賛同し、三重県に近い会員からは「当日手伝いに行く」という申し出もあり、SEW が NPO 法人化してから最初の活動となった。

何をするかについては、グループ内でも様々な議論があったが、「場所を取らない」、「体感しやすい」、「フィジカルにもメンタルにも働きかけることができる」ということで、シンギング・ボウルによるセラピーを行うことになった。

1時間行われた無料体験コーナーは盛況で、当日シンギング・ボウルは3つ用意されていたが、体験ができなかった人もいた(写真5-15)。

(2) 電子出版支援会 (2019年12月23日現地調査滋賀県甲賀市)

SEW の事業目的の1つに「書籍販売事業」があるが、2021年5月の時点で書籍の販売はしていない。精神世界関連事業者の中には電子書籍で情報を発信したい業者もいるが、ノウハウ的にハードルが高いため断念している事業者も多い。SEW にも技法や自己で構築した理論などについて出版をしたいという会員は複数おり、グループで「電子出版の仕方や内容についてのコメントが欲

(写真5-15 写真提供 NPO 法人心臓研究会 SEW)



しい」という要望が出ていた。「ネット上にファイルをアップして内容を会員で読んでどうか」という意見もあったが、「書き始める前に内容の構想も含めて意見を聞きたい」という声もあり、「心身・身体に関する事業者に対する適切な教育」の一貫として集まり、出版希望者らの相談を行ってはどうかということになった。

「スピリチュアル関係者以外からの相談も受け付けてはどうか」という意見もあったが、定款の目的に「事業者に対する」とあるため、最初は事業者を対象として相談会を行った。当日は1人の出版希望者(40代男性 滋賀県在住)が来ており、役員の他に会員6人が参加した。相談会は、出版希望者にどのような内容の出版をしたいのかをプレゼンしてもらい、それに対して出席者から質問や意見を出しあう形式で行われた。【50】、【0A】や事業者からは技法についての質問がでていたが、【5R】や【5S】からは「最低限、自分たちスピリチュアルの外にいる人が読んで分かるものでないと意味がないのでは」という意見もあった。

筆者には出版希望者に対して求められているハードルが高いように思えたので、出版希望者に「条件的に厳しくなかったか」と尋ねたところ、「単に自分の考えたことだけを書くならばブログの方が早いし反映もしやすい。出版である以上はできるだけ多くの人に受け入れてもらえるものを出したいので、事前

にスピリチュアル関係者以外の人からの意見も聞いてよかった」ということだった。

この支援会の内容はグループで共有され、グループ内でも反響があったため3ヶ月に1度程度の頻度で勉強会も兼ねて行うことになり、2020年1月にも行われている。その際に4月以降は出版支援の委員を設置することになり、役員ではなく出版支援の委員が担当することになった（2020年1月28日現地調査）⁵⁹⁾。

(3) 生前葬セラピー（2020年5月予定中止）

【5R】からの提案で企画が進んでいたものに「生前葬セラピー」がある。これは先にも書いた【5R】が行っていた「棺桶体験」によって、死ぬことについての不安が何故か消えた人がいることから、これを1歩進めて実際に寺院や教会で葬儀を行い、体験者は棺桶に入って「送られる側」を体験するというもので、【5R】はこのために自治体の斎場で火が落ちている日に炉の手前まで入る交渉もしていた。

既に会場提供と司式をする寺院と教会の手配もできており、散骨の体験をする手前に聖職者から各宗教ごとの死生観、また SEW から精神世界の死生観などについて1時間ほどのディスカッションを行うということになり、5月後半を目処にスケジュール調整をしていたがコロナ禍で中止となった。

実際には中止となったものの、【5R】からの働きかけで寺院、教会、聖職者、行政担当者からの協力が取り付けられたことはコロナ禍以降の SEW の活動についての可能性を感じさせるものとなった。

(4) コロナ禍における心のケア支援事業

2020年度は「スピリチュアルを体感すること」を1つの目標にしていたため、コロナ禍で事業の大半は中止せざるを得なくなった。

2020年4月には最初の緊急事態宣言がでており、外出が自粛されていることで、グループでは会員から「コロナで疲れている人に遠隔ヒーリングのような

ことはできないか」という提案がでた。精神世界の技法では直接触れなくても行える遠隔セッションもあるため、筆者もこれは可能だと思ったが、実際には「誰がやるのか」、「会員がやるとすれば無償で良いのか」など具体的にどうするかについて話がでていたので難しいかと思われた。

役員会 LINE では「今の社会事情を考えると精神世界の技法が役立つことを知ってもらひひとつのきっかけにもなる」ということになり、2021年度の会費は徴収しないので会員には精神世界関連事業者として協力して貰えないかという打診がなされた。これに対して反対する会員はおらず、「遠隔で何をするべきか」の方にグループでの話は進んでいった。

その結果、最初は誰でも入って来やすいように瞑想を、2回目から精神世界技法を前面に打ち出したものを ZOOM で行うことが決まり、4月25日には「キャンドル瞑想」、5月19日と30日は精神世界の技法である「コードカット、グラウンディング」のイベントが行われることになり、筆者も4月25日と5月30日には参加することになった。

1. キャンドル瞑想（2020年4月25日 ZOOM）

キャンドル瞑想の参加者は13～16名で（途中退出者、スタッフ2人含む）あった。告知期間が10日も無かったにも拘わらず、精神世界に全く触れたことのない人の参加が半数近くいた。参加者アンケートの参加理由の中には複数「NPO 法人主催だったので危険ではないと思った」というものがあり、安心して受けられるのであれば精神世界の技法に需要があることが確認できた。

体感については、参加者の様子を見ることに集中していたために筆者には何も起こらなかったが、3分の1の参加者が途中から寝てしまっていた。

筆者も主催者もともに「企画としては失敗か」と感じたが、参加者からは「久しぶりにまともな睡眠をとった」、「ここ最近、これだけ深く寝られたことはなかったのでスッキリした」という感想がシェア会で出ており、主催者の狙いとはズレているとはいえイベント自体は成功したと言える。

2. コードカット、グラウンディング——第2回（2020年5月30日 ZOOM）

この体験会で使われる技法の「グラウンディング」は、身体のチャクラを開

いて地球につながり、大地のエネルギーを活用することにより靈性を活性化させるというもので、要領を説明すると下記の通りである。

座ってリラックスする。足の裏を地面に密着させ、太腿の上にてのひらを上にして乗せる。目を閉じて4回ほど深呼吸をし、自分のエネルギーを真っ直ぐに送り出し地中へ送る。自分のエネルギーが地球の中心部に着いたイメージができれば巨大なクリスタル（アースキーパー）が見える（ここでクリスタルが見えなければ最初に戻ってやり直し）。アースキーパーが見えたら自分のエネルギーを繋げるようにイメージし、これに成功すれば、グラウンディングコードと呼ばれるエネルギーラインと自分が接続される。

接続が体感できれば、自分の中にある負の感情等のマイナスなものをすべてアースキーパーに注ぎ出す。

以上の動作を繰り返すことで身体のマイナスエネルギーと、地球のプラスエネルギーの熱交換を行い、そのようにして浄化を行っていくことにより、靈性が活性化してくるということであった。残念ながら筆者は目をあけたまま観察をしていたので、アースキーパーに到達することが出来なかったが、参加者は全員が終了後スッキリとした顔になっていた。

この日の参加者は少なく、スタッフを除くと6人（女性4、男性2）であったが、6人ともが「2回目のグラウンディングのイベントに参加して良かったから」という人たちで、筆者を除く全員がこれが精神世界の技法であることを知らず、その効果を体感していた。

どのような経緯で参加したのかを聞いたところ、1回目のキャンドル瞑想の時から参加者が半数でそれぞれが友人を誘ったということであった。

グラウンディングは時間を要するため、スタッフはグラウンディングとはどういう技法なのかについての説明をしておらず、「終わった後からでも説明をすればスピリチュアルについて知ってもらう機会になったのでは」という声もあったが、【5R】は、「コロナ禍におけるケアということを考えると、これがスピリチュアルなものかどうかを特に隠す必要もないが、わざわざアピールする必要もない。むしろ SEW が何をしているかの方が大切では」とし、スタッフ

もこれに納得している様子だった。

3. 3つのメッセージ（2020年7月3日 ZOOM）

体験を主とした企画を3回終えた時点で、【5O】から「講習会ができない現状なので何か講演のようなものはできないか」という提案があった。「何か良い構成はないか」と聞かれたので筆者から、「コロナのせいで葬儀すらできないなどの報道もあるので、代表理事の紹介も兼ねてコロナ禍で『葬儀ができない』という報道の真偽も含めて話をしてもらったかどうか」と提案したところ、「一緒に精神世界関係者からの話、宗教者からの話の3部構成にしてはどうだろうか」という提案があった。【5R】の方は引き受けると同時に「知り合いの住職の寺に話を通して見る」とし、精神世界関連事業者に関しては【5O】が依頼をするという形になった。

【5R】から「お寺の方から、説明をして欲しいので来てくれと言われているので誰かきてくれないか」という連絡があり、今後のことも考えて筆者が同行することにした（2020年6月4日 現地調査）。

SEW のこれまでの活動資料をもとに事情を話したところ、「そういう趣旨であれば引き受けましょう」と住職から院代を紹介され出演が決まった。

当日はスタッフを含めて22名の参加があり、ZOOM を通して語られるメッセージに参加者は真剣に耳を傾けていた。中でも最初の【5R】の話に関しては、「コロナ禍においても葬儀は可能、葬儀ができないケース、できるケースの詳細や斎場の現状」などが語られた。限られた時間の講演だったが、身近な内容であったことから【5R】の講演については後日問い合わせが多く入った。ZOOM で見た人から伝え聞いた福祉関係者らも含めて30件近くの相談が SEW 事務局に入ったという。電話連絡があっても【5R】は普段は事務局にはいないため、要件を一旦預かって【5R】から連絡をし直すという形をとって対応を行った。心のケアとは違う実務関係に関する反響の大きさに筆者も驚いたが、対応した【5R】は、「実際は同じ質問が多かったが、何かあったときにどうしたら良いのかという実務的な面での心の不安を抱えている人は多く、大きな意味では心のケアになるのではないかと今回の質問内容をまとめ、行政に報告

を入れるということであった（2020年8月13日【5R】への聞き取り）。

(5) 家族でできる感染対策 ON-LINE（2020年10月21日）

三重県で「子供食堂」や「食育活動」をしている NPO 法人 shining の理事長（40代女性）から SEW 事務局に連絡があり、「医療関係者による感染対策の LIVE 配信をしたいが、SEW の方で窓口になってもらえないか」という打診があった。これは先の ZOOM での講演の反響の1つで、「自分のところで配信するよりも SEW から配信した方が見てくれる人が多いと考えたから」ということであった。【0A】が案内のバナーを作り（写真5-16）、LIVE 配信は【0A】と三重県のスタッフが手伝い無事に終わった⁶⁰⁾。筆者は後日録画動画でこれを見ている。

（写真5-16 【0A】からの提供）



小 括

SEW は NPO 法人ということで、機関として役員会有り、また行政庁に毎年事業報告の必要があるため他の協働組織に比べて活動に制約がかかる反面、滋賀県や三重県という地方では、地域社会だけではなく行政の一部や精神世界とは関係の無い公益団体との連携がとれているという特徴がある。

一方、「はたしてこれは本当に『靈性にかんする協働組織』なのか」という疑問もある。他の協働組織が神社の清掃や聖地を守ることによって高次の存在

と繋がり、魂のレベルを上げたいという人々が集まってきていること、活動拠点がハッキリしているのに対して、そのような場所を持たず、また活動においては現実的なものが多いため（特に2020年度のオンラインでの活動）、「精神世界から出発したケア団体」のように見えなくもないからである。

確かに設立の経緯に記したように、実際には「対外活動を通して精神世界に関する正しい情報を発信する」という理念のうち精神世界に関する情報発信に関しては進んでいないように見える。

しかし、社会的に受け入れられる方法を用いながらも実際は精神世界技法を取り入れ、精神世界関連事業者が話をするなど、活動1年目でコロナ禍の中で社会的にも精神世界の技法が受け入れられる可能性を示せたことは大きな前進であるように筆者は感じた。

また会員からも「対外的な活動によっても靈的成長は可能だと実感した」という声が大半で、会員がそれぞれ精神世界の根本思想に基づいて動いているという点、手続き上役員会での決議が必要だったり、理事が表にたたないといけない場合もあるものの今回の活動以外にも多くの提案が会員から出ており⁶¹⁾、会員主導で組織が運営されている⁶²⁾。SEW もまた「靈性にかんする協働組織」の特徴を持っているのである。

4 節 禊カフェ

——兵庫県西宮市

禊カフェは、兵庫県西宮市にある越木岩神社の清掃及び環境整備活動を行っている協働組織である。2021年5月の時点での世話人は2代目で、毎月の神社清掃後には世話人のサロンで談話会や参加者による精神世界の技法のワークショップが行われている。

1 協働組織成立の経緯

禊カフェは2015年に石川県で当時「神社コンサルタント」を名乗っていた榎田良一（現：ハートグラムインストラクター⁶³⁾が啓示を受けて、「越木岩神社

のエネルギーが枯渇して地球の磁場が狂いそうなのでなんとかすべき」と情報を発信、「禊カフェ」と銘打って全14回クールで神社の立て直しを検討。精神世界関連事業者で「和魂カード」⁶⁴⁾リーディングを教えていた故【5W】(40代女性 兵庫県在住)がこれに応じ、他のカードリーディングをしている人たちに情報をシェア、柘田を含む9人で活動が始まった。

同神社はいくつもの大きな磐座があるが、活動を始めた時には同神社の本殿から北側は荒れ放題であったという。また、東側の大きな敷地にも磐座があったが、建設業者がマンションの建設予定地としてこれを取り壊そうとしていた。柘田が受けた啓示はこのマンション建設予定地にあった磐座から発せられたとも言われている(2020年8月8日【5W】への聞き取り)。

柘田は「徹底した神社の掃除と祈祷」によって神社と、エネルギー場である磐座を守るべきだと主張。活動のメインは頂上地点まで歩けないほどに荒れ果てていた本殿から北側の参道の掃除と頂上での祈祷となった。

活動が始まってから大阪市のフコク生命ビルで行われた「ボランティア団体のプレゼン」にて【5W】は禊カフェの活動についてのプレゼンを行い、世話人である【5W】(50代男性 コミュニティラジオ運営者)が参加した。同氏の呼びかけにより多くの精神世界関係者がこの活動に賛同しはじめ、参加者が増えていった。

サムハラ神社や大杉神社とは違い、この神社は神社本庁に所属しており、社務所は禊カフェの活動について難色を示していたが、柘田や【5W】らは掃除と祈祷を続行し、14回にわたる活動によって歩いて頂上までいけるように参道が整備された。また理由は不明だが、マンションの建設予定地では事故が多発し、死亡者と重軽傷者が出たためにマンション建設に関しては凍結されている。

柘田は14回の活動が終わった時点で「自分の使命は終わり」としたが、【5W】はこの活動に価値を見いだしており、後も名前をそのまま引き継ぎ「新生禊カフェ」として活動を開始し、2021年にはメンバーは30人近くとなった。なお【5W】は同神社が2度と荒廃しないように、かつて一番荒れ様が酷かった本殿北側へは毎日清掃に行っている。

【5W】が世話人になってから、活動に否定的であった神社側も活動に徐々に賛同するようになり、社務所の開放や清掃日に合わせた神職や職員による境内の清掃、また磐座までの舗装などを行い、また氏子らも禊カフェに触発され「森を守る会」を結成した。本殿付近の清掃は禊カフェと森を守る会の2団体によって行われているため、非常に綺麗に保たれている。

磐座から頂上までは舗装されていないが、「舗装するとエネルギーが封印される」と禊カフェから何度も申し入れを行ったということだった(2020年9月5日【5W】への聞き取り)⁶⁵⁾。

禊カフェでは複数回清掃に参加し、HEALY⁶⁶⁾による【5W】のヒーリングセッションを受け、情報を登録した者が会員として扱われている(2020年9月5日【5W】への聞き取り)。

2 活動拠点について

活動拠点となっている越木岩神社は精神世界関係者から聖地、パワースポットとして扱われている。神職も精神世界に対して寛容で、宮司は氏子と禊カフェの関係が悪くならないように配慮している(2020年2月18日【4I】への聞き取り)。社務所でパワーストーンが販売されていたり、精神世界に共感を示す神職がいるなど、精神世界関係者が活動しやすい環境にある⁶⁷⁾。

3 世話人と精神世界

発足時の世話人である【5W】は郵便局に勤務していたが、2015年に和魂カードに出会い、カードリーダーの認定講座を受けて資格を得てブース出展型イベントに出展し、その後も県内の各地でセッションを行った後、その年の秋には退職して精神世界関連事業を開業した。電話でのスピリチュアルカウンセリングや和魂カードリーダーとして教室を開くなど活動をする中で、FaceBookで柘田と知り合い、柘田から越木岩神社のことを聞かされて「これは自分がなんとかしなければ」と考え、禊カフェの立ち上げに世話人として参加した(2020年8月8日【5W】への聞き取り)。

【5W】を中心とした新生禊カフェとなってからも毎回これに参加しており、清掃後は和魂カードによるセッションを行うなど組織の中心的な存在であった。その後病を患い、1度は回復し清掃にも参加できるようになっていたが、筆者が最初に聞き取りを行った6日後に体調が悪化し急逝した(2020年9月5日【5W】への聞き取り)

【5W】は栞田による禊カフェが行われている時から参加しており、上述の【5V】のプレゼンを聞く数日前に、サロンを置いている場所へと引っ越してきたという。【5W】は2021年5月現在、地元でインターネットラジオ局を持っており、自らも番組を持ち、健康情報や宇宙へのメッセージ、これからの世界についてなど幅広い情報を発信している。

このラジオ局での番組はよく聞くと何らかの形で精神世界に繋がるようになっており、概念的に地域限定でインターネットとはいえラジオ局の開設は大変だと思ったが、【5W】よりも2ヶ月ほど早く禊カフェに参加している【4R】によれば、【5W】は元々大手通信会社の技術部門に勤務しており、機材関係だけでなく開局の手続きまで知識をもっているの、というコンセプトであれば開局ができるかは知り尽くしていることと、それを発信するのが【5W】の使命なので開局はできて当然ということだった(2020年3月27日【4R】への聞き取り)。

【5W】はこの他にも ZOOM を使い2020年から「宇宙とつながる健康お茶会」と題したミーティングを開いており、参加者は日本からだけではなくヨーロッパからもおり、海外では有名な技法者が参加することもある(2020年11月15日 ZOOM)。

「自分自身は手技による技法は得意でない」ということで、基本的には HEALY を使ったセッションや、オーラ測定器による診断などハードウェアを使っているが「セッションが本業ではない」ということで、全て無料で行っている。一方上述のようにインターネットラジオ局の開設や ZOOM を使った情報発信、独自の検索システムによる情報収集した内容を会員へ発信するなどの通信サービスを行っており、宇宙意識からのメッセージを発信するための場を

提供するポジションにある。

また禊カフェには、【5W】以前から参加している音響によるヒーリング CD や動画を作成している【4R】や、HEALY の上位機である TimeWaver セッションを行っている元薬剤師の【5X】など中心となるメンバーがおり、【5W】が不在時には彼らが社務所との間を取り持つなど世話人的な役割を担うこともある。

4 活動内容

禊カフェの活動内容は、越木岩神社の清掃を中心とした午前中と、【5W】のサロンでのディスカッションやセッションが行われる午後の2部で構成されている。

午前中の清掃参加者は9:00に同神社に集合。荷物を社務所に預けた後、それぞれが神社に置いてある禊カフェの専用の物置から竹箒や熊手を取り出して清掃にかかる。同時に社務所からも職員が出てきて境内を清掃しはじめるが、境内の掃除は神社職員が、境内より上の掃除は禊カフェのメンバーが行うという暗黙の分担ができあがっているように見えた⁶⁸⁾。

清掃は閑談を交えながら行われる。参加者は毎回8人-15人ほどで、清掃後は頂上から本殿まで全ての祠を参拝する人もいれば、磐座前に留まり瞑想する人もいる。

どこかで宇宙エネルギー吸収などの儀式があるのかと思っていたが、神社では掃除か参拝だけがなされ、【5X】によれば「清掃をすることで心が浄化される。心が浄化されればこの神社に注いでくるエネルギーは、磐座を通じて自然と体内に吸収されるので特別なことをする必要はない」ということであった。

ただ【4R】は、「この神社からのエネルギーは、神様の意思を持ったエネルギーなので、清掃を通していつも意識を上に向けていないと、気づきを与えるために試練が課されることもある」と言っていた(2020年10月17日【4R】への聞き取り)。

また【5X】は、「本来神社からエネルギーを得ているはずの日本人が弱体化

しているのは、神社に降り注ぐエネルギーを吸収できないため、これはアメリカが神社本庁をつくったときに仕組んだ2礼2拍手が悪い」と話し、3礼3拍手が正しいエネルギーを受け取るための参拝方法だとしていた(2020年10月17日【5X】への聞き取り)。この参拝の仕方は、「大杉神社を守る会」や「たまや」で教えられている参拝の仕方と同じである。

昼頃に清掃は終了し、清掃後は同神社から徒歩1分のところに住んでいる【5W】のサロンにてカレーが用意されている。カレーは【5W】が独自の製法で作ったもので、何杯食べても500円である。器には豆腐と健康食材が入っており、自分で器をとり有機発芽米をよそってそれにカレーをかけて食べるスタイルとなっている(2020年8月8日 現地調査)。

このサロンでディスカッションや精神世界技法のセッションが行われるが、来ている全員がほぼ違うセッションをしており、宇宙意識や神の概念も違う。【5W】は、清掃後は全ての祠に参拝するが、【5X】は「エネルギーは1つに繋がっているので大切どころ1箇所が良い」というように、サロン内にいる人の思想もバラバラである。しかし雰囲気が悪くなることもなく、それぞれが互いの技法について体験をしながら情報交換をしているようであった⁶⁹⁾。

また、特徴的なのは、禊カフェの構成メンバーに理系が多いことである。【5W】は大手通信会社出身で、【4R】は音響の効果を高めるために大学の物理学研究者と共同研究をしている。また【5X】は理系の大学院を修了後に薬剤師の資格を得て大手理系会社の開発部門に勤務しており、TimeWaver セッションの他にエネルギー農業の実験のために千葉県に実験場を持っている。この他にも【5W】の ZOOM ミーティングにはドイツの医師やコ・メディカル、科学者なども参加している(2020年11月15日 ZOOM)。

昼からのディスカッションにおいても、各自の技法について、できるだけ論理的に説明をし、人を越えた未知の領域がどこにあるのかの説明がなされるなど、技法者にとっても自分の技法を深める役にたっているようだった。

理系色が強いので、他の組織と少し趣が違っているように感じるが、この協働組織では、数年後を見据えて地球の次元上昇についていくために、神社の清掃活動

を通じて魂を整え、器である身体を整えて浄化のエネルギーをしっかりと整えていくことを大切にしており、大きな点では大杉神社を守る会やたまやと概ね語られていることは同じである。

「たまや」や「大杉神社を守る会」との違いを挙げると、禊カフェは参加神社(参加者ではない)を募っており、賛同する神社との連携を望んでおり⁷⁰⁾、活動範囲を広げていこうとしている点である。2020年12月の時点で、実験的に会員が別の神社で活動を始めているということだった(2020年12月12日【5X】への聞き取り)。

5 地域社会と禊カフェ

【5W】はサロンを開放し、ワイン品評会や調理師による健康料理会などを行っている⁷¹⁾。これらの集まりは事前予約さえすれば誰でも参加することができる。

そのため、神社の掃除がない祭日などに集まりが開かれ、【5W】のサロンへ地域の人たちがやってきて精神世界的な内容に限らず情報交換をし、また技法者が無料セッションを行うなどが行われている。

これらの人々はどこからこれらの活動を知って参加しているのだろうかと思っていたが、【4R】からの「固定局としてラジオを聞く人は結構いるからね」という言葉で納得した(2020年3月27日【4R】への聞き取り)。

小 括

禊カフェも神社を中心とした活動をしているので、「たまや」や「大杉神社を守る会」と比べてしまうが、両者よりもさらに参加者の技法や思想がバラバラで、衝突が起こらないのが不思議だったが、何度も参加しているうちに【5W】や【4R】、【5X】といった理系のメンバーがそれらを理系的な理論で説明し、誰もが納得できるように説明をしていることに気づいた。

また、常にセッションに対して理系的な説明がなされることで、地域との交流会で精神世界の技法が行われていても怪しい雰囲気を感ぜさせず、自然と

人々がそれらを受け入れる環境ができつつあるように感じた。

5節 レムリア会議

——北海道札幌市

——現地調査（2020年11月22日）

現時点で継続調査ができておらず、1回のみ現地調査となっているが、世話人とは連絡がとれており、コロナ禍が収束し次第継続調査に入る予定である。

1 織概要及び世話人

この組織の世話人の1人である【5Y】（50代男性札幌市在住）は、2015年の秋に、夕張市に所在する滝の上公園へ旅行した際に、宇宙から地球の変革にかかわる啓示を受けたという。妻（40代女性札幌市在住）にそのことを話したところ、妻と Facebook で繋がりのある精神世界関係者の【5Z】（40代女性富良野市在住）らが、富良野市の宗教施設の会議室に仲間を集め、【5Y】が受信したメッセージを読み解く勉強会が行われるようになり、2016年に【5Y】と【5Z】を共同世話人として現組織が立ち上げられた。【5Y】がいうには、「自分はアイヌの末裔で、アイヌは宇宙と昔から繋がっているために、メッセージをキャッチしやすい」とのことであった。

2 活 動

この組織の活動の中心は、富良野市で行われる「【5Y】の受けた啓示を読み解く会」と、夕張市（滝の上公園）と札幌市（札幌大神宮）で定期的に行われるエネルギーワーク講習会の2つで、宇宙からの啓示の受信やエネルギーワークの指導は【5Y】が行い、活動拠点となっている富良野市の宗教施設との顔つなぎや参加者との連絡を【5Z】が受け持っている。またエネルギーワークの講習では、エネルギーを溜めて必要な場所へ送ることもある⁷²⁾。【5Y】の話では、「北海道には、東日本大震災以降のアセンションで、アイヌの血に目覚めた者

が多く出てくるようになり、同様の会議が複数存在する」ということで、2020年からは、リモートの普及に伴い、道内の他の協働組織との合同会議を行うこともあるという。

3 地域社会との関係

レムリア会議の世話人のサロンは札幌市にあるが、主な活動は勉強会の会場である富良野の宗教施設及びその近隣の清掃ということである。この宗教施設の敷地内に敷かれている石にはかつてアイヌが住んでいた地の石が混じっており、アイヌの末裔である人が来た場合に覚醒しやすいということであった。

この施設は中規模な寺院くらいの敷地だが管理者が1人しかいない。そのため全体の清掃や設備の管理が行き届かず、施設を借り始めてすぐに、集まったメンバーの提案で清掃や施設修繕が行われるようになったという。

また施設の大きさに対して集まる人数が多いため、近隣の清掃も行うようになり、コロナ禍までは日程を合わせて地域の自治会と合同で清掃活動を続けていたということだった。

2021年3月の時点では徐々に活動を再開し始めているようであるが、筆者の調査時（2020年11月）には宗教施設側が閉鎖していたため、ここでの聞き取りをすることはできなかった。社会情勢を見て再度調査予定である。

6節 総 論

序説で「霊性にかんする協働組織」についての概説を行ったが、さらに詳しく分析するために、1-5節で扱った組織について、成立の過程、活動拠点、活動内容、活動の主体及び世話人、地域社会との関係の5項目に分けて表5-1を作成した。

(表 5-1 筆者が作成)

	成立の過程	活動拠点 (聖地など)	活動内容	活動の主体・世話人	地域社会との関係
一般社団法人 たまや	世話人と精神世界関係者 によるサムハラ神社保護の 呼びかけによる	サムハラ神社 奥宮(岡山県)	・神社の清掃と保守管理 ・神社の案内 ・イベントの開催	会員が活動内容を提案、 世話人が調整してイベント 等を行う	・経済効果などからも支持されている ・世話人の地域からの信用が 組織の信用にもなっている
大杉神社を守る会	世話人が奉賛会を受継ぎ 精神世界関係者が集まって くることによる新組織化	大杉神社 (滋賀県)	・神社とそこに至る林道 の保守管理と植樹活動 ・神社の案内 ・イベントの開催	・糖林や大規模な保守管理 は世話人の呼びかけ ・普段の清掃やイベントは 会員の提案による	地域社会からはあまり知られていない が、林道使用者など一部の人は 活動を支持されている。
NPO法人 心経研究会SEW	現監事が精神世界に関する 疑問から同じ志を持つ人々 や外部から活動趣旨に賛同 する人が役員に就任して設立 (滋賀県認証)	特に聖地はもたず インターネット上 に会議室を持つ	・精神世界技法の一般へ の提供 ・公益団体や地方公共 団体への協力 ・講習会の開催 など	・法規で定められた役員 (理事3人・監事1人)の存在 ・グループページで会員が 活動内容を話し合い、 決まれば役員会で決議	・監事の地元地域や行政とはもともと 良い関係を築いていた。 ・津市後援の活動に精神世界技法の ブースを出展 ・zoomを通じての活動により他の 公益団体等との連携が進んでいる
禊カフェ	神社コンサルタントが啓示 を受けて企画した活動を、 世話人が引き継ぐ	越木岩神社 (兵庫県)	・神社の清掃と保守管理 ・清掃後の相互セッション ・地域向けのイベント企画	・神社の清掃は世話人と会 員で日程調整 ・地域向けイベントは会員 が提案し、世話人がサロ ンを解放。	・神社とは良い関係を築けている ・地域向けイベントは世話人のラジオ や口コミで人が集まっている
レムリア会議	世話人に降りてきた宇宙から のメッセージを読み解く会 からスタート	・彦良野市の宗教 施設 ・滝の上公園 (茨城県) ・札幌大神宮	・宗教施設の清掃と保守 管理と地域の清掃活動 ・メッセージを読み解く会 ・エネルギーワーク	・世話人は2人おり、技法 指導と渉外担当から成る ・宗教施設近隣自治会との 連絡は会員が行っている	・活動拠点となっている宗教施設及び 近隣の自治会とは良好な関係

1 古神道系団体と「霊性にかんする協働組織」

1 節ではたまやの人々について【5F】や【5G】が古神道的な参拝の仕方を強調していた。2 節で大杉神社の大祭に集まった人に対して近隣住民が「お参りご苦労さまやね」と声をかけていた。また両神社とも管理者が常駐していないため定期的に一定人数で清掃や設備管理をしている。これらの事例を見ると彼らについて、「神社系の信者集団と精神世界関係者とは何が違うのか」という問いが出てくるかもしれない。定期的に神社の清掃をしにくる禊カフェのメンバーも他の参拝者からは、氏子会のメンバーのように見えかもしれない⁷³⁾。彼らを精神世界関係者の集まりではなく信者団体とみなす人はいるだろう。またこの3 団体を「古神道系の新宗教」とする見方もあるかと思われる。

成立の過程を見てみると、これらの協働組織は自然発生したものではなく、発起人がいるため、そのように見られてしまうことは否定できない。しかし活動の主体やその内容を見ていくと、これらの協働組織と古神道系の新宗教とは全く別のものであることが分かる。ここでは実際に古神道を名乗っている団体を例にあげ、「霊性にかんする協働組織」との違いを見ていくことにする。

(1) 大和ことほぎの会

——京都府向日市

——代表者について

代表者の矢加部幸彦は福岡出身で、幼少の頃より武道を通じて人間の不思議さに興味を持ち、精神世界の研究を始めた。企業勤めの後、古神道の師の元で修行して独自の論理を確立して1995年に独立した。

矢加部は古神道のワークショップや言霊修道士養成講座などを行いながら、神道音楽家としても活動しており（矢加部 2017：2616/2647）、2009年にはWEB ページも開設している⁷⁴⁾。

——活動目的と教義

同団体では生きている神話（古神道）、日の本の叡智の体験を通し、日本が神ながらの国であることを知り、日々の禊祓いをして弥栄を祈りつづけることを目的としており（矢加部 2017：2429/2647-2557/2647）、その目的を達成するための心がけや修行方法も細かく教義として示されている（矢加部 2017：1680/2647-2409/2647）。

(2) 日本弥栄の会

——埼玉県さいたま市

——代表者について

代表者の中矢伸一は東京出身で、米国ワシントン州立コロンビア・ベイسن・カレッジを卒業。米国留学生活を通じ、日本と日本民族の特異性を自覚したという。

帰国後、英会話講師・翻訳・通訳業に携わる一方、古神道系の歴史、宗教、思想などについて独自に研究を進め（中矢 2016：2897/2925）、太古の神道を復古した「ひつく神道」（中矢 2016：6/2925）を教えるため同会を発足し、1995年から月刊『玉響』を刊行している⁷⁵⁾。

——活動目的と教義

中矢によれば同会は、日月神示を解き明かして『『ミロクの世界』における世界一家』を目指すことを活動目的とし（中矢 2016：1727/2925-1862/2925）、「日月神示」を經典としている⁷⁶⁾。

教義には「正しい神棚の祀り方」（中矢 2016：2636/2925-2739/2925）や、「肉食の禁止」（中矢 2016：1865/2925-2159/2925）をはじめとした細かい事項も含まれている。

(3) 古神道系団体と「靈性にかんする協働組織」

上記で紹介した2団体とも「自分たちは宗教ではない」としているが、本論文において宗教の特徴とした「礼拝儀式」、「信仰共同体」、「教義」そして「儀式執行者」が存在し、さらには教主的存在もいるため、この両者は極めて「宗教団体」的であるということが出来る。

一方、「靈性にかんする協働組織」には、組織成立の経緯において世話人は存在していても、彼らは組織の教主的存在でも儀式執行者でもない⁷⁷⁾。特に喫茶カフェではこの傾向が顕著に現れており、掃除後に境内のどの祠に参るかは自由、また参拝せずに磐座でエネルギーを感じているのも自由である。

上記の古神道系団体に所属する人たちは、經典的なものに従って「信仰のために活動する共同体」を形成している。しかし、表5-1の「活動の主体」を見れば分かる通り、「靈性にかんする協働組織」には世話人はいても指導者はおらず、自分の持っている精神世界の根本思想（靈的進化論）にもとづき、普段は個々別々に活動しながらも、大きな目的のために協働している。この点で、同じように神社に関係をもっている、古神道系団体と「靈性にかんする協働組織」は大きく違うのである。

2 協働性と個人主義

これは神社を活動拠点にした協働組織だけではなく、他の協働組織にも当てはまることだが、SEW の外部役員を除けば、協働組織の会員は、精神世界の根本思想である靈的進化論にもとづいて、「宇宙意識との繋がり」、「魂の浄化」、

「靈的界層の上昇」などの思想を個々に持っている。

この意味でも上記の古神道系団体とは違いますが、逆に「神社の清掃や整備管理は、靈的進化という1次的目的のための2次的な目的であって『結局は個人主義の延長線』であり、協働行為に見えるだけでは」という疑問がでてくる可能性は十分にある。

確かに個人主義的目的の延長線上に奉仕的活動が存在するグループも存在する。一例をあげれば、第4章で扱った【4H】が参加している UFO 交信会では一通りの活動を終えた後に山頂や付近の掃除をし、また積極的に登山客とのコミュニケーションをとっていた。しかし穿った見方をすれば、山頂の掃除は次に UFO と交信する際のために場を浄化するためかもしれない、登山客とのコミュニケーションも効率よく UFO の基地を探すために良い関係を作っておきたかったのかもしれない。いずれにしても定期的に彼らがここで清掃活動をするということはない。

しかし、「靈性にかんする協働組織」の人たちは、「他の人が気持ちよく参拝できるように」、「せっかく清掃をするのであれば施設の近隣も綺麗に保ちたい」、「神社までの道を利用する人のために何かしたい」という気持ちから清掃や設備管理などを継続して行っている。また2020年の SEW の活動も、「今の社会情勢で何ができるのか」を考えた結果無償でリモートセッションを行っている。その事業自体は1回であったかもしれないが、他人のために何かをしようという活動は個人を超え、組織として継続しており、それを協働行為と呼ぶことに何ら問題はないと筆者は考える。

もちろん、SEW に「対外的な活動でも靈的成長を実感できた」という会員がいることを指して、「根底には利己主義があるではないか」と問うことはできるかもしれないが、筆者は利他主義か利己主義かを判断することにさほど重要性を感じない。重要なのは「靈性にかんする協働組織」が継続して利他的な協働性を持っていることであり、この点に新たな動向を見いだせるのではないかとのことである。

3 精神世界関係者の新しいあり方

この「霊性にかんする協働組織」は、どの組織でも第4章で述べてきた周辺分野のどれかを扱っており、変わりつつある精神世界の象徴とも言える⁷⁸⁾。

しかし、この協働組織の中において一番注目すべきは、彼らが個人主義に終わらず、協働して目的のために継続して働き、地域社会や精神世界の外にある人たちから受け入れられているという点である⁷⁹⁾。

このような協働組織が精神世界の中においてどのくらいの割合を占めるかといえば、おそらくはごくごく少数であろう⁸⁰⁾。しかし彼らは2章で論じた新潮流のさらに先にある存在で、今後どのような形になっていくかは未知数であるものの、これまでの精神世界研究において論じ切れなかった部分であると考えている。

ではなぜこの協働性が精神世界に発生することになったのか、本論文において新たに論じた点も踏まえ、次章で述べていく。

- 1) 団体・組織の概念論で言えば、ここで紹介する集団は構成員を規制する力は弱いものの、目的を達成するための活動を維持・継続していくための運営システムと管理者に相当する世話人や理事が存在するという点で、中條秀治のいう「組織」の概念に近く（中條 2001：216）、協働団体ではなく「協働組織」の語をあてることにした。
- 2) 筆者が知る限りは2020年春の緊急事態宣言が発令された際に理事会から「社会に不安を与えるような情報を会員はブログ等で発信しないように」という通達がなされている。
- 3) 登記簿情報「一般社団法人たまや」民事法務協会（2018年9月5日取得）。
- 4) この時点では岡山県在住。
- 5) 大杉神社を守る会の世話人【5H】は、「神様ごとは神社だけでなく自宅や身近なところに神を降ろし、そのエネルギーを得て、神を内側に感じて感謝して生きること」としており、【5A】は自分のサロンの神棚にサムハラ神社のエネルギーを引き入れ、「いつでも神の力を感じ感謝して生きることが大切だ」としている。この両者の説明から筆者は、彼らのいう「神様ごと」を「身近な諸々の現象を神からの通信として受け取り、常に神を感じる生き方」として解釈している。
- 6) 奥宮管理者【5F】（70代 男性）への聞き取りにもとづく（2020年8月7日）。
- 7) 『ゆほびか GOLD vol. 43』（マキノ出版 2019 49-52）。
- 8) 現代の精神世界に大きな影響を持つ事業家で、健康食品「まるかん」の販売のほ

か、精神世界の思想に基づく「商売繁盛や事業成功のハウトゥ本」を150冊以上出版。動画サイトには「魂のステージ」、「魂の成長」、「魂力を上げる」など精神世界関係の動画を150本以上アップしている。また、精神世界関係者としては唯一、12年間連続で高額納税者のベスト10入りしている（光田 2010：39）。

- 9) 精神世界では「地下帝国」を指すことが多く、エネルギーを注ぐと、地場が安定するという。
- 10) 株式会社スヌースコーポレーション代表取締役。武蔵野学院大学スペシャリアカデミックフェロー。冥王星のオコット（宇宙人）から超越情報を得たとされている。
- 11) 第4章で取り上げたゴーストやフレアが写っている写真。
- 12) 「宇宙のエネルギーをサロンに誘導することができる」という、綿棒で組み立てられた高さ 30 センチほどのピラミッド。
- 13) 【5B】への聞き取りにもとづく（2020年5月16日）。
- 14) 磁力が存在しない全ての均衡が取れた、命を育む場所といわれる。
- 15) 現地調査（2020年9月12日）及び、2021年3月20日までの【5A】からのLINEにもとづく。
- 16) 筆者にも会員に提供したのと同じ内容の情報がシェアされている（2021年3月20日までの【5A】からのLINEにもとづく）。
- 17) たまや会員【5C】（40代女性）への聞き取りにもとづく（2020年9月12日）。
- 18) 【5A】からの聞き取りにもとづく（2019年3月24日）。
- 19) 雑誌を見て夜中に神社に大きな楽器をもってきて演奏するなど、近隣に迷惑をかける訪問者もいた（サムハラ神社近隣住民らへの聞き取りに基づく 2019年7月28日）。
- 20) 【5A】とのLINEのやりとりにもとづく（2020年4月6日など）。
- 21) 同会会員【5J】への聞き取りにもとづく（2020年2月11日）。
- 22) 岡崎梓織への聞き取りにもとづく（2019年7月1日）。
- 23) 【5J】への聞き取りにもとづく（2020年2月11日）。
- 24) IP ドメイン SEARCH 調べ (<https://www.ip-domain-search.com/cgi-bin/ipsearch.cgi>) 閲覧日2019年3月22日。
- 25) Google Chrome ツール（期間を絞って検索）による調査。
- 26) 大杉神社を守る会会員【5J】（20代男性）への聞き取りにもとづく（2020年2月11日）。
- 27) 【5J】への聞き取りにもとづく（2020年2月11日）。
- 28) ミラクルアーティストと呼ばれる精神世界の牽引者の1人で、様々な芸術活動も行っている。
- 29) 地球が次元上昇して新しい次元に突入するという精神世界の通説。
- 30) 12次元の体験に関しては協働組織「禊カフェ」の会員【5X】がTimeWaverという12次元と繋がることのできる機械によって行っている。
- 31) 現地調査（2020年4月6日）。
- 32) 2020年の夏から調査をはじめた兵庫家西宮市にある越木岩神社を中心に活動する

- 霊性にかかわる協働組織、「禊カフェ」でも3礼3拍手1礼での参拝を推奨している（現地調査、2020年8月8日）。
- 33) 「ありがとう」という言葉は、精神世界ではエネルギーと結びつけられることが多いが、今回【5H】は特に理由を言っていなかった。
- 34) 自治会関係者への聞き取りにもとづく（2020年4月8日）。
- 35) 近隣住民（50代男性）への聞き取りにもとづく（2020年4月8日）。
- 36) 最近では仏壇を買う人ではなく撤去する人が多いが、【5H】は嫌がらずに撤去するだけでなく「中の魂を抜く作業まで丁寧してくれる」とのことだった——近隣住民（40代女性）への聞き取りに基づく（2020年4月8日）。
- 37) 継続現地調査による（2017年9月-2019年8月）。
- 38) 筆者が最初に【5O】に会ったのは地域密着がブース出展型イベント「巡る月の祭典」（2017年9月18日開催）で、それ以降も連絡を取り合っている。
- 39) 現地調査（2018年8月10日）。
- 40) 「Jasmine's Love Sharing Party」（2018年6月）。
- 41) 基本受けた説明をそのまま記した。固有名称もそのまま記し、説明が必要な用語等には註を付した。
- 42) 技法中毒者やセッションにどんどん金銭をつぎこみ破産する場合や、家庭環境を悪くして離婚やDVに至るようなケース全般を指している。
- 43) すべてに対して精神世界の観点からしか見えない人、「頭痛＝霊障＝魂のレベルが上がって来ている」と考えるような人を指して使われている。
- 44) ここで、具体例としてアロマは体、タロットは心、エネルギー療法は体など様々な例を挙げて説明があったが詳細は割愛する。なおこの「心の技法」と「体の技法」という言葉がSEWの心脉研究会という名称につながっている。
- 45) 精神世界の優良技法者認定をするビジネスを行う団体も実在している。
- 46) この段階では筆者はまだ参与調査者ではなく、質問に対する回答が法律に抵触することも考え、WEBページを紹介するという形をとった。
- 47) メンバーは【5O】・【0A】・【5Q】の他9人（女性6人、男性3人）で介護職や【5O】のイベントに出展している雑貨店など精神世界とは関係ない人も含まれている。
- 48) 【5Q】の弁当屋は従業員もいる一定の規模である。
- 49) 県庁職員（女性）への聞き取りにもとづく（2019年1月17日）。
- 50) 元治安機関調査官。
- 51) 現地調査（2019年2月22日）。
- 52) WEB上の会員専用ページからリンクされている会員専用のSNS（<https://www.sew19.com>）閲覧日2021年3月30日。
- 53) 現行薬機法の施行後は、市販の乾燥アロマやオイルを使うようにしているが、この時の経験や知識は市販のものを購入する際にも役だっているという。
- 54) 自然界が持つ気・エネルギーを利用し、人の治癒力を活性化する手当療法・エネルギー療法の一種（日本神霊学研究会 2019：328）。
- 55) 海洋散骨を行うには行政手続が必要で、手続が煩雑なことから、散骨希望者と自社船舶を持つコストを考えるとリスクが高いため、3分の2の業者が下請けに頼んでいるのが現状だという。
- 56) 最近では互助会に入らず、また宗教団体にも所属していない場合、葬儀をせずに死亡場所から直接葬儀場へ行くことも増えてきており「直葬」と呼ばれている。
- 57) 葬祭ディレクターとして直葬や福祉葬など、特殊な形式の葬儀や、病院以外で死を迎えた場合の対応など、葬儀に関する講演活動も行っている。
- 58) 2019年1月12日開催。
- 59) この支援会についてはコロナ禍のため、2021年5月の時点では行われていない。ZOOMを使っての継続も検討、されたが技法によってはリモートでは説明しにくいというグループ内で臨時総会を開いた結果「中途半端な会にするよりは休止にした方が良い」ということになった。
- 60) 【0A】への聞き取りにもとづく（2020年11月14日）。
- 61) 年次総会（ZOOM）での聞き取りにもとづく（2020年12月11日）。
- 62) 筆者は法人設立までは「【5O】がないと動かない組織になるのでは」と考えていた。
- 63) ハートグラムとは2016年に考案・発売されたビジネス用性格診断ツール（増田 2017：23/344）。
- 64) 霊と呼ばれる魂の中心と4つの魂のカードからリーディングを行い、同時に場を安定させる浄化作用をもったカード。
- 65) 2021年4月現在もここは舗装されていないが、神社側がこの主張を受け入れた結果かどうかは不明である。
- 66) 波動によるエネルギーバランス調整をする器機で、タブレットにクライアント情報を登録することにより、誰に対してもセッションが可能となるという（<https://www.healyworld.net/ja/>）閲覧日2021年3月30日。
- 67) 同神社については第4章で【4I】が詳しく話しているため、詳細は割愛する。
- 68) 現地調査（2020年8月8日・9月5日・10月17日・12月12日・2021年3月27日）。
- 69) 5回の現地調査からの判断（2020年8月8日-2021年3月27日）。
- 70) 実際は聖域であれば神社でなくても良いそうである（【5W】からの聞き取りにもとづく 2021年3月27日）。
- 71) 筆者はふぐ鍋に参加してた（現地調査 2020年12月6日）。
- 72) 大統領選挙中のトランプへエネルギーを送ったという（【5Y】への聞き取りにもとづく2020年11月22日）。
- 73) 氏子による「森を守る会」の設立も、禊カフェが氏子会と思われたことに氏子らが触発されたという（【5W】への聞き取りにもとづく 2020年9月5日）。
- 74) IPドメインサーチ検索「kamuhogi.com」（<http://www.ip-domain-search.com>）閲覧日2020年3月31日。
- 75) 創刊情報がなかったため、第3種郵便物許可年と、月刊誌であるので最新号から遡って創刊号の発刊年を割り出した（2021年3月31日調査）。

- 76) 中矢は、古代から日本にある真の靈性は神社神道ではなく教派神道に引き継がれ、そこから現れた天啓が「日月神示」だとしている（中矢 2019：26/4014）。
- 77) その神社において、一番パワーが得られたり、御利益がある参拝の仕方は教えるものの、実際に世話人が教えた通りにしていなくとも問題はない。
- 78) 聖地や古神道は勿論、SEW ではサブカルチャーと精神世界の関係、禊カフェでは音楽療法や UFO との遭遇体験などについて、ディスカッションなどが行われている。
- 79) 協働組織に対する調査全体から感じたことは、精神世界関係者側だけではなく協働組織と関わる側にも波及効果が見られることである。SEW のコロナ禍リモート支援では精神世界技法に「心身に回復効果がある」と感じた人が出てきており、禊カフェの活動に触発されて神社の氏子会が活動を始めるなど、協働組織と触れた側にも変化が出てきている。この点については、今後の課題として調査を行っていく予定である。
- 80) なんらかの目的のために集まる人々は散見されるようになっており、これまで3つのグループに対して調査を行ったが、まだ協働組織と呼べるほどには成長していない（2021年3月10日 現地調査 兵庫県など）。

終章

本論文には特に2つの点で、これまでの精神世界研究を補完し得る新しさがあると考えられる。1つは、それまでつながりが強いと考えられていた精神世界と新新宗教との間とに溝があり、むしろ（旧新宗教を含む）伝統的宗教との間に親和性を持っていることが確認できたことである。

もう1つは、「個々人の自己充足への志向」が強いために「奉仕による共同行為」という理念は尊ばれない（島藺 1996：380）とされてきた精神世界の中に、霊性進化を共通の目的としながら社会の中で協働性を発揮する人々を確認できたことである。

この2つは、以前からある程度予見されていたものの、筆者の知る限り、今回の実証的な現地調査を通して初めてその実態が明らかになったものである。

1 精神世界と伝統的宗教の親和性

第3章にて論じた精神世界と伝統的宗教の関係をあらためてまとめると下記の2点となる。

1. 伝統的宗教は、構築された理論体系を有しており、それが精神世界を受け入れる土壌となっている。
2. 精神世界は伝統的宗教から思想や技法の一部を取り入れている。

堀江は、仏教界において「お寺でヨガや瞑想のイベント、カフェ形態での人生相談などを開催する動きがある」、「浄土真宗の教義では基本的に霊魂というものを認めないが、悩みを抱えた人たちの中には霊魂の存在を信じている人もいる。そんな人に対して浄土真宗の僧侶はどうするか。『ウチの教義はこうだから、あなたの考えは間違っている』と言ったら布教になるが、現在の若い僧侶の多くはそんなことは言わない」、「既成宗教が現代人に受け入れられやすいものに変容するきっかけになるかもしれない」と、現在における伝統的宗教（仏教）の柔軟さについて述べている（堀江 時田 2020：141-142）。

実際に【3A】、【3D】、【3G】の事例からも、仏教の宗派や寺院によっては精

神世界を受容していることが分かる。これらの事例は精神世界と伝統的宗教の関係を見ていく上で重要である。

堀江は、キリスト教に関しては、日本ではなく世界的な動向から述べている。(世界の)プロテスタント文化圏においてはスピリチュアリズムやニューエイジがキリスト教と対立しつつも補完しあっているとし、カトリックは「民間信仰を排除しない方針を明確にしたため、信仰の中にスピリチュアルな要素が融和しつつ入っている感じだ」としている(堀江 時田 2020:143)。

本論文では日本のキリスト教を取り上げているが、プロテスタントの最大教派では精神世界を受け入れている教会・教職者がほとんどで、【3C】や【3H】の事例からも、足りないところを補完しあっているのは日本でも同じである。

上記から考えると、日本においては堀江の、「スピリチュアリティに関心のある人が個人的に既成宗教に接近していくケースもあるし、逆に宗教者の側がスピリチュアリティを取り入れようという動きもある。いま生まれつつあるのは、両者が影響を与え合うような関係なのだと思う」(堀江 時田 2020:139)という言葉が現実になりつつあるといえよう。しかし、堀江のカトリックに関する論考についてはいささか疑問が残る。堀江は、「カトリックは民間信仰を排除しない方針を明確にしたため、信仰の中にスピリチュアルな要素が融和しつつ入っている感じだ」という。堀江のいうカトリックの明確な方針とは、「第二バチカン公会議公文書——キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」(1965)を指していると思われるが、この中には、「教会は自分の子らに次のことを奨励する。(中略)彼らのもとに見いだされる霊的・道徳的な富や社会的・文化的な諸価値を認識し促進することである」(カトリック中央協議会 2019:6320/21041)とある。しかし第2バチカン公会議でのこの決定は、公会議全体の新しい方向付けとして包括主義の流れを採用しているものの(尾形 1996:250)、教皇庁は2003年に「自己自身の意識を高いレベルに変容させ『宇宙意識』に融合していく」という思想について、「自分の努力によって神的なものへと上昇しようと努める」汎神論であるとし(カトリック中央協議会 2007:75)、「キリスト教とは相容れない」とする公式見解を文書

として世界に向けて発信している(カトリック中央協議会 2007:104)。

もっともこれは世界のカトリック事情の話で、日本のカトリック教会の中では精神世界的な技法が入っており、技法者が周りから受け入れられているのが現実である。

3章で述べた通り(日本の)カトリック教会では、「何か問題が起きるまでは静観する」という姿勢のため、仏教やプロテスタント最大教派のように明らかに親和性があるとまでは言い切れないものの、【3F】が半ば公認状態で存在していることや、精神世界関係者の間でカトリックのロザリオやメダイなどの聖具が人気を集めており、カトリックの公式ショップならず精神世界関係者が運営するWEBページでも通販されていることから¹⁾、カトリックもまた伝統的宗教として精神世界の側から親近感を持たれているといえる。

2 「霊性にかんする協働組織」の発見

筆者は、「霊性にかんする協働組織」の成立に関して、主に以下の5つの理由があると考えている。

(1) 核となる世話人の存在

今回とりあげた5つの協働組織には、1人で立ち上げられたものはない。たまやでは【5A】と【5B】の出会い、大杉神社を守る会では【5H】と【5I】、SEWでは【5O】と【0A】、禊カフェでは【5V】と【5W】、そしてレムリア会議では会議では【5Y】と【5X】のように、核となる人物と精神世界関係者²⁾との接触によって情報が発信され、人が集まるための基礎ができていったのである。この世話人が1人で立ち上げたことではないところに協働組織の特徴の1つがある。

(2) 世話人が地域社会から受け入れられていること

協働組織が社会から受け入れられるかどうかは、最初に核となった世話人が社会から受け入れられているかどうか重要となる。たまやの例をみれば、一部の神社関係者からはたまやを批難する声もある。しかし【5A】がサムハラ神

社のある加茂町に根ざし、そこで信用のある人物だったからこそ、そこに集まってきた精神世界関係者は、「【5A】の知り合いなら大丈夫だろう」と迎え入れられているのである。

禊カフェも【5W】が毎日のように越木岩神社を掃除し、またラジオを通して地域との交流をしている結果、神社だけでなく近隣住民からも受け入れられている。大杉神社を守る会は、林業関係者をはじめ林道利用者から信用を得ており、SEW は地域社会だけでなくこれまで精神世界に関わりがなかった人からの理解を得られるようになりつつある。

(3) 世話人自身が探求者であること

【5A】や【5H】を見ていると、設立直後から現在までに技法やイベント内容が変化しているように見える。これは、「神様ごとが好きなお世話人が会員に合わせられる寛容性を持っている」ということもできるが、他の協働組織の世話人とあわせて見ていくと、そこには、「探求心」という共通点をみいだすことができる。

禊カフェのディスカッションでは会員が持ってきた新しい技法や機器にかんして、世話人も積極的に体験し、自分の技法・思想の中に組み入れられるかどうかなど、積極的に話の輪の中に入っている。また SEW ではイベントや NPO としての活動以外に会員が発信した疑問に対して精神世界関係者の【5O】や【0A】のみならず最近では【5S】も参加し、自分たちがどう成長していくことができるか、それが社会にどう役立つかなど話がなされている。大杉神社を守る会においても大祭の後のディスカッションから世話人が探求者であることは読み取れる。

宗教との関係を考える際、核となっている者が「探求者である」のか、「教義を示す存在」なのかの差は大きい。「霊性にかんする協働組織」の世話人は、組織においてイベントスケジュールや、組織運営についての管理をするだけでなく自らも会員と同じく「探求者」なのである。

(4) 目的を継続するためのシステムができていないこと

同じ霊性の目的のために集まるだけであれば第4章に例をあげた UFO 交信会も集うという意味では同じである。

重要なことは「同じ目的のために、継続した活動を目指しているかどうか」という点である。このため会員は、霊的な目的のために協働しているだけではなく、その目的を継続するために世話人を支え、また自主的に発題をしている。一例をあげると、2020年の夏前からたまやは【5A】1人では案内が不可能なほどの予約が入っているが、この状況を知った会員がそれぞれにシフトを組んで代わりに案内を行うなど自主的な運営を行っている。

(5) SNS の普及

— 協働組織と SNS

協働組織が誕生した要因の1つに SNS の普及が関連しているのではないかと筆者は考えている。

今回調査した協働組織は、独自に構築された SEW の WEB グループを除けば、Facebook グループか、グループ LINE でクローズドな連絡網を作っている。これらの SNS に外部のネットから入ることは不可能である。【5O】と【0A】も SNS で知り合っているが、活動を共にするようになったのは出会ってからである。同様に禊カフェもたまやも、協働組織に興味があればまずその活動に参加することが求められる。その上で5章で述べたような手順を踏んで会員となり、そこではじめて SNS のクローズドなグループに入ることができる。

SNS に参加してはじめて活動の日程やイベントの企画、さらにはディスカッションなどに参加できる。そこでは、会員同士が緩やかな繋がりを持ちつつ互いに束縛し合わない集団を形成しているのである。

筆者は SEW のグループページに参加しているが、発言を強要されることはなく、よほど公序良俗に反しない限り発言が規制されることもない。個人主義を保ちつつも同じ目的のために緩やかに繋がることは SNS によってはじめて

可能になったということではできないだろうか。

——精神世界関係者の年齢層と SNS 利用率

では、SNS の利用率と協働組織の誕生時期には関係があるのだろうか。第 5 章で述べた通り、調査の対象となった協働組織が誕生するようになってきたのは 2016 年-2018 年頃である。

筆者がアンケート調査を行ったブース出展型イベントを訪れる世代は、「30代」28%、「40代」40%、「50代」19%で、ブース出展型のイベントを訪れる人の中心は 30代、40代であった³⁾。逆に事業者を対象にインターネットで行ったアンケート調査（2020年12月10日-15日）では全回答者102人のうち「30代」10%、「40代」43%、「50代」39%と、30代と50代の占める割合が逆転していた⁴⁾。

ブース出展型イベントには事業者以外の一般参加者も参加しており、必ずしも全員が精神世界の根本思想を持っているとは限らない。2020年の事業者に対するアンケートでは、事業をしている時点で狭義の精神世界関係者であり、さらにサロンを持つには開業資金などそれなりの資金がいるため、30代と50代が入れ替わったと考えられる。ここから、40代への SNS の普及率を確認することにより SNS と協働組織の交流の因果関係を検証することができると考えた。

「総務省情報通信政策研究所」のデータでは⁵⁾、40代の LINE と Facebook の利用率は、2012年には「LINE」11.5%、「Facebook」11.9%であったが、たまやファンクラブが設立された2016年には「LINE」74.1%、「Facebook」34.5%と大幅に伸びており、筆者が調査を開始した2018年には「LINE」87.7%、「Facebook」36.7%となっている。これらの分析から、SNS の普及と協働組織の興隆は無関係ではないといえることができるだろう。

そして彼らの集い方もまた調査を困難にしていたと考えている。SNS の普及と共に協働組織が成立してきたとしても、組織にコミットするには実際にその活動に参加する必要がある。参加するためには何らかの形で活動をしている人に直接接する必要がある。筆者が霊性にかんする協働組織と接触することができたのは、地道な現地調査と聞き取りによって築いた調査対象者との信頼

関係によるのである。

おわりに

これまで、精神世界は技法者や思想者が独自に展開してきたものの総称としてそう呼ばれ、第 1 章、第 2 章で述べたように霊的輻湊状態・混合状態であり、未だにその傾向は色濃く残っている。

1994年のフナイ・オープン・ワールドに端を発し、「癒しとスピリチュアルの大見本市」と呼ばれるスピリチュアル・コンベンション（櫻井 2009a : 139）で開花した「ブース出展型イベント」は、現在も精神世界の中心であり、ここを中心に新しい技法や思想、ブームが発信されている。そして現地調査から検証する限り、今も霊的輻湊状態にある⁶⁾。

しかし、第 4 章で見たように周辺分野との関係性を見ていくと、精神世界というものが個々の霊的技法や霊的思想を包括して指す呼称から、根本的思想を軸として「精神世界」という共通した地盤・基盤として浮かびあがってきているように思われる。「霊性にかんする協働組織」はこの 1 つの例だといえることができる。

堀江は、「スピリチュアリティに関わるものが完全に個人単位の営みになっているわけではない」としており（堀江 時田 2020 : 139）、今後「精神世界＝個人主義」という図式は成り立たなくなっていくことを示唆している。

1970年代後半に精神世界という言葉が使用されるようになって約40年たつ。今後、「後期霊性思想の中心であった精神世界」がどのように変わっていくかについての方向性を示して論考を締めくくりたい。

筆者は今回の実証的事例研究を通し、これまで通り自己の魂のレベルにのみ関心を向ける人と、霊的な目的のために協働性やゆるやかな繋がりを持ち、霊的成長の関心が外側との関係へ向いていく人々とに徐々に分かれていき、ゆるやかに二極化していくのではないかと分析している。

堀江も、「スピリチュアリティに惹かれる人は、ある意味で二極分化しているような気もする」と述べているが（堀江 時田 2020 : 139）、堀江の場合は

「孤独と向き合っている中でスピリチュアリティに目覚めた個人主義的なタイプもあれば、親の影響を受けたり肉親が亡くなったりしたことで関心を持つようになったタイプもある」としている点で、同じ二極化を述べていても、後半の結論は筆者と違っている。

これは必ずしも、筆者と堀江の論考が対立することを意味しない。第2章で述べたように「スピリチュアリティ」という言葉はあまりにも大きな範囲を指すため、筆者は1992年に島菌が示した定義を引き継いでいる「精神世界」という用語を使用してきた。

堀江はここでスピリチュアリティという語を「グリーンケア」、「スピリチュアルケア」といった死に直面して生きる意味を失っている人全般を対象にする大きな意味で使用し、その上で今後のスピリチュアリティの在り方を論じている。

対して筆者が研究対象にしているのは、「自己自身の意識を高いレベルに変容させ『宇宙意識』に融合していく」という根本思想を持つ「精神世界」の人々である。その点で精神世界はスピリチュアリティ（霊性）が意味するものよりもずっと狭義で、社会から見えづらいところにあると思われる。

しかし、現在の大きな意味での霊性の原点が精神世界にあると筆者は考えており、今後の精神世界やそれに続く霊性思想の根本を実証的調査によって追っていくことは、社会における大きなスピリチュアリティ（霊性）の研究にも寄与していくものだと考えている。

- 1) パワーストーン・ジュエリー「コルヌコピア」(<https://ameblo.jp/jewelry-cornucopia/entry-12365734298.html>) 閲覧日2020年4月9日。
- 2) 双方が精神世界関係者の場合もある。
- 3) 詳細は巻末資料①③④⑧⑨を参照。
- 4) 詳細は巻末資料⑩を参照。
- 5) 総務省情報通信政策研究所「令和元年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」(2020年9月)。同調査は2012年から毎年実施し13歳から69歳までの男女1500人を対象に行われている (https://www.soumu.go.jp/main_content/000708016.pdf)。
- 6) 「癒しフェア2018 in OSAKA」(3月10日)、「癒しフェア2019 in TOKYO」(8月5日)、「癒しスタジアム in OSAKA」(2019年12月15日) など。

参考文献

参考文献

- 秋庭裕 2001 「霊劇と霊能発動」『人間関係論集』（18）（大阪府立大学）
- アグロー・インターナショナル・ジャパン 2015 『LIFECHANGERS』（Aglow International）
- 浅野和二郎 1938 『心霊学より日本神道を観る』（心霊研究界出版部）
- 浅野和二郎著 2014 『心霊講座』黒木昭征現代語訳（ハート出版）
- 浅原修一 2006 『キングダムセミナー』（私家版）
- 麻原彰晃 1991 『超能力秘密の開発法』（オウム出版）
- 朝日新聞社 1959 『科学朝日』9月号
- 朝松健 2016 『完本黒衣伝説』Kindle（アドレナイズ）
- ブライアン・アッシュ編 1978 『SF 百科図鑑』山野浩一監訳（サンリオ）
- 甘糟勇雄司法参事官 大場茂馬校訂 1908 『警察犯処罰令註解』（松華堂）
- 天野成美 2020 『カタカムナが解き明かす宇宙の秘密：12000年前世界最古の日本のカタカムナ文明で幸せになるカタカムナ文明初級編』Kindle（株式会社一）
- 有元裕美子 2011 『スピリチュアル市場の研究——データで読む急拡大マーケットの真実』（東洋経済新報社）
- 飯田史彦 2019 『生きがいの創造——世界標準の科学的スピリチュアル・ケアを目指して』Kindle（PHP）
- 池上良正 1996 「宗教現象のフィールドワーク」井上順考 月本昭男 星野英紀編『宗教学を学ぶ』（有斐閣選書）
- 磯岡哲也 1994 「社会調査を通してみた宗教」井上順孝編『現代日本の宗教社会学』（世界思想社）
- 市川裕 2010 「聖地」編者星野英紀 池上良正 氣多雅子 島蘭進 鶴岡賀雄『宗教学事典』（丸善）
- 一柳廣孝 1994 『こっくりさんと千里眼——日本近代と心霊学——』（講談社）
- 一柳廣孝 1997 『催眠術の日本近代』（青弓社）
- 一柳廣孝 2020 『怪異の表象空間：メディア・オカルト・サブカルチャー』（国書刊行会）
- 一般社団法人日本スピリチュアル医学研究会 2015-2019 『HSMA』Vol. 1-5
- 伊藤耕一郎 2018 「精神世界の再考察——宗教との関係から——」『関西大学哲学第36

- 号』（関西大学哲学会）
- 伊藤耕一郎 2019「こころくじけて」『愛智』第20号（関西大学哲学会「愛智」編集委員会）
- 伊藤耕一郎 2020「精神世界を問い直す」『千里山文学論集第100号』（関西大学大学院文学研究科）
- 伊藤耕一郎 2021「霊とマスク：コロナ禍における精神世界の実情」『院生新常态2020』（関西大学十院生協議会）
- 伊藤真乗 2015『一如の道——新訂修治版五第二刷』（真如苑教学部）
- 伊藤雅之 榎尾直樹 弓山達也 2004『スピリチュアリティの社会学——現代世界の宗教性の探求』（世界思想社）
- 稲場圭信 2004「シェアされるスピリチュアリティと意識変容」伊藤雅之 榎尾直樹 弓山達也編『スピリチュアリティの社会学現代世界の宗教性の探求』（世界思想社）
- 井上円了著 東洋大学井上円了記念学術センター編集 1999『井上円了選集第十七巻』（学校法人東洋大学）
- 井上順孝 1985「さらばオカルト・ブーム」『東京大学宗教学年報別冊』（東京大学文学部宗教学研究室）
- 井上順孝 1996「宗教へのアプローチ」井上順孝 月本昭男 星野英紀編『宗教学を学ぶ』（有斐閣選書）
- 井上順孝編 1994『現代日本の宗教社会学』（世界思想社）
- 井上順孝 1996「宗教へのアプローチ」井上順孝月本昭男星野英紀編『宗教学を学ぶ』（有斐閣選書）
- 今井信治 2020「アニメ『巡礼』の生成と展開」山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』（弘文堂）
- 井村宏次 1996『新・霊術家の饗宴』（心交社）
- 井村宏次 2014『霊術家の黄金時代』（ビイング・ネット・プレス）
- ヴァンセント・ウォルシュ著 黒木昭征現代語訳 2012『今なにか起きているのか？』高間友の会訳（高間友の会）
- 瓜谷侑宏 1983『深層自己の発見』（たま出版）
- NPO 法人日本ホリスティック医学協会 2018『HOLISTICNewsLetter』Vol. 100
- NPO 法人日本ホリスティック医学協会 2019『HOLISTICNewsLetter』Vol. 103
- NPO 法人日本ホリスティック医学協会 2019『HOLISTICNewsLetter』Vol. 105
- NPO 法人日本ホリスティック医学協会 2020『HOLISTICNewsLetter』Vol. 106

- NPO 法人日本ホリスティック医学協会 2020『HOLISTICNewsLetter』Vol. 108
- NPO 法人日本ホリスティック医学協会 2020『HOLISTICMAGAZINE』2020
- NPO 法人日本ホリスティック医学協会 2021『HOLISTICMAGAZINE』2021
- 江原啓之 2003『スピリチュアルな人生に見覚めるために——心に「人生の地図」を持つ』（新潮社）
- 江原啓之 2005『江原啓之神紀行1 伊勢・熊野・奈良スピリチュアル・サンクチュアリシリーズ』（マガジンハウス）
- 江原啓之 2009『今、行くべき聖地』（マガジンハウス）
- 大川従道 2020『永遠と復活』（幻冬舎）
- 大澤義孝 2020『幽体離脱入門 霊トレで離脱は誰でもできる』Kindle（アールズ出版）
- 大田俊寛 2013『現代オカルトの根源：霊性進化論の光と闇』（ちくま新書）
- 大谷栄一 2004「スピリチュアリティ研究の最前線」伊藤雅之 榎尾直樹 弓山達也『スピリチュアリティの社会学——現代世界の宗教性の探求』（世界思想社）
- 大谷尚 2019『質的研究の考え方——研究方法論から SCAT による分析まで——』（名古屋大学出版会）
- 大野百合子 2017『レムリア&古神道の魔法で面白いほど願いはかなう！ 古代日本の「祈り」が起こす奇跡』Kindle（徳間書店）
- 大道晴香 2020「パワースポットのメンタリティ」山中弘編『現代宗教とスピリチュアルマーケット』（弘文堂）
- 大宮司朗 2004『古神道の身体秘伝——「古事記」の密議』Kindle（ビイング・ネットプレス）
- 大村哲夫 2015「祟る？それとも護る？——カウンセリングにおける霊出現の意味——」『宗教研究』88巻別冊（日本宗教学会）
- 岡崎梓織 2018「滋賀県における民俗宗教的聖地の展開」（滋賀県立大学地域文化学科市川研究室平成29年度卒業論文）
- 小笠原英晃 2019『輝く人生を送るためのスピリチュアルガイドブック 精神世界の歩き方：スピリチュアルリーダーたちから教わったこと』（BAB ジャパン）
- 尾形守 1996『ニューエイジムーブメントの危険』（プレイズ出版）
- 尾形守 2000『リバイバルの源流を辿る』（マルコーシュ・パブリケーション）
- 奥野修司 2020『魂でもいいからそばにいて——3・11後の霊体験を聞く』（新潮文庫）
- 奥山実 1992『悪霊を追い出せ——福音派の危険を克服するために』（暁書房）
- アラン・カーデック編 2006『霊の書～大いなる世界に～（上）』桑原啓善訳（潮文社）

- 戒能信生 2002 『日本基督教団』大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文見編集 『岩波キリスト教辞典』(岩波書店)
- 楓月悠元 1998 『全宇宙の真実来るべき時に向かって——悲しみの星、地球(サラス)の友へ』(たま出版)
- 葛西賢太 2004 『世界共通の断酒法』伊藤雅之 檜尾直樹 弓山達也編 『スピリチュアリティの社会学——現代世界の宗教性の探求』(世界思想社)
- 檜尾直樹 2010 『スピリチュアリティ革命——現代霊性文化と開かれた宗教の可能性』(春秋社)
- 学研 1991 『マヤ』 Vol. 13
- 学研 1979 『ムー』 創刊号
- 学研 1985 『ムー』 59号
- 学研 1990 『ムー』 110号
- 学研 1991 『ムー』 130号
- 学研 1997 『ムー』 194号-205号
- 学研 1998 『ムー』 206号
- 門田岳久 2013 『巡礼ツーリズムの民族誌——消費される宗教経験』(森話社)
- カトリック中央協議会 教皇庁文化評議会教皇庁諸宗教対話評議会 2007 『ニューエイジについてのキリスト教的考察』
- カトリック中央協議会 第2バチカン公会議文書公式訳改定特別委員会 2019 『第二バチカン公会議公文書改定公式訳』
- 金子毅 2006 『オカルト・ジャパンシンドローム』一柳廣孝編著 『オカルトの帝国——1970年代の日本を読む』(青弓社)
- 鎌田東二 2003 『神道のスピリチュアリティ』(作品社)
- 神尾学 2006 『人間の基礎としての神智学』(コスモス・ライブラリー)
- 唐沢俊一 2007 『新・UFO 入門——日本人は、なぜ UFO を見なくなったのか』(幻冬舎新書)
- R. H. カルベッパ 1978 『カリスマ運動を考える——聖書の視点から』大塚九三子訳 (ヨルダン社)
- 川瀬統心 2018 『新説・精神世界史講座ワンネスは2つある』(ヒカルランド)
- 川又俊則 2015 『宗教組織』櫻井義秀・平川喜久子編著 『よくわかる宗教学』(ミネルヴァ書房)
- 川村邦光 2007 『憑依と近代のポリティクス』(青弓社)

- 川村邦光 2017 『出口なお・王仁三郎：世界を水晶の世に致すぞよ』(ミネルヴァ書房)
- 岸本英夫 1961 『宗教学』(東京大明堂)
- 北村皆雄 1987 『民間信仰調査の方法』圭室文雄 平野榮次 宮家準 宮田登編 『民間信仰調査整理ハンドブック〈下実践編〉』(雄山閣)
- 木原善彦 2006 『UFO とポストモダン』(平凡社新書)
- 清田益章 1991 『発見！パワースポット』(太田出版)
- 栗田英彦 塚田穂高 吉永進一編 2019 『近現代日本の民間精神療法——不可視な(オカルト) エネルギーの諸相』(国書刊行会)
- ジェイムス・クレンション 1955 『天と地とを結ぶ電話——まさに来たらんとする時代の予言』谷口清超訳 (日本教文社)
- クロノスケープ著 2011 『ゲームシナリオのための SF 事典知っておきたい科学技術・宇宙・お約束110』森瀬繚監修 (SB・クリエイティブ)
- KK ワールドフォトプレス 1987 『トワイライトゾーン』139号
- KK ワールドフォトプレス 1989 『トワイライトゾーン』No 159~179号
- KK ワールドフォトプレス 1991 『SPY』8月号
- 公益財団法人日本心霊科学協会 2019-2021 『心霊研究』2019年4月-2021年3月号
- パトリシア・コーリ著 2011 『限りない愛を受ける存在あなたはいまスターシードとして目覚める(超知ライブラリー)』小林美香訳 (徳間書店)
- 国際宗教研究所 2021 『現代宗教2021』
- 小谷真理監修 2015 『ファンタジー世界用語事典』(辰巳出版)
- 小寺敦之 2011 『「パワースポット」とは何か——社会的背景の検討とその受容についての予備的調査』『人文・社会科学論集』第29号 (東洋英和女学院大学)
- 小松左京 1969 『神への長い道』石川喬司福島正実編 『日本のSF(短編集)現代篇』(早川書房)
- 斎藤貴男 2000 『カルト資本主義』(文春文庫)
- ドクターテリー・サイモンズ&アシユタールプロジェクト編 2011 『スターシードを生み出す光のメッセージこうしてアセンションしよう宇宙連合同司官アシユタールからの次元変革アドバイス(超知ライブラリー)』(徳間書店)
- 坂本政道 2009 『アセンションの鍵——SUPERLOVE スーパーラブ』(ハート出版)
- 桜井識子 2019 『死んだらどうなるの？ 選べる行き先は4つ！ 奇跡の魂ツアーに出発しよう』(KADOKAWA)
- 櫻井義秀 2009a 『霊と金：スピリチュアル・ビジネスの構造』(新潮新書)

- 櫻井義秀 2009b 「『宗教』と『カルト』のあいだ」『宗教研究』83巻（日本宗教学会）
- 佐崎愛 2017 「『月例パニヒダ』から見る日本ハリストス正教会の受容と現状」東北宗教学13巻（東北大学）
- サトウタツヤ 春日秀朗 神崎真実編集 2019 『質的研究法マッピング——特徴をつかみ活用するために』（ワードマップ）
- 佐藤正之 2018 『音楽療法はどれだけ有効か：科学的根拠を検証する』Kindle（化学同人）
- GLA 2017-2021 総合本部出版部『G.』2017年11月号-2021年2月号
- JMR 2021 「日本宣教ニュース」2月（東京基督教大学）
- トム・ジェームズ 2018 『宇宙人が神だった』Kindle 高橋利恵訳（Amazon）
- 塩谷政憲 1985 「大本教以降の動き」『日本宗教事典』（弘文堂）
- 島蘭進 1992 『新新宗教と宗教ブーム』（岩波ブックレット）
- 島蘭進 1996 『精神世界のゆくえ——現代世界と新霊性運動』（東京堂出版）
- 島蘭進 2007 『スピリチュアリティの興隆——新霊性文化とその周辺』（岩波書店）
- 島蘭進 2012 「ニューエイジ系宗教」山折哲雄監修『宗教の事典』（朝倉書店）
- 島蘭進 2020 『新宗教を問う：近代日本人と救いの信仰』（ちくま新書）
- 島田秀平 2010 『島田秀平と行く！ 全国開運パワースポットガイド決定版!!』（講談社）
- 島田裕己 2007 『日本の10大新宗教』（幻冬舎新書）
- 島田裕己 2020 『捨てられる宗教葬式・墓・戒名を捨てた日本人の末路』（SB クリエイティブ）
- 自由国民社 1986 『現代用語の基礎知識』
- 宗教問題 2020 『宗教問題30：新型コロナウイルスと宗教』
- 徐翌 2017 「小松左京と日本未来学：SF と並走する未来」『海港都市研究』12号（神戸大学文学部海港都市研究センター）
- 新人物往来社 1995 『古神道の秘術』別冊歴史読本特別増刊18（新人物往来社）
- 人体科学会 2018 「人体科学第28回大会プログラム」12月
- 真如苑 2013 『おかえりなさい』
- 真如苑教学部編集 2017 『朝夕のおつとめ』（真如苑）
- 菅田正昭 1985 『古神道は甦る——The old shinto』（たま出版）
- 杉本良男 2010 「比較による真理の追求：マックス・ミュラーとマダム・ブラヴァツキー」『国立民族学博物館調査報告』（国立民族学博物館）
- 鈴木正宗 五十嵐太郎 岡本亮輔 2016 「人はなぜ聖地にひかれるのか」渡邊直樹編集

- 『宗教と現代がわかる本2016』（平凡社）
- スタジオ・ハードデラックス 2013 『クリエイターのための SF 大事典』高橋伸之監修（ナツメ社）
- レイチェル・ストーム 1993 『ニューエイジの歴史と現在——地上の樂園を求めて』高橋巖 小杉英了訳（角川書店）
- スピリチュアリズム普及会 1996 『続スピリチュアリズム入門高級霊訓が明かす霊的真理のエッセンス&霊的成長の道』
- 隈元正樹 2018 『療術から宗教へ——世界救世教の教団組織論的研究』（ハーベスト社）
- アニ・セノフ 2015 『ピュア・インディゴ&ピュア・インディゴクリスタルの子供たち——すでに今地球に生きるアップグレードした人々“旧世代の大人たち”がこれら“新時代の子供たち”と共に未来を創っていくその方法』石原まどか訳（ヒカルランド）
- 大法輪閣 1960 「特集現代の不思議」『大法輪』11月号
- ダイヤモンド社 2018 「新宗教の寿命」『週刊ダイヤモンド』10/13号
- 第6回日本伝道会議日本宣教 170-200 プロジェクト編著 2016 『データブック日本宣教のこれからが見えてくるキリスト教の30年後を読む』（いのちのこば社）
- 高津理恵 2008 『あなたに「幸せな奇跡」がいっぱい起こる本』（PHP研究所）
- 高橋佳子 1997a 『真創世記地獄編——今、明かされた魂の真実』（祥伝社）
- 高橋佳子 1997b 『真創世記天上編——すべての真実を今ここに』（祥伝社）
- 高橋佳子 1978 『真創世記黙示編』（祥伝社）
- 高橋佳子 2014 『新・祈りのみち——至高の対話のために』（三宝出版）
- 高橋五郎 1921 『幽明の霊的交通』（弘文堂書店）
- 高橋信次 1971 『心の発見——神理編』（三宝出版）
- 高橋朋宏 鈴木七沖編 1999 『精神世愛が見えてくる人間とは何か気づきとは何か』（サンマーク出版）
- 武井元晃 2019 「眼前にある課題群」『日本民俗学』300号（日本民族学会）
- 武富健治 2015 『武富健治実話作品集狐筋の一族秘境と因習編』Kindle（太陽図書）
- 田中千代松 2019-2020 「日本における心霊研究の発達」1-6『心霊研究』No. 870-875（公益財団法人日本心霊科学協会）
- 田中正明 1987 「民間信仰調査上の心構えと手順」圭室文雄 平野榮次 宮家準 宮田登編『民間信仰調査整理ハンドブック〈下実践編〉』（雄山閣）
- ガイ・P・ダフィールド ナタナエル・M・ヴァンクリーブ著 2010 『ペンテコステ神学

- の基礎』(日本フォースクエア福音教団)
 たま出版 1988 『アクエリアス革命』 #004
 たま出版 1993 『たま』 85号
 知花敏彦 1994 『ワネス・ワールド——天地一体世界の実現』(たま出版)
 地人書館 1962 『天文と気象』 10月号
 千代崎秀雄 2002 『福音派』 大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文晃編集 『岩波キリスト教辞典』(岩波書店)
 津城寛文 2005 『〈霊〉の探求の探究——近代スピリチュアリズムと宗教学』(春秋社)
 筒井康隆 1983 『時をかける少女、緑魔の町』 『筒井康隆全集4』(新潮社)
 手束正昭 1986 『キリスト教第三の波——カリスマ運動とは何か』(キリスト教新聞社)
 寺石悦章 2008 『船井幸雄の聖地論』 『四日市大学総合政策学部論集』 7巻(四日市大学総合政策学部)
 寺石悦章 2010 『草檜崎皇月に関する資料について』 『四日市大学総合政策学部論集』 9巻(四日市大学)
 寺沢龍 2004 『透視も念写も事実である——福来友吉と千里眼事件』(草思社)
 寺園喜基 2002 『自由主義神学』 大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文晃編集 『岩波キリスト教辞典』(岩波書店)
 天外伺朗 2002 『宇宙の根っこにつながる生き方』(サンマーク文庫)
 シュー・土井・ポール 2003 『20世紀のキリスト教とペンテコステ・カリスマ運動』 『日本の神学』 42(日本基督教学会)
 同志社神学協議会 2016 『同志社神学協議会2016』
 中川建一 2019 『ディスペンセーションナリズム Q&A』(ハーベストタイム・ミニストリーズ)
 長倉顕太 2015 『プチ教祖の秘密』 Kindle (Amazon)
 中條秀治 2001 『「団体」の概念と「組織」の概念(経営学の新世紀:経営学100年の回顧と展望)』 『経営学論集』 71 (0)(中京大学)
 中野真作 2016 『「私」という夢から覚めて、わたしを生きる——非二元・悟りと癒やしをめぐるストーリー』 Kindle (青山ライフ出版)
 中村晋介 2011 『「スピリチュアル・ブーム」をどうとらえるか——福岡県内の大学生を対象とした意識調査より——』 『福岡県立大学人間社会学部紀要』 19巻(福岡県立大学)
 中村雅彦 2010 『新靈性運動・文化の光と闇』 『トランスパーソナル心理学/精神医学』

- vol. 10 (日本トランスパーソナル心理学/精神医学会)
 中村友太郎 2002 『ペンテコスタル・ムーブメント』 大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文晃編集 『岩波キリスト教辞典』(岩波書店)
 中矢伸一 2014 『異次元空間は存在するか』 船井幸雄 『すべては「必要、必然、最善」』(ビジネス社)
 中矢伸一 2016 『ひつく 神道入門日本人が知っておくべき本当の心の整え方』 Kindle (徳間書店)
 中矢伸一 2019 『神威復活～黒住、天理、金光、大本、日月神示に至る流れを追う～』 Kindle (東光社)
 長山靖生 2005 『千里眼事件:科学とオカルトの明治日本』(平凡社新書)
 西原廉太 2015 『エキユメニカル運動の現在と将来』 『ヨーロッパ文化史研究』(東北学院大学大学院文学研究科)
 西山茂 1988 『現代における〈霊:術〉系宗教の流行』 大村英昭 西山茂 『現代人の宗教』(有斐閣)
 日本医師会1919 『医政調査資料』 『療術行為者取締問題参考資料』 第8輯
 日本神学連盟 1997 『21世紀への神道革命——教義と実践』(本の森出版センター)
 日本神霊学研究会編 2019 『大霊界神霊学用語事典』(展望社)
 日本聖書協会 2018 『聖書 聖書協会共同訳』
 日本宣教リサーチ 2019 『JMR 調査レポート 2018年度』(東京基督教大学)
 日本ハリストス正教団西日本主教区教務部 2007 『家庭祈禱書』(正教会)
 日本ハリストス正教団東日本主教区宗務局 2018 『教区報』 第109号(正教会)
 沼田健哉 1995 『宗教と科学のネオパラダイム——新宗教を中心として』(創元社)
 クリストファー・パートリッジ 2009 『現代世界宗教事典——新宗教、セクト、代替スピリチュアリティ』 井上順孝監訳 井上順孝 井上まどか 冨沢かな 宮坂清訳(悠書館)
 トニー・パーンズ 2017 『何でもないものがあらゆるものである——無、存在、すべて——』 Kindle 高木悠鼓訳(ナチュラルスピリット)
 はせくらみゆき 2017 『宇宙とあっさりつながる最強のワークブック』(かんき出版)
 初見健一 2012 『はくらの昭和オカルト大百科70年代オカルトブーム再考』(大空ポケット文庫)
 初見健一 2014 『昭和ちびっこ怪奇画報——はくらの知らない世界1960s-70s』(青幻社)
 羽仁礼 2001 『超常現象大事典——永久保存版』(成甲社)

- ジョリオン・バラカ・トーマス 2008「マンガと宗教の現在」国際宗教研究所『現代宗教2008特集メディアが生み出す神々』（秋山書店）
- 春川栖編 2009『スピリチュアル用語辞典』（ナチュラルスピリット）
- 半田広宣 中山康直 2014『[2013] 世界はグレンとひっくり返った反転の創造空間《シリウス次元》への超突入！いつでも「今」どこでも「ここ」——驚異のScience&Spiritual メタモルフォーゼ情報！』（ヒカルランド）
- 平川出版 1978『TheMeditation』2号
- 平藤喜久子 2015「宗教の定義」櫻井義秀・平川喜久子編著『よくわかる宗教学』（ミネルヴァ書房）
- 藤本満 2015『聖書信仰——その歴史と可能性（上）』Kindle（いのちのことは社）
- 船井幸雄 1996『百匹目の猿現象は右脳から』（KK ベストセラーズ）
- 船井幸雄 2005『人は生まれ変わる』（ダイヤモンド社）
- 船井幸雄 2014『未来への言霊：この世の答えはすでにある！』（徳間書店）
- H・P・ブラヴァツキー 2018『神智学の鍵』Kindle 田中恵美子訳（UTYUPUBLISHING）
- 堀江宗正 2010a「日英米のスピリチュアリティ：2009年度の海外調査から（1）」『国際宗教研究所ニュースレター』第67号（財団法人国際宗教研究所）
- 堀江宗正 2010b「日英米のスピリチュアリティ：2009年度の海外調査から（2）」『国際宗教研究所ニュースレター』第68号（財団法人国際宗教研究所）
- 堀江宗正 2011『スピリチュアリティのゆくえ（若者の気分）』（岩波書店）
- 堀江宗正 2015「被災地における霊的体験と継続する絆——身内の霊と未知の霊——」『宗教研究』88巻別冊（日本宗教学会）
- 堀江宗正 2019『ポップ・スピリチュアリティ：メディア化された宗教性』（岩波書店）
- 堀江宗正 時田英之 2020「現代社会に広がるスピリチュアリティ」『読売クオーターリー』2020春号（読売新聞東京本社調査研究本部）
- 堀江復 1886『教会法学略記-2版』（正教会）
- バーナード・W・マーティン 1984『神秘オカルト小辞典——精神世界探究のためのガイドブック』C+F コミュニケーションズ訳（たま出版）
- 毎日新聞社 2017「蘇る宗教真如苑の明暗③」『サンデー毎日』2017年2月19日号
- 毎日新聞社 2018『毎日新聞』2月27日
- 牧真司編 2017『柴野拓美S F評論集理性と自走性——黎明より』（東京創元社）
- マキノ出版 2019『ゆほびか GOLD』vol. 43
- 牧野内大史 2017『人生が変わる心のブロックの溶かし方：一瞬で変わる変性意識のつ

- くり方つかい方』（シンクロニシティクラブ）
- 増田良一 2017『ハートグラムバージョン@Ver. 2 基本テキスト：25枚のカードを選ぶだけで、人間関係、収入アップ、心と体の健康診断ができます。ハートグラム塾』Kindle（Amazon）
- 松井圭介 2014「宗教学におけるフィールドワーク」『人文地理学研究』34巻（筑波大学人文地理学研究）
- 松島公望 2016『宗教を心理学する：データから見えてくる日本人の宗教性』（誠信書房）
- 松原皎月述 2004「催眠術講義」吉永進一編『日本人の身・心・霊——近代民間精神療法叢書』（クレス出版）
- 松久正 2018『Dr. ドルフィンの地球人革命』Kindle（ナチュラルスピリット）
- 松久正 2020『地球人類よ、新型コロナウイルスを浴びなさい！』Kindle（ヒカルランド）
- 松村潔 2012『精神世界の教科書』（アールズ出版）
- 松本健一 1989『神の罨——浅野和郎、近代知性の悲劇』（松新潮社）
- 三木英 2014『宗教集団の社会学』（北海道大学出版）
- 水草修治 1995『ニューエイジの罨（改訂第一版）』（CLC 出版）
- ダヴィド水口優明 2016『正教会の手引』改訂第三版（日本ハリストス正教団全国宣教企画委員会）
- 光田秀 2010『賢者たちのメッセージ』（PHP 文庫）
- 宮越俊光 2002「按主」大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文晃編集『岩波キリスト教辞典』（岩波書店）
- 宮崎正美 2002「奉神礼」大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文晃編集『岩波キリスト教辞典』（岩波書店）
- 宮武和平 2014『出口王仁三郎：日本人の精神に多大な影響を与えた霊性の巨人』Kindle（光祥社）
- 宮本聡介 太田信夫編著 2008『単純接触効果研究の最前線』（北大路書房）
- 武藤悦子 2011『決定版！ スピリチュアル事典』（主婦の友社）
- 村川治彦 2020「〈気〉とは何か」黒木幹夫 鎌田東二 鮎澤聡『身体の知：湯浅哲学の継承と展開』Kindle（ビイング・ネットプレス）
- 村田久行 2011「終末がん患者のスピリチュアルペインとそのケア」『日本ペインクリニック学会』18巻1号（一般社団法人日本ペインクリニック学会）

- 百瀬文晃 2002 「主教」大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文晃編集『岩波キリスト教辞典』（岩波書店）
- 文化庁 2010 『宗教年鑑 2010年』
- 文化庁 2020 『宗教年鑑 2020年』
- 矢加部幸彦 2017 『神ながら意識』Kindle（ナチュラルスピリット）
- 保江邦正 2014 『古神道《神降ろしの秘技》がレムリアとアトランティスの魂を蘇らせる時』（ヒカルランド）
- 保江邦正 2019 『願いをかなえる「縄文ゲート」の開き方』（ビオ・マガジン）
- 山蔭基央 2013 『神道の神秘——古神道の思想と行法』Kindle（春秋社）
- 山北篤 2010 『ゲームシナリオのためのファンタジー事典知っておきたい歴史・文化・お約束110』（SB クリエイティブ）
- 山下泰平 2019 『『舞姫』の主人公をバランカとアフリカ人がボコボコにする最高の小説の世界が明治に存在したので20万字くらいかけて紹介する本』（柏書房）
- ゆうわ 2018 『宇宙語で遊ぼう!! 私たちは遠い遠い宇宙からやってきました』Kindle（Amazon）
- 弓山達也 2004 「スピリチュアリティの目覚めとその危険」伊藤雅之 樫尾直樹 弓山達也編『スピリチュアリティの社会学——現代世界の宗教性の探求』（世界思想社）
- 横田順彌 1977 『SF 事典』（広済堂）
- 吉永進一 2006 「円盤にのったメシア」一柳廣孝編著『オカルトの帝国——1970年代の日本を読む』（青弓社）
- 吉永進一 2010 「近代日本における神智学思想の歴史」『宗教研究』84巻2章（日本宗教学会）
- 吉永進一 2019 「民間精神療法主要人物および著作ガイド」栗田英彦 塚田穂高 吉永進一編『近現代日本の民間精神療法——不可視な（オカルト）エネルギーの諸相』（国書刊行会）
- リンピンクネット編著 1994 『超常現象の事典』関口篤訳（青土社）
- 霊波之光 1982 『御書』
- 霊波之光 『霊波之光の信仰』改訂第5版改訂年月日不明（R105.01P100E）
- ルーン魔女KAZ 2013 『スピリチュアルにつかれてしまったあなたへ』（出版処てんでる）

〈参照インターネット一覧〉

- IP ドメインサーチ「IP ドメインサーチ」(<http://www.ip-domain-search.com>) 検索サイト2001年5月14日開設
- あまね理樺「あまね理樺」ライトランゲージで宇宙の記憶を思い出す (<https://amanerica.com/light-language/>) 最終閲覧日2021年4月22日
- 国土交通省「観光庁」(https://www.mlit.go.jp/kankocho/topics05_000108.html) 2021年3月2日
- NPO 法人心髄研究会 SEW 「『私』が『わたし』であるために～スピリチュアル&セラピーマルシェ」2019年7月14日アンケート「『スピリチュアル』・『精神世界』の可能性について、希望があると思われる分野は？」有効回答数33 (<https://www.facebook.com/npo.sew/photos/pcb.566170357245601/1297221227120021/>) 最終閲覧日2021年3月11日
- NPO 法人心髄研究会 SEW 「NPO 法人心髄研究会 SEW」(<https://www.sew19.com>) 最終閲覧日2021年3月30日
- エルアウラ「癒しフェア」(<https://www.a-advice.com>) 最終閲覧日2021年4月5日
- 紀伊國屋書店「紀伊國屋書店」(kinokuniya.co.jp) 紀伊國屋書店ネット検索サイト開設日1995年12月14日
- グッド・サマリタン・チャーチ「グッド・サマリタン・チャーチ」(<http://good-samaritan-church.org>) 最終閲覧日2021年4月21日
- クリスチャン・トゥデイ「クリスチャン・トゥデイ」日本基督教団聖霊刷新協議会手束正昭師2005年5月6日 (<http://www.christiantoday.co.jp/articles/364/20050506/news.htm>) 最終閲覧日2021年4月21日
- クリスチャン・トゥデイ「クリスチャン・トゥデイ」日エクソシストが集結、ローマで悪魔払いの講座カトリック以外にも初開放2019年5月13日 (<https://www.christiantoday.co.jp/articles/26829/20190513/exorcists-gather-in-rome.htm>) 最終閲覧日2021年4月20日。
- 公益財団法人日本心霊科学協会「公益財団法人日本心霊科学協会」(<http://www.shinrei.or.jp>) 最終閲覧日2021年4月5日
- 国立国会図書館「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp>) 開設日1995年1月23日
- 国立国会図書館「国立国会図書館サーチ」(<https://iss.ndl.go.jp>) 開設日1995年1月23日

越木岩神社「越木岩神社」(<https://www.koshikiwa-jinja.jp/koshiki>) 最終閲覧日2020年4月10日

コルヌコピア「パワーストーンジュエリーコルヌコピア」祈りのツール、不思議のメイイとあなただけのロザリオ2018年4月4日 (<https://ameblo.jp/jewelrycornucopia/entry-12365734298.html>) 最終閲覧日2020年4月9日

GLA「GLA」(<https://www.gla.or.jp/outline>) 最終閲覧日2018年3月11日、2021年4月16日

GLA「GLA 一日一葉研鑽」(<https://www.gla.or.jp/ichinichiichiyousp>) 最終閲覧日2020年6月22日

エス・エー・エス「真氣光」(<http://shinkiko.com/k>) 最終閲覧日2021年4月15日

人体科学会「人体科学会」(<http://www.smbs.gr.jp>) 最終閲覧日2021年4月5日

神智学協会日本ロッジ「神智学協会日本ロッジ」(theosophy.jp) 最終閲覧日2020年3月11日

sympathy777「Sympathy blog」無限の宇宙と繋がっていく【アセンションと覚醒の旅】2019年8月24日 (<https://ameblo.jp/sympathy777/entry-12511164230.html>) 最終閲覧日2020年3月9日

東洋経済 ONLINE「なぜ人間はオカルトにハマってしまうのか？」大田俊寛2013年8月23日 (<https://toyokeizai.net/articles/-/18156?page=2>) 最終閲覧日2021年3月13日

並木良和のオフィシャルブログ「並木良和のオフィシャルブログ」(<https://ameblo.jp/namikiyoshikazu>) 最終閲覧日2021年3月2日

日刊サイゾー「スピリチュアルブーム終焉か？ オーラの泉打切り決定！」(http://www.cyzo.com/2009/02/post_1576_entry.html) 最終閲覧日2021年4月15日

TimelessEdition「エンジェルナンバーとは？」(<https://www.timeless-edition.com/archives/12341>) 最終閲覧日2011年4月22日

西宮市「西宮市の市章について教えてください。」(<https://www.nishi.or.jp/smph/shitsumon/shiseijoho/shinogaiyo/symbol/shisho.html>) 最終閲覧日2021年3月2日

日本超心理学会「日本超心理学会」(<http://j-spp.umin.jp>) 最終閲覧日2021年4月5日

丹羽公三「Kz.UFO 現象調査会」(<https://ameblo.jp/kz0222/entry-12303797139.html>) 最終閲覧日2021年4月21日

ヴェイジョナリー・カンパニー「日本のタロットカード・オラクルカード全集」(<https://oracle-tarot.jp>) 最終閲覧日2021年4月17日

ハーベスト・タイム・ミニストリーズ「3分でわかる聖書——預言の賜物は、今もあるのですか。」(https://www.youtube.com/watch?v=dEF-wcITk_8) 最終閲覧日2021年4月20日

羽賀ヒカル「北極流占い」(<https://hagahikaru.com>) 最終閲覧日2021年3月2日

晴レルヤ実行委員会「晴レルヤマルシェ」(<https://sun-marche.jimdo.com/>) 最終閲覧日2021年4月16日

Healy World International PTE「healy」(<https://www.healyworld.net/ja>) 閲覧日2021年3月30日

ヒーリングサロン・エンジェルオブライイト「30種類以上の全ヒーリング一覧」(https://angeloflight.net/2_healing.html) 最終閲覧日2021年4月22日

光のサロン「神伝レイキ」(<http://light.st/training>) 最終閲覧日2021年4月15日

ビタミンアロマ「癒しスタジアム」(<http://www.balance.join-us.jp/vitaminaroma/index.htm>) 最終閲覧日2020年4月5日

船井勝仁「船井幸雄.com」船井幸雄の今一番知らせたいこと。わが深宇宙探訪記2013年12月16日 (http://www.funaiyukio.com/funa_ima/index.asp?dno=201312003) 最終閲覧日2021年4月12日

Fr.Barnabas Powell (October.24.2017) “Strange Fire: Pentecostalism as Cure for the Reformation” <https://blogs.ancientfaith.com/orthodoxyandheterodoxy/2017/10/24/strange-fire-pentecostalism-cure-reformation> 最終閲覧日2021年4月20日

日本出版販売「Honya Club」(<https://www.honyaclub.com>) 開設日2017年10月5日

ヨーコ・ミュタント2017年5月26日「次回、なんと最終回！ 東京スピマ終了、ありがとうございます」(<https://ameblo.jp/yoko-mutants-annex/entry-12278123199.html>) 最終閲覧日2021年4月5日

大和カルバリーチャペル「大和カルバリーチャペル」(<http://www.yamatocalvarychapel.com>) 最終閲覧日2021年4月21日

霊泉館「霊泉館」公益財団法人日本心霊科学協会にて発表！ (<http://senntenn.jp/blog/2016/06/27/>) 最終閲覧日2021年3月10日

文学研究科 総合人文学専攻
哲学専修
18D2902 伊藤耕一郎

資 料

【調査資料】

① アンケート調査「ニューエイジに関するアンケート調査」

調査場所及び調査日「癒しフェア2018 in OSAKA」(2018年3月10日)

「癒しフェア2018 in TOKYO」(2018年8月4日・5日)

対象：出展者及び来場者（選択式）

有効回答数97

設問は「性別」、「年代」、「ニューエイジという言葉を知ったことがありますか」、「ニューエイジの意味として適切なものはどれですか」、「年間のイベント利用数は何回ですか」、「魂のレベルを意識したことはありますか」、「地球のアセンションは近いと思いますか」、「あなたは出展者ですか来場者ですか」の9問。

② データベース「ニューエイジ運動の輪郭とその周辺」

島薺は、ニューエイジ運動の輪郭とその周辺に関して、2009年に雑誌特集でも言及しており¹⁾、筆者はこれに示された図と1996年に島薺が示した内容（島薺 1996：30-66）を技法と思想に分けて整理し直したところ下記の通りまとめた。

A. ニューエイジ系（神智学・ニューソート・クリスチャンサイエンス等を含む）

（技法）

お引き寄せ、ライトランゲージ、マインドブロック解除、カルマ浄化、UFO体験、チャネリング、リーディング、レイキ、各種ヒーリング技法、ワンネスデグシャ など。

（思想）

ライトワーク、ライトボディー、アセンション、ソウルメイト、ツインソウル、フェミニスト霊性運動、ホリスティック医療、食事療法、マクロビオティック輪廻転生 など。

B. 占術系

（技法）

タロット、オラクルカード、易、数秘術、癒書、チャームタッチ、手相 など。

（思想）

過去と未来、神託、文字や言葉の力 など。

C. 伝統系(日本、東洋、その他伝統的宗教)

（技法）

加持祈祷、各種修行、呼吸法、四度加行、各種武道、直伝霊氣、禅、風水実践、龍脈探索、九星気学、ヨガ、ロザリオ・メダイの使用 など。

（思想）

守護霊、精霊信仰・古神道・加護・安心立命、シャンバラ、風水六大課、本命星・月命星、大地の血管、チャクラ、守護天使、聖母の加護 など。

D. スピリチュアリズム・魔術系

（技法）

降霊術、自動書記、リーディング、幽体離脱、憑依体験、霊媒体験、魔術 など。

（思想）

高級霊との交信、死後生存、審神者、(人格を伴わない)再生、類魂、指導霊 など

E. セラピー・心理学系

（技法）

カラーセラピー、アロマセラピー、ヒプノセラピー、マインドフルネス実践、トランスパーソナル（ホロトロピックセミナー）、整体、各種ボディーセラピー、音楽療法 など。

（思想）

過去退行、臨死体験、自我の目覚め、リラクゼーション など。

③ アンケート調査「宗教について絶対必要なもの」

A 調査場所及び調査日 近畿圏の2大学（2017年11月13日・21日）

対象：大学生（選択回答式）

有効回答数153

B 調査場所及び調査日 「癒しスタジアム in OSAKA」（2017年12月17日）

有効回答数42

設問はBのみ「年代」以下はA Bとも共通で「性別」と「宗教について絶対必要なものは何だと思えますか」の2問で2問目の選択肢は「神的存在」、「神的存在を畏れる心」、「礼拝・儀式」、「信仰を共有する共同体」、「儀式執行者（聖職者）」、「礼拝・儀式のための共同体」、「教主的存在」、「布教行為」、「信者の教育」の9選択肢。

④ アンケート調査「新新宗教に関するアンケート調査」

調査場所及び調査日「Jasmine's Love Sharing Party」（2018年6月8日）

「癒しフェア2018 in TOKYO」（2018年8月4日）

対象：問1・2はブース出展者 問3はブース出展者及び来場者（選択式・自由回答）

有効回答数 問1・2 - 66 問3 - 79

設問は「性別」、「年代」と下記3つの5問。

問1 「あなたは霊能的新新宗教に入信してみたいですか」

選択肢は「体験してみたい」、「体験してみたくない」、「興味がない」、「分からない」の4つ

問2 「なぜ体験をしてみたくないのですか」体験したい人以外を対象 - 自由回答

問3 「どの宗教と精神世界は親和性がありそうですか」

選択肢は「仏教」、「キリスト教」、「イスラム教」、「ヒンドゥー教」、「霊能的新新宗教」、「その他（自由回答）」の6つ

⑤ アンケート調査「スピリチュアル意識調査」

調査場所及び調査日 WEBにて（2019年3月1日-3月4日）

対象 精神世界関係者に直接 DM 及びメッセージ送信

有効回答数157

設問は「スピリチュアル・心霊主義・心霊研究は同じだと思いますか」、「スピリチュアルと心霊主義の違いを説明できますか」、「ワンネスとサムシンググレートは同じだと思いますか」の3問。

⑥ アンケート調査「晴明神社訪問者へのアンケート」

調査場所及び調査日 晴明神社-京都府（2017年3月20日）

対象 神社参拝者

有効回答数32

設問は「あなたはここに祀られている神を知っていますか」、「ここがパワースポットだと言われていることを知っていますか」、「ここを訪れた目的は何ですか」、「どこから境内を回りましたか」の4問。

⑦ アンケート調査「恋愛弁天訪問者へのアンケート」

調査場所及び調査日 神戸市氷室神社（2017年8月16日）

対象 神社参拝者

有効回答数16

設問内容は「ここを訪れた目的は何ですか」、「この場所をどうやって知りましたか」、「あなたは本殿を参拝しましたか（自由回答）」の3問。

⑧ アンケート調査「SF・ファンタジーに関する関心度調査」

調査場所及び調査日「癒しスタジアム2019 in OSAKA」（2019年12月15日）

対象 出展者

有効回答数64

設問は「性別」、「年代」、「あなたはアニメやマンガ、ゲーム、ライトノベル

などのどれに興味がありますか?」、「あなたはどの媒体が好きですか」、「あなたはどのジャンルが好きですか」、「あなたはどの国のアニメやマンガ、ゲームなどが、好きですか?」、「あなたがアニメやマンガ、ゲーム、ライトノベルなどを好きになったのはどの年代ですか?」、「あなたがスピリチュアルに興味を持ったとき、アニメやマンガ、ゲーム、ライトノベルなどが好きでしたか?」の8項目。

⑨ アンケート調査「スピリチュアルに関する意識調査」

調査場所及び調査日「癒しフェア2019 in TOKYO」(2019年8月17日)

対象 出展者

有効回答数55

設問は「性別」、「年代」、「ニューエイジについて知っていますか」、「スピリチュアルの中心は何だと思いますか(自由回答)」、「ライトワーカーとは何をさしていますか」の5問。

⑩ アンケート調査「コロナ禍でのスピリチュアル」

調査場所及び調査日 WEB 2020年12月10日-12月15日

対象 精神世界関連事業者

有効回答者数102 *のみ92

設問は「性別」、「年代」、「あなたはマスクが感染防止に有効だと思いますか」、「あなたはマスクを着用していますか」、「あなたはワクチン接種を受けたいですか」、*「ワクチン接種を受けたくない理由は何ですか」、「あなたはコロナウイルスにどう対応すべきだと思いますか」、「あなたはコロナ禍をどう受け止めていますか」の8問

- 1) 2009「スピリチュアル VS ニューエイジ」『StarPeople for assension』Vol 29 (ナチュラルスピリット)